

—スポーツ公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

大分県文化財調査報告書第103輯

スポーツ公園内遺跡群 発掘調査報告書

(第3分冊)

いっぽうびら
一方平Ⅱ遺跡

いっぽうびら
一方平Ⅲ遺跡

いっぽうびら
一方平Ⅳ遺跡

1999

大分県教育委員会

一方平Ⅱ遺跡



一方平Ⅱ遺跡遠景（北から）

本文目次

第1章 遺跡の概要	1	第2章 発掘調査の成果	3
第1節 調査の経緯	1	第1節 調査の概要	3
(1) 調査に至る経過	1	第2節 検出した遺構と遺物	4
(2) 調査体制	1	(1) 旧石器時代	4
第2節 遺跡の位置	1	(2) 縄文時代	53
		(3) 平安時代	62
		第3章 まとめ	63

挿図目次

第1図 一方平Ⅱ遺跡周辺地形図	2	第38図 第Ⅺ群石器類実測図	32
第2図 一方平Ⅱ遺跡遺構配置図	3	第39図 第Ⅺ群剥片実測図	33
第3図 一方平Ⅱ遺跡石器分布図	4	第40図 第Ⅻ群石器類実測図	34
第4図 第Ⅰ群石器類実測図	5	第41図 第Ⅻ群剥片実測図	35
第5図 第Ⅰ群剥片実測図	5	第42図 第Ⅼ群石器類実測図	36
第6図 第Ⅰ群石核実測図(1)	5	第43図 第Ⅼ群剥片実測図	37
第7図 第Ⅰ群石核実測図(2)	6	第44図 第Ⅼ群石核実測図(1)	37
第8図 第Ⅱ群石器類実測図	7	第45図 第Ⅼ群石核実測図(2)	38
第9図 第Ⅱ群剥片実測図	8	第46図 第Ⅼ群石器類実測図	39
第10図 第Ⅱ群石核実測図	9	第47図 第Ⅼ群剥片実測図	40
第11図 第Ⅲ群石器類実測図	10	第48図 第Ⅼ群石核実測図	40
第12図 第Ⅲ群剥片実測図	11	第49図 第Ⅰ群母岩別石器分布図	42
第13図 第Ⅲ群石核実測図	12	第50図 第Ⅰ群石器接合資料	42
第14図 第Ⅳ群剥片実測図	13	第51図 第Ⅱ群母岩別石器分布図	43
第15図 第Ⅳ群石核実測図	13	第52図 第Ⅱ群石器接合資料	43
第16図 第Ⅴ群石器類実測図	14	第53図 第Ⅲ群母岩別石器分布図	44
第17図 第Ⅴ群剥片実測図(1)	14	第54図 第Ⅲ群石器接合資料	45
第18図 第Ⅴ群剥片実測図(2)	15	第55図 第Ⅳ群石器接合資料	46
第19図 第Ⅴ群剥片実測図(3)	16	第56図 第Ⅳ群母岩別石器分布図	47
第20図 第Ⅴ群石核実測図(1)	16	第57図 第Ⅴ群母岩別石器分布図	47
第21図 第Ⅴ群石核実測図(2)	18	第58図 第Ⅴ群石器接合資料	48
第22図 第Ⅵ群石器類実測図(1)	20	第59図 第Ⅵ群母岩別石器分布図	49
第23図 第Ⅵ群石器類実測図(2)	21	第60図 第Ⅵ群石器接合資料	49
第24図 第Ⅵ群剥片実測図(1)	21	第61図 第Ⅶ群母岩別石器分布図	50
第25図 第Ⅵ群剥片実測図(2)	22	第62図 第Ⅶ群石器接合資料	51
第26図 第Ⅵ群石核実測図(1)	22	第63図 第Ⅷ群母岩別石器分布図	52
第27図 第Ⅵ群石核実測図(2)	23	第64図 接合石器全体分布図	52
第28図 第Ⅶ群石器類実測図	24	1号集石地実測図	53
第29図 第Ⅶ群剥片実測図(1)	24	山形押型文土器実測図	55
第30図 第Ⅶ群剥片実測図(2)	25	柘門押型文土器実測図	56
第31図 第Ⅷ群石器類実測図	26	無文土器口縁部実測図	56
第32図 第Ⅷ群剥片実測図	26	石鏃実測図	57
第33図 第Ⅸ群石器類実測図	28	石斧等実測図(1)	59
第34図 第Ⅸ群剥片実測図	28	石斧等実測図(2)	60
第35図 第Ⅹ群石器類実測図	29	石皿実測図	61
第36図 第Ⅹ群剥片実測図	30	1号土坑実測図	62
第37図 第Ⅹ群石核実測図	31	蔵骨器実測図	62

第1章 遺跡の概要

第1節 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

95年度に行った試験の結果、縄文早期の土器片を検出したため、96年11月下旬より本調査を実施するに至った。現地は雑木林であったため、本調査は伐採後に重機で表土を除去した後、96年11月25日から97年1月31日までおよそ2ヶ月間、2750㎡の範囲で発掘作業を行った。

(2) 調査体制

一方平Ⅱ遺跡の調査組織は以下のとおりである。(役職は96年度のもの)

調査主体 大分県教育委員会

田中恒治(大分県教育委員会教育長)

調査総括 清水宗昭(教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第1係長)

調査主任 栗田勝弘(同 埋蔵文化財第1係主査)

調査員 首藤 善(同 埋蔵文化財第1係主任)

藤内尚竹(同 埋蔵文化財第1係主事)

横山知成(同 埋蔵文化財第1係嘱託)

調査作業員(一方平Ⅱ・一方平Ⅲ・九池遺跡)

藤本 明・青井 哲雄・高倉セツ子・大杉 茂・塩月ミヨ子・高瀬 敏明・高瀬 和子
竹中サツキ・荒川 伸代・森崎 弘吉・森崎みわ子・坂東キミ子・川崎ヤチ子・高木 和枝
岩本かおる・古賀 陽子・甲斐 住治・岩元真代美・金子ヤヨイ・梶井カナ子・岩本 和美
吉岡 玲子・野村 智子・藤沢 英子・江藤美恵子・高橋 宇市・山崎 重信・本田真理子
別宮 晴好・別宮 康希・別宮けい子・野上八重子・児玉忠美代・柴田 豊子・山内 純子
平田 悟・上原三子代・鶴原 麻子・西川喜代芳・原 洋子・佐藤喜代美・酒井 邦恵
佐渡 文代・金丸イサヨ・桑原 孝子・鈴木 英子・松下 初美・野尻 隆子・工藤 桜子
松鹿 康子・山川真知子・新森 朝代・新森ケイ子・阿南 信子・佐藤 洋子・香名やよい
高合 律子・姫野 京子・坂口美奈子・五所 千伸・酒井小夜子・首藤とし子・高橋キヌ子
姫島 洋子・後藤 昭信・進 美枝子・亀井 敬治・占田ひとみ・藤本 和代・上藤 一
平野 次郎・井上由美子・田崎 千鶴・栗原寺由起子・三浦 典子・三浦 良一・大城 忠
藤沢 登美・駒水 順子・衛藤 久子・川村 功子・木津美知子・森本美佐枝・菅 峰子
後藤 悦子・今村 初美・木田 邦子・中畑 光世・足立久美子・山井 薫・大塚美枝子
二宮 泉・藤山 邦子・伊藤 輝夫・伊藤ツルエ・安部志津子・箱田小夜子・北 久美子
田中 翠・高井 光子・甲斐 睦子・藤田美津代・粟野ひとみ・飯島佳代子・山下 厚子
得丸 直・後藤 浜市・馬場 恵子・竹内 尚美・長迫麻里子・清武 豊美・米岡 和子
長尾 和・長尾 恒子・大坪 千鶴・佐藤 清秀・八並キミヨ・山本 敏江・須田 昌子
塚塚 徳子・麻生 幸子・伊藤 恵子・山本 明・下関 久司・三浦としお・安部 領一
田中記代子・泥谷久美子・甲斐 信子・山村 寿子・秋月千鶴子・秋元 春枝・安東 美保
安部 浩子・後藤 鶴代・小原井並由美・杉田 五月・瀬田 祥恵・谷川 隆子・高野英代子
野田 香代・野田 武志・野田 房子・野田マサ子・原 圭子・林 智子・藤澤 裕子
藤田 圭子・藤田山里子・古川智重美・松尾さよ子・宮本 明子・森 貴子・矢野 典子
山崎トミ子・若原 弥生・高野 京子・江上より子・藤井 和代・羽田野裕之・前田 泰
幸田 健二・松本 尚子・西原 史子・岡部 義孝・岩尾由香里・小野りつ子・小野 博子
加藤きよこ・河野ゆかり・木崎 直美・木崎てる子・清川 洋美・園分 明美

第2節 遺跡の位置

一方平Ⅱ遺跡は大分市大字横尾字一方平に所在するもので、北側には高尾山、東側には大野川、さらにそれをはさんで丹生台地、南側は古城山に面している。調査区は、標高約75mの地点にあり、尾根筋は南を除く三方を谷に囲まれている。



第1圖 一方平Ⅱ遺跡周辺地形圖

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

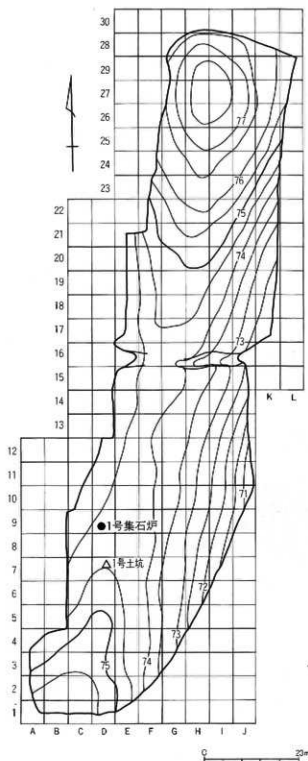
本調査では各遺構・遺物の位置、層位や石器の接合状態を正確に把握するため、隣接する一方平Ⅱ遺跡のグリッド配置と合わせ、第2図に示したように5m×5mのグリッドを設定した。西から東にかけてA～J、南から北にかけて1から30のナンバーをつけた。従って場所の指定は、例えばE-8グリッドというかたちになる。

遺物分布の中心は馬の背状になった遺跡の鞍の部分、すなわち尾根部の中央平坦地（E-8～G-15）であり、東西の斜面からは、少量の遺物が出たのみで、中央部からの流れ込みと判断された。上記の中央平坦地以外においては、遺構は検出されず、遺物も少なかった。

本遺跡の基本土層は第Ⅰ層から第Ⅲ層に大別できる。第Ⅰ層は明黄褐色を基調とする層で遺物の混入はほとんどなく、現表土層である。発掘作業は、重機によりこの層を除去した後に、発掘調査作業員の手作業による遺構・遺物の検出を行った。第Ⅱ層は暗褐色土層で厚さが約30cmあり、細かい石粒や黒色・赤色スコリアを多く含む。縄文早期の土器片や旧石器時代の石器類等遺物のほとんどがこの土層から出土した。第Ⅲ層は赤褐色土層で細かい石粒や拳大の礫を含む硬い無遺物層で、本遺跡の基盤層である。

当初は調査区を手作業によって全体的に掘り下げる予定だったが、表土を除去して、遺物の分布状況を確認した結果、遺跡の南半分を中心に遺物・遺構の検出を行うこととなった。北半分は南半分と比べ、傾斜が急なこともあり、遺物の出土が非常に少なく、また、包含層である第Ⅱ層も希薄であった。

本遺跡では層位的な発掘ができず、調査は旧石器時代から平安時代まで各時代の遺構・遺物が錯綜する中で行われた。そのため時期を認定するのが困難な遺構が多く、全体のうち遺構として確認できたものは2基しかなかった。確認できなかった遺構の多くは報告者へ割愛している。遺物の出土はおおむね表土層から30～50cmの深さに集中したが、分布が散漫な地域では上下の拡散幅が小さい。一つの文化圏の石器群が埋没後に移動したと考えるのが妥当であろう。



第2図 一方平Ⅱ遺跡遺構配置図

第2節 検出した遺構と遺物

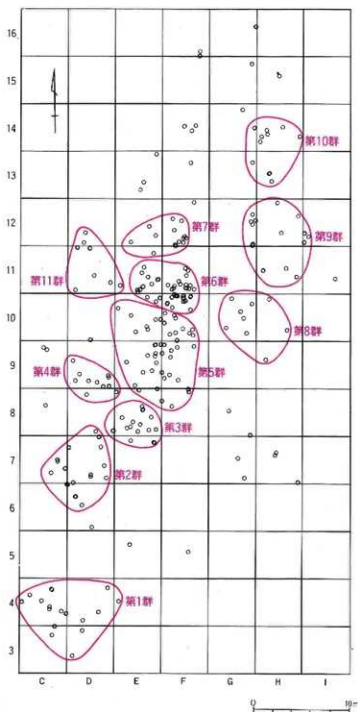
(1) 旧石器時代

今回の調査で、本遺跡からは総計266点の旧石器時代の遺物が出上した。このうち、E-8～F-12の10グリッド（発掘調査面積全体の9.1%）で120点（遺物の45.1%）が出上している。この集中区は、明確な境界はないが3つに区分している。また、その他の地区も集中の状況により8つに区分した。これにより全体の分布状況が遺物の集中状況により第1～11群（第3図）に大別された。また、それぞれの石群で出土した遺物を器種ごとに分類し、分析を行った。

ただし、出土地点を特定できなかったものが29点、そのうち遺跡一括として取り上げたものが14点ある。この29点については一括として扱い、第3図には入れていないが、グリッド一括として取り上げたものについては前述の11群の中に含めてあるものもある。

他にもこの11群の範囲外の地点で出土した遺物は、第12群から第14群として分類してある。このうち第12群については、ブロック外の北側半分を範囲とした（南北1～9）。第13群については、ブロック外の南側半分を範囲とした（南北10～30）。第14群については、遺跡一括として全く場所の特定ができなかった遺物を含めた。

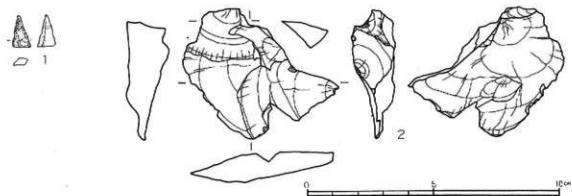
遺物の多くは前述のようにE-8～F-11グリッドに集中しており、後で述べる全16例の石器接合資料のうち、11例がこの範囲内で行われた。



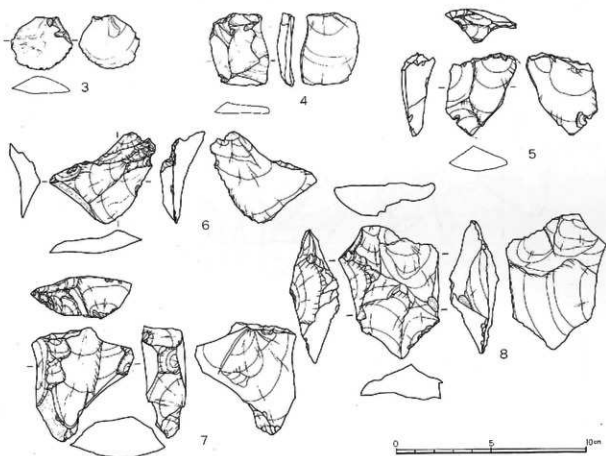
第3図 一方平Ⅱ遺跡石器分布図

a. 【第1群】（第4～7図）

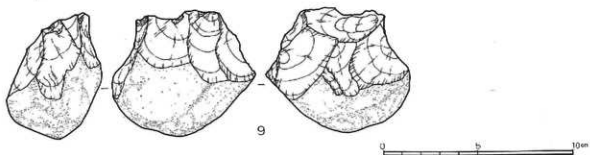
この石群はC-3グリッドを分布の中心とするもので、16点の遺物が確認された。その内訳は、剥片・砕片が9点、石核が5点、石器が2点であった。これらは全て流紋岩を使用したもので、うち8点は同じ母岩から作成されたものであった。石器類では、1が角錐状石器に分類されるが完形品ではなく、先端の部分だけが残存した状態。2は使用痕ある剥片である。横長剥片を素材にして背面の右側縁と下端にわずかに使用痕がついている。この他にも使用痕がついていると思われる剥片もあるが、ここでは明確な使用痕を有するものに限定した。この石群では石核の数が剥片・砕片と比べて多い（剥片・砕片に対する割合が0.56）のが特徴である。



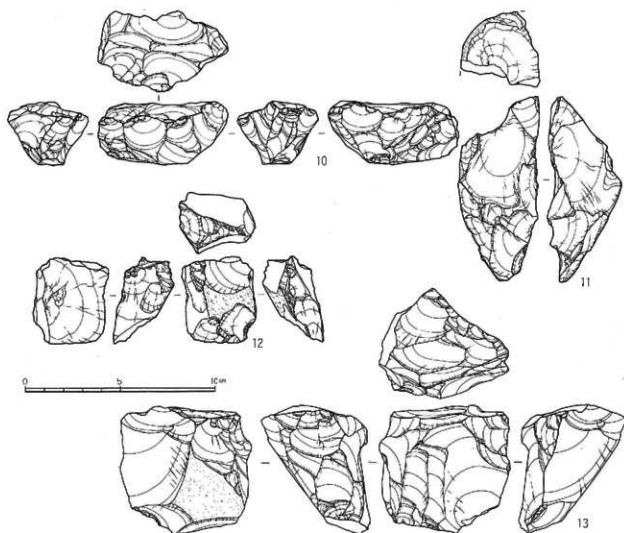
第4图 第1群石器类实测图



第5图 第1群剥片实测图



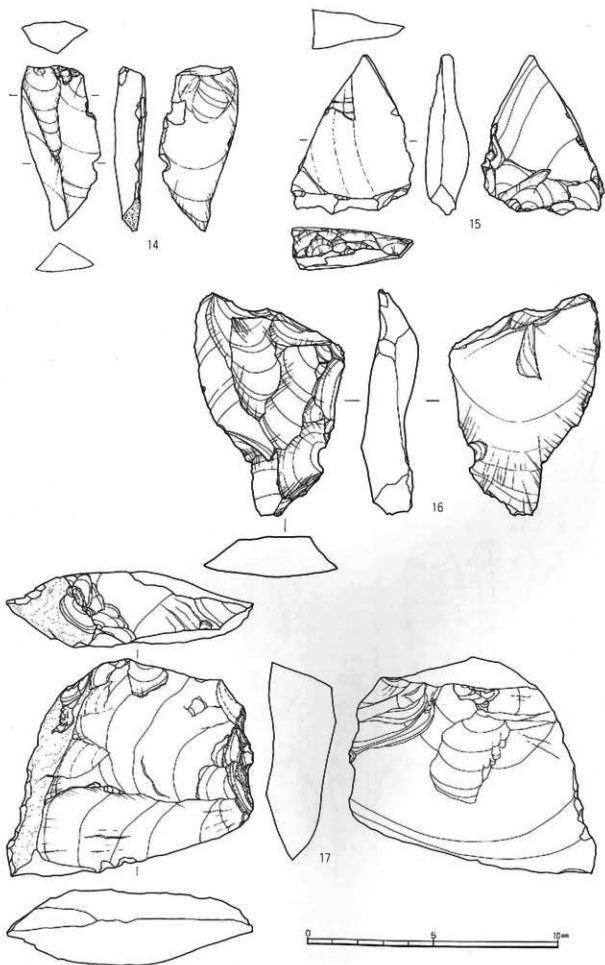
第6图 第1群石核实测图(1)



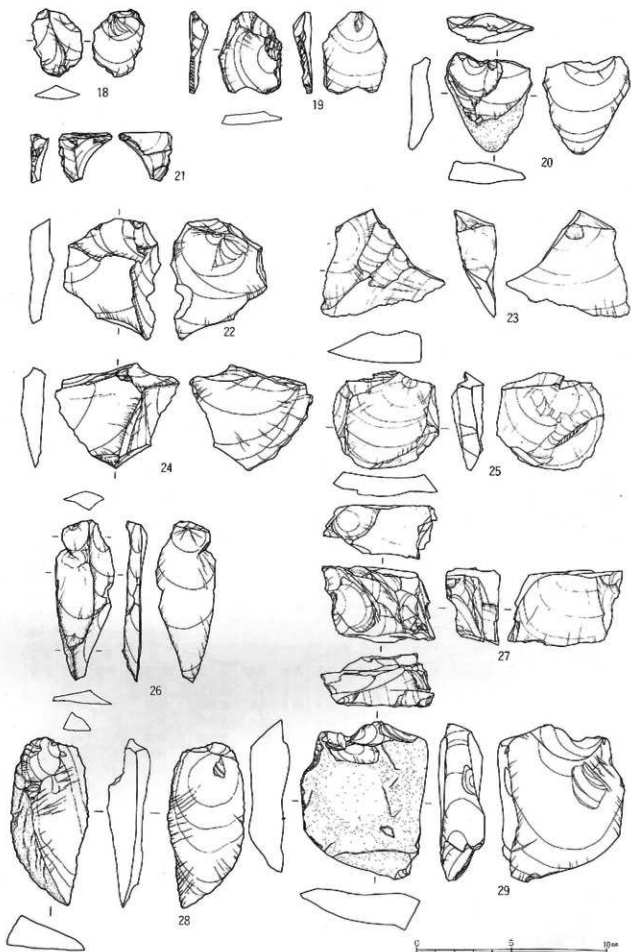
第7図 第1群石核実測図(2)

第1表 第1群石器観察表

図版 番号	出土位置 区画	番号	分 別 器 種	石 材	寸 法 (cm)				石 群			出 土 位 置 (m)		
					縦長	横長	厚さ	重量 g	母岩	接合		南から	西から	標 高
1	C03	2	角錐	流紋岩	1.23	0.72	0.33	0.3	1			13.997	13.424	75.283
10	C03	3	石核	流紋岩	3.35	6.95	4.30	88.4	1			14.943	13.704	75.258
13	C04	1	石核	流紋岩	6.80	5.75	6.86	234.0	1	B		16.283	14.928	75.145
8	C04	2	剥片	流紋岩	7.12	5.32	2.64	64.8	1			16.512	14.405	75.180
6	C04	4	剥片	流紋岩	4.80	5.65	2.40	20.8	1	B		18.780	13.393	75.061
	C04	5	碎片	流紋岩	×	×	×	1.7	1	B		18.830	13.356	75.056
	C04	9	碎片	流紋岩	×	×	×	1.7	1	B		17.601	12.317	75.111
12	C04	10	石核	流紋岩	4.56	3.22	4.02	47.8	1	B		16.991	13.171	75.108
2	C04	11	使用痕剥片	流紋岩	5.18	6.26	1.77	28.0	1	B		16.726	13.157	75.188
	C04	14	碎片	流紋岩	×	×	×	1.7	1	B		18.219	11.097	74.958
4	C04	16	剥片	流紋岩	3.81	3.18	0.88	9.8	1	B		17.525	10.231	74.956
11	D03	1	石核	流紋岩	9.76	4.31	3.96	123.3	1			11.810	15.623	75.320
7	D03	4	剥片	流紋岩	5.95	5.40	2.29	59.8	1			14.477	16.681	75.226
9	D04	3	石核	流紋岩	6.66	7.64	5.12	205.9	1			15.560	16.742	75.141
5	D04	5	剥片	流紋岩	4.19	3.75	1.84	16.9	1			16.435	18.400	75.055
3	E04	1	剥片	流紋岩	2.79	3.23	1.01	7.3	1			17.585	20.496	74.764



第 8 圖 第 2 群石器類実測図



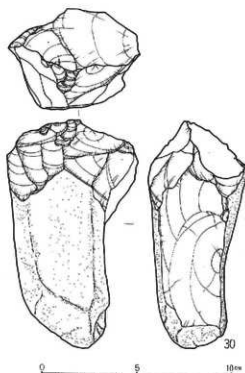
第9图 第2群剥片实测图

b. 【第2群】(第8～10図)

この石群はD-7グリッドを分布の中心とするもので、19の遺物が確認された。その内訳は、剥片・砕片が14点、石核が1点、石器が4点であった。これらも第1群と同じく全て流紋岩を使用したものであるが、母岩の数は多く、13個体が確認された。同一石群内での接合も2例が確認されているが、2例とも異なる跡を母岩とする。

石器類では、14、15、17が撿器である。14は縦長剥片を素材とし、背面の先端に剥離を施し刃部を形成している。15は縦長剥片を素材にしている。腹面の下端に背面方向から剥離を施し刃部を形成している。17は横長剥片を素材にしており、背面の右側縁と上面の右端に剥離を施し刃部を形成している。16は使用痕ある剥片である。縦長剥片を素材にしており、腹面右側縁上部に使用痕がついている。30はここでは石核と分類しているが、背面上端の剥離の様子を考えると、チャップパーと考えることも可能であるかもしれない。

この石群の剥片は縦長剥片が7点、横長剥片が7点であった。



第10図 第2群石核剥片図

第2表 第2群石器観察表

図版	出土位置		分 別		寸 法 (cm)							出 土 位 置 (m)		
番号	区画	番号	器 種	石 材	縦長	横長	厚さ	重量 g	石群	母岩	接合	南から	西から	標 高
18	C06	1	剥片	流紋岩	3.58	2.72	0.76	6.2	2	P	1	29.886	14.970	74.882
26	C07	4	剥片	流紋岩	8.54	3.14	1.23	21.4	2	A		31.552	14.781	74.623
24	C07	6	剥片	流紋岩	5.56	0.60	1.34	47.3	2	W	2	31.081	13.280	74.505
25	C07	8	剥片	流紋岩	5.19	5.66	1.71	44.0	2			32.285	13.964	74.527
17	C07	9	撿器	流紋岩	9.84	8.60	3.01	256.3	2			32.470	13.939	74.509
21	D06	1	剥片	流紋岩	2.57	2.82	0.96	4.4	2	P		25.354	17.660	74.840
28	D06	3	剥片	流紋岩	8.84	4.12	2.29	61.7	2	C		27.690	16.589	74.784
	D06	6	砕片	流紋岩	×	×	×	2.7	2	J		28.591	15.931	74.642
14	D06	7	撿器	流紋岩	6.58	3.29	1.32	22.0	2	C		28.588	15.861	74.625
15	D06	8	撿器	流紋岩	6.36	4.91	1.72	43.7	2			29.859	15.057	74.888
23	D07	1	剥片	流紋岩	5.69	6.56	2.22	41.6	2			30.068	15.643	74.811
20	D07	2	剥片	流紋岩	5.18	4.61	1.60	26.6	2	F		30.694	17.525	74.719
27	D07	3	剥片	流紋岩	4.07	6.06	2.89	71.1	2			30.890	17.540	74.688
30	D07	6	石核	流紋岩	12.02	6.96	5.28	442.5	2	D		30.561	19.174	74.744
29	D07	8	剥片	流紋岩	8.31	6.73	2.51	143.5	2	F		31.841	18.948	74.735
	D07	15	砕片	流紋岩	×	×	×	1.1	2	J		33.822	18.586	74.615
19	D07	21	剥片	流紋岩	4.34	3.37	0.95	11.4	2	P		33.769	15.170	74.520
22	D07	29	剥片	流紋岩	6.42	5.20	1.31	36.0	2	W	2	34.886	18.389	74.500
16	D08	47	使用痕剥片	流紋岩	8.81	6.02	2.30	85.4	2	L		35.448	18.056	74.441

c. 【第3群】(第11、12図)

この石群はE-8グリッドを分布の中心とするもので、17点の遺物が確認された。その内訳は、剥片・砕片が14点、石器が2点であった。この石群の石器類も、石材は全て流紋岩を使用しており、特に母岩Kはこのグリッド内からほとんどが出土している。そのことから、母岩Kについてはこの場所での石器制作が行われ

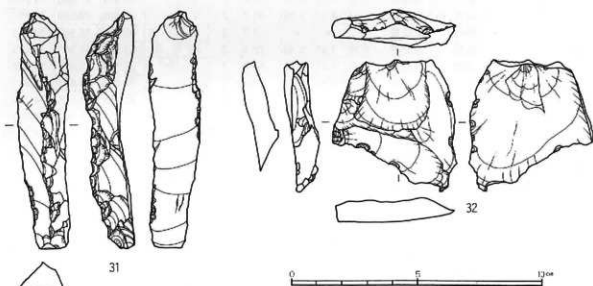
たのであろうことが推測される。

石器類では、31が掻器である。縦長剥片を利用し、右側面の左端に細かな調整剥離が施されている。また、腹面の右側縁上部と左側縁下部、それと背面の左側縁下部には、二次加工を施し、また細かな使用痕も認められる。32については、使用痕ある剥片である。横長剥片を利用し、背面右側縁と下端に使用痕が確認できる。1回だけの使用ではなく、何回か断続的に使用されたものであろう。

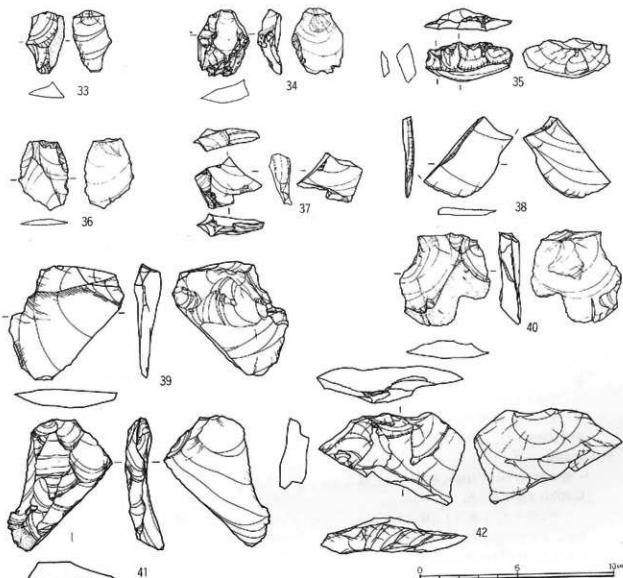
この石群内では、石核と考えられる石器は検出されていない。なお、この石群内においては2組の接合関係が確認されている（接合資料212、219を参照）。その他の剥片については、縦長剥片が4点、横長剥片が5点であった。

第3表 第3群石器観察表

図版	区画	番号	分 別	器 種	石 材	寸 法 (cm)				石群	母岩	接合	出 土 位 置 (m)		
						縦長	横長	厚さ	重量 g				南から	西から	標 高
36	D08	51	剥片	流紋岩		3.61	2.57	0.76	4.2	3	Q		35.540	19.884	74.598
33	E07	18	剥片	流紋岩		×	×	×	3.9	3	AC		34.296	24.172	74.569
	E07	19	砕片	流紋岩		×	×	×	3.3	3			34.269	24.249	74.563
35	E07	55	剥片	流紋岩		2.07	4.56	1.20	7.2	3	K		34.498	21.697	74.414
	E08	20	剥片	流紋岩		×	×	×	1.2	3			35.668	24.395	74.514
40	E08	28	剥片	流紋岩		4.78	4.73	1.08	21.8	3			38.102	22.913	74.632
32	E08	35	使用痕剥片	流紋岩		5.20	4.98	1.42	25.4	3	K		36.462	21.929	74.675
42	E08	36	剥片	流紋岩		4.88	7.62	1.87	43.1	3	L	5	35.942	21.662	74.612
41	E08	78	剥片	流紋岩		6.79	5.48	1.96	33.3	3	K		36.906	20.790	74.438
37	E08	80	剥片	流紋岩		2.66	3.46	1.13	6.2	3	Q		35.801	21.310	74.555
	E08	81	剥片	流紋岩		×	×	×	2.1	3	AC		35.453	22.474	74.368
38	E08	83	剥片	流紋岩		4.15	4.69	0.42	7.6	3	K	6	35.606	23.635	74.446
39	E08	86	剥片	流紋岩		5.88	6.00	1.41	37.4	3	K	6	36.194	22.730	74.439
	E08	98	剥片	流紋岩		×	×	×	1.5	3			37.797	23.032	74.557
34	E08	99	剥片	流紋岩		3.42	2.71	1.25	8.4	3			37.713	22.988	74.556
31	E08	104	掻器	流紋岩		9.35	2.04	2.06	26.6	3	K		36.964	23.895	74.269



第11図 第3群石器類実測図



第12図 第3群剥片実測図

d. 【第4群】(第13~15図)

第4表 第4群石器観察表

図版 番号	出土位置 区画 番号	分 別 器 種	石 材	寸 法 (cm)				石群	母岩	接合	出 土 位 置 (m)		
				縦長	横長	厚さ	重量 g				南から	西から	標 高
45	D08	25	削器	流紋岩	6.00	4.52	1.50	31.7	4		39.327	17.064	74.504
43	D09	1	ナイフ形石器	流紋岩	5.84	1.86	1.01	6.2	4	J	40.184	18.821	74.544
53	D09	2	石核	流紋岩	4.22	6.06	1.71	36.8	4		41.147	19.388	74.542
51	D09	4	剥片	流紋岩	5.07	4.06	2.10	38.3	4	H	40.614	18.160	74.483
47	D09	29	剥片	流紋岩	2.72	3.68	1.28	7.1	4	J	42.895	15.597	74.241
50	D09	37	剥片	流紋岩	6.53	3.18	1.51	23.8	4	AF	40.792	15.839	74.325
52	D09	39	剥片	流紋岩	6.18	7.24	3.42	123.2	4	AC 3	41.473	16.290	74.377
48	D09	43	剥片	流紋岩	4.59	6.06	2.24	47.5	4	H	40.225	19.431	74.322
54	D09	44	石核	流紋岩	5.18	5.12	4.96	170.3	4	H	40.753	17.266	74.237
49	D09	60	剥片	流紋岩	4.46	1.82	0.75	2.8	4	Q	41.339	19.343	74.287
46	D09	一坩	剥片	流紋岩	4.32	4.32	0.71	10.2	4	N 13			
44	E08	75	削器	流紋岩	8.32	3.00	1.40	23.3	4	AE	39.627	20.192	74.447

この石群は、D-9グリッドを分布の中心とするもので、計12点の遺物が確認された。その内訳は、剥片・砕片が7点、石核が2点、石器が3点であった。

この石群においても、石材は全て流紋岩であり、確認された母岩は10個体であった。ただ、他の石群との接合関係は確認されたものの（接合資料217、218を参照）、同一石群内での接合例は確認できなかった。

石器類では、43がナイフ形石器である。三角形でやや扁平な縦長剥片を素材として、打面をナイフの基部に、剥片の末端をナイフの先端にあてている。基部には刃潰しを行わず、背面の右側縁上部から約1/2の部分にのみ刃潰しを施している。44は刮器で縦長剥片を素材にしている。腹面左側縁の中央部分のみに、二次加工を施し、刃部を形成している。45は刮器として主に使用されたと考えられる石器で、縦長剥片を素材にしている。背面左側縁の、腹面方向から二次加工を施し、刃部を形成している。また腹面の周辺全縁に使用時につく細かな剥離が認められ、実際に使用された痕跡が窺える。

他の剥片については縦長剥片が4点、横長剥片が3点であった。

この石群では、石核は2点確認されているが、どちらの石核も、石群内・外の剥片・石器等との接合は確認できなかった。

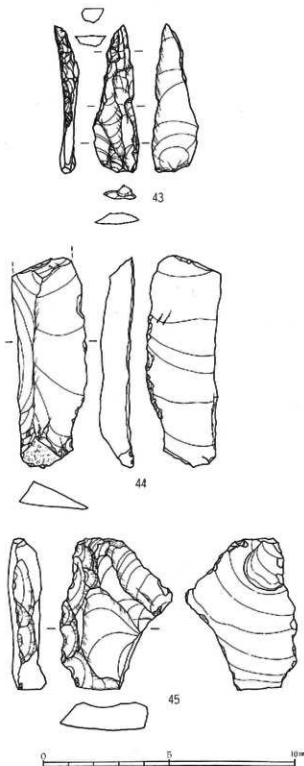
e. 【第5群】（第16～21図）

この石群はE-8グリッドを分布の中心とするもので、47点の遺物が含まれる。本遺跡の調査区では一番遺物の量が多かったところである。

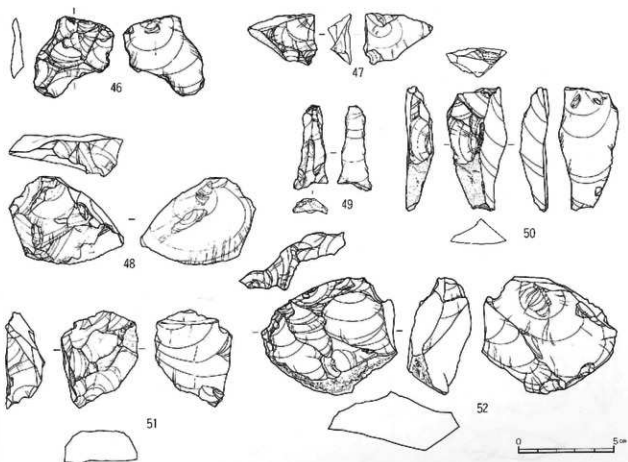
その内訳は、剥片・砕片が38点、石核が5点、石器が4点であった。石材はここでも全て流紋岩である。この石群内では、接合資料が他に比べ多く、この地点を中心に石器の製作が行われたであろうことが推測される。

ただし、石材はすべて同じ流紋岩ではあるが、その種類は多岐にわたっており、34個体の母岩が確認された。

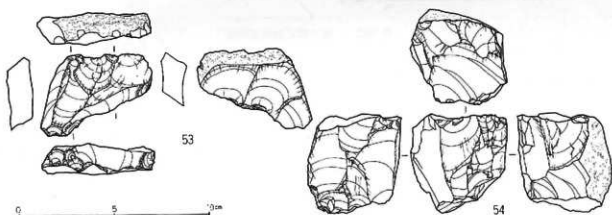
石器類では、55、56が刮器。55は縦長剥片を素材としており、背面左側縁の全縁に自然面を残す。また、背面右側縁の全縁に二次加工を施し、刃部を形成している。56も縦長剥片を素材としており、背面の右側縁



第13図 第4群石器類実測図

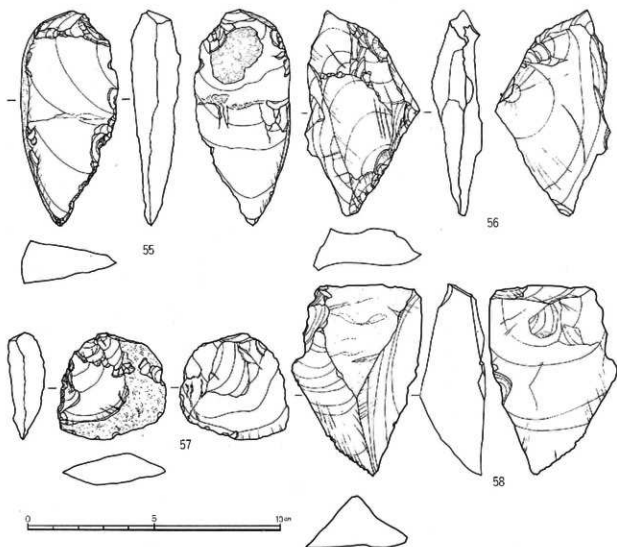


第14図 第4群剥片実測図

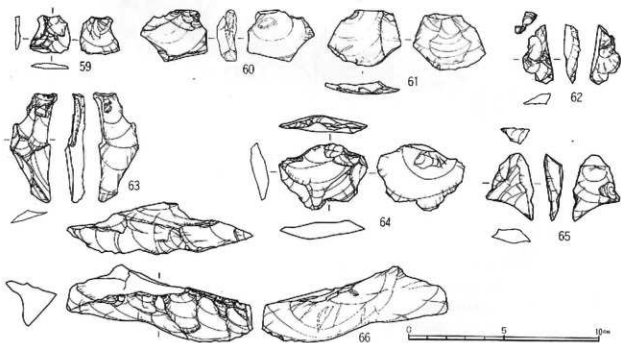


第15図 第4群石核実測図

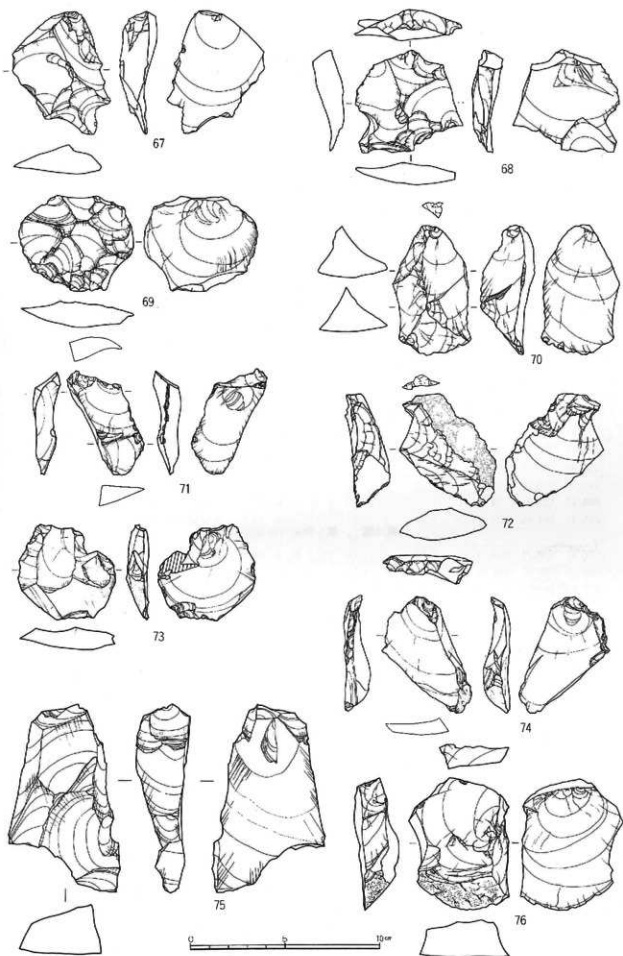
全縁に二次加工を施し、刃部を形成している。(56については接合資料の213を参照) 57は横長剥片を素材とした使用痕ある剥片である。背面の左側縁に使用痕がついている。58も縦長剥片を素材とした使用痕ある剥片である。背面の左側縁下部に使用痕がついている。その他、剥片として分類した中にも、その剥離の具合によっては、実際に使用されたのではないかと考えられる剥片も含まれているが、ここでは、その目的が明らかな石器と、使用痕跡が明確に確認できる剥片についてのみ考察を行い、その他の剥片類については考察を割愛している。剥片では縦長剥片が13点、横長剥片が11点であった。



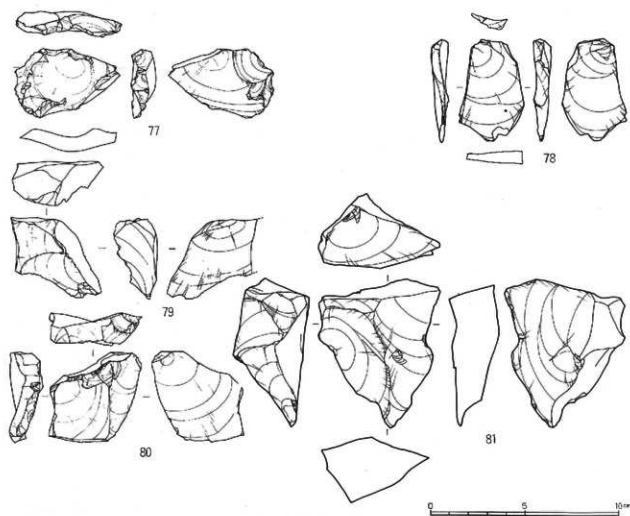
第16圖 第5群石器類実測圖



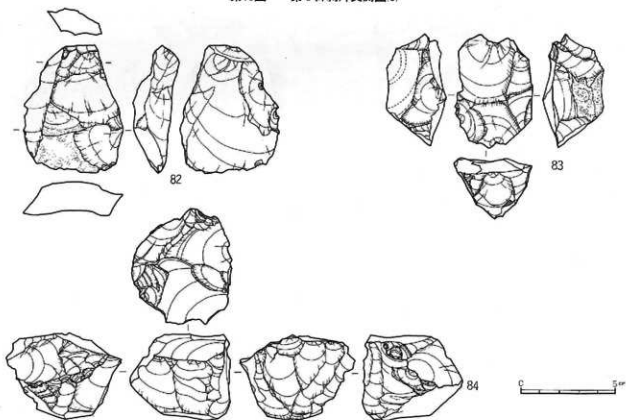
第17圖 第5群切片実測圖(1)



第18图 第5群剥片实测图(2)



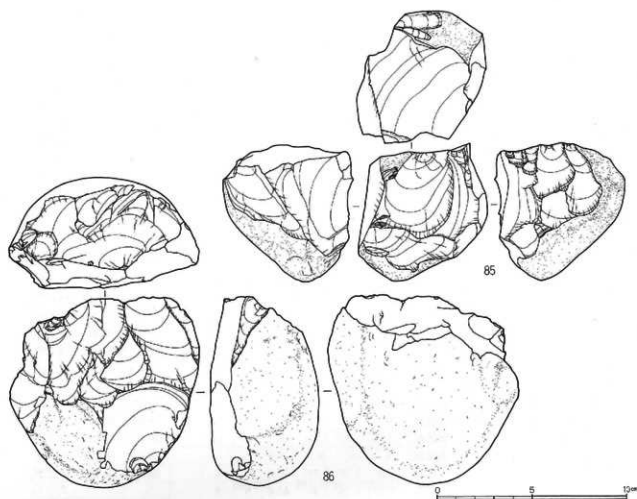
第19图 第5群剥片实测图(3)



第20图 第5群石核实测图(1)

第5表 第5群石器観察表

図版 番号	出土位置 区画 番号	分 別	寸 法 (cm)				石群	母岩	接合	出土位置 (m)		
			縦長	横長	厚さ	重量 g				南から	西から	標 高
	E08 74	砂片	流紋岩	×	×	×	0.1	5		39.949	24.514	74.542
63	E08 106	剥片	流紋岩	5.76	2.46	1.03	7.4	5		39.821	22.574	74.485
79	E09 30	剥片	流紋岩	4.19	4.80	2.32	28.4	5	M	41.681	23.009	74.474
76	E09 54	剥片	流紋岩	7.02	5.32	2.38	89.5	5	AC 3	40.297	22.142	74.518
74	E09 76	剥片	流紋岩	6.07	4.78	1.40	25.7	5	Q	42.754	21.247	74.581
60	E09 102	剥片	流紋岩	2.76	3.56	1.05	6.9	5	Q	41.846	23.961	74.518
65	E09 106	剥片	流紋岩	3.58	2.52	0.94	5.9	5	AC 3	42.677	24.418	74.580
66	E09 112	剥片	流紋岩	4.02	9.83	2.79	48.7	5	L 5	43.686	24.353	74.536
71	E09 120	剥片	流紋岩	5.48	4.12	1.44	16.4	5	A	44.823	24.907	74.471
78	E09 123	剥片	流紋岩	5.38	3.41	0.90	14.5	5	AC 3	43.450	23.504	74.443
75	E09 124	剥片	流紋岩	9.10	5.98	2.85	108.3	5		43.375	24.282	74.306
70	E09 131	剥片	流紋岩	6.82	4.16	2.88	50.4	5	G	44.556	24.261	74.310
62	E09 132	剥片	流紋岩	3.12	1.62	0.83	2.7	5	AC 3	44.588	24.341	74.246
	E09 一括	剥片	流紋岩	×	×	×	2.1	5	P			
84	E10 8	石核	流紋岩	4.55	5.34	6.10	152.3	5		46.491	23.383	74.362
55	E10 11	削器	流紋岩	8.50	3.88	1.96	50.5	5		47.668	21.693	74.466
69	E10 32	剥片	流紋岩	5.02	6.11	1.41	43.4	5	N 7	48.427	20.344	74.259
64	E10 44	剥片	流紋岩	3.50	4.66	0.92	11.1	5	N	47.271	24.873	74.259
67	E10 45	剥片	流紋岩	6.46	5.16	2.01	42.6	5	T	47.236	24.324	74.257
57	E10 50	使用痕剥片	流紋岩	4.20	4.32	1.50	24.1	5		46.208	23.495	74.270
82	E10 53	石核	流紋岩	6.72	5.18	2.43	63.3	5	D	45.945	22.201	74.289
	F08 18	剥片	流紋岩	×	×	×	15.5	5	N	39.634	27.897	74.220
77	F08 19	剥片	流紋岩	3.68	5.62	1.34	23.1	5	Q	39.931	27.823	74.212
	F08 22	剥片	流紋岩	×	×	×	1.9	5		38.677	25.032	74.496
61	F08 26	剥片	流紋岩	2.97	3.88	0.71	6.5	5	K	38.100	26.100	74.275
72	F08 一括	剥片	流紋岩	5.94	5.18	2.39	43.8	5	E			
83	F09 30	石核	流紋岩	5.98	4.15	3.32	67.1	5	P	41.408	25.650	74.342
	F09 42	剥片	流紋岩	×	×	×	13.4	5		43.281	25.957	74.190
	F09 48	剥片	流紋岩	×	×	×	71.6	5		43.702	25.049	74.275
	F09 54	剥片	流紋岩	×	×	×	35.6	5		44.421	28.423	74.121
	F09 61	砂片	流紋岩	×	×	×	0.8	5		44.316	26.655	74.217
86	F09 62	石核	流紋岩	9.96	10.10	5.76	735.0	5		43.983	26.037	74.145
	F09 75	剥片	流紋岩	×	×	×	65.1	5		44.587	25.270	74.343
81	F09 77	剥片	流紋岩	7.91	6.48	4.01	125.2	5	AC 3	41.054	25.284	74.254
58	F09 89	使用痕剥片	流紋岩	7.56	5.16	2.59	73.5	5	P	40.870	26.770	74.348
	F09 96	剥片	流紋岩	×	×	×	2.9	5	P	41.680	25.030	74.577
80	F10 1	剥片	流紋岩	4.76	4.86	1.78	31.4	5	G	45.690	25.866	74.455
	F10 13	剥片	流紋岩	×	×	×	407.1	5		47.910	25.346	74.389
59	F10 24	剥片	流紋岩	1.88	2.09	0.30	1.2	5	N 7	47.684	26.333	74.377
56	F10 58	削器	流紋岩	8.15	4.60	2.04	49.3	5	L 5	46.895	25.260	74.297
85	F10 92	石核	流紋岩	7.14	6.86	6.90	376.0	5		47.388	26.464	74.206
73	F10 100	剥片	流紋岩	5.03	5.18	1.14	28.9	5		45.855	26.478	74.226
	F10 103	砂片	流紋岩	×	×	×	0.3	5		46.282	27.224	74.154
	F10 109	剥片	流紋岩	×	×	×	1.6	5	S	46.184	28.265	74.135
68	F10 113	剥片	流紋岩	5.42	5.72	1.68	36.4	5	R	45.586	28.328	74.202
	F10 114	剥片	流紋岩	×	×	×	4.9	5		45.822	27.918	74.146
	F10 123	剥片	流紋岩	×	×	×	7.6	5		45.056	26.635	74.241



第21図 第5群石核実測図2

f. 【第6群】（第22～27図）

この石群はF-11グリッドを分布の中心とするもので、44点の遺物が確認された。その内訳は剥片・碎片が32点、石核が6点、石器が6点であった。石材はこの石群も全て流紋岩である。母岩は28個体が確認されており、第5群に比べ分布が集中しているせいか、種類は少ない。中でも母岩Aとしている石材はこの石群に集中して分布しており、石群内での接合も確認される。

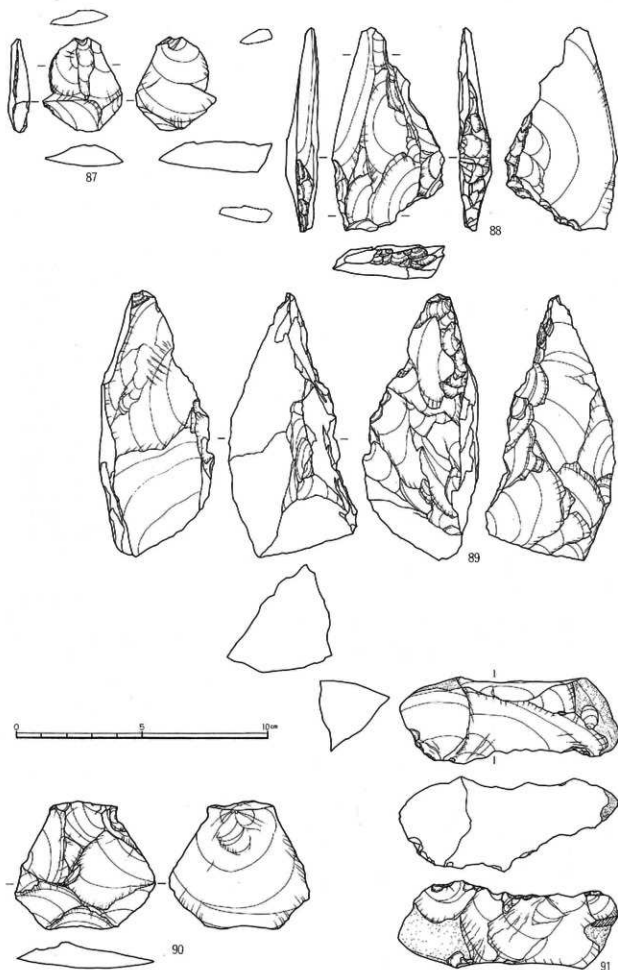
石器類では、89が三稜尖頭器の未成品である。腹面の左側縁全縁には調整剥離を施しているが、他の2辺には細かな調整は施されていない。製作途中で断念したものであろう。88はナイフ形石器である。横長剥片を素材として、打面の付近に腹面からの刃潰しを施している。90は搔器である。縦長剥片を素材とし、背面右側縁上部にわずかに二次加工を施している。全体に人まかな調整を施しているだけで、未成品という見方も出来る。また、これについては接合資料の217でも扱っている。87、91、92は使用痕ある剥片である。91については、横長剥片を素材としている。腹面上部の一側縁に使用痕がみえる。92は、横長剥片を素材としたもので、背面下端にわずかな二次加工と取れる調整剥離がみえる。また、背面右側縁の上部と、腹面下端に使用痕がある。87は、縦長剥片を素材としており、背面左側縁の上部に使用痕がある。

石器と分類されている以外では111、116についても、ここでは石核と分類しているが、どちらも調整を施したらしい痕跡が確認できるため、石器として製作を行う途中であったという見方もできる。また、111、116については、接合資料の204、208でも扱っている。

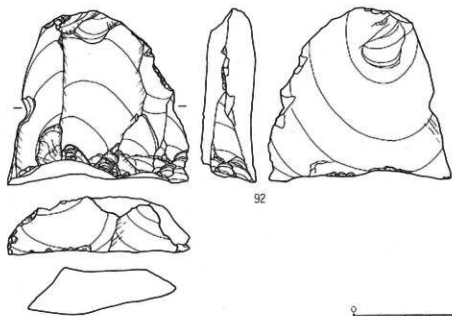
剥片については、縦長剥片が9点、横長剥片が9点であった。

第6表 第6群石器観察表

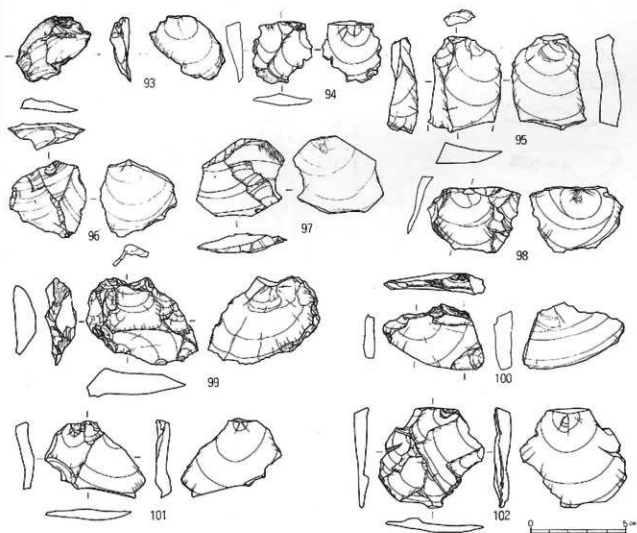
図版	出土位置	分	別	寸 法 (cm)				石群	母岩	接合	出 土 位 置 (m)		
番号	区画 番号	器 種	石 材	縦長	横長	厚さ	重量 g				南から	西から	標 高
113	E10 17	剥片	流紋岩	×	×	×	200.8	6	Z		49.778	24.943	74.322
	E10 18	石核	流紋岩	7.08	2.56	4.24	75.0	6	X		49.129	24.356	74.389
	E10 39	剥片	流紋岩	×	×	×	2.3	6			49.586	23.434	74.193
93	E10 41	剥片	流紋岩	3.40	3.97	1.05	8.9	6	S		49.530	24.778	74.120
	E11 6	碎片	流紋岩	×	×	×	1.8	6			52.153	22.845	74.181
105	E11 7	剥片	流紋岩	7.70	3.76	2.20	49.4	6		8	52.752	23.074	74.261
87	E11 12	使用痕剥片	流紋岩	3.72	3.18	0.86	8.1	6	A		51.716	23.503	74.298
106	E11 16	剥片	流紋岩	6.46	5.06	1.32	31.3	6	A		50.727	22.980	74.227
112	E11 18	石核	流紋岩	7.41	6.09	4.08	224.1	6			50.420	22.663	74.287
	E11 19	剥片	流紋岩	×	×	×	29.8	6			50.981	23.895	74.316
114	E11 22	石核	流紋岩	5.74	8.88	6.71	419.4	6			51.441	24.494	74.190
94	E11 23	剥片	流紋岩	3.23	3.15	0.85	5.3	6	A		51.474	24.627	74.195
109	E11 40	剥片	流紋岩	6.13	5.89	2.51	70.7	6	M		50.377	22.375	74.193
115	E11 41	石核	流紋岩	7.81	5.16	4.04	122.4	6	M		50.152	22.414	74.208
97	F10 31	剥片	流紋岩	4.09	4.77	1.00	13.5	6			48.903	25.553	74.380
111	F10 34	石核	流紋岩	3.94	6.65	3.64	74.4	6	A	10	48.512	26.106	74.256
99	F10 43	剥片	流紋岩	4.59	5.96	1.68	31.0	6	N		49.565	27.271	74.321
88	F10 54	ナイフ形石器	流紋岩	8.07	4.52	1.38	41.3	6	R		49.695	28.058	74.275
	F10 60	剥片	流紋岩	×	×	×	2.5	6	N		48.991	25.616	74.114
103	F10 61	剥片	流紋岩	5.79	3.42	1.05	8.3	6	Y		49.606	26.061	74.107
91	F10 64	使用痕剥片	流紋岩	3.46	8.78	3.78	75.2	6			49.783	26.486	74.139
	F10 65	剥片	流紋岩	×	×	×	3.8	6			49.746	26.591	74.131
	F10 66	剥片	流紋岩	×	×	×	1.7	6			49.738	26.637	74.127
110	F10 68	剥片	流紋岩	9.21	5.96	1.44	68.8	6	O		49.168	27.295	74.150
	F10 69	碎片	流紋岩	×	×	×	1.5	6	R		49.767	27.292	74.226
	F10 70	碎片	流紋岩	×	×	×	0.8	6			49.228	27.477	74.192
98	F10 73	剥片	流紋岩	3.47	4.98	0.78	9.1	6	N	12	49.629	28.014	74.217
	F10 75	碎片	流紋岩	×	×	×	2.4	6			48.272	28.037	74.086
	F10 122	碎片	流紋岩	×	×	×	1.1	6			51.271	26.781	74.327
92	F10 126	使用痕剥片	流紋岩	6.88	7.25	2.18	108.7	6			49.922	26.330	74.101
90	F11 4	槌器	流紋岩	5.10	5.62	1.02	30.6	6	N	13	50.881	25.640	74.380
107	F11 10	剥片	流紋岩	6.12	6.68	1.61	38.0	6	Y		50.438	26.069	74.303
108	F11 12	剥片	流紋岩	5.58	5.56	1.44	28.4	6	N		50.558	26.265	74.295
116	F11 25	石核	流紋岩	5.96	10.85	4.20	222.5	6	AD	14	51.881	27.585	74.225
	F11 31	剥片	流紋岩	×	×	×	3.2	6	Y		50.566	27.485	74.319
101	F11 34	剥片	流紋岩	4.12	5.37	0.79	11.1	6	R		50.929	27.551	74.240
104	F11 41	剥片	流紋岩	4.99	4.65	1.40	26.1	6	Y		52.638	27.464	74.052
96	F11 42	剥片	流紋岩	4.08	4.08	1.41	14.7	6			52.394	27.754	74.137
102	F11 45	剥片	流紋岩	5.32	5.63	0.96	20.2	6	R		50.838	28.010	74.119
	F11 46	剥片	流紋岩	×	×	×	1.5	6			50.495	27.873	74.116
100	F11 48	剥片	流紋岩	3.48	5.16	1.19	20.1	6	R		50.534	27.623	74.282
89	F11 50	三稜尖頭器	流紋岩	10.40	5.14	4.61	177.7	6			50.969	26.948	74.208
95	F11 53	剥片	流紋岩	5.08	3.96	1.68	26.4	6	A	10	50.781	26.342	74.120
	F11 61	碎片	流紋岩	×	×	×	1.7	6			50.442	28.421	74.098



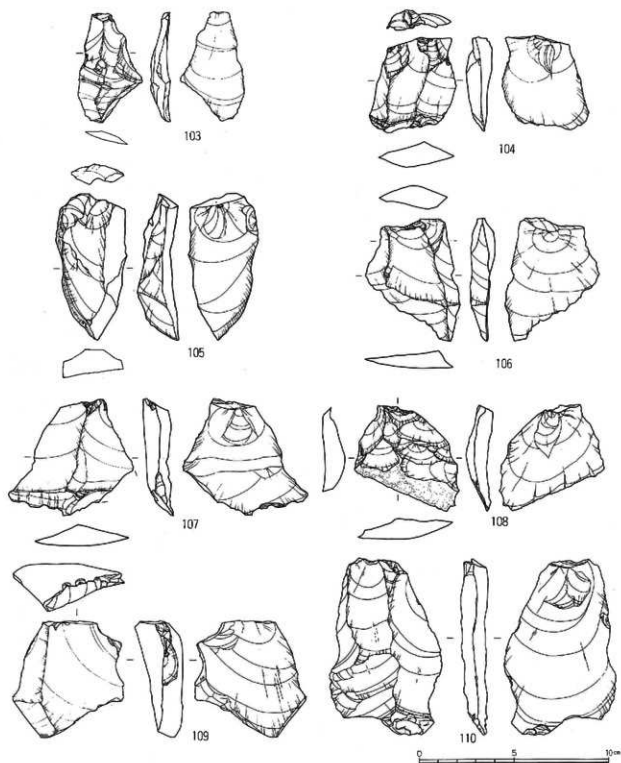
第22図 第6群石器類実測図(1)



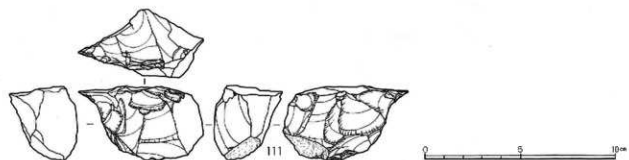
第23圖 第6群石器類実測図(2)



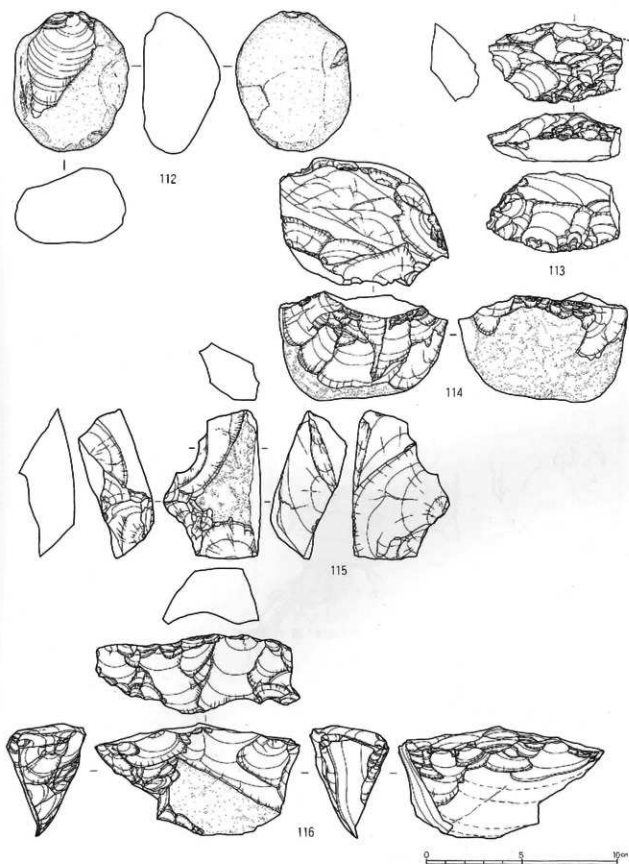
第24圖 第6群剥片実測図(1)



第25图 第6群剥片实测图(2)



第26图 第6群石核实测图(1)



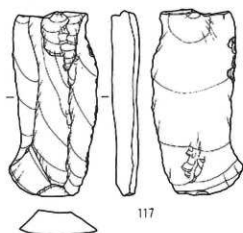
第27图 第6群石核实测图(2)

8. 【第7群】（第28～30図）

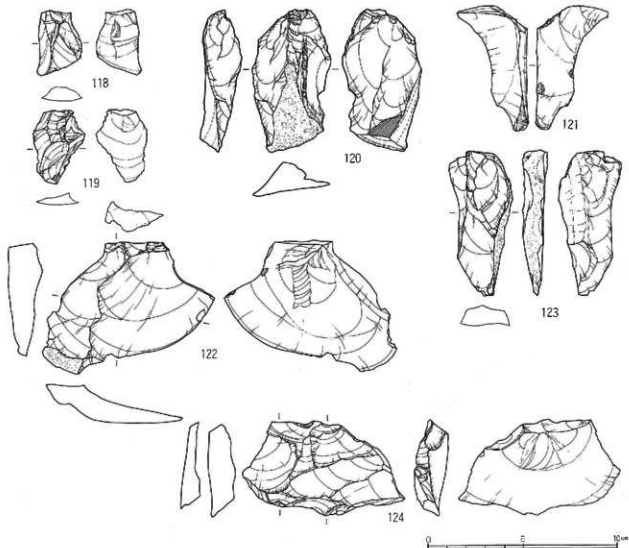
この石群はF-12グリッドを分布の中心としたものであり、13の遺物が確認された。内訳は剥片・砕片が12点、石器が1点である。この石群内では接合例が多く、遺物13点中7点で接合が確認された。ただ、この石群では石核が確認されていないので、この場所で母岩からの石器製作が行われた可能性は低い。

石器類では、117が使用痕ある剥片である。縦長剥片を素材としており、背面右側縁全縁に使用痕がある。他の剥片には使用痕・二次加工痕ともに確認されず、全て単純な剥片と考えられる。

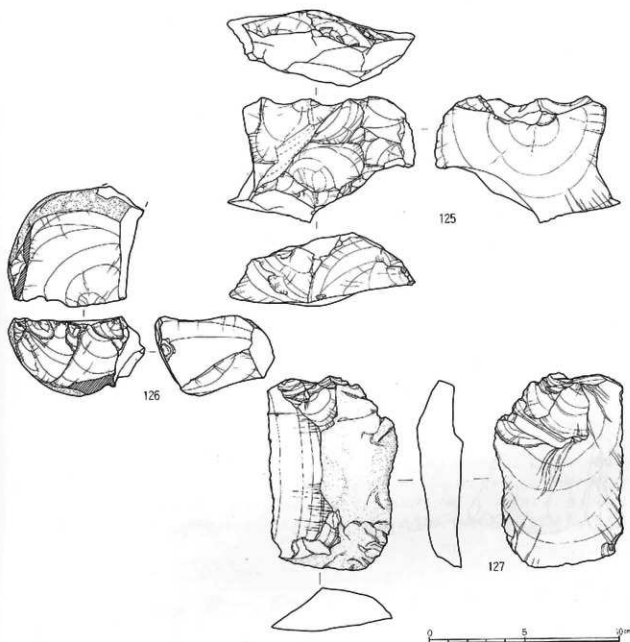
剥片では、縦長剥片が5点、横長剥片が4点であった。



第28図 第7群石器類実測図



第29図 第7群剥片実測図(1)



第30図 第7群剥片実測図(2)

第7表 第7群石器観察表

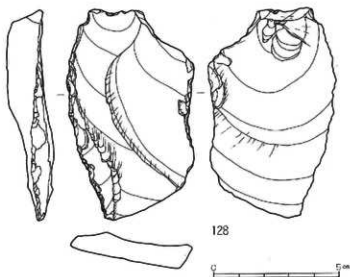
図版 番号	出土位置 区画 番号	分 別	器 種	石 材	寸 法 (cm)				石 群	母 岩	接 合	出 土 位 置 (m)		
					縦長	横長	厚さ	重量 g				南から	西から	標 高
	E11 34	剥片	流紋岩	×	×	×	103.3	7				54.221	24.078	74.162
127	E12 7	剥片	流紋岩	10.28	6.83	2.43	169.7	7				55.398	21.664	74.059
119	E12 27	剥片	流紋岩	3.85	2.74	0.72	5.6	7	J			57.064	23.625	74.248
125	E12 44	剥片	流紋岩				190.9	7	A	9		56.104	24.308	74.234
118	F12 11	剥片	流紋岩	3.41	2.38	0.85	6.1	7	AB			57.879	26.142	74.176
	F12 32	剥片	流紋岩	6.77	7.00	2.01	54.4	7				55.019	26.445	74.275
126	F12 33	剥片	流紋岩	4.17	7.26	6.13	190.1	7	AD	14		55.149	26.425	74.248
120	F12 35	剥片	流紋岩	7.56	4.20	2.27	44.1	7	AD	14		55.451	26.801	74.277
122	F12 36	剥片	流紋岩	6.85	9.20	2.10	77.7	7	A	4		55.363	27.266	74.233
124	F12 41	剥片	流紋岩	5.02	8.62	1.81	65.8	7				55.834	27.263	74.233
117	F12 43	使用痕剥片	流紋岩	7.28	3.60	1.14	33.5	7	AB	11		56.006	27.390	74.287
123	F12 45	剥片	流紋岩	7.64	3.39	1.38	32.0	7	AB	11		55.837	27.553	74.207
121	F12 52	剥片	流紋岩				24.6	7	A	9		57.659	27.077	74.167

h. 【第8群】(第31、32図)

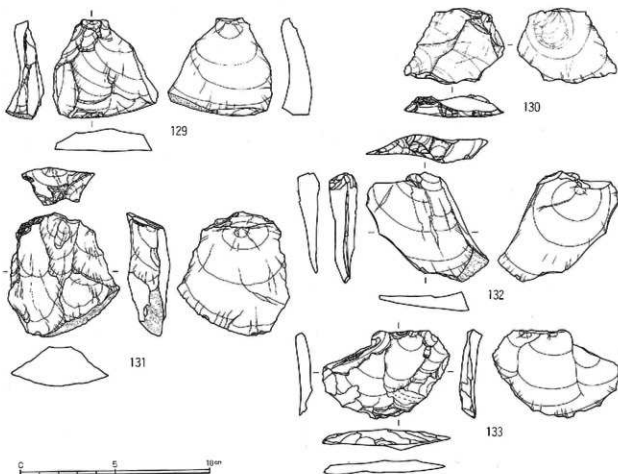
この石群は、G-10グリッドを分布の中心とするもので、9点の遺物が確認された。その内訳は、剥片・砕片が8点、石器が1点であった。ここでも全て流紋岩を使用したものが出土している。ただし、母岩は全て異なっている。

石器については128が削器で、縦長剥片を素材としている。背面右側縁に、一旦大きく剥離を施した後、さらに細かい二次加工を行い、刃部を形成している。また、背面左側縁にも使用痕がみられる。その反対の側面にも使用による細かい剥離痕が認められる。

他の剥片には全て使用痕・二次加工痕は認められなかった。ここで確認された遺物は、他の石群の石材と共通する母岩を使用しているものが半数を占めており、この地点で石器製作を行ったというよりも、中央部からの流れ込みによるものと考えたほうが妥当かもしれない。



第31図 第8群石器類実測図



第32図 第8群剥片実測図

第8表 第8群石器観察表

図版 番号	出土位置 区画 番号	分 別		寸 法 (cm)				石群	母岩	接合	出 土 位 置 (m)		
		器 種	石 材	縦長	横長	厚さ	重量 g				南から	西から	標 高
	G10 1	剥片	流紋岩	×	×	×	5.5	8			46.373	31.857	73.829
132	G10 7	剥片	流紋岩	5.78	6.56	1.46	30.9	8			45.814	33.999	73.472
131	G10 13	剥片	流紋岩	6.56	5.92	2.32	72.6	8			49.449	32.429	73.799
	G10 14	砕片	流紋岩	×	×	×	1.5	8	AF		48.090	33.364	73.677
128	G10 17	削器	流紋岩	8.39	5.10	1.86	53.6	8			48.910	34.542	72.471
133	G10 22	剥片	流紋岩	4.65	6.78	1.26	26.0	8			47.398	33.677	73.655
129	H09 2	剥片	流紋岩	5.20	5.58	2.01	45.9	8	A	10	43.027	36.015	73.095
130	H10 4	剥片	流紋岩	3.98	5.29	1.15	20.2	8	N		49.408	36.342	73.305
	H10 11	砕片	流紋岩	×	×	×	3.2	8	Y		46.148	38.308	72.859

i. 【第9群】(第33、34図)

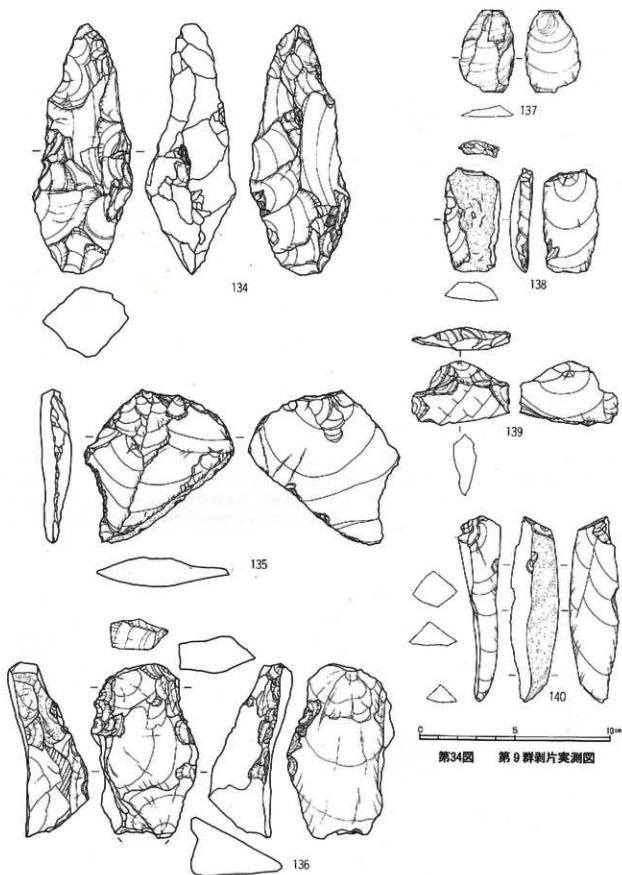
この石群は、II-12グリッドを分布の中心とするもので、16点の遺物が確認された。内訳は剥片・砕片が13点、石器が3点で、ここでも第8群と同様に石核は含まれない。この石群の石器類も、全て流紋岩を利用したものである。母岩の種類は15個体であった。

石器類では134が一稜尖頭器の未成品と考えられる。背面右側縁の中央部と腹面右側縁の下部に調整剥離の痕がある。しかし、どの側面にも連続した調整の痕は見受けられず、大きく3つの面を整形したにとどまっている。135は削器である。縦長剥片を素材としている。背面左側縁の下部に使用痕のような小さな剥離を施し、また、背面上部にも二次加工を行い刃部を形成している。136も削器である。縦長剥片を素材としており、背面右側縁の上部から約2/3の範囲に背面・腹面両方向からの剥離を施し、同じく左側縁の上部から約1/2の範囲にも大きな剥離を施している。

他は全て剥片であるが、他の石群と比べ細かな剥片が多い。砕片2点もあわせると13点の平均の重量が13.6gで、追跡全体の剥片・砕片の重量(平均37.4g)と比べても小さい。このことから、この石群の剥片は石器を製作する過程での調整剥片が多いと考えられる。ただ、第8群と同様、同一の母岩からと考えられるものが少なく(全体で16点中、同一の母岩と考えられるものは2点のみ)、西側の石群からの流れ込みと考えたほうが妥当であろう。

第9表 第9群石器観察表

図版 番号	出土位置 区画 番号	分 別		寸 法 (cm)				石群	母岩	接合	出 土 位 置 (m)		
		器 種	石 材	縦長	横長	厚さ	重量 g				南から	西から	標 高
134	G12 2	三稜尖頭器	流紋岩	9.87	3.95	3.58	94.6	9			56.083	34.561	73.522
	G12 3	剥片	流紋岩	×	×	×	39.4	9			55.216	34.613	73.490
140	G12 6	剥片	流紋岩	9.76	2.65	2.21	39.1	9			57.278	34.570	73.643
139	G12 7	剥片	流紋岩	3.36	5.18	1.21	16.5	9			57.702	34.884	73.662
138	G12 13	剥片	流紋岩	5.45	2.99	1.22	21.6	9	Z		58.321	34.569	73.764
	G12 26	砕片	流紋岩	×	×	×	2.9	9			57.578	34.414	73.648
	H11 3	剥片	流紋岩	×	×	×	7.7	9			52.434	35.715	73.432
	H11 4	剥片	流紋岩	×	×	×	3.2	9			52.398	35.699	73.446
	H11 12	剥片	流紋岩	×	×	×	9.1	9	A		51.748	39.321	72.798
	H11 14	砕片	流紋岩	×	×	×	4.3	9	A		52.647	38.185	73.059
136	H12 20	削器	流紋岩	6.92	4.27	3.29	62.5	9			56.395	37.662	73.271
	H12 26	剥片	流紋岩	×	×	×	9.6	9			58.162	39.483	73.042
	H12 36	剥片	流紋岩	×	×	×	5.9	9	AA		59.550	37.224	73.373
	I12 1	剥片	流紋岩	×	×	×	7.0	9			55.406	40.141	72.777
137	I12 2	剥片	流紋岩	4.32	2.88	0.98	9.9	9			56.366	40.171	72.821
135	I12 7	削器	流紋岩	6.10	6.02	1.26	30.6	9			55.988	40.609	72.732



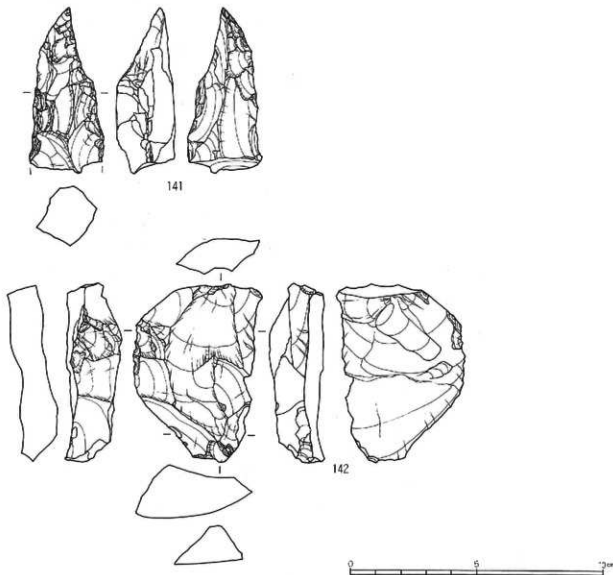
第33图 第9群石器类实测图

第34图 第9群剥片实测图

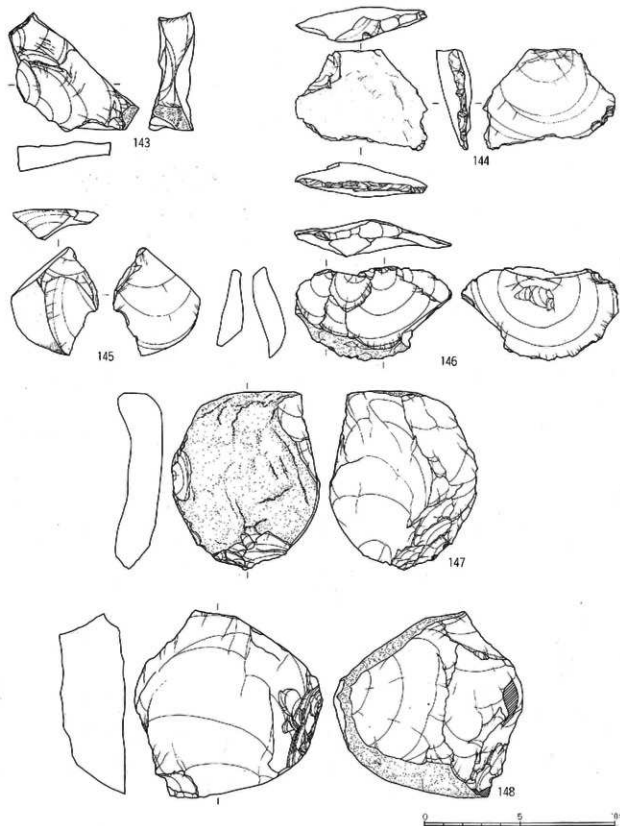
j. 【第10群】 (第35~37図)

第10表 第10群石器観察表

図版	出土位置		分 別		寸 法 (cm)							出 土 位 置 (m)		
番号	区画	番号	器 種	石 材	縦長	横長	厚さ	重量 g	石群	母岩	接合	南から	西から	標 高
146	G13	14	剥片	流紋岩	4.93	8.30	1.97	58.0	10	T		63.803	34.568	73.747
141	G13	一括	三稜尖頭器	流紋岩	6.50	2.96	2.36	34.5	10					
142	G14	25	掻器	流紋岩	7.09	5.19	2.26	74.9	10			67.451	34.771	73.810
	H13	11	剥片	流紋岩	×	×	×	12.1	10			62.690	36.388	73.611
143	H13	12	剥片	流紋岩	6.29	6.94	2.40	71.5	10	U	15	62.640	36.326	73.600
145	H13	18	剥片	流紋岩	5.68	4.65	1.62	28.6	10	AA		61.840	36.608	73.674
147	H14	27	剥片	流紋岩	9.40	7.92	2.32	243.2	10	V	16	66.793	36.155	73.732
148	H14	28	剥片	流紋岩	9.90	10.00	3.44	433.8	10	V	16	67.209	36.058	73.720
149	H14	29	石核	流紋岩	8.18	5.96	1.82	88.9	10			66.534	35.530	73.746
150	H14	30	石核	流紋岩	6.38	5.22	2.20	58.8	10			65.988	35.382	73.763
144	H14	33	剥片	流紋岩	5.31	6.98	1.84	65.5	10			66.539	39.634	73.289
	H14	38	剥片	流紋岩	×	×	×	46.7	10			67.535	37.795	73.552



第35図 第10群石器類実測図

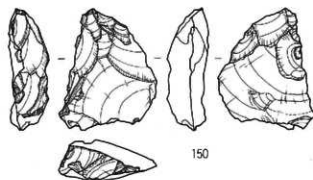
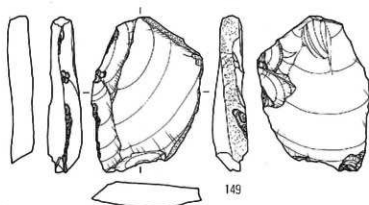


第36图 第10群剥片实例图

この石群はII-14グリッドを中心とするもので、12の遺物が含まれる。内訳は剥片・砕片が8点、石核が2点、石器が2点である。

石器類では141が三稜尖頭器の未成品と考えられる。背面左側縁の下部と、同じく右側縁の全縁、それと腹面右側縁の上部に調整剥離を施している。ただ、刃部がまだ形成されていないにもかかわらず、全く調整の痕がみられない側縁もあり、この石器については未成品という見方をした。142については槌器である。縦長剥片を素材としており、側面全体ではなく一部のみに調整剥離がみられる。

149については石核に分類しているが、わずかに調整剥離の痕もみられ、石器として使用された可能性が



第37図 第10群石核実測図

k. 【第11群】(第38、39図)

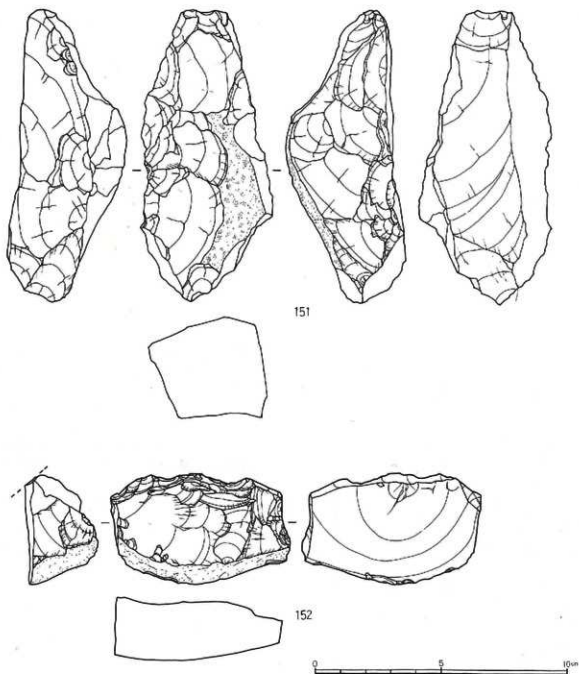
この石群は、D-11グリッドを中心とするもので、8点の遺物が含まれる。内訳は剥片・砕片が6点、石器が2点である。151のみ玄武岩質安山岩であったが、その他は全て流紋岩であった。

石器類については、前述の151が三稜尖頭器の未成品である。背面左側縁と右側面に大きく調整を施しているが、完全にその輪郭ができあがる前に、作業を中断している。152は使用痕ある剥片で、横長剥片を素材としている。腹面下部に使用痕がみられる。また、背面上部と同じく右側縁に剥離を施した痕があり、槌器または削器として作成されたのではないとも考えられる。その他については使用痕や調整痕は確認されなかった。

また、この石群内は同一の母岩から作られたとみられる遺物は確認されておらず、他からの流れ込みによるものという可能性が強い。

第11表 第11群石器観察表

図版番号	出土位置	区画番号	分 別	材 質	寸 法 (cm)	石 群	母 岩	接 合	出 土 位 置 (m)	標 高
156	D11	1	剥片	流紋岩	7.38 5.19 1.77 42.4	11		4	51.132 19.544	74.093
154	D11	4	剥片	流紋岩	3.32 4.00 1.05 10.3	11			51.863 17.821	73.874
157	D11	9	剥片	流紋岩	11.31 7.73 2.91 181.7	11			50.346 15.828	73.720
153	D11	14	剥片	流紋岩	3.20 2.66 0.92 7.3	11			54.827 16.028	73.476
155	D11	15	剥片	流紋岩	3.50 4.00 0.64 6.3	11	Q		54.740 17.365	73.748
	D12	6	砕片	流紋岩	× × × 2.1	11			55.328 16.719	73.554
151	D12	25	三稜尖頭器	安山岩	11.56 5.29 5.77 274.9	11			56.380 16.880	73.580
152	E11	1	使用痕剥片	流紋岩	4.39 7.19 2.96 93.5	11			50.828 20.567	74.203

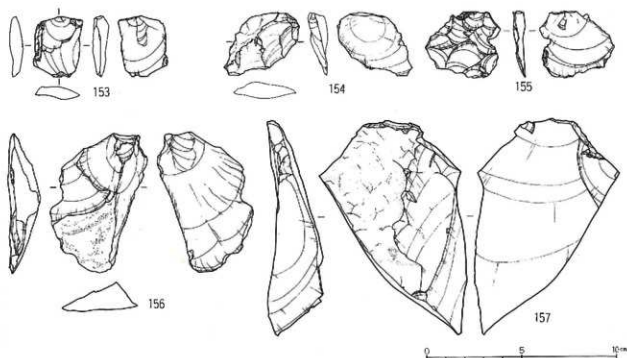


第38図 第11群石器類実測図

Ⅰ. 【第12群】(第40、41図)

この石群は、これまでの第1～11群以外の部分で、グリッドの南北が1～9の、すなわち発掘区内では南半分の地点で確認された遺物を集めたものである。従って範囲は広く、これまでの分類とは異なる。ここには20点の遺物が含まれる。内訳は剥片・碎片が13点、石器が7点であった。

石器類では161が刮器である。縦長剥片を素材としており、背面左側縁に二次加工を施し刃部を形成している。164も刮器である。横長剥片を素材としており、腹面上部に背面方向から二次加工を施し刃部を形成している。158～160、162～163は使用痕ある剥片である。158は横長剥片を素材としており、背面下部に使用痕がついている。159は縦長剥片を素材としており、背面右側縁下部に使用痕がついている。160は横長剥



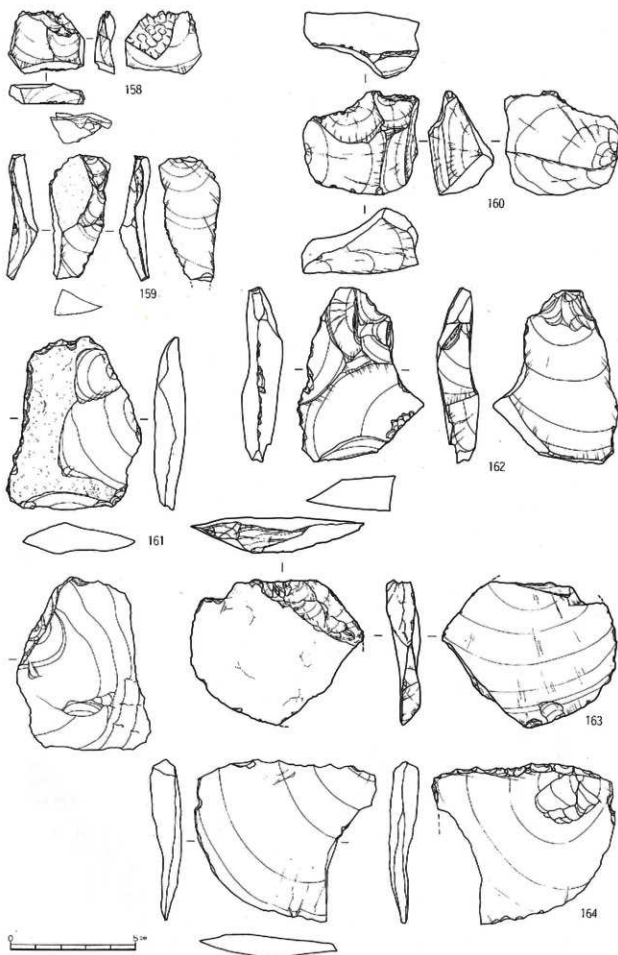
第39図 第11群剥片実測図

片を素材としている。背面1部に使用痕がついている。162は縦長剥片を素材としている。背面左側縁に使用痕がついている。163は横長剥片を素材としている。版面右側縁に使用痕がついている。

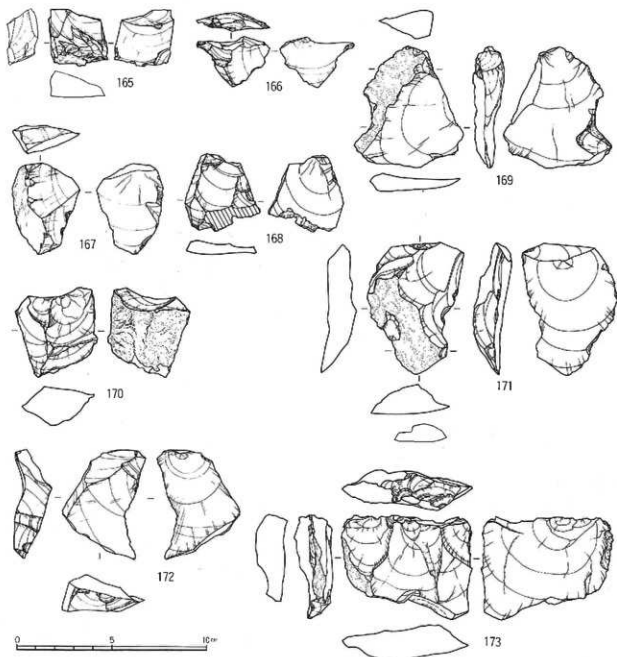
また、この石群には母岩をBとする剥片等が多い(4点)。この母岩は他の石群では第5群で1点確認されているだけである。この石群は前述の通り道跡の南半分を範囲としたものであり、地点があまり限定されていない。従って第5群で作成されたものが外に流れ出したと見るのが妥当であろう。

第12表 第12群石器観察表

図版 番号	出土位置 区画	番号	器種	石 材	寸 法 (cm)				石群	母岩	接合	出 土 位 置 (m)		
					縦長	横長	厚さ	重量 g				南から	西から	標 高
161	C07	一括	削器	流紋岩	6.84	5.37	1.28	43.7	12					
164	C07	一括	削器	流紋岩	6.46	7.30	1.24	39.1	12	I				
167	C07	一括	剥片	流紋岩	4.06	3.55	1.27	36.1	12					
170	C07	一括	剥片	流紋岩	4.70	4.36	2.06	36.0	12	P	1			
	C08	18	砕片	流紋岩	×	×	×	4.1	12	J		38.192	12.670	74.013
158	C08	一括	使用痕剥片	流紋岩	2.94	3.04	0.82	6.4	12					
169	C08	一括	剥片	流紋岩	6.42	5.81	1.67	40.6	12	E				
	C08	一括	砕片	流紋岩	×	×	×	2.4	12	J				
160	C09	27	使用痕剥片	流紋岩	4.12	4.66	2.66	35.3	12	E		44.036	12.800	73.789
162	C09	28	使用痕剥片	流紋岩	6.92	5.10	1.73	42.8	12	AE		44.273	12.445	73.708
173	D04	6	剥片	流紋岩	5.46	6.96	7.12	72.5	12			18.993	19.351	74.851
172	D04	一括	剥片	流紋岩	5.76	4.39	1.96	28.0	12	X				
166	E05	2	剥片	流紋岩	2.56	3.93	0.99	5.1	12			23.545	21.624	74.687
171	F05	8	剥片	流紋岩	6.92	5.10	2.00	49.4	12			22.779	27.875	73.865
168	G07	4	剥片	流紋岩	4.06	4.01	1.01	12.2	12	AF		30.568	33.810	73.176
	G08	5	剥片	流紋岩	×	×	×	5.3	12			37.639	32.157	73.519
163	G08	16	使用痕剥片	流紋岩	5.76	6.92	1.44	47.1	12			35.100	34.396	73.012
159	H07	11	使用痕剥片	流紋岩	4.86	2.45	1.20	8.9	12	E		32.979	37.036	72.583
	H07	12	剥片	流紋岩	×	×	×	6.2	12			33.262	37.147	72.590
165	H07	13	剥片	流紋岩	2.95	3.17	1.65	16.1	12	E		30.138	39.521	71.892



第40圖 第12群石器類実測図

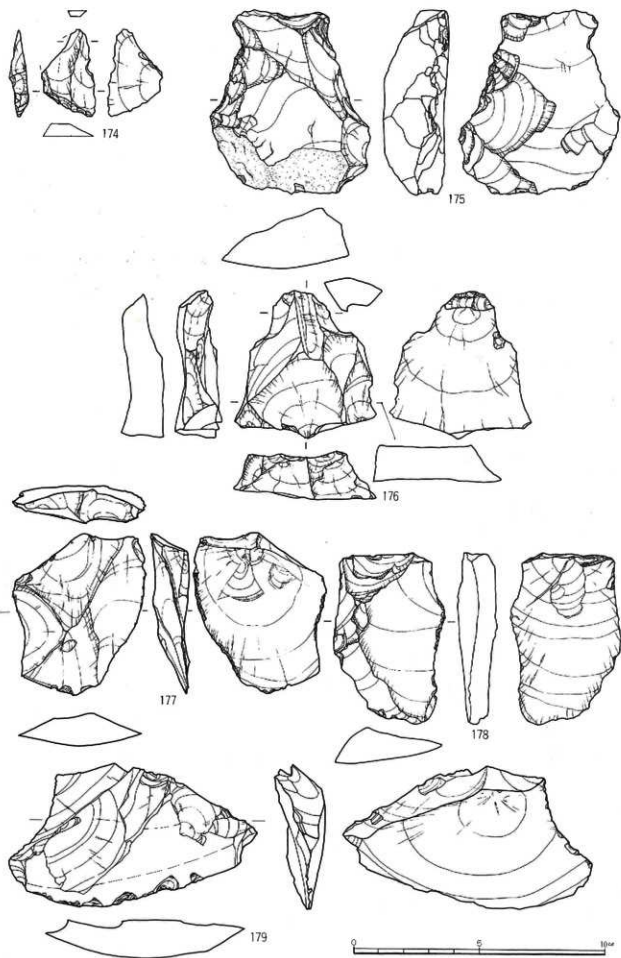


第41図 第12群剥片実測図

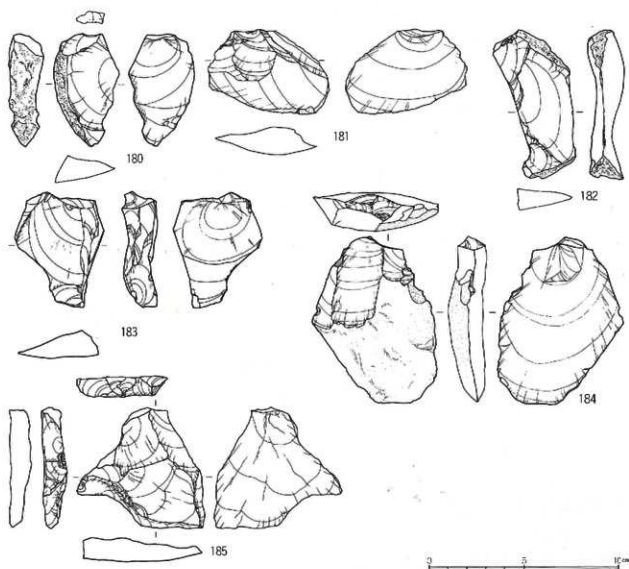
m. 【第13群】（第42～45図）

この石群も第12群と同じく第1～11群以外の地点で、南北の10～30グリッド、すなわち発掘区の北半分から出土した遺物である。（ただし、グリッド番号の24から北では、遺物はほとんど検出されていない。）その数は20点で、内訳は、剥片・碎片が10点、石核が4点、石器が6点であった。石材は流紋岩のほかに玄武岩質安山岩も1点みられた。

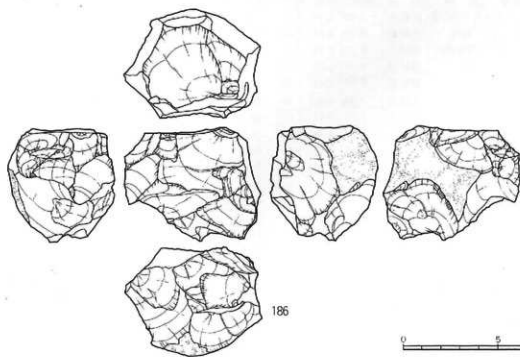
石器類では、174がナイフ形石器で、横長剥片を素材にしており、打面が腹面左に位置している。背面左側面は折損しており全体の形は明らかでないが、背面基部に刃潰しを施している。175は二次加工痕のある剥片。縦長剥片を素材にしており、背面左側縁と腹面右側縁に大まかな調整刻離の痕がみられる。176～179についてはどれも使用痕ある剥片である。176は縦長剥片を素材としており、腹面上部に使用痕がついている。177も縦長剥片を素材としており、腹面左側縁に使用痕がついている。178も縦長剥片を素材としている。背面左側縁の中央部に使用痕がついている。179は横長剥片を素材としており、背面下部に使用痕がついている。



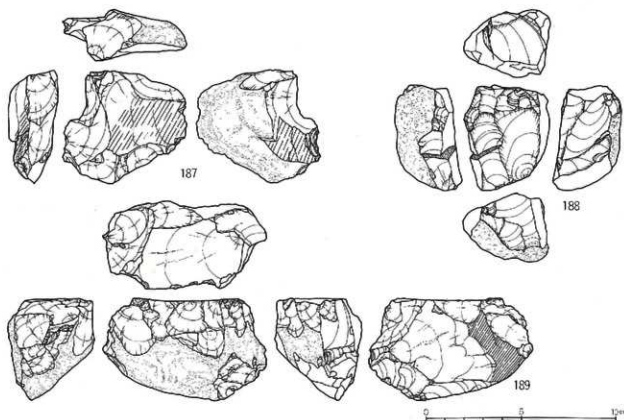
第42圖 第13群石器類実測圖



第43图 第13群剥片实测图



第44图 第13群石核实测图(1)

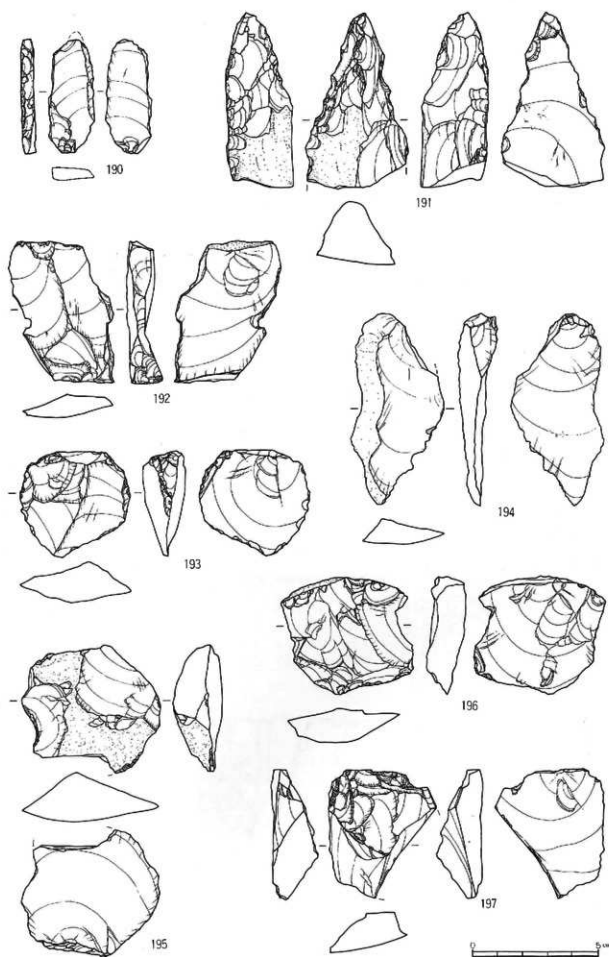


第45図 第13群石核剥片(2)

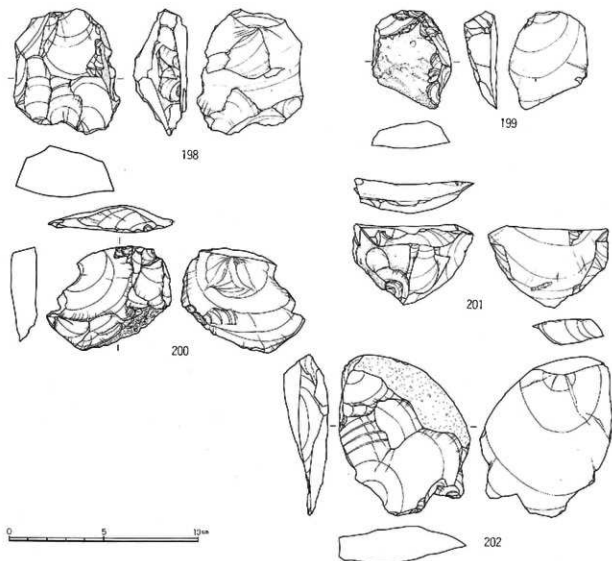
ここでは同じ母岩とみられる石材は確認されなかった。この地区は遺物が分布する中でも標高が高い部分であり、第7～10群への流れ込みがあったと仮定できる。

第13表 第13群石器観察表

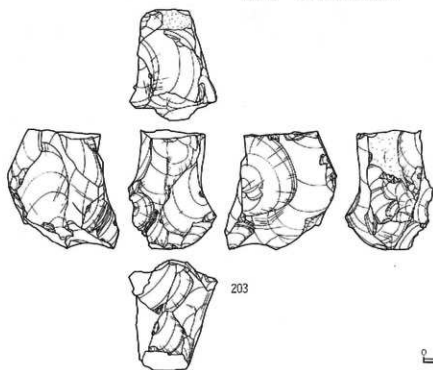
図版	出土位置		分 別		寸 法 (cm)								出土位置 (m)		
番号	区画	番号	器 種	石 材	縦長	横長	厚さ	重量 g	石群	母岩	接合	南から	西から	標 高	
174	D10	13	ナイフ形石器	流紋岩	3.48	2.16	0.75	3.9	13			45.105	17.448	74.240	
184	E13	21	剥片	流紋岩	8.76	3.64	2.02	105.1	13			60.952	22.686	74.144	
179	E13	32	使用痕剥片	流紋岩	5.78	9.94	2.04	75.9	13			61.739	23.045	74.029	
183	E13	39	剥片	流紋岩	6.11	4.72	1.81	40.3	13	I		64.661	24.378	74.094	
180	F11	一括	剥片	流紋岩	5.97	3.48	1.86	32.8	13						
182	F12	20	剥片	流紋岩	7.88	4.45	1.98	46.4	13	U	15	59.604	28.395	74.238	
175	F13	37	二次加工剥片	流紋岩	7.26	6.41	2.64	108.9	13			63.757	28.050	74.137	
178	F14	31	使用痕剥片	流紋岩	6.74	4.46	1.60	37.1	13			67.618	27.350	74.140	
187	F14	36	石核	流紋岩	5.98	6.62	1.68	89.4	13			67.677	27.556	74.207	
185	F14	38	剥片	流紋岩	6.36	6.84	1.45	46.7	13			67.148	28.124	74.099	
188	F16	26	石核	流紋岩	5.54	4.58	3.63	107.8	13			75.032	28.985	74.108	
181	F16	27	剥片	流紋岩	4.51	6.43	1.49	41.0	13			75.510	29.027	74.100	
	G14	11	剥片	流紋岩	×	×	×	4.3	13			69.359	33.514	74.121	
	G15	29	剥片	流紋岩	×	×	×	17.4	13	O		74.205	34.465	74.046	
177	G16	1	使用痕剥片	流紋岩	6.42	5.93	1.50	43.1	13			78.141	34.900	74.258	
176	H15	13	使用痕剥片	安山岩	5.88	5.65	1.88	53.4	13			72.939	37.419	73.809	
	H23	一括	剥片	安山岩	11.56	4.44	2.08	73.0	13						
	I11	9	剥片	流紋岩	×	×	×	76.2	13			51.560	43.351	71.975	
186	I12	一括	石核	安山岩	6.64	7.27	5.72	276.6	13						
189	J11	1	石核	安山岩	5.38	8.75	4.01	261.2	13			52.148	45.118	71.680	



第46图 第14群石器类型实测图



第47图 第14群剥片实测图



第48图 第14群石核实测图

n. 【第14群】 (第46～48図)

この石群は遺跡一括として取り上げたもので、遺跡内のどの地点で出土したかを特定できる遺物は、基本的にはない。ただし、母岩の同じ石器が出土している地点で多少は絞り込むことが可能である。全部で14点出土している。

石器類では、190はナイフ形石器で縦長剥片を素材としている。先端部は折損しており全体の形は明らかでないが、背面右側縁に剥離を施し刃部を形成している。また、背面左側縁全縁と背面基部に刃痕を施している。191は一稜尖頭器である。自然面を利用して三角錐形を作り出している。基部が折損しているため全体の形は明らかでない。背面左側縁に細かい調整剥離を施している。191については母岩が特定できている為、母岩Pの出土位置で考えると、第2群に含まれる可能性がある。193、194、196については削器である。193は横長剥片を素材としており、背面左側縁に施し刃部を形成している。194は縦長剥片を素材としており、自然面をそのまま刃部として利用している。196は横長剥片を素材としており、背面上部と下部にそれぞれ剥離を施し刃部を形成している。背面下部には使用痕も残っている。194と196については191と同様、母岩から出土位置をある程度特定することが可能である。194については第4群、196については第5群の範囲に含まれている。197は二次加工痕のある剥片である。縦長剥片を素材としており、背面上部に剥離を施した痕がみられる。また、腹面左側縁全縁に使用痕がついている。192は使用痕のある剥片である。縦長剥片を素材としており、背面上部にわずかではあるが使用痕がついている。

第14表 第14群石器観察表

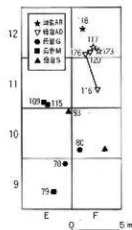
図版	出土位置		分 別		寸 法 (cm)				出 土 位 置 (m)					
番号	区画	番号	器 種	石 材	縦長	横長	厚さ	重量 g	石群	母岩	接合	南から	西から	標 高
190	遺跡	一括	ナイフ形石器	流紋岩	4.50	1.84	0.63	5.6	14					
191	遺跡	一括	三稜尖頭器	流紋岩	6.90	4.12	2.72	68.7	14	P				
192	遺跡	一括	使用痕剥片	流紋岩	5.65	4.24	1.45	29.0	14					
193	遺跡	一括	削器	流紋岩	4.16	4.42	1.72	25.0	14					
194	遺跡	一括	削器	流紋岩	7.60	3.72	1.60	26.9	14	AE				
195	遺跡	一括	使用痕剥片	流紋岩	5.06	5.56	2.00	48.0	14					
196	遺跡	一括	削器	流紋岩	4.65	5.29	1.60	34.2	14	N				
197	遺跡	一括	二次加工剥片	流紋岩	5.10	4.35	1.88	27.3	14					
198	遺跡	一括	剥片	流紋岩	6.68	5.66	2.85	106.8	14					
199	遺跡	一括	剥片	流紋岩	5.52	4.71	1.68	29.0	14	A				
200	遺跡	一括	剥片	流紋岩	5.52	6.60	1.45	34.3	14	N	12			
201	遺跡	一括	剥片	流紋岩	4.28	6.38	1.83	43.1	14					
202	遺跡	一括	剥片	流紋岩	8.46	6.95	2.41	119.4	14					
203	遺跡	一括	石核	流紋岩	6.31	4.63	5.90	169.8	14	AC	3			

o. 【接合関係】

本遺跡での石器接合は16点を数えた。それを母岩別に大別したのが以下の資料である。

(第I群) ここでは母岩A・B、A・D、G、M、Sを一つの石群とした。(第49、50図)

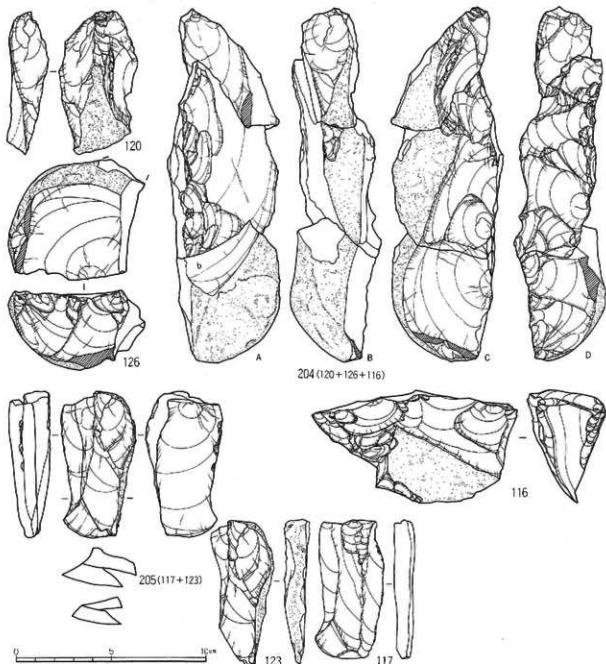
- ・【接合資料204】 (第50図) 120→126→116 剥片2点、石核1点の計3点の接合。母岩はA・D。剥離過程は次の通りである。①接合資料204のA面に、1回大きな剥離で打面を形成。②同じくC面に数回の打撃を加え、平らな面を形成する。③D面のa点を打撃し、剥片120を剥離する。④b点を打撃し、剥片126を剥離すると、116の形になる。その後116にも調整を加えているが、石器に調整するまでには至っていない。
- ・【接合資料205】 (第50図) 123→117 使用痕跡ある剥片1点、剥片1点の計2点の接合。母岩はA・B。剥片剥離がある程度進行した段階で、接合資料205の上部から打撃を加え、剥片123を分離、その後同じ面から右へ打撃をずらして1枚の剥片をとった後、117を剥離している。



第40図 第I群母岩別石器分布図

第15表 第I群石器等観察表

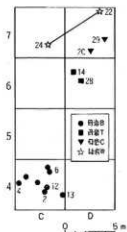
番号	区画	番号	器種	石材	石群	母岩	接合	南から	西から	標高
118	F12	11	剥片	流紋岩	7	AB		57.879	26.142	74.176
117	F12	43	使用痕剥片	流紋岩	7	AB	11	56.006	27.390	74.287
123	F12	45	剥片	流紋岩	7	AB	11	55.837	27.553	74.207
116	F11	25	石核	流紋岩	6	AD	14	51.881	27.585	74.225
126	F12	33	剥片	流紋岩	7	AD	14	55.149	26.425	74.248
120	F12	35	剥片	流紋岩	7	AD	14	55.451	26.801	74.277
70	E09	131	剥片	流紋岩	5	G		44.556	24.261	74.310
80	F10	1	剥片	流紋岩	5	G		45.690	25.866	74.455
79	E09	30	剥片	流紋岩	5	M		41.681	23.009	74.474
109	E11	40	剥片	流紋岩	6	M		50.377	22.375	74.193
115	E11	41	石核	流紋岩	6	M		50.152	22.414	74.208
93	E10	41	剥片	流紋岩	6	S		49.530	24.778	74.120
	F10	109	剥片	流紋岩	5	S		46.184	28.265	74.135



第50図 第I群石器接合資料

(第Ⅱ群) ここでは母岩B、C、F、Wを一つの石群とした。(第51、52図)

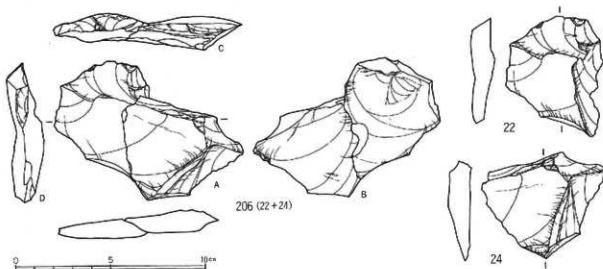
- ・【接合資料206】(第52図) 24→22 剥片2点からなる。母岩はW。接合資料206のA面を剥離した後、剥片24を剥離、その後、B面上部からの打撃により剥片22を剥離している。



第51図 第Ⅱ群母岩別石器分布図

第16表 第Ⅱ群石器等観察表

番号	区画	番号	器種	石材	石群	母岩	接合	南から	西から	標高
13	C04	1	石核	流紋岩	1	B		16.283	14.928	75.145
6	C04	4	剥片	流紋岩	1	B		18.780	13.393	75.061
	C04	5	碎片	流紋岩	1	B		18.830	13.356	75.056
	C04	9	碎片	流紋岩	1	B		17.601	12.317	75.111
12	C04	10	石核	流紋岩	1	B		16.991	13.171	75.108
2	C04	11	使用痕剥片	流紋岩	1	B		16.726	13.157	75.188
	C04	14	碎片	流紋岩	1	B		18.219	11.097	74.958
4	C04	16	剥片	流紋岩	1	B		17.525	10.231	74.956
28	D06	3	剥片	流紋岩	2	C		27.690	16.589	74.784
14	D06	7	使用痕剥片	流紋岩	2	C		28.588	15.861	74.625
20	D07	2	剥片	流紋岩	2	F		30.694	17.525	74.719
29	D07	8	剥片	流紋岩	2	F		31.841	18.948	74.735
24	C07	6	剥片	流紋岩	2	W	2	31.081	13.280	74.505
22	D07	29	剥片	流紋岩	2	W	2	34.886	18.389	74.500



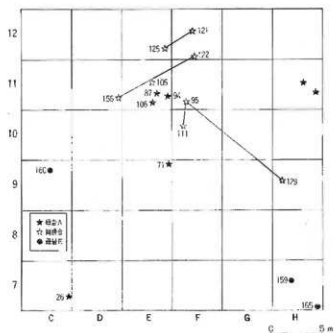
第52図 第Ⅱ群石器接合資料

(第Ⅲ群) ここでは母岩A、Eを一つの石群とした。(第53、54図)

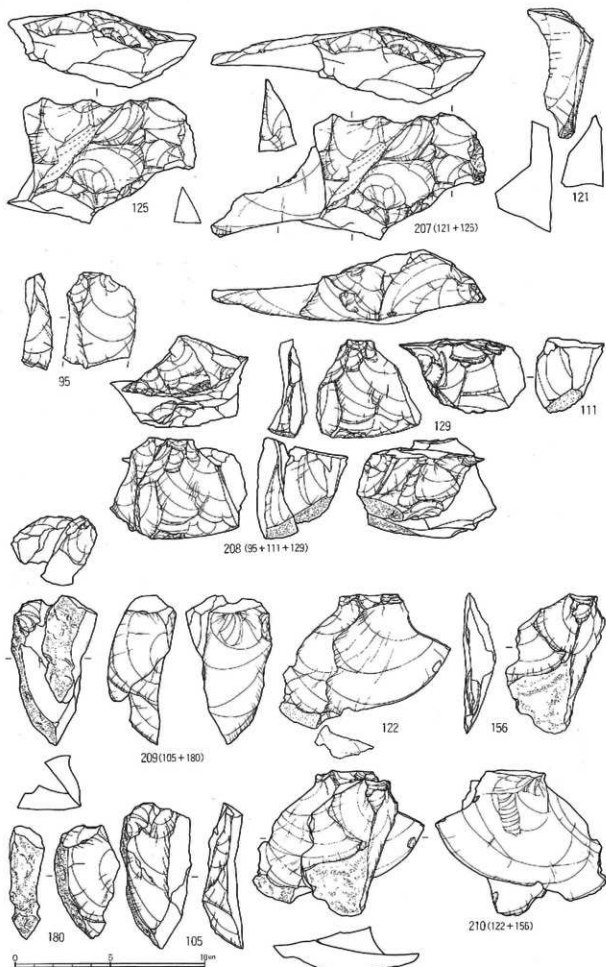
- ・【接合資料207】(第54図) 121→125 剥片2点からなる。母岩はA。剥離過程は次の通りである。①接合資料IVを含む大きな剥片を作り出す以前に、A面/左上部から打撃を加え1点の剥片を剥離する。②B面上部より打撃を加え、接合資料207を石核から剥離する。③接合資料207がほぼ形成された段階で121を折曲している。
- ・【接合資料208】(第54図) 129→95→111 剥片2点、石核1点の計3点の接合。母岩はA。接合資料208のB面より打撃を加え、剥片129を剥離。次に打点を後方にずらして剥片95を剥離。その後何度か剥離を繰り返して石核111を加工している。
- ・【接合資料209】(第54図) 180→105 剥片2点からなる。母岩はA。接合資料209のB面から打撃を加え、剥片180を剥離。次に場所をずらしてもう1点の剥片を剥離した後、剥片105が形成された。
- ・【接合資料210】(第54図) 156→122 剥片2点からなる。母岩はA。接合資料210を含む大きな石核からまず剥片156を含む中剥片を分離、その後209の上部より打撃を加え剥片122を剥離している。

第17表 第Ⅲ群石器等観察表

番号	区画	番号	器 種	石 材	石群	母岩	接合	南から	西から	標 高
26	C07	4	剥片	流紋岩	2	A		31.552	14.781	74.623
156	D11	1	剥片	流紋岩	11	A	4	51.132	19.544	74.093
71	E09	120	剥片	流紋岩	5	A		44.623	24.907	74.471
105	E11	7	剥片	流紋岩	6	A	8	52.752	23.074	74.261
87	E11	12	使用痕剥片	流紋岩	6	A		51.716	23.503	74.298
106	E11	16	剥片	流紋岩	6	A		50.727	22.980	74.227
94	E11	23	剥片	流紋岩	6	A		51.474	24.627	74.195
125	E12	44	剥片	流紋岩	7	A	9	56.104	24.308	74.234
111	F10	34	石核	流紋岩	6	A	10	48.512	26.106	74.256
95	F11	53	剥片	流紋岩	6	A	10	50.781	26.342	74.120
180	F11	一括	剥片	流紋岩		A	8			
122	F12	36	剥片	流紋岩	7	A	4	55.363	27.266	74.233
121	F12	52	剥片	流紋岩	7	A	9	57.659	27.077	74.167
129	H09	2	剥片	流紋岩	8	A	10	43.027	36.015	73.095
	H11	12	剥片	流紋岩	9	A		51.748	39.321	72.798
	H11	14	碎片	流紋岩	9	A		52.647	38.185	73.059
199	遺跡	一括	剥片	流紋岩		A				
169	C08	一括	剥片	流紋岩		E				
160	C09	27	使用痕剥片	流紋岩		E		44.036	12.800	73.789
72	F08	一括	剥片	流紋岩	5	E				
159	H07	11	使用痕剥片	流紋岩		E		32.979	37.036	72.583
165	H07	13	剥片	流紋岩		E		30.138	39.521	71.892



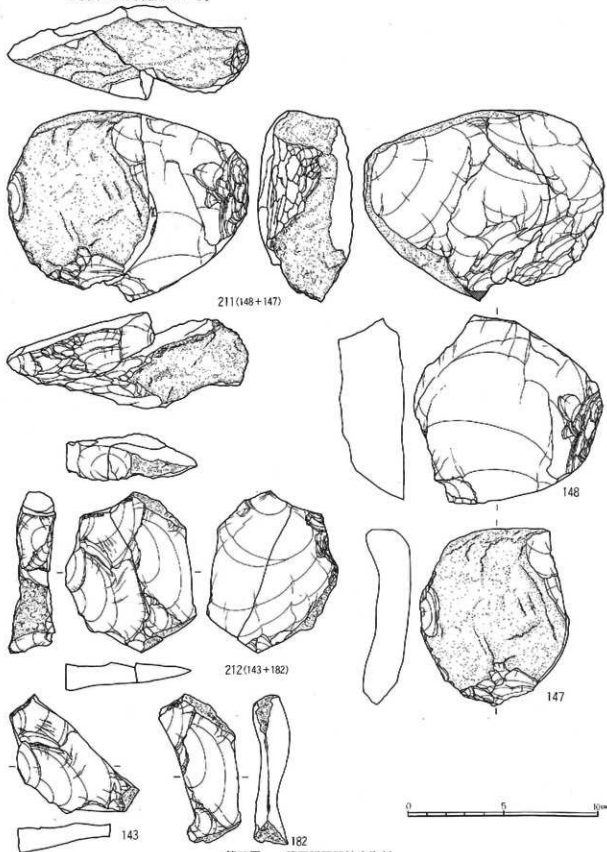
第53図 第Ⅲ群母岩別石器分布図



第54圖 第三群石器接合資料

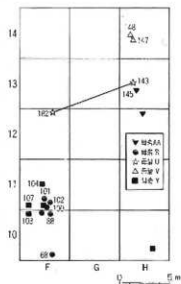
(第IV群) ここではA A、R、J、V、Yを一つの石群とした。(第55、56図)

- ・【接合資料211】 (第55図) 147→148 大型の剥片2点からなる。母岩はV。接合資料211を含む大石核に打撃を加え数枚の剥片を剥離した後、A面下部より打撃を加え剥片147を含む剥片を剥離。その剥片から剥片147を剥離している。



第55図 第IV群石器接合資料

- ・【接合資料212】(第55図) 182-143 剥片2点からなる。母岩はJ。接合資料212を含む剥片を大型の石核から分離。その後、182と143のそれぞれを含む剥片に分離した後、その前面部に調整剥離を加えている。

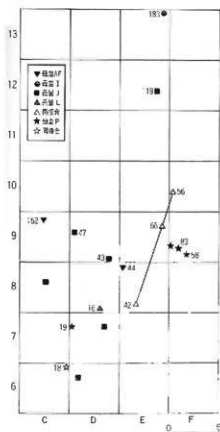


第56図 第Ⅳ群母岩別石器分布図

第18表 第Ⅳ群石器等観察表

番号	区画	番号	器種	石材	石群	母岩	接合	南から	西から	標高
	H12	36	剥片	流紋岩	9	AA		59.550	37.224	73.373
145	H13	18	剥片	流紋岩	10	AA		61.840	36.608	73.674
88	F10	54	ナイフ形石器	流紋岩	6	R		49.695	28.058	74.275
	F10	69	剥片	流紋岩	6	R		49.767	27.292	74.226
68	F10	113	剥片	流紋岩	5	R		45.586	28.328	74.202
101	F11	34	剥片	流紋岩	6	R		50.929	27.551	74.240
102	F11	45	剥片	流紋岩	6	R		50.838	28.010	74.119
100	F11	48	剥片	流紋岩	6	R		50.534	27.623	74.282
182	F12	20	剥片	流紋岩		U	15	59.604	28.395	74.238
143	H13	12	剥片	流紋岩	10	U	15	62.640	36.326	73.600
147	H14	27	剥片	流紋岩	10	V	16	66.793	36.155	73.732
148	H14	28	剥片	流紋岩	10	V	16	67.209	36.058	73.720
103	F10	61	剥片	流紋岩	6	Y		49.606	28.061	74.107
107	F11	10	剥片	流紋岩	6	Y		50.438	28.069	74.303
	F11	31	剥片	流紋岩	6	Y		50.566	27.485	74.319
104	F11	41	剥片	流紋岩	6	Y		52.638	27.464	74.052
	H10	11	剥片	流紋岩	8	Y		46.148	38.308	72.859

(第Ⅴ群) ここでは母岩A E、I、J、L、Pを一つの石群とした。(第57、58図)

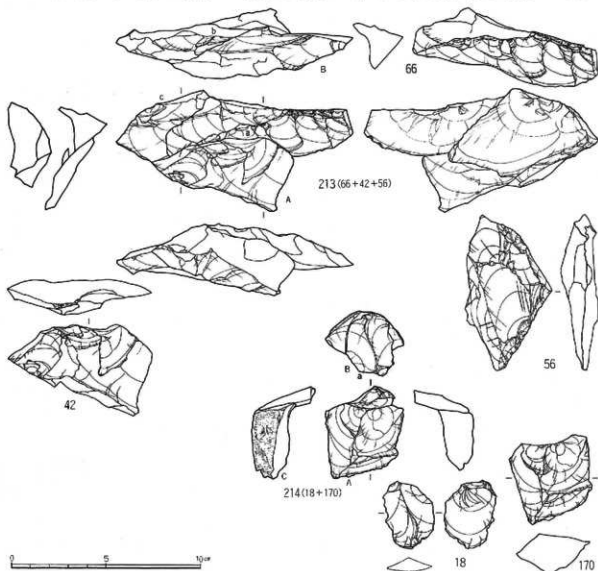


第57図 第Ⅴ群母岩別石器分布図

第19表 第Ⅴ群石器等観察表

番号	区画	番号	器種	石材	石群	母岩	接合	南から	西から	標高
182	C09	28	使用痕剥片	流紋岩		AE		44.273	12.445	73.708
44	E08	75	使用痕剥片	流紋岩	4	AE		39.627	20.192	74.447
194	遺跡	一括	削器	流紋岩		AE				
164	C07	一括	削器	流紋岩		I				
183	E13	39	剥片	流紋岩		I		64.661	24.378	74.094
	C08	18	剥片	流紋岩		J		38.192	12.670	74.013
	C08	一括	剥片	流紋岩		J				
	D06	6	剥片	流紋岩	2	J		28.591	15.931	74.642
	D07	15	剥片	流紋岩	2	J		33.822	18.586	74.615
43	D09	1	ナイフ形石器	流紋岩	4	J		40.184	18.821	74.544
47	D09	29	剥片	流紋岩	4	J		42.895	15.597	74.241
119	E12	27	剥片	流紋岩	7	J		57.064	23.625	74.248
16	D08	47	使用痕剥片	流紋岩	2	L		35.448	18.056	74.441
42	E08	36	剥片	流紋岩	3	L	5	35.942	21.662	74.612
66	E09	112	剥片	流紋岩	5	L	5	43.896	24.353	74.536
56	F10	58	削器	流紋岩	5	L	5	46.895	25.260	74.297
18	C06	1	剥片	流紋岩	2	P	1	29.886	14.970	74.882
170	C07	一括	剥片	流紋岩		P	1			
21	D06	1	剥片	流紋岩	2	P		25.354	17.660	74.840
19	D07	21	剥片	流紋岩	2	P		33.769	15.170	74.520
	E09	一括	剥片	流紋岩	5	P				
83	F09	30	石核	流紋岩	5	P		41.408	26.560	74.342
58	F09	89	剥片	流紋岩	5	P		40.870	26.770	74.348
	F09	96	剥片	流紋岩	5	P		41.680	25.030	74.577

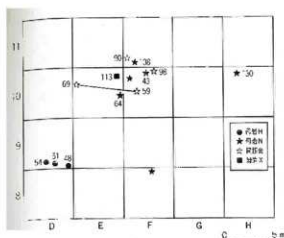
- ・【接合資料213】（第57図）42→66→56 剥片2点、削器1点の計3点の接合。母岩はL。剥離過程は次の通りである。①数回の剥片剥離の後、A面中央部のa点を打撃し剥片42を剥離。②B面中央部のb点を打撃して剥片66を剥離。③A面左上部のc点を打撃して剥片56を剥離した後、細かい調整剥離により、削器56を作成している。
- ・【接合資料214】（第57図）18→170 剥片2点からなる。母岩はP。数回の調整剥離の後、B面下部のa点に打撃を加え剥片18を剥離。その後、数回の打撃をA面上部から加え数枚の剥片を剥離している。



第58図 第V群石器接合資料

（第VI群）ここでは母岩II、N、Xを一つの石群とした。（第59、60図）

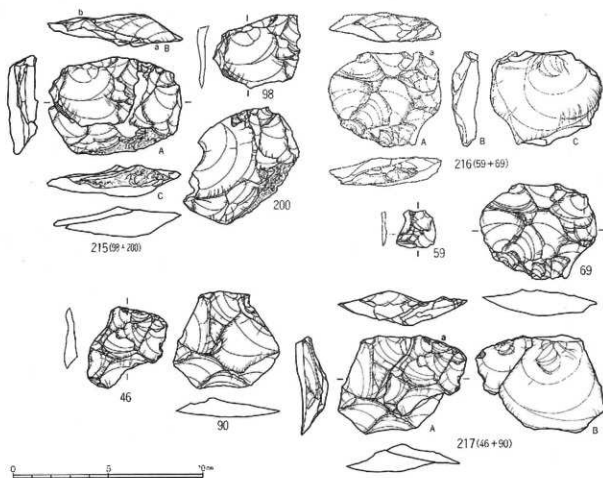
- ・【接合資料215】（第60図）98→200 剥片2点からなる。母岩はN。最初に接合資料215のA面右上部手前より打撃を加え、B面を形成する。次にB面左のa点から打撃を加え、剥片98を剥離。その後、同じくB面の右上部b点より打撃を加え剥片200を剥離する。
- ・【接合資料216】（第60図）59→69 剥片2点からなる。母岩はN。剥片59は剥片69の調整を行う段階で、剥離されたもの。A面右上部のa点より打撃を加え剥片59を剥離している。
- ・【接合資料217】（第60図）46→90 剥片1点、搔器1点の計2点の接合。母岩はN。剥片46は接合資料217のB面が形成されていない状態で剥離されたもの。A面の右上部a点から打撃を加え、剥片46を剥離。その後数枚の調整剥片を剥離して搔器90を剥片の状態で剥離し、調整剥離を加えている。



第59図 第VI群母岩別石器分布図

第20表 第VI群石器観察表

番号	区画	番号	器種	石材	石群	母岩	接合	南から	西から	標高
51	D09	4	剥片	流紋岩	4	H		40.614	18.160	74.483
48	D09	43	剥片	流紋岩	4	H		40.225	19.431	74.322
54	D09	44	石核	流紋岩	4	H		40.753	17.266	74.237
46	D09	一括	剥片	流紋岩	4	N	13			
69	E10	32	剥片	流紋岩	5	N	7	48.427	20.344	74.259
64	E10	44	剥片	流紋岩	5	N		47.271	24.873	74.259
	F08	18	剥片	流紋岩	5	N		39.834	27.897	74.220
59	F10	24	剥片	流紋岩	5	N	7	47.684	26.333	74.377
99	F10	43	剥片	流紋岩	6	N		49.565	27.271	74.321
	F10	60	剥片	流紋岩	6	N		48.991	25.616	74.114
98	F10	73	剥片	流紋岩	6	N	12	49.629	28.014	74.217
90	F11	4	搔器	流紋岩	6	N	13	50.881	25.640	74.380
108	F11	12	剥片	流紋岩	6	N		50.558	26.265	74.295
130	H10	4	剥片	流紋岩	8	N		49.408	36.342	73.305
200	遺跡	一括	剥片	流紋岩		N	12			
196	遺跡	一括	剥片	流紋岩		N				
172	D09	一括	剥片	流紋岩		X				
113	E10	18	石核	流紋岩	6	X		49.129	24.356	74.389

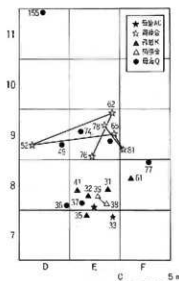


第60図 第VI群石器接合資料

(第Ⅶ群) ここでは母岩A・C、K、Qを一つの石群とした。(第61、62図)

- ・【接合資料218・219】 (第62図) 78→81→65→52→62→76→203 剥片6点、石核1点の計7点の接合である。母岩はA・C。このほかにも母岩を同じくすると考えられる石があと2点存在する。接合資料218では、高さ12cm、幅10cm、厚さが7cmほどの原礫の約1/4ほどの石核となる。この接合資料の剥片剥離の順は次の通りである。①接合資料218のA面左側手前にある、剥片76の正面に見える剥離痕の剥片を剥離。②同C面中央の剥片81の正面に見える剥離痕の剥片を剥離。③同A面の、剥片78の正面に見える剥離痕の剥片を剥離。④③の打点のやや左、打点aからの打撃により剥片78を含む剥片を剥離。その打撃により剥片が数枚に粉碎。剥片78はその内の1枚である。⑤同C面の打点bの打撃により剥片81を剥離。⑥同B面中央部の打点cへの打撃により、剥片65を剥離。⑦接合資料219のA面左上部、打点aに打撃を加え、剥片52を剥離。⑧剥片52を剥離後、数回の剥離の後に現れた同B面の打点bへの打撃により剥片62を剥離。⑨同A面上部の打点cへの打撃により、剥片76を剥離。最終的に石核203が残る。この段階でも石核203には調整が加えられている。

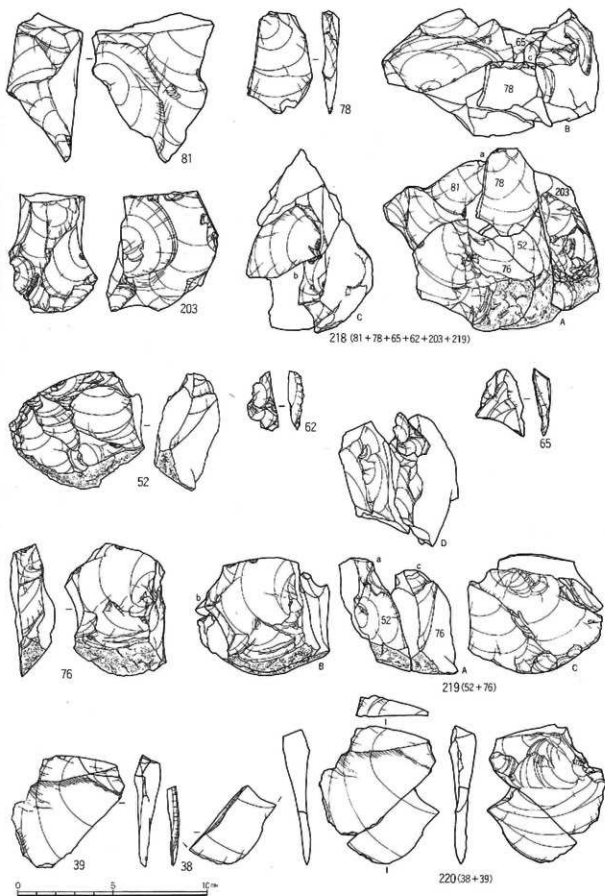
- ・【接合資料220】 (第62図) 38→39 剥片2点からなるが、もとは1枚の剥片。裏面の平坦面への1回の打撃で縦横に粉碎したらしい。母岩はK。



第61図 第Ⅶ群母岩剥石器分布図

第21表 第Ⅶ群石器等観察表

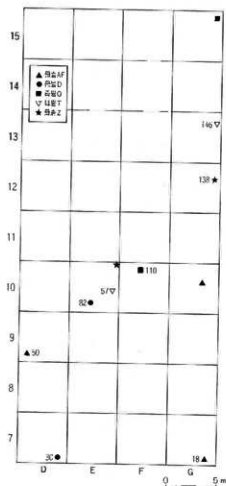
番号	区画	番号	器種	石材	石群	母岩	接合	南から	西から	標高
52	D09	39	剥片	流紋岩	4	AC	3	41.473	16.290	74.377
33	E07	18	剥片	流紋岩	3	AC		34.296	24.172	74.569
	E08	81	剥片	流紋岩	3	AC		35.453	22.474	74.368
76	E09	54	剥片	流紋岩	5	AC	3	40.297	22.142	74.518
65	E09	106	剥片	流紋岩	5	AC	3	42.677	24.418	74.560
78	E09	123	剥片	流紋岩	5	AC	3	43.450	23.504	74.443
62	E09	132	剥片	流紋岩	5	AC	3	44.588	24.341	74.246
81	F09	77	剥片	流紋岩	5	AC	3	41.054	25.284	74.254
203	遺跡	一括	石核	流紋岩		AC	3			
35	E07	55	剥片	流紋岩	3	K		34.498	21.697	74.414
32	E08	35	使用痕剥片	流紋岩	3	K		36.462	21.929	74.675
41	E08	78	剥片	流紋岩	3	K		36.906	20.790	74.438
38	E08	83	剥片	流紋岩	3	K	6	35.806	23.635	74.446
39	E08	86	剥片	流紋岩	3	K	6	36.194	22.730	74.439
31	E08	104	搔器	流紋岩	3	K		36.964	23.895	74.269
61	F08	26	剥片	流紋岩	5	K		38.100	26.100	74.275
36	D08	51	剥片	流紋岩	3	Q		35.540	19.884	74.598
49	D09	60	剥片	流紋岩	4	Q		41.339	19.343	74.287
155	D11	15	剥片	流紋岩	11	Q		54.740	17.365	73.748
37	E08	80	剥片	流紋岩	3	Q		35.801	21.310	74.555
74	E09	76	剥片	流紋岩	5	Q		42.754	21.247	74.581
60	E09	102	剥片	流紋岩	5	Q		41.846	23.961	74.518
77	F08	19	剥片	流紋岩	5	Q		39.931	27.823	74.212



第62圖 第Ⅴ群石器接合資料

(第Ⅲ群) ここではAF、D、T、Zを一つの石群とした。(第63図)

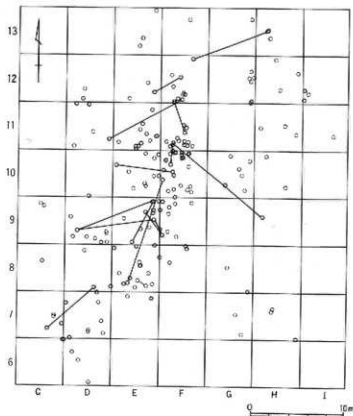
この石群内での接合は確認できなかった。



第63図 第Ⅲ群母岩別石器分布図

第22表 第Ⅲ群石器等観察表

番号	区画	番号	器種	石材	石群	母岩	接合	南から	西から	標高
50	D09	37	剥片	流紋岩	4	AF		40.792	15.839	74.325
168	G07	4	剥片	流紋岩		AF		30.568	33.810	73.176
	G10	14	剥片	流紋岩	8	AF		48.090	33.364	73.677
30	D07	6	石核	流紋岩	2	D		30.561	19.174	74.744
82	E10	53	石核	流紋岩	5	D		45.945	22.201	74.289
110	F10	68	使用痕剥片	流紋岩	6	O		49.168	27.295	74.150
	G15	29	剥片	流紋岩		O		74.205	34.465	74.046
67	E10	45	剥片	流紋岩	5	T		47.236	24.324	74.257
146	G13	14	剥片	流紋岩	10	T		63.803	34.568	73.747
	E10	17	剥片	流紋岩	6	Z		49.778	24.943	74.322
138	G12	13	剥片	流紋岩	9	Z		58.321	34.569	73.764



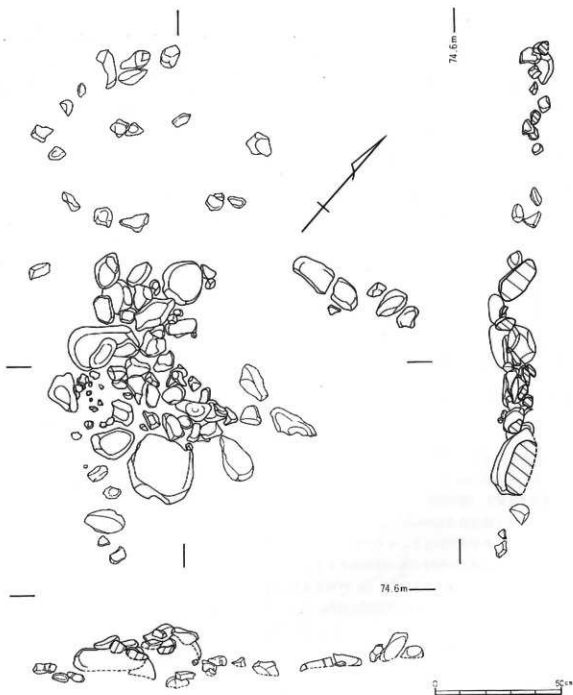
第64図 接合石器全体分布図

(2) 縄文時代

本遺跡では、調査の概要で述べたように層位的な発掘ができず、第Ⅱ層からしか遺物は検出されなかった。従って、層位によって遺構の時代を特定するのは困難であった。そのため遺構の形態からその時代を推察するか、地磁気分析などの化学分析によって明らかにしていくほかはなく、その他の時期が不明の遺構については割愛した。

a. 遺構

【1号集石炉】（第65図）



第65図 1号集石炉実測図

D-9 グリッドのほぼ中央部に位置し（第2図）、東西に160cm、南北に165cmを測る。大型で石皿状の礫を、直径100cmの範囲で円形に配置し、その周辺もしくは内部に、礫の角礫・円礫を多数配置している。ほとんどの石は被熱して赤変しており、灰としての形跡を残している。集石の内部からは土器などの遺物は出土していない。この集石炉については発掘調査終了後に取り上げ保存を行った。

b. 遺物

(1) 土器

縄文土器の分布の傾向は、調査の概要で述べたように旧石器の分布と同じく、E-8 グリッド～G-15 グリッドが中心であった。また、出土した土器925点のうち894点（96.8%）が、縄文時代早期と考えられる無文土器であり、同じく縄文時代早期と考えられる押形文を有する土器は全体の3.2%（31点）にすぎなかった。以下、押形文土器全てと、無文土器の口縁部について取り上げる。

【山形押型文土器】（第66図）

本遺跡で出土した山形文土器は24点であった。その内訳は、7点が口縁部、15点が胴部、2点が底部となっている。5～7は、外面には細かい山形文を横方向に施文し、内面には原条痕の下位に外面と同じく水平方向に山形文を回転施文したものである。これは縄文時代早期の、早水台式土器の特徴と一致する。2、3、15、20については、外面に縦方向の山形文を施文し、内面には原条痕の下位に外面とは違い、横方向の山形文を施文してある。また、これらは口縁部がやや外反しており、これらの特徴から下管式B式土器と推察される。

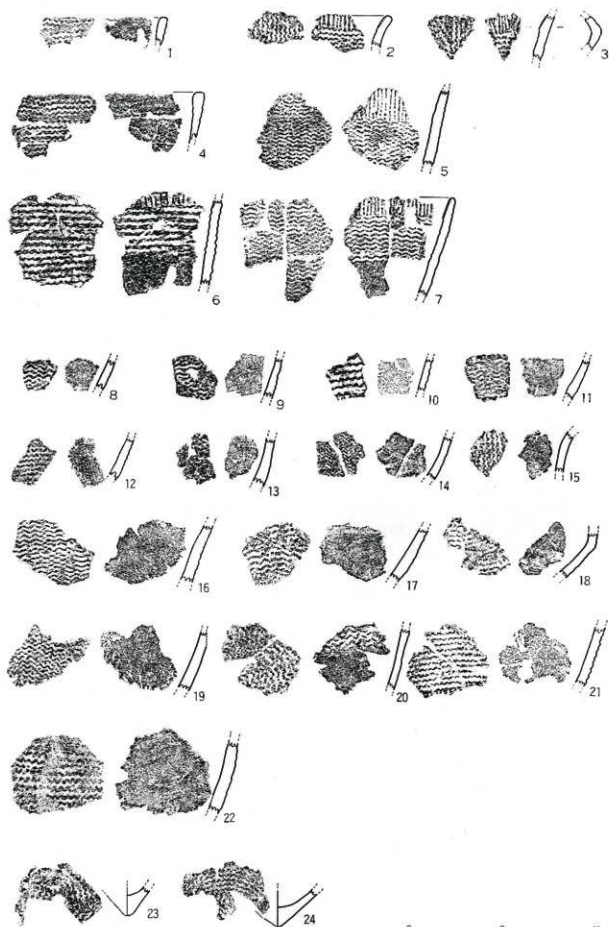
なお、3については他の出土遺物と比べ小型なため全体の形状が判断しにくく、横方向の断面も入れている。波状口縁の一部である可能性もあるが、遺物そのものが非常に小型であるためともいえる。1、4、8～14、16～19、21、22はいずれも外面に横方向の山形文を施文し、内面には施文が確認されないもので、これは前述の早水台式土器の特徴と一致する。23、24については底部である。これらは縄文時代早期の土器としては典型的な底部の形状である、尖底の碗形をなしており、外面には横方向の山形文が回転施文されている。

【楕円押型文土器】（第67図）

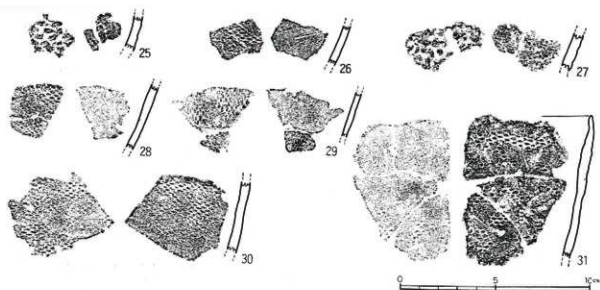
全体で7点出土したうち、11縁部が1点、残りの6点は胴部であった。26は、外面に小粒の楕円文を水平方向に施文し、無文部を残す。内面は無文のまま施文は確認されない。28は、小粒の楕円文を外面全体に施文し、内面は無文のまま。30は、内外面ともに小粒の楕円文を横方向に施文している。31は、内外面ともに部分的に小粒の楕円文を回転施文し、同じく内外面に無文部を残している。25、27は、外面に大粒の楕円文を横方向に回転施文し、内面には施文を確認できなかった。29については他の土器と違い、外面の楕円文が縦方向に施されている。内面については施文が確認できなかった。

【無文土器】（第68図）

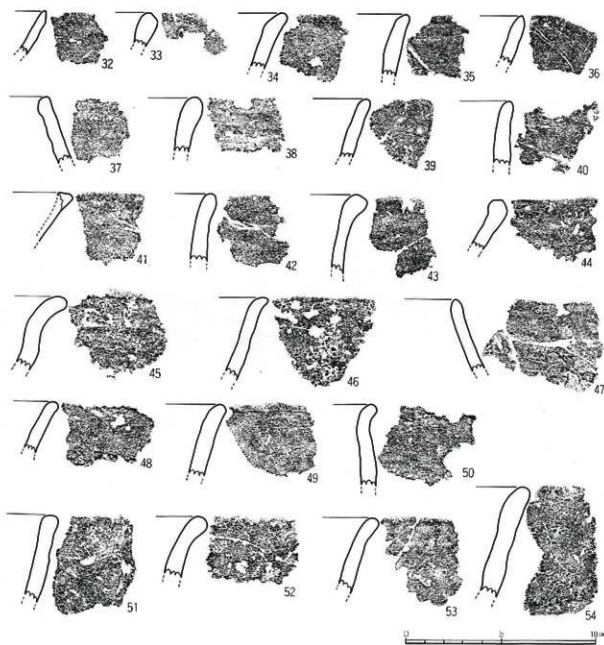
無文土器全体では894点が出土したが、そのほとんどが胴部にあたり、表面も風化していたため実測に耐えるものが少なかった。そのためここで取り上げるのは口縁部のみに限定した。その数は23点であった。これは11縁部が内傾するものと外傾するものとに大別できる。器厚はどれも約1cm前後であった。その中で、11縁部が内傾するものが、37、47の2点で、残りの21点は全て外傾している。また、この中でも11縁部が外反しているものが2点確認された。



第66圖 山形押型文土器実測圖



第67図 横円押型文土器実測図



第68図 無文土器口縁部実測図

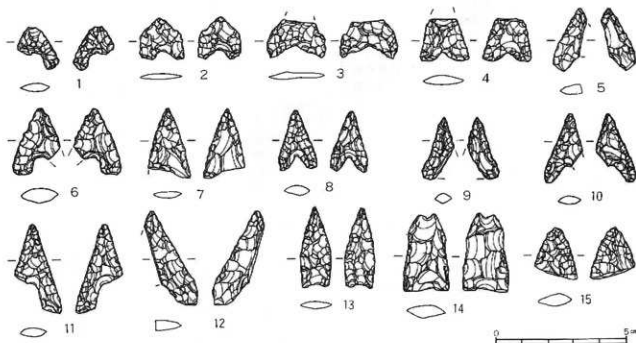
(2) 石器

【打製石鏃】(第69図)

本道跡からは15点が出土している。出土状況はほぼ全域にわたっており、特に集中している地区はない。石鏃の形態は大きく分けて4種が認められる。一つは縄文早期特有の鎌型鏃で、これはさらに挟入部の型によって3つに細かく分類できる。1～4、15がこれにあたる。次に長二等辺三角形で挟入部がやや深く、脚端が丸い特徴を持つもの。石鏃としては一般的な形状で5～10がこれにあたる。次に同じく二等辺三角形であるが挟入部の深いもの。11、12がこれにあたる。他に長二等辺三角形で基部がやや凹んだもの。13、14がこれにあたる。石材の利用状況はチャートが8点、姫島産黒曜石が4点、金山産サヌカイトが2点、角閃石安山岩が1点となっている。

第23表 一方平Ⅱ遺跡出土石鏃観察表

図版 番号	出土位置		分 別		寸 法 (cm)				出 土 位 置 (m)		
	区画	番号	器 種	石 材	縦長	横長	厚さ	重量g	南から	西から	標 高
1	I13	一括	石鏃	チャート	1.61	1.04	0.30	0.8			
2	G17	1	石鏃	姫島産黒曜石	1.62	1.74	0.22	0.6	83.609	34.157	74.598
3	F13	16	石鏃	姫島産黒曜石	1.48	2.29	0.29	0.9	63.855	25.844	74.136
4	E12	13	石鏃	チャート	1.62	1.95	0.39	1.3	57.446	21.967	74.099
5	F13	40	石鏃	チャート	2.40	1.37	0.40	0.9	63.771	27.373	74.165
6	D12	19	石鏃	姫島産黒曜石	2.52	1.88	0.56	1.2	59.715	17.888	73.625
7	D08	17	石鏃	金山産サヌカイト	2.59	1.50	0.47	1.1	38.597	16.585	74.504
8	I20	1	石鏃	姫島産黒曜石	2.33	1.48	0.39	0.8	97.713	45.093	74.283
9	遺跡	一括	石鏃	チャート	2.40	1.28	0.38	1.0			
10	D12	5	石鏃	チャート	2.63	1.55	0.34	1.2	55.347	17.847	73.730
11	E15	13	石鏃	角閃石安山岩	3.48	1.86	0.37	1.7	70.713	22.872	73.804
12	G12	5	石鏃	チャート	3.68	2.05	0.40	2.0	57.123	34.138	73.675
13	F03	1	石鏃	チャート	3.16	1.21	0.30	1.4	14.317	24.611	74.262
14	F07	8	石鏃	金山産サヌカイト	3.02	1.81	0.50	2.4	31.561	26.812	73.958
15	G15	30	石鏃	チャート	1.98	1.72	0.47	1.5	74.074	34.441	74.054



第69図 石鏃実測図

【石斧】（第70、71図）

本遺跡からは扁平打製石斧が8点、磨製石斧が4点出土している。

打製石斧はいずれも板状に加工しやすい結晶片岩・緑色片岩を用いており、刃部等による磨耗痕をもつものも多い。ただ、24、25については調整剥離の痕が少なく、他の石斧が全縁に刃部が形成されているのに対し、一側縁にしか作られていない。また、全体にやや厚くなっていることから、製作途中の可能性もあり、実際に使用されたか定かではない。打製石斧の大きさは中型と小型の2種類に大別できる。小型のものは長さが10cm程で、中型のものは25、26の2点で、長さは15cm程である。25については前述の通りで、26については実際に使用されたと思われる。磨製石斧は16、19、22、28の4点で、いずれも剥離整形あるいは敲打整形の後、研磨によって仕上げられている。16は、割合に鋭利な基部側を残してかなり破損している。19は刃部・基部ともに使用による破損が見られる。22は他と比べかなり薄く、また、使用による破損が少ない。28は前の3つと比べるとかなり大型である。

これら石斧の破損状況を見ると、強い加撃による破損を伴いやすい作業に用いられたと判断できる。

【敲石】（第70、71図）

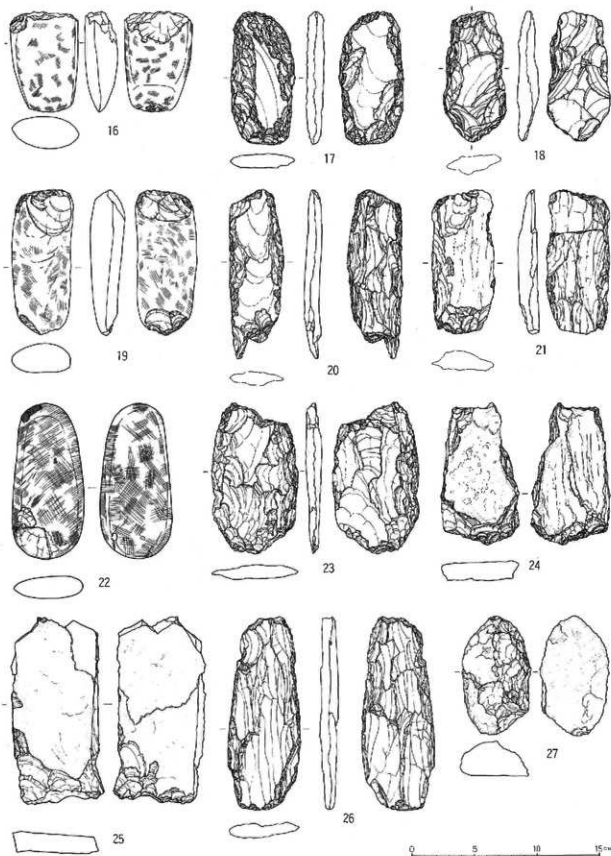
27、29の2点が出土している。どちらも安山岩の円礫をそのまま利用したもので、特に27は石器の左側縁において、使用による磨耗が激しい。29については、その大きさ（縦長13cm）、重量（710g）や、上部の打痕が調整痕とも見て取れることから、礫器として使用された可能性も考えられる。

【磨石】（第71図）

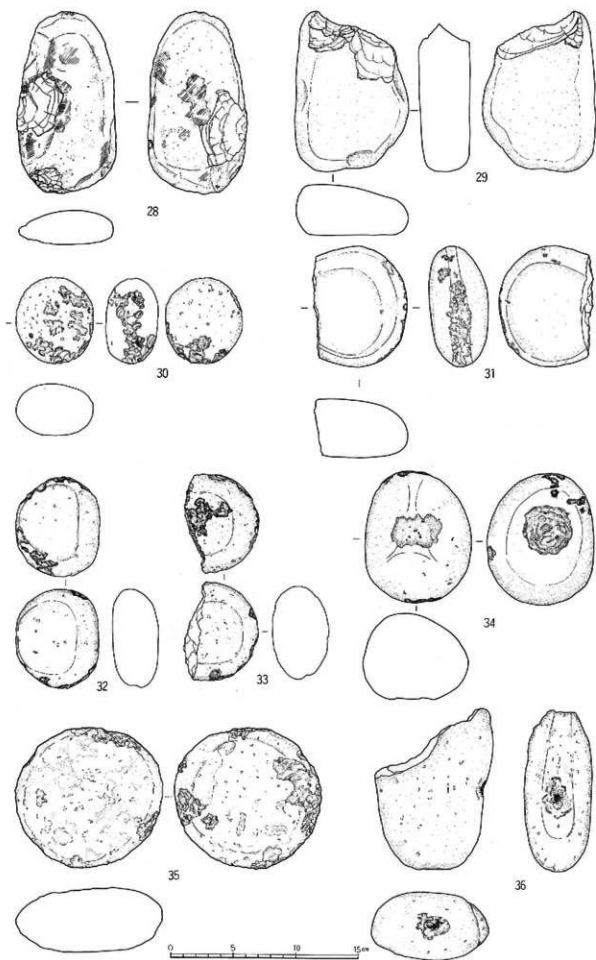
30～36は安山岩、もしくはレキ岩の円礫をそのまま利用したもので、そのほとんどが表裏面や側面に打痕や磨痕を残す。また、礫中央部の表裏面に凹み部を形成しているものもある。大きさは直径約6cm～13cmと規格性はない。なお、磨石のうち数点には敲石と兼用で使用した痕跡があり、敲磨石とよばれるタイプのものがある。状況によって使い分けたのであろう。

第24表 一方平Ⅱ遺跡出土石器観察表(1)

図版 番号	出土位置 区画	番号	分 別		寸 法 (cm)				出 土 位 置 (m)		
			器 種	石 材	縦長	横長	厚さ	重量 g	南から	西から	標 高
20	F09	79	打製石斧	結晶片岩	12.50	4.30	1.10	95.5			
26	F10	5	打製石斧	結晶片岩	15.35	5.80	1.20	147.5	46.472	26.661	74.402
17	G14	19	打製石斧	結晶片岩	10.50	5.15	1.15	101.5	68.264	33.859	74.064
23	G15	17	打製石斧	結晶片岩	11.70	6.95	1.10	126.6	71.183	34.151	74.081
21	G15	28	打製石斧	結晶片岩	11.10	5.00	1.45	115.3	73.946	34.249	74.213
25	H14	21	打製石斧	結晶片岩	14.85	6.95	1.85	298.6	66.940	36.752	73.795
18	H14	31	打製石斧	結晶片岩	10.20	5.00	1.40	96.3	66.038	35.542	73.716
24	H14	47	打製石斧	結晶片岩	10.80	6.20	1.50	155.9	69.964	39.777	73.472
19	E09	91	磨製石斧	泥岩	11.40	4.75	2.60	212.2	43.365	23.240	74.555
16	H12	11	磨製石斧	蛇紋岩	7.95	5.50	2.55	175.4	59.179	36.907	73.412
28	E14	44	磨製石斧	熔結凝灰岩	14.50	7.95	3.00	472.3	69.827	21.838	73.821
22	I23	1	磨製石斧	玄武岩	12.40	5.70	1.95	228.7	112.484	43.593	76.204
27	F10	26	敲石	安山岩	9.40	5.45	2.75	158.8	48.576	25.178	74.396
29	F10	53	敲石	安山岩	12.95	9.20	4.00	710.8	38.627	26.661	74.402
32	F11	18	磨石	レキ岩	6.70	7.90	3.55	269.0	50.661	25.466	74.224
34	F11	19	磨石	レキ岩	10.50	9.60	6.80	883.9	50.392	25.534	74.243
33	F11	20	磨石	レキ岩	5.80	5.85	4.60	272.0	51.908	26.634	74.288
30	F14	26	磨石	レキ岩	6.85	6.20	4.10	239.8	68.357	26.689	74.177
35	E14	45	磨石	安山岩	11.20	11.80	5.10	906.7	69.584	21.424	73.699
31	F13	1	磨石	安山岩	9.60	7.50	4.55	543.8	60.008	25.164	74.176
36	H13	6	磨石	安山岩	11.55	9.00	5.30	820.4	64.280	36.884	73.573



第70图 石斧等类图(1)

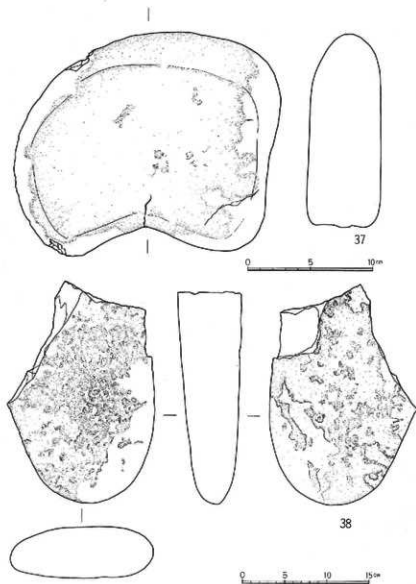


第71圖 石斧等実測図2)

【石皿】（第71図）

本遺跡から石皿はF-10、D-11グリッドで2点検出された。いずれも扁平な河原石を使用したもので、表面は使用により中央部が磨耗して凹みができている。ただ、38については、数多くの敲打された痕も残している。また、いずれの石も被熱して赤化しており、D-9グリッドにある集石炉の一部として使用された可能性も否定できない。

他にもこの周辺で、石皿、もしくは台石に利用された可能性のある人型の扁平礫がいくつか出土しているが、明確な使用痕跡が確認できなかったため、ここでは割愛している。



第72図 石皿実測図

第25表 一方平Ⅱ遺跡出土石器観察表(2)

図版	出土位置		分 別		寸 法 (cm)				出 土 位 置 (m)		
番号	区画	番号	器 種	石 材	縦長	横長	厚さ	重量 g	南から	西から	標 高
38	F10	106	石皿	レキ岩	25.00	17.40	7.60	4040.0	46.301	27.588	74.236
37	F11	57	石皿	レキ岩	20.00	16.70	7.40	3667.5	54.966	28.181	74.208

(3) 平安時代

本遺跡において出土した遺物は、そのほとんどが旧石器時代、縄文時代早期と考えられるものであった。ただ、なかにはそれよりもかなり新しいと思われる遺構・遺物も確認されている。この節ではそれらの遺構と遺物を取り上げる。

a. 遺構

【1号土坑】（第73図）

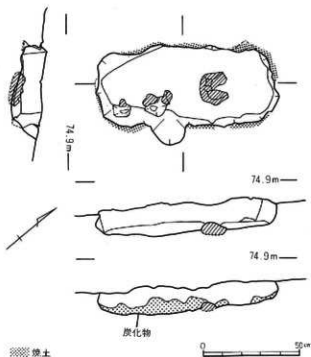
D-6 グリッド北東部、第Ⅲ層に掘り込まれた長さ約90cm、幅約40cm、深さ約20cm程の浅い土坑で、底面は平坦であった。周りの壁と底は被熱して赤化しており、内部で火を使った可能性を考えることが出来る。土坑に伴う遺物は出土しなかったため、時期は特定できなかった。

ただ、本遺跡の南東約300mに位置する九池遺跡や、南側に接する一方半Ⅲ遺跡で確認された同様の土坑でおこなった地磁気分析の結果によると、おおよそ11世紀末から12世紀初頭という結果がでており、本遺跡の土坑もほぼその時期ではないかと考えられる。

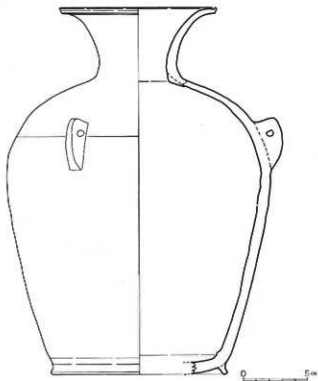
b. 遺物

【須恵器（蔵骨器）】（第74図）

F-15、16グリッドで出土した、高台付きの甕で、蔵骨器であると考えられる。口径は12.4cm、器高は28.7cm、底径は13.9cmである。胴部に1条の沈線をめぐるせ、その上に1個の穴を穿った耳上の把手がつく。把手は半楕円形を半分にしたような形状をなす。その数については実測図では3つとしているが、この部分については完全に復元できておらず、定かではない。口縁部は大きく外反し、口縁端部が上部につまみ上げられている。高台は短く、外反しており器の底部が床に接地する。この蔵骨器の製作年代はおおよそ9世紀末と考えられる。



第73図 1号土坑実測図



第74図 蔵骨器実測図

第3章 まとめ

本遺跡の遺物包含層は第Ⅱ層のみで、旧石器時代、縄文時代の明確な包含層は確認できなかった。以下、調査で判明した遺跡の歴史をまとめておく。

旧石器時代 本遺跡では、本編の第2章でも述べたように、旧石器時代の遺物は計266点検出されている。その構成は、剥片が168点（63.2%）、砕片が22点（8.3%）、石核が26点（9.8%）、使用痕ある剥片が20点（7.5%）、二次加工痕ある剥片が2点（0.8%）、削器が12点（4.5%）、搔器が6点（2.3%）、ナイフ形石器が4点（1.5%）、三稜尖頭器が5点（1.9%）、角錐状石器が1点（0.3%）であった。（石器類は50点で全体の18.8%）これらを石材別にみると、流紋岩が261点（98.1%）と圧倒的に多くっており、その他は全て玄武岩質安山岩（5点・1.9%）であった。母岩の数では、流紋岩で確認しただけで、最大148個体が存在する。

また、石器・剥片に対する石核の割合（石核数÷石器数、石核数÷剥片数）は、石器では0.52、剥片では0.15となっている。これは、本遺跡の北東に隣接する一方平Ⅰ遺跡には及ばないが、その他の旧石器時代の遺跡と比較すると、その割合は高くなっているといえる。これは石器の製作を行った遺跡というより、原石をただ加工するのみの場所であったとも考えられる。また、この遺跡で出土している旧石器遺物の点数は、かなり流出しているものがあることを考えに入れても、他の遺跡に比べ決して多いとはいえず、この時代、本遺跡で断続的な生活が営まれていたとは考えにくい。三稜尖頭器は今までのところ、A T（始良沢火山成）層より古い時代では確認されていない。従って本遺跡の旧石器遺物の年代も今から約21000年前のA T以降と考えられる。

縄文時代 縄文時代については、遺構では早期と考えられる集石遺構（約9000年前）を1基検出した。遺物については、石器が925点、石器類が320点出土した。

土器については、無文土器が894点（96.8%）、押型文土器が31点（3.2%）であり、圧倒的に無文土器が多くなっている。石器類の構成は石器が38点（11.9%）、姫島産黒曜石の剥片が79点（24.7%）、同砕片が78点（24.4%）、チャートの剥片が35点（10.9%）、同砕片が84点（26.3%）、その他の剥片が6点（1.9%）であった。石器の器種別構成については、石鏃が15点（39.5%）、石斧が12点（31.6%）、磨石が7点（18.4%）、石皿が2点（5.2%）、敲石が2点（5.2%）であった。

石器のうち、打製石鏃については、その形態から縄文時代早期のものと考えられるが、打製石斧については縄文時代後期の所産であり、その使用された時代については大きく異なる。また、縄文時代早期の土器については多数検出されているが、それ以外の縄文時代後期～晩期の土器については全く検出されていない。従って縄文時代前期以降の生活の場は、他の土地に移ったものと考えられる。ただ、本遺跡で打製石斧が出土したこと考えると、生活の場が違う場所に移ってからも、原始的農耕が当地で行われていた可能性が強い。なお、本遺跡の北西約150mに所在する一方平Ⅳ遺跡で縄文時代晩期の土器が検出されており、本遺跡との関連が考えられる。

なお、本文中では扱っていないが362点の礫を取り上げた。5kgを超える大型の礫が12点（3.4%）、500g～5kgの礫が108点（29.8%）、500g未満の小型の礫が154点（42.6%）で、ほとんどの礫に比熱した痕跡がある。また、これらはC-8～D-10グリッドの範囲に集中して分布している。この付近ではD-9グリッドで集石遺構が検出されており、集石如とこれらの礫とを関連づけて考えるのが適当であろう。また、この遺跡では住居跡などは検出されていない。ただ、縄文時代早期の土器が多数検出されて出土していることから考えると、この場所で当時生活が営まれていたであろうことが推測される。打製石鏃の出土があることから狩猟基地として、残された家族にとっては採集活動の拠点として都合の良い場所だったのではないだろうか。

平安時代 平安時代の遺構は、焼土坑1基が検出されている。この焼土坑については、第2章でもとりあげたとおり、周辺の遺跡で検出された同様の焼土坑からその使用されていた年代を割り出している。遺物では、蔵骨器と考えられる須恵器壺が1点検出されている。どちらも平安時代と判断されるが、推定される作成年代におよそ200年の違いがあり（土坑が12世紀初頭、須恵器が9世紀末）、このことから同じ年代のものとは考えられない。ただし、他の分析結果では土坑の使用されていた年代に違いがでてきており、はっきり断定することはできない。また、これら2つ以外の遺構・遺物は全く検出されておらず、従って、この場所で9～12世紀に生活が営まれていたと考えるのは難しい。

参考文献

- 稲田孝司編 『恩原2遺跡』 岡山大学文学部考古学研究室 1996
坂田邦弘 『大分岩戸遺跡』 1980
高橋信武他 『エゴノケテ遺跡』 宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書 大分県教育委員会 1993
國學院大學文学部考古学研究室 『柳又遺跡 A地点』 國學院大學文学部考古学実習報告書 第21集 1992
中間研志他 『クリナラ遺跡』 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告43 1997
高橋信武他 『横枕B遺跡・前田遺跡』 大分県直入郡直入町所在遺跡の発掘調査報告書 直入町教育委員会 1989

一方平Ⅱ遺跡調查風景



一方平Ⅱ遺跡調查風景



1号土坑





1号集石炉



集石炉取り上げ
保存作業風景(1)

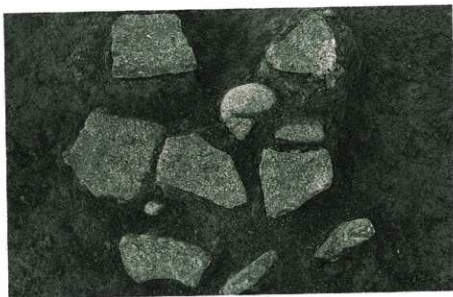


集石炉取り上げ
保存作業風景(2)

遺物出土状況



遺物出土状況

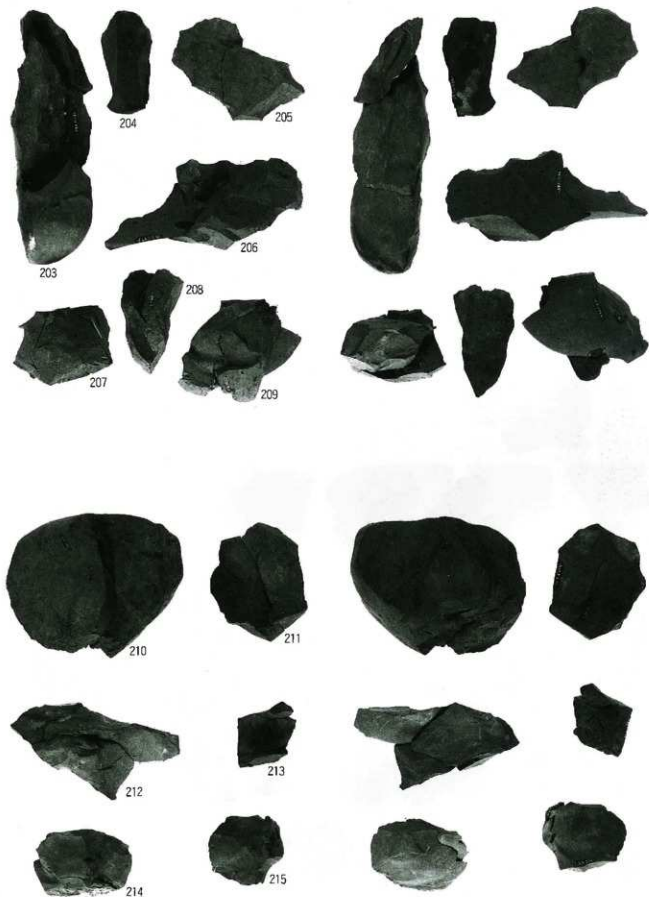


須恵器出土状況



圖版 4

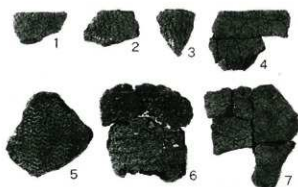




圖版 6

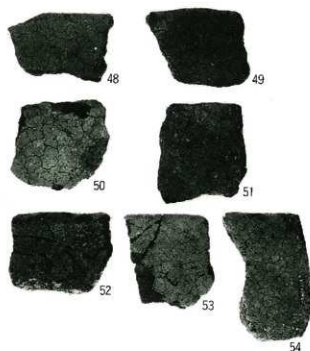
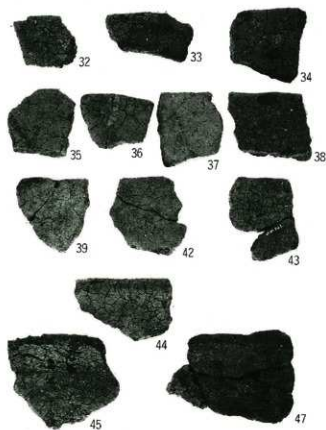


一方平Ⅱ遺跡出土石器接合資料(2)

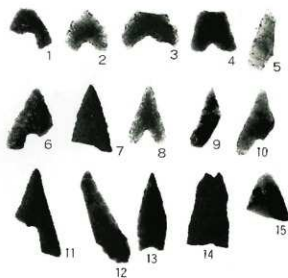


一方平Ⅱ遺跡出土縄文早期土器(1)

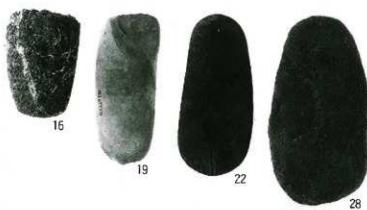
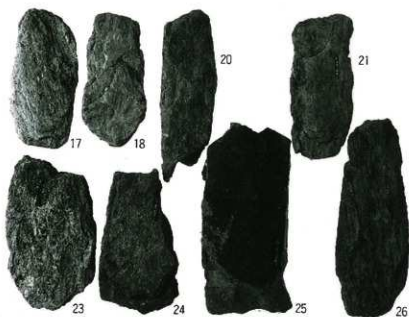
圖版 7



一方平Ⅱ遺跡出土縄文早期土器 (2)



一方平Ⅱ遺跡出土縄文石器 (1)

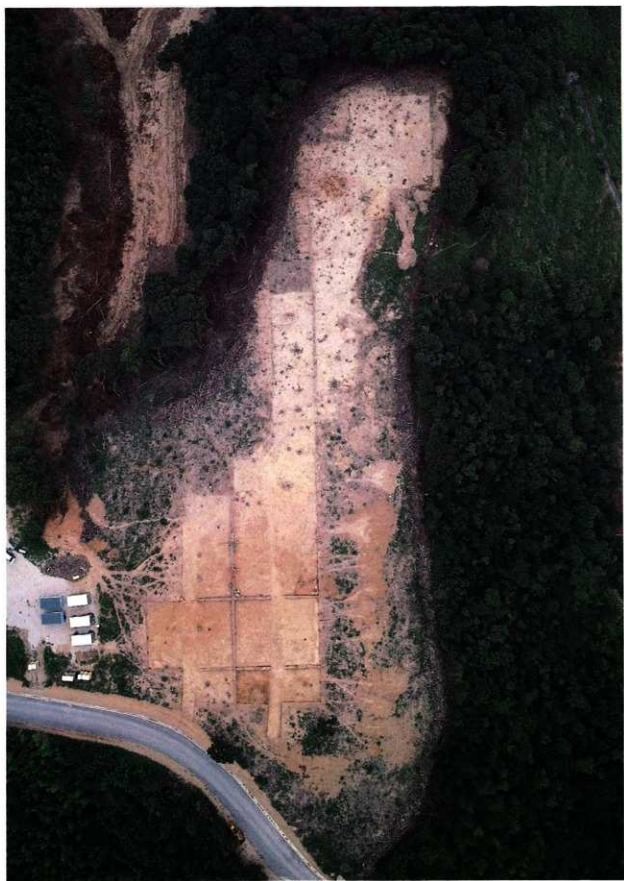


一方平Ⅱ遺跡出土縄文石器（2）



一方平Ⅱ遺跡出土土版骨器

一方平Ⅲ遺跡



一方平Ⅲ遺跡全景

本文目次

第1章 遺跡の概要	1
第1節 調査の経緯	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査体制	1
第2節 遺跡の立地	1
(1) 遺跡の環境	1
第2章 発掘調査の成果	3
第1節 調査の概要	3
第2節 検出した遺構と遺物	4
(1) 集石遺構	6
(2) 土坑	10
(3) 石器	15
(4) 土器	36
(5) 須恵器	44
第3章 小結	46

表目次

第1表 礫器観察表	16
第2表 石核・剥片石器・石斧・石鏃観察表	33
第3表 敲石・磨石観察表	33
第4表 土器観察表 (1)	39
第5表 土器観察表 (2)	42
第6表 土器観察表 (3)	43
第7表 須恵器観察表	44

插图目次

第1図 一方平Ⅲ遺跡周辺地形図	2
第2図 一方平Ⅲ遺跡調査区の設置	3
第3図 グリッドE7～E10の西壁土層図	4
第4図 一方平Ⅲ遺跡遺構分布図	5
第5図 1号集石実測図	6～7
第6図 2号～5号集石実測図	8
第7図 6号・7号集石実測図	9
第8図 1号～4号土坑実測図	11
第9図 5号～7号土坑実測図	12
第10図 一方平Ⅲ遺跡遺物分布図	13～14
第11図 礫器実測図 (1)	17
第12図 礫器実測図 (2)	18
第13図 礫器実測図 (3)	19
第14図 礫器実測図 (4)	20

第15図	礫器実測図 (5)	21
第16図	礫器実測図 (6)	22
第17図	礫器実測図 (7)	23
第18図	礫器実測図 (8)	24
第19図	礫器実測図 (9)	25
第20図	石核実測図	27
第21図	剥片石器実測図 (1)	28
第22図	剥片石器実測図 (2)	29
第23図	剥片石器実測図 (3)	30
第24図	剥片石器実測図 (4)	31
第25図	石斧・石鏃実測図	32
第26図	敲石・磨石実測図	34
第27図	グリッドF-9の土器出土状況	35
第28図	土器実測図 (1)	37
第29図	土器実測図 (2)	38
第30図	土器実測図 (3)	40
第31図	土器実測図 (4)	41
第32図	須恵器実測図	45

写真図版目次

図版 1	1・5・6号集石	48
図版 2	1・2・5号土坑	49
図版 3	7号土坑、F9グリッド土器集市区、発掘調査風景	50
図版 4	礫器	51
図版 5	石器(石核・剥片石器・石斧・石鏃・敲石・磨石)	52
図版 6	土器(土師器)	53
図版 7	土器(土師器)	54
図版 8	土器(土器山縁部・甕・甕)	55
図版 9	土器(高坏・甕)、須恵器	56

なお、本報告書を作成するにあたり、調査時に設定した地区名、及び遺構番号と本報告書で使用した地区名、遺構番号を修正している。そのため、下記の表のとおり本書のものとは相違している。ご了承願いたい。

本報告書の呼称	調査時の呼称	本報告書の呼称	調査時の呼称
1号集石	2号集石	1号土坑	7号土坑
2号集石	2b集石	2号土坑	1号土坑
3号集石 ²	1号集石	3号土坑	4号土坑
4号集石	3号集石	4号土坑	2号土坑
5号集石	6号集石	5号土坑	3号土坑
6号集石	5号集石	6号土坑	8号土坑
7号集石	4号集石	7号土坑	9号土坑

第1章 遺跡の概要

第1節 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

報告する一方平Ⅲ遺跡は、平成8年度に本調査を行った遺跡である。調査区域の伐採終了後、5月13日より調査を開始した。試掘時に入れた遺跡南側のトレンチの周辺から北側斜面へと調査区域を広げた。その結果、旧石器時代後期～縄文時代早期の遺物と集石遺構7基、弥生時代中期の遺物、奈良時代の遺物と時期不明の上坑が確認された。途中、他の調査区も始まり、調査員や作業員の分担による若干の作業効率の減少もあったが、順調に調査は進み、9月23日に面積3360㎡に及ぶ全調査を終了した。

(2) 調査体制

調査の組織は以下の通りである。

調査主体 大分県教育委員会

田中恒治（大分県教育委員会教育長）

事務統括 後藤一郎（大分県教育委員会文化課課長）

	野田武志（	同	課長補佐）
	山崎靖信（	同	課長補佐兼管理係長）
調査統括	清水宗昭（	同	主幹兼埋蔵文化財第1係長）
調査主任	栗田勝弘（	同	埋蔵文化財第1係主査）
調査員	甲斐寿義（	同	埋蔵文化財第1係主任）
	首藤 浩（	同	埋蔵文化財第1係主事）
	藤内諒竹（	同	埋蔵文化財第1係主事）
	萩 幸二（	同	埋蔵文化財第1係嘱託）
	近藤元弘（	同	埋蔵文化財第1係嘱託）
	横山知成（	同	埋蔵文化財第1係嘱託）
調査事務	西 哲弘（	同	埋蔵文化財第1係主査）
	渡辺重昭（	同	埋蔵文化財第1係主査）
	小野高寛（	同	管理係主事）

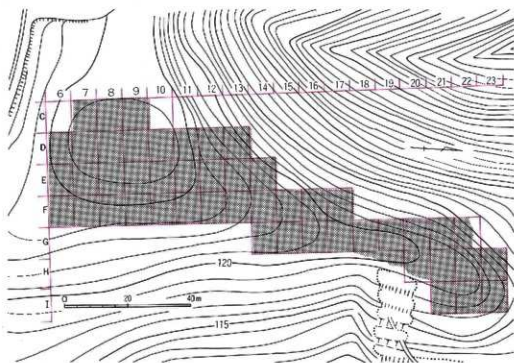
第2節 遺跡の立地

(1) 遺跡の環境

一方平Ⅲ遺跡は、大分市大字横尾一方平に所在する。本遺跡は大分平野を南から北へと流れる大野川支流の乙津川下流左岸の丘陵上にあり、600m北に高尾山、北東部には大分市街地、別府湾を臨む。日あるスポーツ公園遺跡群の中にあつて、標高約125m前後、上牧ノ内Ⅱ遺跡に次ぐ高い場所にあり、本遺跡からは大分平野東部一帯を見わたすことができる。大野川流域は発達した台地があり、特に下流域には大規模な台地が分布している。台地の多くは河岸段丘・海岸段丘の両方からなり、大野川を境にして左岸の鶴崎台地には、有田遺跡・横尾貝塚・岡原遺跡・松岡遺跡・清水遺跡・向原遺跡があり、右岸の丹生台地には、昭和40年頃の前期旧石器時代の論争ともなった丹生遺跡群や野間古墳群などがあり、旧石器時代からの遺跡が数多く散在する地域である。



第1圖 一方平里遺跡周辺地形圖



第2図 一方平Ⅲ遺跡調査区の設定

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

平成7年度に試掘を行い、標高125m付近の丘陵に幅2mの試掘溝を南北に2本入れたところ、縄文早期の土器の細片が検出された。これを受けて、スポーツ公園遺跡群の中において、メインスタジアムが建設される場所として、平成8年5月から9月初めまでの期間で最初に本調査を行うこととなった。試掘溝での南北方向を基本に高低差約5mのなだらかな丘陵地帯に各遺構・遺物の位置、層位を正確に把握するため、南北8m×東西10mのグリッドを組み、南北に数字、東西にアルファベットをつけ調査区を設定した。

調査は、標高125mの一番高い平坦部から開始し、徐々に南から北へ、西から東へ向かって調査範囲を広げていった。その結果、平坦部と丘陵の先端部などから縄文時代・弥生時代の遺物が検出された。8月下旬、調査も終盤を迎えて、F-9グリッドにおいて多量の土師質土器が検出された。また、竈穴住居跡や溝状遺構などは検出できなかったものの、縄文時代の集石遺構7基、土坑7基などを検出し、土坑については、そのうちの1基について、地磁気分析を行い、10世紀末～11世紀初頭の頃という年代結果が出た。

1層は、表上から地山まで、平坦部の深いところで約50cm程しかなく、南から北へ斜面や先端部に行くにつれて浅くなっていた。層位については、主に遺物が出た平坦部のE列および多量の土師器が検出されたF-9グリッド南東端を中心として4つの層に分けた。1層は表上であり、2層は粘性で根などによる擾乱があり、小礫を含み、

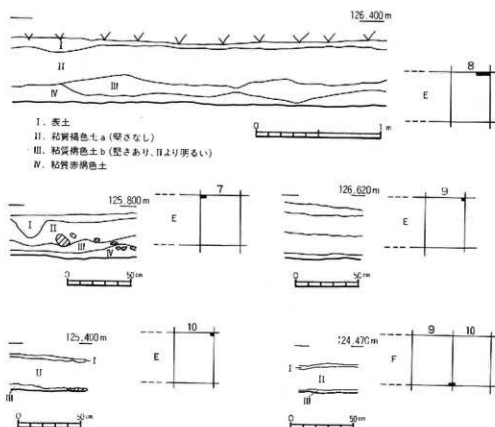
堅さは余りない。Ⅲ層は粘性で堅く、白色粒子を多く含んでおり、Ⅱ層よりも明るい。Ⅱ層は、Ⅲ層とほぼ同質であり、根による擾乱か2次堆積によるものであろう。Ⅳ層は、粘性・堅さが非常にあり、白色粒子・礫を多く含んでおり、その下は本遺跡の基盤層(地山)である。遺物・遺構は主にⅢ層からⅣ層にかけて出土した。しかしながら、遺跡の大部分は緩やかな斜面になっており、根による擾乱なども見られ、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層においては、プライマリーな上層ではないと考えられる。

出土遺物も含めて考えると遺構の状況などから、生活を営んでいたということは考えにくいものの、旧石器時代末から中世までの長い時代にわたり、人の痕跡を伺い知ることができる。

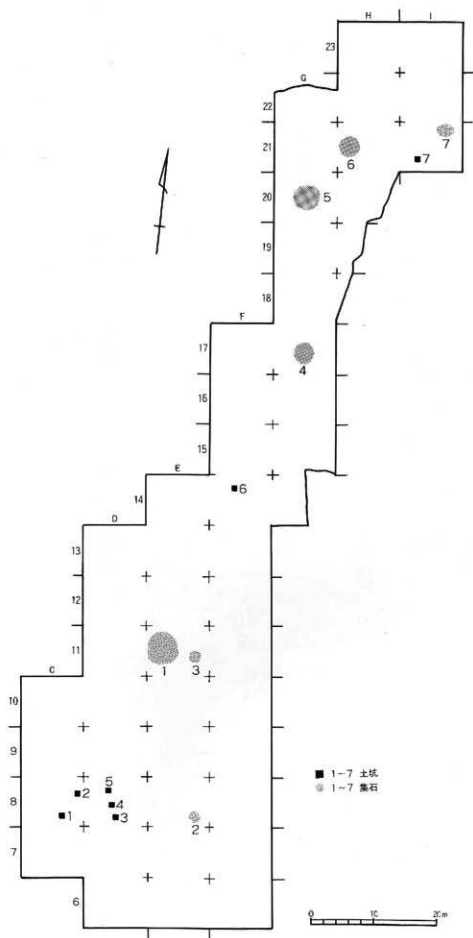
第2節 検出した遺構と遺物

本遺跡では、堅穴住居跡・柱穴といった遺構は検出されなかったが、縄文時代早期の集石遺構を7基、土坑を7基検出した。集石遺構については、標高約125m前後の緩やかな丘陵部に3基、約120m前後の遺跡北側の丘陵先端部に4基を検出した。いずれの集石遺構も人頭大程の礫はわずかで、ほとんどは握り拳大から少し小さめの礫の集合体であり、それぞれの遺構の約3分の2以上の礫が赤色化しており、被熱している。

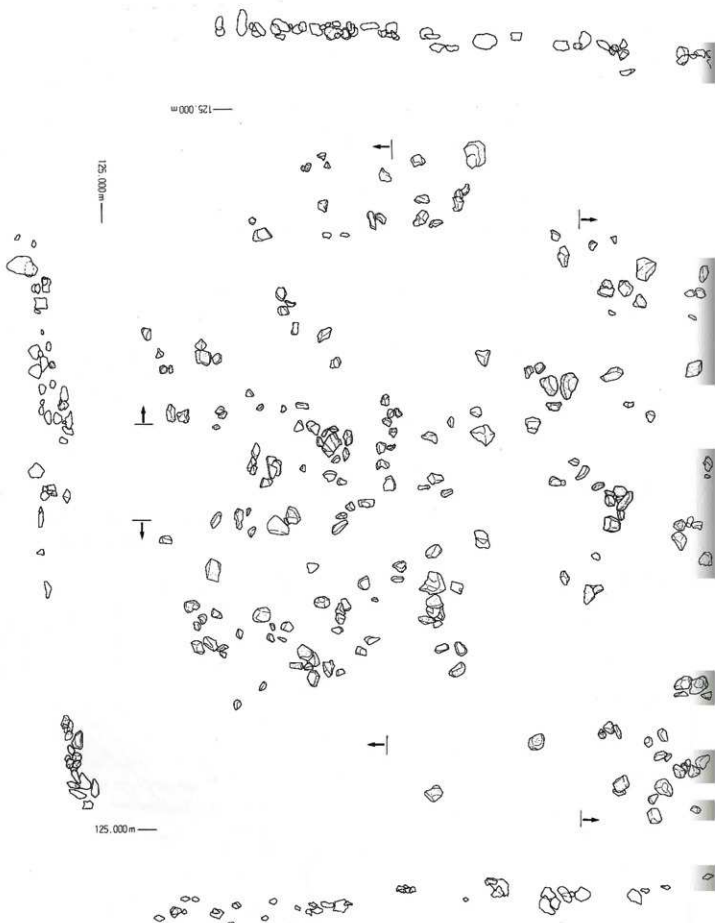
土坑については、遺跡南側の一番高い丘陵部に5基、南北に長い遺跡の中央部に1基、遺跡北側の先端部に1基が検出された。ほとんどの土坑について、大きさ・形は多様であり、内部には遺物などは含まれていなかった。土坑の時期は明確ではないものの、7基のうちの1基(7号土坑)を地磁気分析した結果として、約1100年前後の年代値がでている。



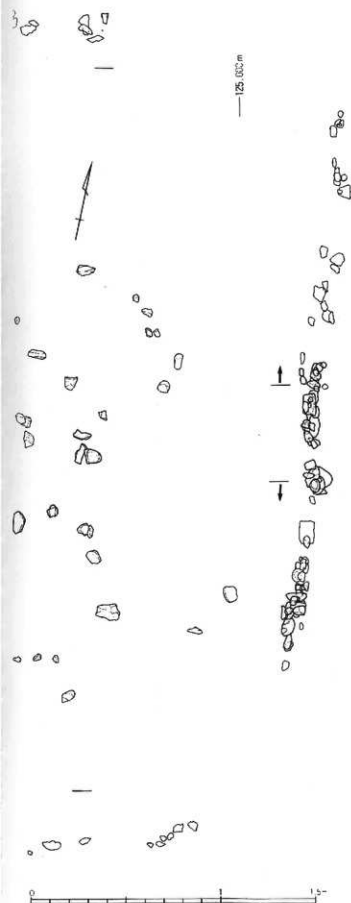
第3図 グリッドE 7～E 10の西壁土層図



第4圖 一方平Ⅲ遺跡遺構分布圖



第5图 1号集石类测图



(1) 集石遺構

【1号集石】(第5図)

E-11グリッド西側に位置し、南北に3.9m、東西に4.0mの広範囲で、散漫に広がっている。範囲のわりには個数はそれほど多くはない。礫の大半は、握り拳大ほどのものが多く、火を受けて赤変しており、なかには熱により砕片しているもあった。掘り込み遺構は確認できなかった。

【2号集石】(第6図)

E-8グリッド南側の東寄りに位置し、南北に1.05m、東西に0.81mの範囲で5cm～10cm台の焼けた石が集まっている。集石の状態は散漫で、掘り込みなどの下部遺構は確認できなかった。

【3号集石】(第6図)

E-11グリッドの南、東側に位置する。南北に1.4m、東西に1.0mの範囲に拳大の大きさから、それより小さめの石が集まる。掘り込みは確認できず、石のほとんどは火を受けて、赤変していた。

【4号集石】(第6図)

G-17グリッドのほぼ中央に位置し、南北に1.7m、東西に1.12mの範囲に拳大かそれよりやや小さめの焼けた石の集集体である。掘り込みによる下部遺構は確認できなかった。

【5号集石】(第6図)

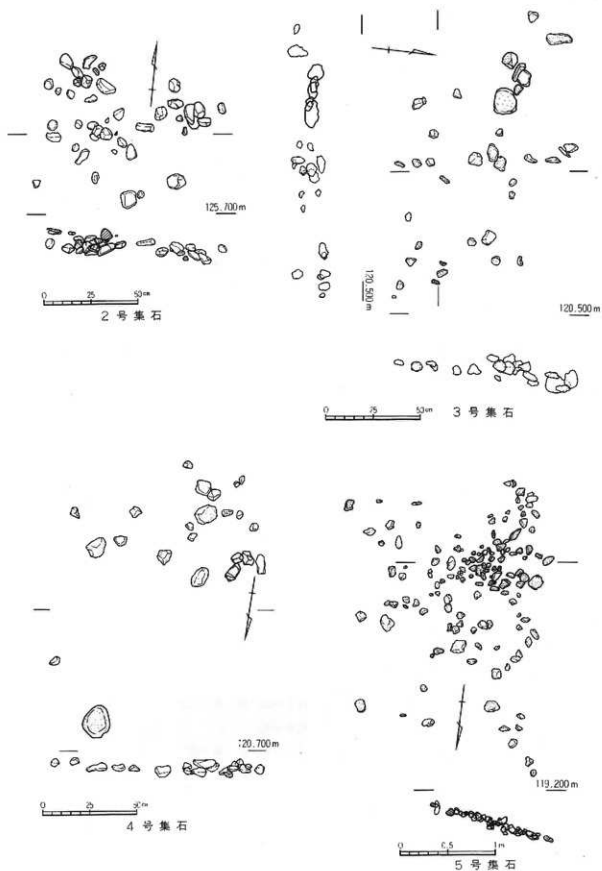
G-20グリッドのほぼ北側中央部の西側斜面に位置し、南北2.15m、東西2.24mの広範囲に拳大よりやや小さめの焼けた石が集まっている。

【6号集石】(第7図)

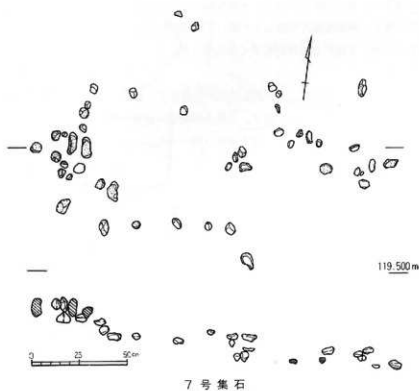
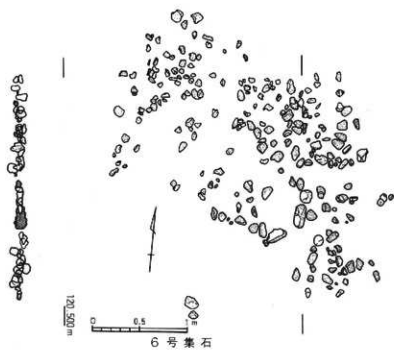
H-21グリッド東側、遺跡北端の丘陵中央部に位置する。南北に2.89m、東西に2.32mの広範囲を測る。拳大ほどの焼け礫が多く散乱しており、掘り込みも確認できなかった。

【7号集石】(第7図)

I-21グリッドの北側で東側斜面に位置する集石。範囲は、南北1.34m、東西1.92mを測る。拳大より少し大きめの焼けた石が大半で拡散している状態であった。掘り込みなどは確認できなかった。



第6図 2号~5号集石実測図



第7图 6号・7号集石実測図

(2) 土坑

【1号土坑】(第8図)

C-8グリッドの南から約1.5m、東から約3.5mに位置する。不整な楕円形を呈し、長さ0.78m、幅0.34m、深さ0.18mを測る。北側半分の壁土は火を受けて赤変しており、側壁は底から上へ彎曲していた。覆土は、全体的に炭化物を含み、南側底部の直上より丸石を1個、流れ込みと考えられる無文土器の細片が出土した。

【2号土坑】(第8図)

C-8グリッド東側、約3mに位置する。不整な隅丸長方形で南西隅が突き出ている。長さ1.78m、幅1.01m、深さ0.19mを測る。北側に焼壁が認められる。覆土は、炭化物と若干の礫を含んでいる。土器等の出土遺物は無かった。

【3号土坑】(第8図)

D-8グリッド南側、西から東へ約3.5m、北へ約1.25mの位置に、長さ0.64m、幅0.7m、深さ0.4mを測る。不整な円形で、覆土の上層に小さめの礫、炭化物、赤色スコリアを多く含んでいた。断面は逆梯形を呈する。遺物は検出されなかった。

【4号土坑】(第8図)

D-8グリッドのほぼ中央、西から東へ約2mに位置する。不整な楕円形を呈し、長さ1.13m、幅0.46m、深さ0.17mを測る。小礫、赤色・黒色スコリアを多く含んでいる。焼壁は確認されず、遺物も検出されなかった。

【5号土坑】(第9図)

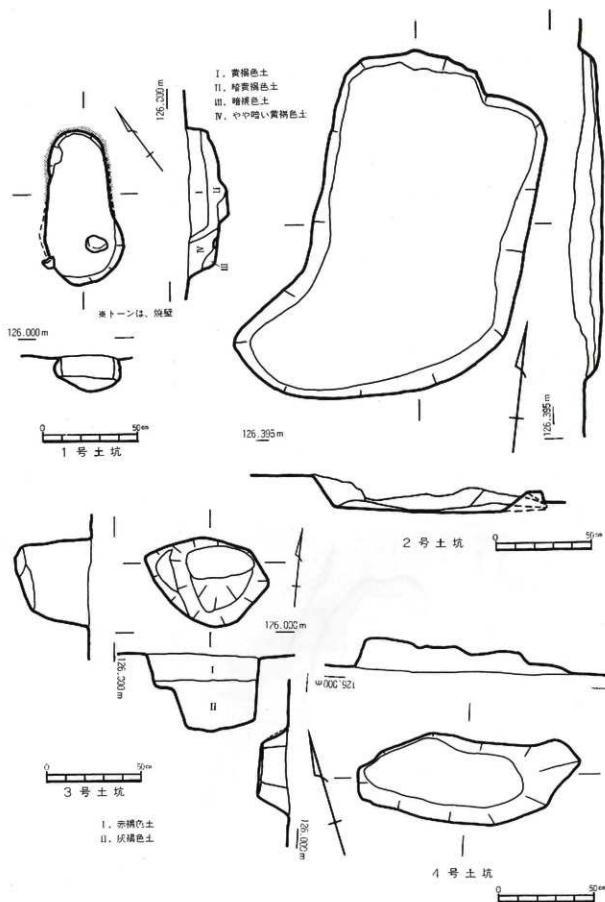
D-8グリッド北側、西から3.75m、北から2mに位置し、不整な楕円形を呈す。長さ0.74m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。北西側に焼壁が確認できた。断面は、半円形を呈し、覆土は、暗黄褐色で小礫、炭化物を多く含んでいた。出土遺物は無かった。

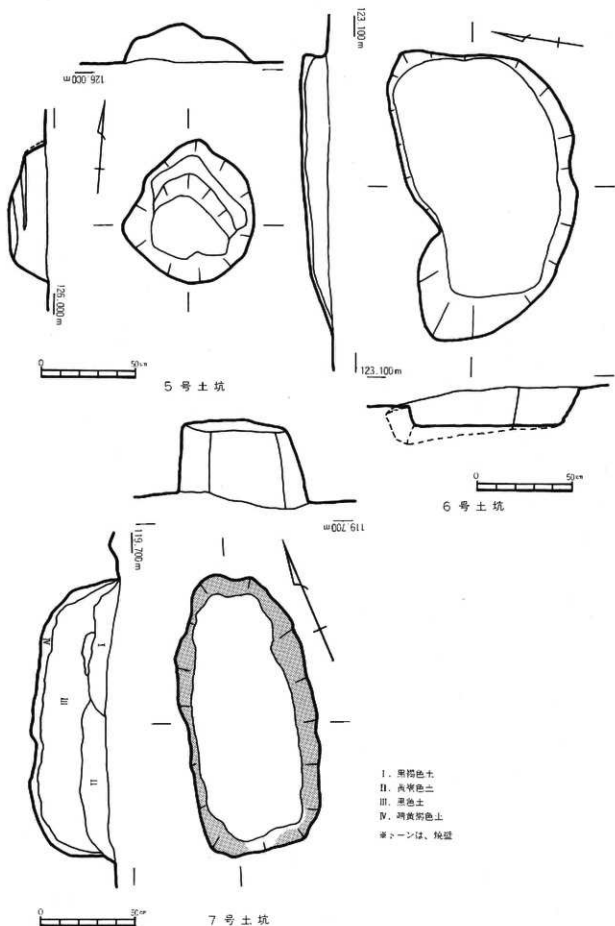
【6号土坑】(第9図)

F-14グリッド北寄りのはぼ中央に位置し、不整な隅丸長方形を呈し、東側に開いている。長さ1.37m、幅1.1m、深さ0.13mを測る。南側床面より数センチ浮いて不規則に置かれたような状態で木炭が出土した。覆土の上層には礫を若干含み、下層には炭化物を多く含んでいた。

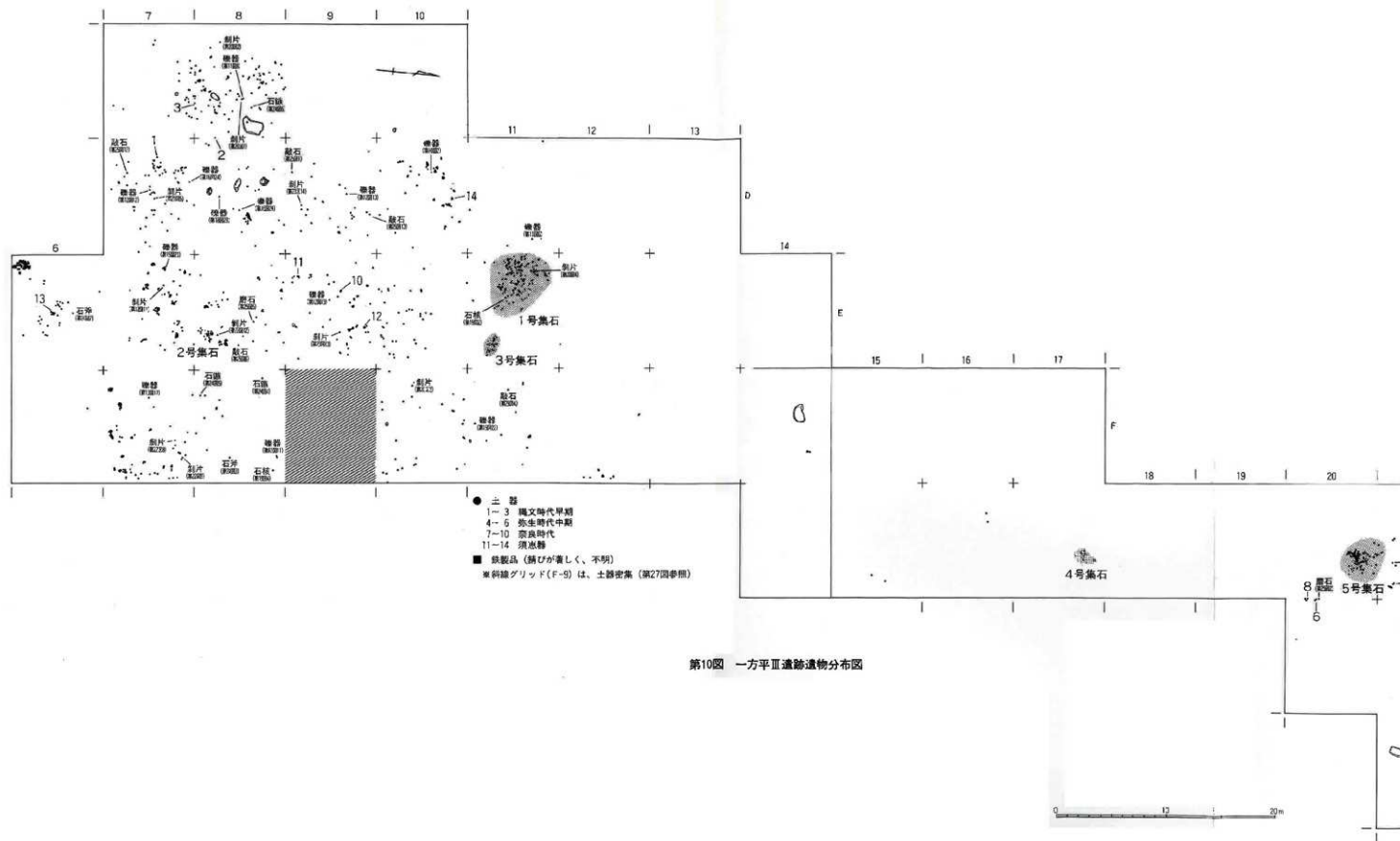
【7号土坑】(第9図)

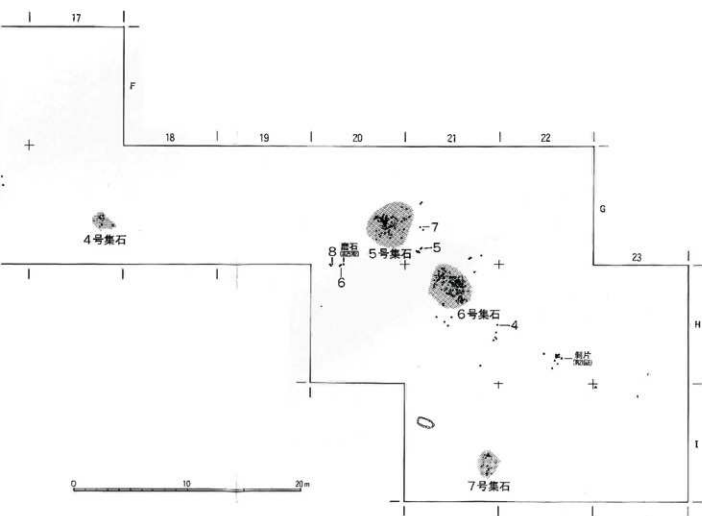
I-21グリッドの南側、北へ約2m、東へ約2.75mに位置する。長さ1.47m、幅0.68m、深さ0.5mを測る。不整な隅丸長方形を成し、断面は逆梯形を呈す。土坑全体で堅い焼壁が確認でき、覆土も黒褐色で全体にわたり多量の炭化物と若干の焼礫を含んでいた。出土遺物は無かった。





第9図 5号~7号土坑実測図





(3) 石器

石器類は、全部で71点が出土している。包含層から出土した石器は、そのほとんどが遺跡の標高125m～123m前後の緩斜面からであり、明確に分けることはできないが、Ⅱ層の下部、Ⅲ層、Ⅳ層から出土する傾向にあった。出土した上器は、厚めの無文土器がほとんどであり、そのことから考えると縄文時代早期に属する石器が多いと考えられる。石器組成の占める割合としては、特に礫器が多く全体の43.7%を占め、次いで剥片石器が19.7%、敲石が16.9%、石核・石鏃が5.6%、打製石斧が4.2%であった。7材でみると、流紋岩が多く、全体の25.4%で、順に玄武岩9.9%、ホルンフェルス9.9%、といった割合である。安山岩も22.5%と多かったが、そのほとんどは敲石・磨石への使用である。また、礫器として認定するのも困難なものもあるが、観察状況を加えてみた。その他、投擲?、ハンマーストーンなどが出土している。

礫器

【礫器 (1)】(第11図)

1は流紋岩で、片面のみを一部礫面を残しながら、ほぼ全面調整している。大きな剥離面を残し、刃部を調整している。2～4は風化が著しく石材は不明。2は単一打面で円筒形を呈し、石核として捉えることも可能であろう。3は片面を全面剥離してしているが、明確な加工ではない。もう片面は全体に礫面を残すが、下側縁を粗雑であるが刃部として調整している。4は楕円形の礫の片面を一部礫面を残し、下側を加工作しているが、明確な調整ではない。火を受けて、赤化した痕跡がある。5は玄武岩製で、片面のみに一部礫面を残しながら、刃部を細かく調整している。

【礫器 (2)】(第12図)

6はホルンフェルスで、楕円形の礫の片面の一部を剥離しているが、明確な加工ではない。もう片面は全面剥離し、下左縁を粗雑であるが加工している。7は風化が著しく石材は不明。片面に一部礫面を残し、台形状で大きく剥離しているが、統一性がない。8は流紋岩で、楕円形の礫の片面のみを礫面をほぼ残して大きく剥離加工している。もう片面は、自然剥離である。9は風化により石材の判断は困難であり、円形の礫の片面の一方端を剥離している。もう片方は、全体に礫面を残している。

【礫器 (3)】(第13図)

10はホルンフェルスで、4面のうち3面は大きく剥離しており、統一性はない。1面は自然剥離である。11～13は流紋岩である。11は片面のみ礫面を一部残しながら、刃部を調整している。上面及び裏面には、剥離に統一性はない。12は片面のみの加工で、右側縁に大きな剥離面を残して、刃部を調整している。13は表面の下側縁を、大きく剥離しているが明確な加工とはいえない。火を受けて、赤化した痕跡がある。

【礫器 (4)】(第14図)

14は風化により石材の判断は不明。わずかに礫面を残すのみで、ほぼ全面を調整している。表面の上縁と下左縁を粗雑であるが刃部として調整している。火を受けて、赤化した痕跡がある。15・16は凝灰岩で、15は大きな礫の剥離片をさらに加工したものか。表面の左縁から下縁にかけて粗雑な刃部を形成している。16は試験時に採取したもので、左側面に礫面を残す。下から右側面に掛けて剥離を残すが統一性はなく、風化が著しい。17は玄武岩であり、片面のみに大きな剥離面を残しているだけで、明確な加工ではない。

【礫器 (4)】(第15図)

18は玄武岩で、扁平な隅丸長方形の礫で、片面は礫面を残し、右側縁の刃部を調整している。もう片面は全体に礫面を残すが、刃の部分の一部剥離している。打製石斧の可能性もあるが、風化が著しい。19はホルンフェルスで、片面のみの剥離調整で、一部礫面を残す。剥離面は粗雑であり、明確な加工ではない。火を受けて、赤化した痕跡がある。20は砂岩を使用して、大きな礫の細片を利用している。大きな剥離面を残すのみで石器製作途中のものか。

【硯器 (6)】(第16図)

21はホルンフェルスで、両面ともに礫面を残しながら、刃部を調整している。片面に敲打したような使用痕があり、台石の破片を2次的加工したものととも考えられる。22は玄武岩で、縦長の礫で剥離には統一性がない。23はホルンフェルスで、長方形で片面のみの3方向に剥離を残す。3方向のうちの下側縁を刃部として調整している。

【硯器 (7)】(第17図)

24は玄武岩で、片面のみの加工で、大きな剥離面を残しているが、剥離に統一性がない。25は流紋岩で、片面は大きな剥離面を残す。もう片面は剥離面を残しながら、右上縁を刃部として調整しているが、明確な加工ではない。

【硯器 (8)】(第18図)

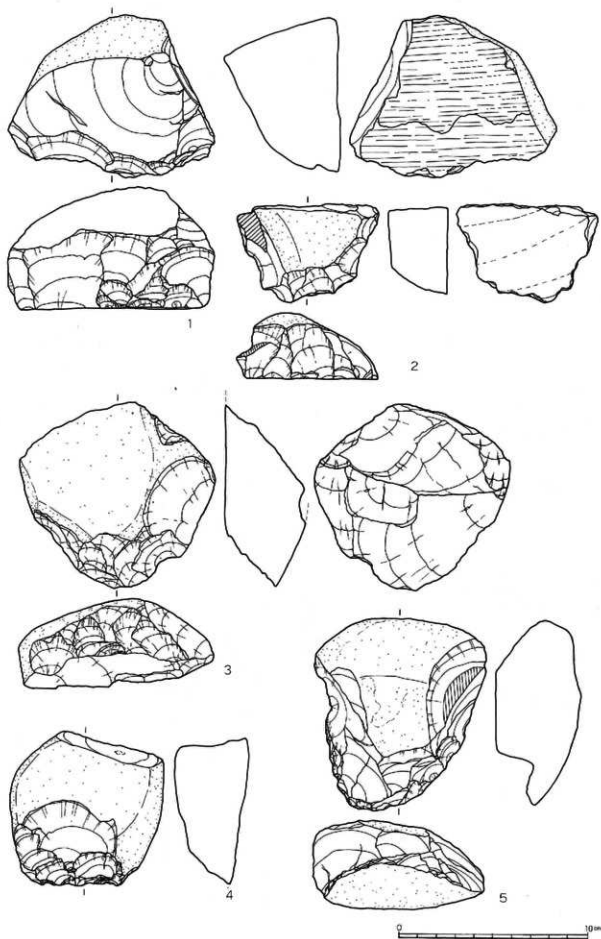
26は玄武岩で、円錐形を呈し、全体に礫面を残しながら、自然剥離と考えられる面を利用して刃部を細かく調整している。27はホルンフェルスを使用しており、楕円形を呈し、片面のみの加工で、大きな剥離面を残し、刃部を調整している。

【硯器 (9)】(第19図)

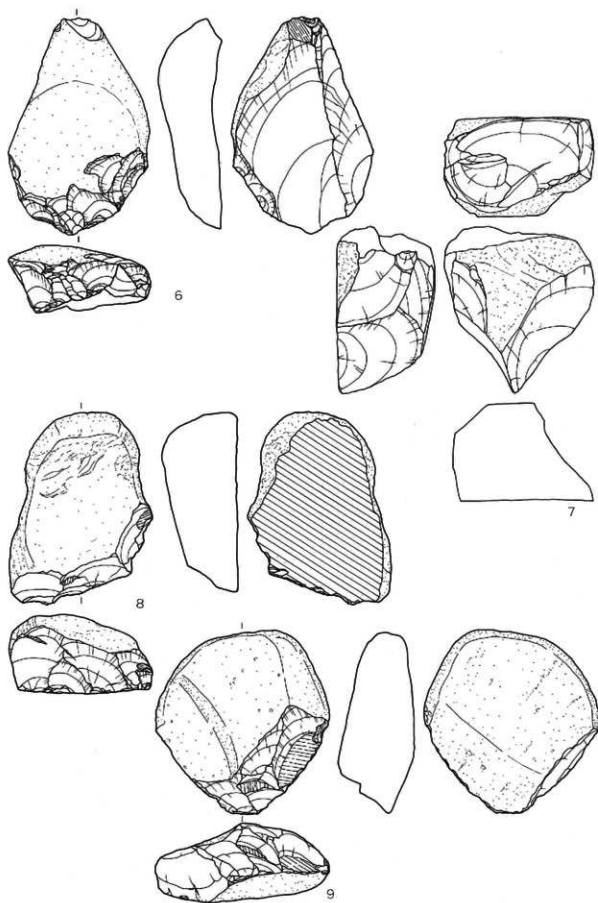
28は砂岩で、大きい礫の破片を利用したもので、大きな剥離面を残し、刃部を調整している。29は安山岩で、楕円形の礫の一端部が剥離しているが、明確な加工ではない。礫の周辺部に数箇所、敲打痕が見られる。30は砂岩を使用し、不整な三角形の礫で、剥離には統一性がなく明確でないが、打製石斧の製作途中と考えられる。31は安山岩製で、半楕円形の礫で、左側面に大きな剥離面が残る。片面の下縁に刃部として調整を加えているため、人形の打製石斧の可能性はある。

第1表 礫石器観察表

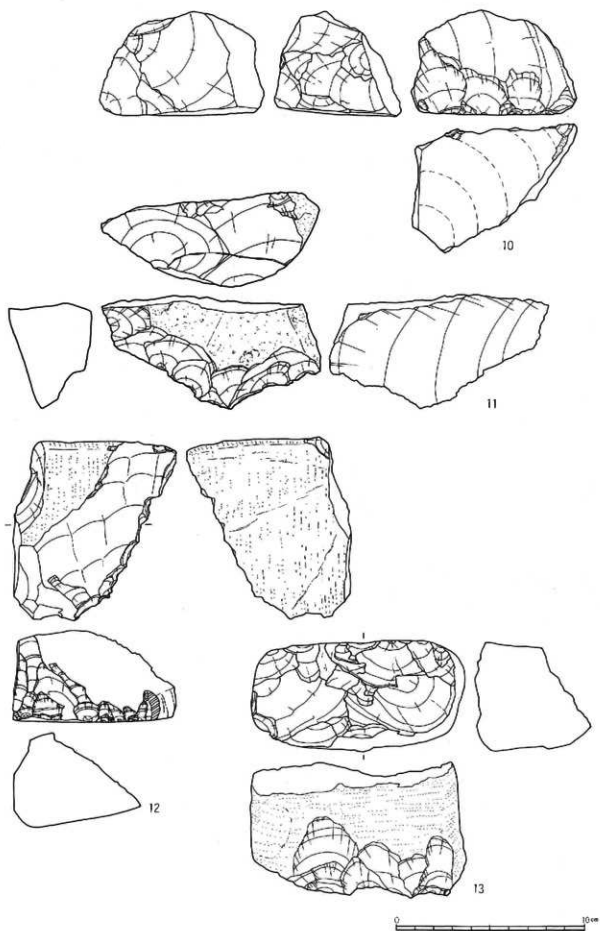
図版番号	番号	グループ	器種	台石	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	容積cm ³	備考
第11図	1	D-8-32	礫器	流紋岩	8.2	10.3	5.4	680.4	153.903	
第11図	2	C-0-21	礫器		4.7	6.2	5.0	150.6	126.343	風化著しい
第11図	3	D-7-2	礫器		9.6	9.8	6.1	389.8	126.831	風化著しい
第11図	4	-16	礫器		7.8	7.7	5.0	278.1		敲打痕あり
第11図	5	B-1-6	礫器	玄武岩?	9.8	9.1	4.2	441.9	124.584	
第12図	6	C-1-2	礫器	4477.4.3	11.2	7.3	2.9	291.5	124.275	
第12図	7	F-2-29	礫器		5.8	7.9	5.1b	107.6	124.61	風化著しい
第12図	8	C-6-43	礫器	流紋岩	5.5	7.1	3.4	568.7	125.955	風化著しい
第12図	9	E-7-105	礫器		5.6	9.2	3.6	568.4	125.595	
第12図	10	D-2-28	礫器	4477.4.3	5.5	8.4	6.5	371.5	125.885	
第13図	11	F-8-9	礫器	流紋岩	5.6	11.5	4.3	284.7	124.426	
第13図	12	D-7-32	礫器	流紋岩	9.5	6.9	4.8	401.4	125.803	
第13図	13	C-9-7	礫器	玄武岩	5.7	11.2	5.9	582.5	125.650	敲打痕あり
第14図	14	C-8-33	礫器		12.6	7.4	3.7	303.4	125.111	敲打痕あり/風化著しい
第14図	15	B-9-1	礫器	安山岩製	9.0	6.6	4.7	333.6	125.686	
第14図	16	-16	礫器	流紋岩製	9.1	11.5	5.7	930.9		
第14図	17	D-5-29	礫器	玄武岩	10.6	6.8	4.2	892.9	125.820	
第14図	18	D-16	礫器	玄武岩	15.6	10.5	4.06	117.7		
第15図	19	C-5-678	礫器	4477.4.3	10.2	10.6b	4.9	642.4	124.749	敲打痕あり
第15図	20	C-7	礫器	砂岩	11.8b	11.5b	6.2	974.3	125.652	
第16図	21	D-8-43	礫器	4477.4.3	16.8	8.4	7.4	1560	125.836	
第16図	22	F-1-5	礫器	玄武岩	8.0	7.6	2.2	1390	124.168	
第16図	23	C-7-4	礫器	4477.4.3	8.8	11.4	6.3	682.3	125.835	
第17図	24	C-7-64	礫器	玄武岩	10.7	6.6	6.1	617.2	125.822	
第17図	25	C-6-2	礫器	流紋岩	13.9	8.0	4.9	407.9	124.727	
第18図	26	F-9-612	礫器	玄武岩	3.5	11.75	4.05	624.1	124.671	
第18図	27	C-5-656	礫器	4477.4.3	8.3b	9.2	12.8b	926.1	124.354	
第19図	28	D-2-34	礫器	砂岩	15.7b	15.4	5.7	1700	125.894	
第19図	29	片岩無し	礫器	安山岩	17.1b	23.6	8.3	544.6		
第19図	30	式1279.4	礫器	砂岩	12.5	7.3	7.1	1510		
第19図	31	式1279.4	礫器	安山岩製	14.9b	10.6b	5.9	3200		



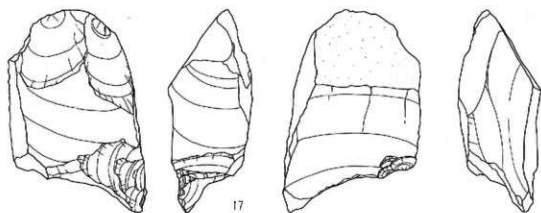
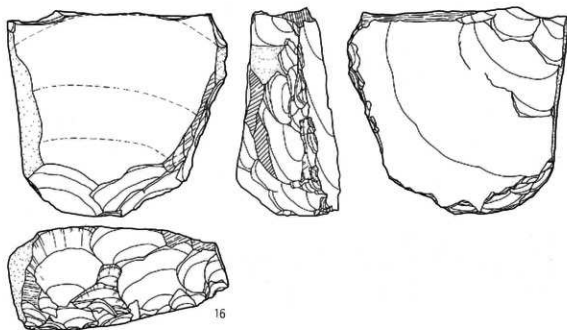
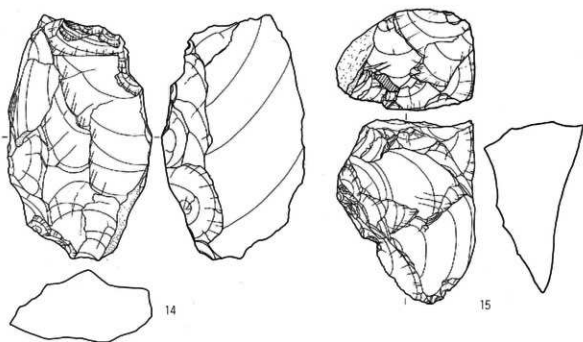
第11图 石器实测图 (1)



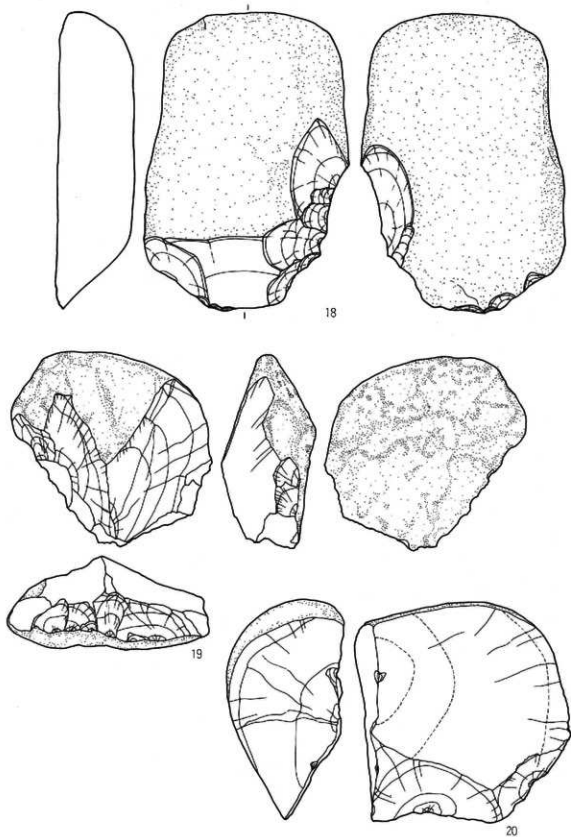
第12図 石器実測図 (2)



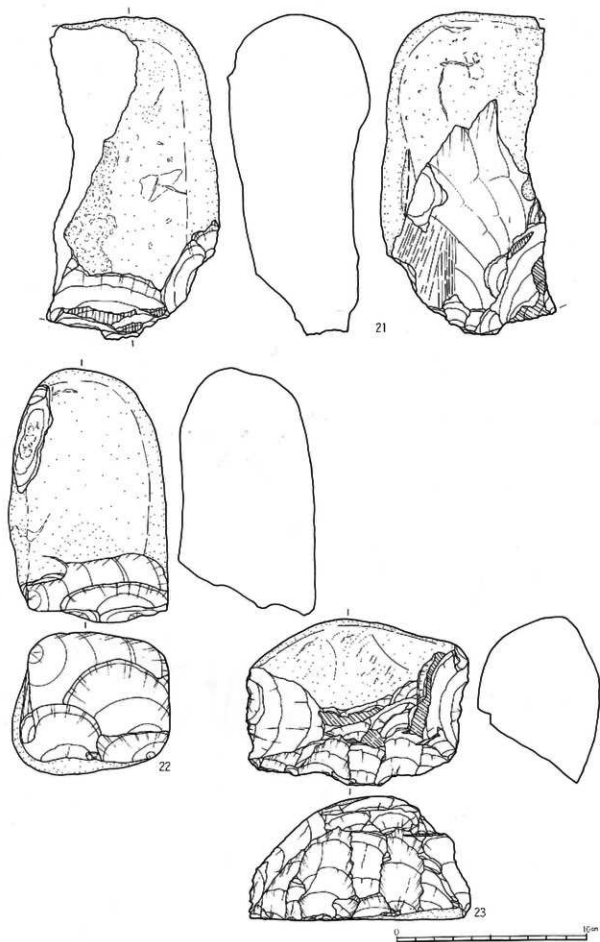
第13圖 磁器実測図 (3)



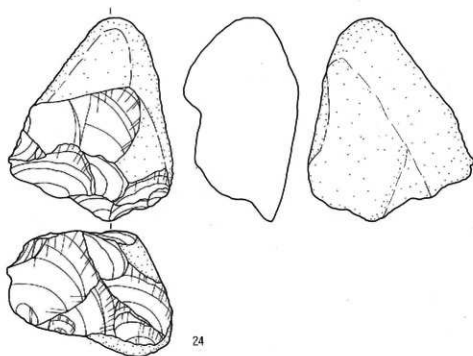
第14図 磁器実測図 (4)



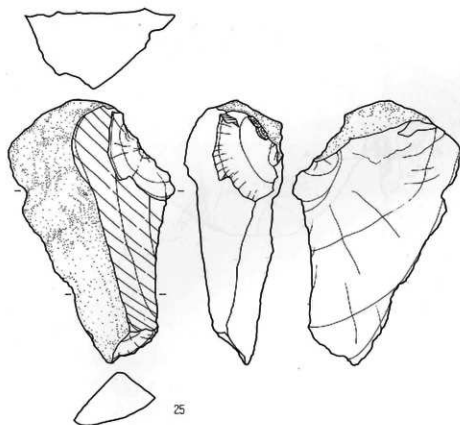
第15圖 礦器実測圖 (5)



第16圖 礫器実測圖 (6)



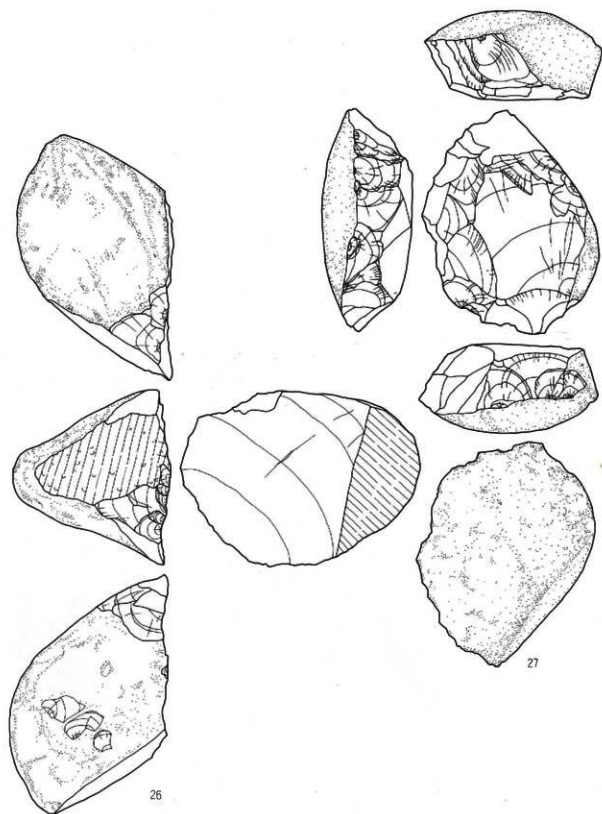
24



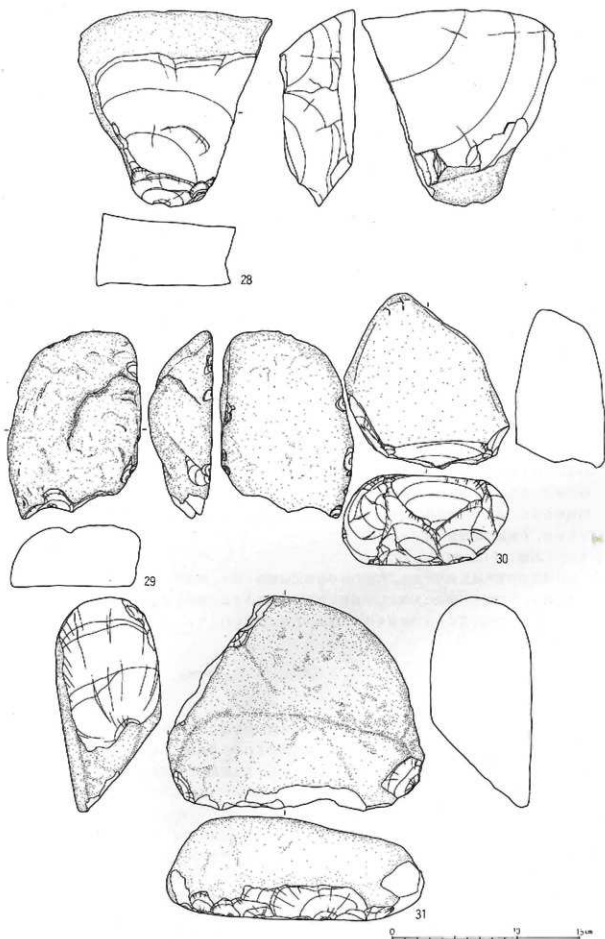
25



第17圖 礫器実測図 (7)



第18图 石器实测图 (8)



第19圖 礮器実測図 (9)

石核・剥片石器類

【石核】(第20図)

1～3は流紋岩製の石器である。1は円盤状であり、断面は台形を成す。片面を中心に各方向から剥ぎ取っている。剥離は、側面の両方向からの横長剥片である。2は片面に多く自然面を残すものの、左上からと下部からの剥離がなされている。明確な加工ではなく、石は火を受けて、赤化している。3は2と同様、片面に自然面、もう片面に主要剥離面を残している。剥ぎ取りは、側面からはほぼ全方向になされているが、あまり剥ぎ取っていない。4は玄武岩で、半球状を呈し、自然面を多く残す。剥ぎ取りは、すべて上からの方向でおこなわれている縦長剥片である。石は火を受けて、赤化している。

【剥片石器類 (1)】(第21図)

1～4はすべて流紋岩である。1は縦長剥片である。表面の上下に2次調整が観察される。下側縁は刃部の調整をおこなっており、裏面にも剥離が見られる。2は一部に自然面を残す。3は縦長剥片で、下部を欠損する。表面には2次加工の剥離が、左側上縁には微細な刃こぼれ状の剥離が観察される。4は片面の一部に自然面を残す縦長剥片である。裏面右側に粗雑に打ち欠いた刃部の調整が観察される。

【剥片石器類 (2)】(第22図)

5～7は流紋岩である。5は片面に自然面を残す、横長剥片である。剥離した面は少ないが、下部縁は刃こぼれ状の剥離が観察される。6は一部に自然面を残す、縦長剥片である。上からの方向から、剥ぎ取りがおこなわれており、左側縁を刃部として剥離調整している。7は片面に一部自然面を残す、断面が凸レンズ状の剥片で下端部に刃こぼれ状の剥離が観察される。

【剥片石器類 (3)】(第23図)

8・9はチャート製で、一部に自然面を残す不整形な小剥片である。同一原石から剥離されたものと考えられる。10はサヌカイト製であると思われる。縦長剥片で、断面形は、三角形を呈す。下端部や右側縁部に使用痕が確認できる。11・12は流紋岩製の剥片である。11は上部から幅の広い短い小剥片を剥ぎ取っている。12は四角形を呈し、裏面はほぼ全体に自然面を残す。断面形は不整な半楕円形である。剥離面は両面併せて2つしかないが、右側縁に使用痕が確認される。

【剥片石器類 (4)】(第24図)

13は珉質泥岩製の横長剥片である。片面のほぼ全体に自然面を残す。断面形は不整で、左側面に明確でない剥離が残り、下部縁や右側縁に刃部として調整したと思われる小さな剥離痕が確認できる。14はホルンフェルス製の縦長剥片で、片面に一部自然面を残す。裏面の右側に粗雑に打ち欠いた刃部の調整が確認できる。刃器製作途中のものか。

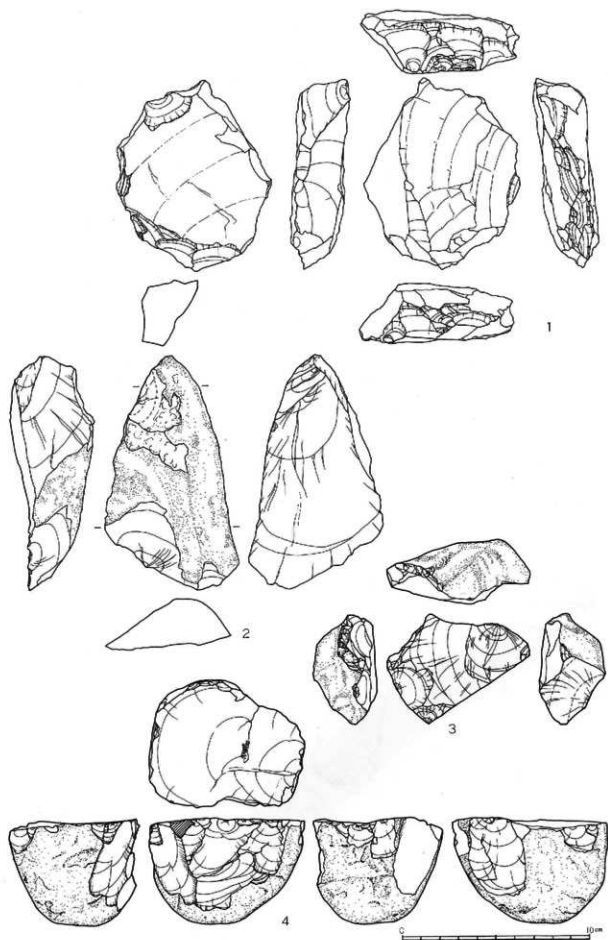
石斧・石鏃

【石斧】(第25図)

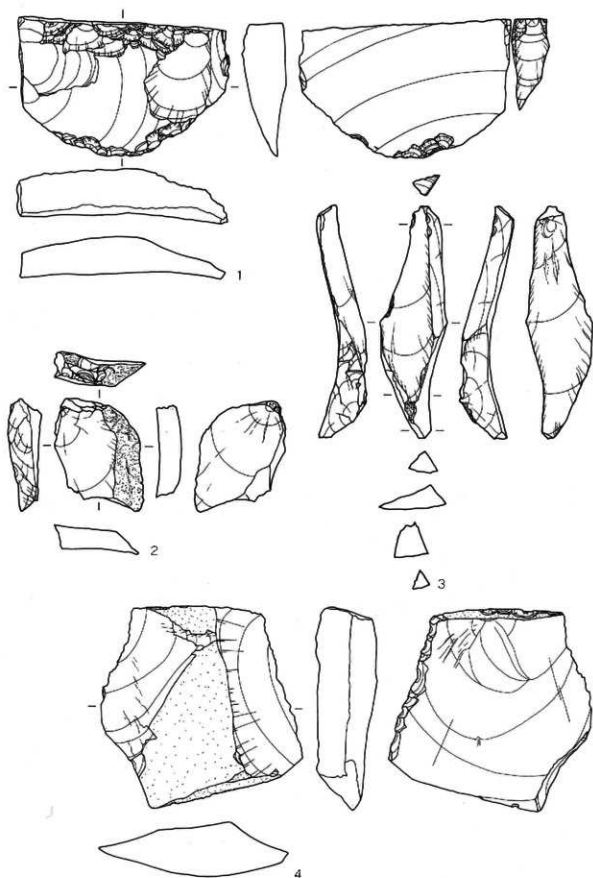
1～3はすべて緑色片岩製の扁平打製石斧である。1は楕円形を呈し、1号集石(第5図)の中から検出された。縁全体に打面調整がみられ、上下端には摩擦痕が確認される。2は楕円形を呈し、1と同様に縁全体に打面調整がおこなわれている。下端部に摩擦痕が確認される。3は縦長で、上部が一部欠損している。片側縁および下端部に粗雑ながら剥離調整が観察できる。

【石鏃】(第26図)

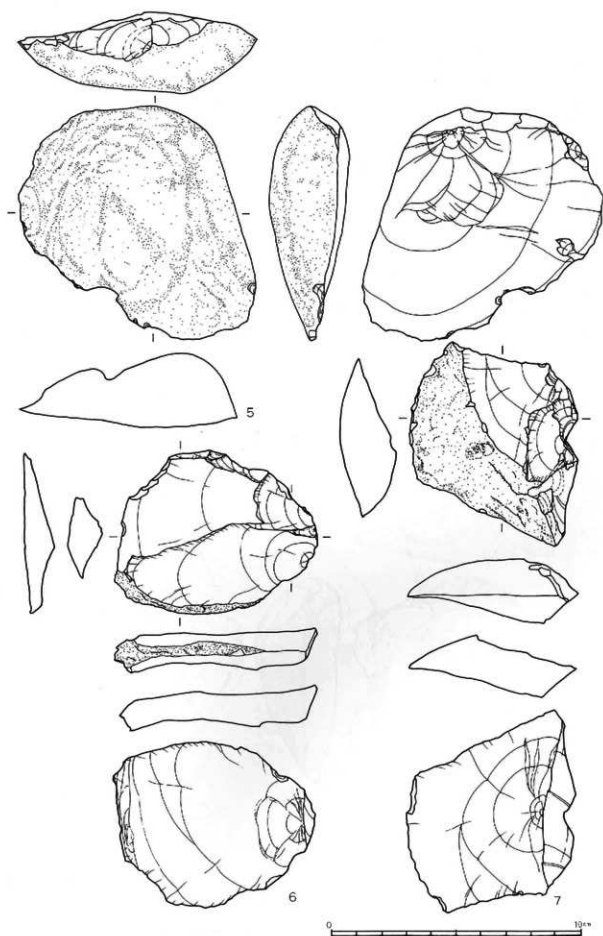
4・7はチャート製、5・6は磐島産の黒曜石製である。4は形状が二等辺三角形で凹部(じ字状の挟り)の石鏃で、挟入部は深い。鋌形鏃で、脚端部が平らである。出土した中では人型の石鏃である。5は形状が正三角形を呈し、挟入部が極端に浅い。6は形状が二等辺三角形で凹部(V字状の挟り)の小型の石鏃で、挟入部はやや深い。脚端部は丸く、先端と片脚端部を欠損。7は形状が二等辺三角形で凹部(V字状の挟り)の石鏃で、挟入部は深く、脚端部は尖っている。先端と片脚端部を欠損。



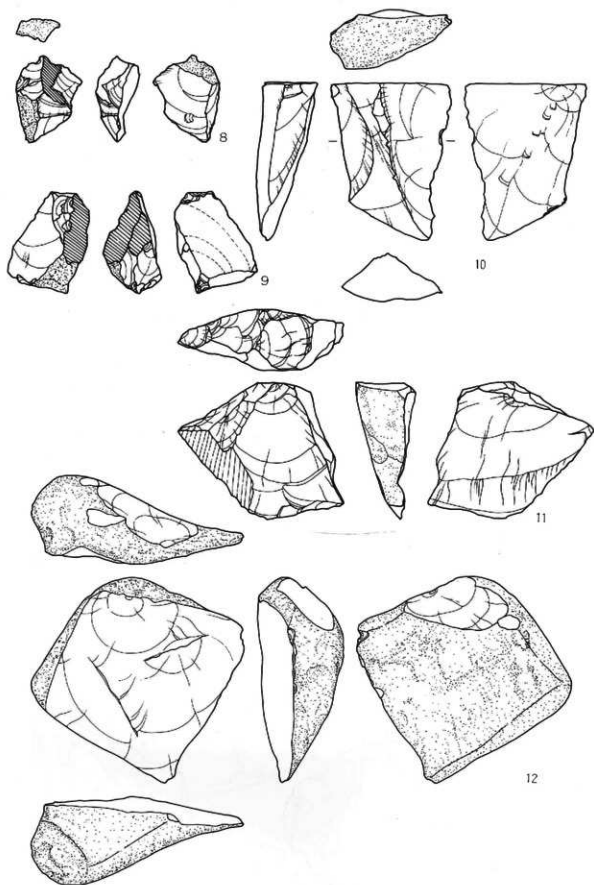
第20圖 石核実測圖



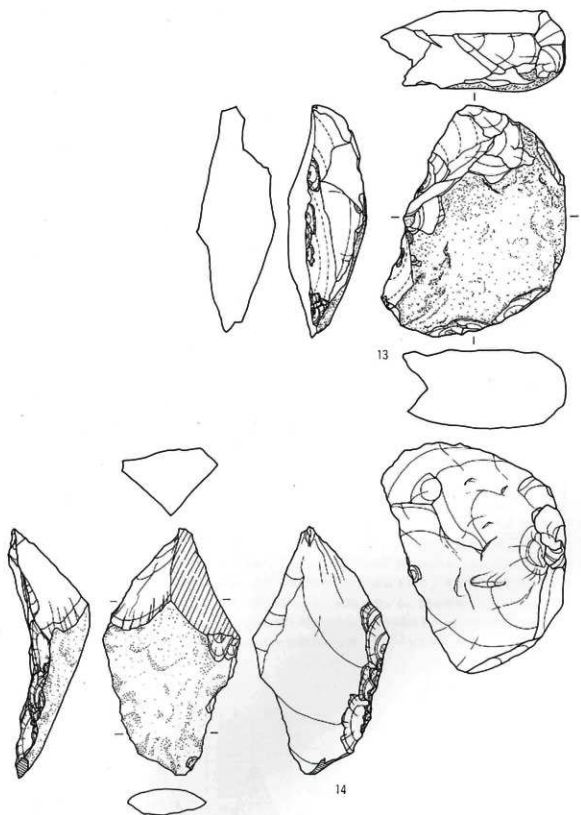
第21圖 剥片石器実測図 (1)



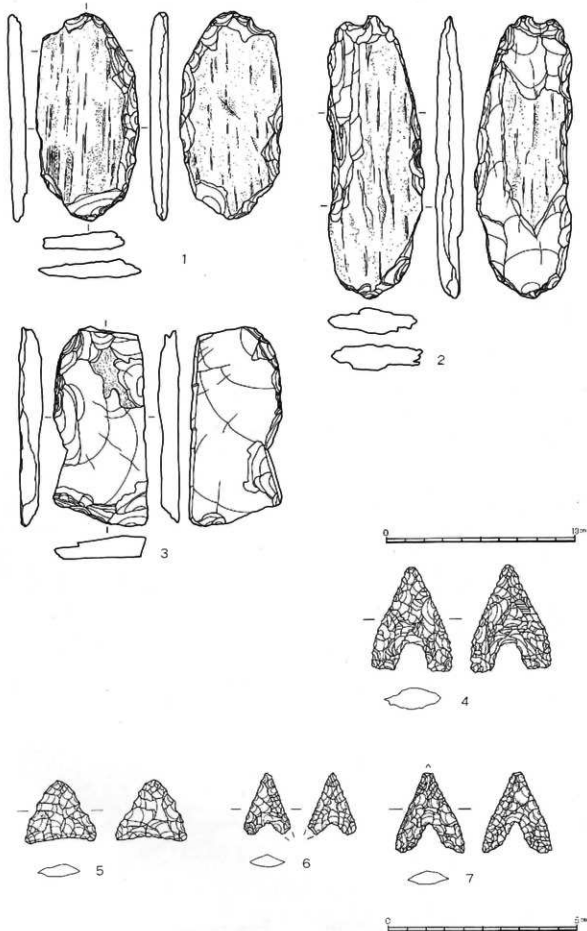
第22图 剥片石器实测图 (2)



第23图 剥片石器实测图 (3)



第24図 剥片石器実測図 (4)



第25圖 石斧・石鏃実測圖

第2表 石核・剥片石器・石斧・石鏃観察表

図版番号	番号	グランド	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	高さcm	備考
第20図	1	A-429	片核	流紋岩	10.4	8.2	2.8	264.5	124.590	
第20図	2	B-1-3	石核	流紋岩	12.5	7.0	2.35	280.2	124.708	成熟痕あり
第20図	3	重トレンチ型	石核	流紋岩	5.8	7.65	3.35	125.2		
第20図	4	F 6-10	石核	玄武岩	5.6	8.15	6.8	392.5	124.410	被熱痕あり
第21図	5	C 6-44	磨石	流紋岩	5.3	8.2	1.3	98.7	126.027	
第21図	6	C 6-72	磨石	流紋岩	3.7	3.5	0.9	18.0	125.534	
第21図	7	M 0-1	剥片	流紋岩	9.3	2.8	0.9	24.4	124.763	下部欠損
第21図	8	K 11-1	剥片	流紋岩	7.8	8.2	2.4	147.3	124.368	
第22図	9	D 1-68	剥片	流紋岩	9.35	9.6	3.25	255.7	125.746	
第22図	10	H 20-13	剥片	流紋岩	7.8	6.4	1.5	77.5	119.756	
第22図	11	D 3-18	剥片	流紋岩	6.9	6.2	2.2	100.7		
第22図	12	I 1-58	剥片	チャート	3.4	2.7	1.7	10.0	124.614	
第22図	13	I 1-27	剥片	チャート	4.1	3.3	2.1	25.7	124.464	
第22図	14	F 9-555	剥片	チャート	6.2	4.0	1.9	59.9	124.675	
第22図	15	E 7-143	剥片	流紋岩	5.55	6.7	2.4	52.2	125.505	
第22図	16	F 9-53	剥片	流紋岩	8.0	8.5	3.6	181.8	125.315	
第24図	17	E 9-53	剥片	玄武岩	7.15	3.2	3.1	206.7	125.216	
第24図	18	C 9-4	剥片	トロンクス	9.9	5.5	2.6	97.4	125.787	
第25図	19	H 9-25	片核	緑色片岩	11.0	5.4	0.9	67.2		
第25図	20	H 9-25	片核	緑色片岩	14.3	4.8	1.25	131.5	126.132	
第25図	21	H 9-7	片核	緑色片岩	10.2	4.8	0.1	83.7	124.462	一部欠損
第25図	22	H 9-11	片核	チャート	2.6	1.6	0.56	2.2	124.937	
第25図	23	H 9-13	片核	緑色片岩	1.6	1.2	0.35	0.6	124.501	
第25図	24	C 8-23	片核	緑色片岩	1.65	1.2	0.4	0.4	126.144	磨面を欠損
第25図	25	片なし	石鏃	チャート	2.1	1.8	0.35	0.9		先端・磨面を欠損

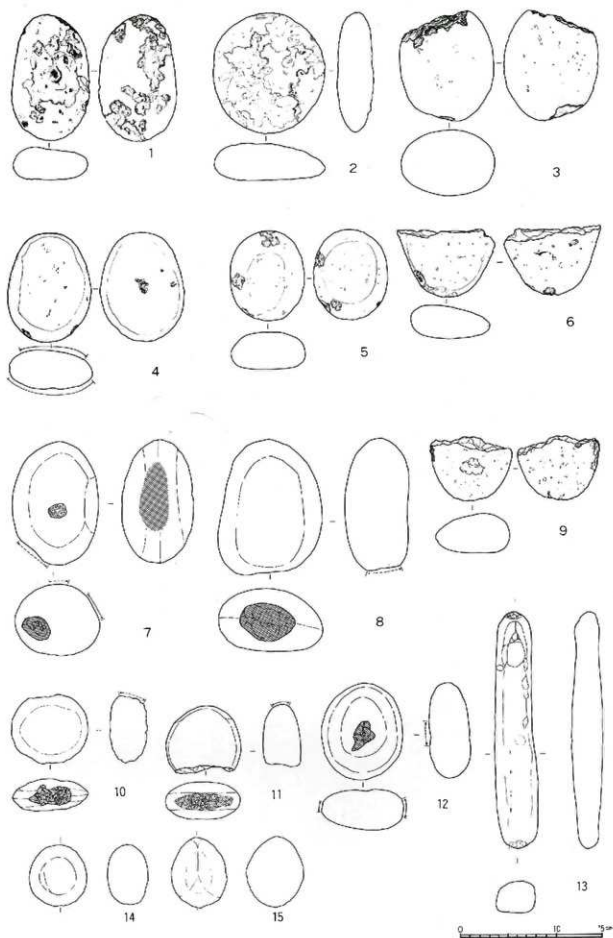
敲石・磨石

【敲石・磨石】(第26図)

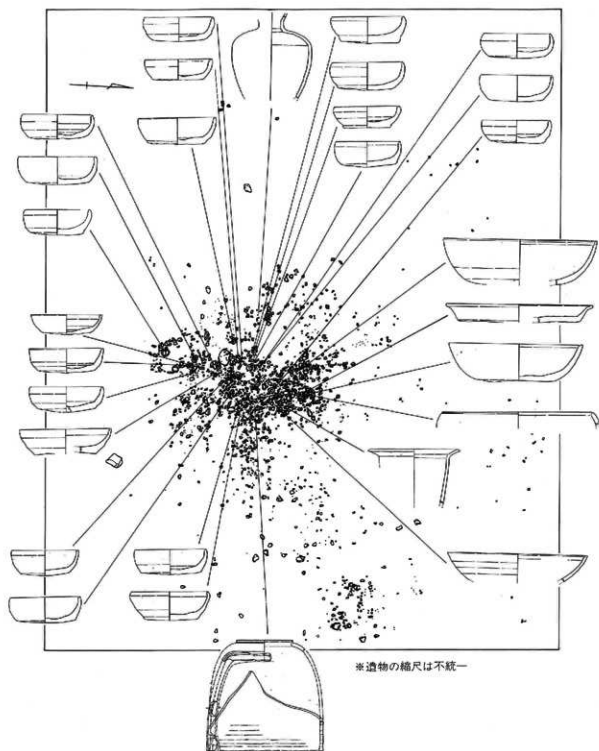
1～14までは、すべて安山岩製である。形状は楕円形及び円形であり、状況により、敲石として使用しているもの、敲石と磨石とを併用して使用しているものとに分類される。1は両面に敲打痕が確認される。2は片面の周囲全体に敲打痕が確認される。3は断面形が楕円形を呈し、両端に敲打痕が明瞭に確認される。4は両面を磨石として使用し、片面の中心と一端を敲石として使用している。5は両面を磨石、縁辺を敲石として使用している。6は楕円形であろうが半分が欠損している。下端部に敲打痕が確認される。7は片面中央と下側面に敲打痕が、一縁辺に磨面が確認できる。8は下端部に敲打痕が確認される。9は半分を欠損しているが、ほぼ中央に敲打痕が確認される。10・11は一端を敲石として使用している。12は両側面にやや明瞭に欠ける使用痕が確認され、1面の中心を敲石としての敲打痕が確認される。13・14は3～4cm程度の球形の礫であり、投弾としたが断定することは困難である。15は結晶片岩製のハンマーストーンと考えられる。両端に使用したと見られる敲打痕が確認される。

第3表 敲石・磨石観察表

図版番号	番号	グランド	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	高さcm	備考
第26図	1	D 9-31	敲石	安山岩	13.3	8.25	3.40	527.1	125.759	磨面なし
第26図	2	C 12-2	敲石	安山岩	12.75	11.9	3.90	171.2	119.382	
第26図	3	D 9-9	敲石	安山岩	11.7	10.6	6.85	1109.1	125.668	下部を欠損?
第26図	4	F 1-3	磨石	安山岩	11.65	8.90	4.15	653.2	124.692	
第26図	5	H 8-12	磨石	安山岩	9.58	7.85	2.90	447.3	125.597	
第26図	6	H 8-38	敲石	安山岩	6.90	9.85	2.90	214.5	125.594	1/2欠損
第26図	7	一形	敲石	安山岩	12.9	9.20	7.80	1300.5		
第26図	8	H 8-53	敲石	安山岩	14.0	10.9	5.50	1250.0	125.443	
第26図	9	D 1-12	敲石	安山岩	6.75	8.80	4.30	329.6		1/2欠損
第26図	10	D 9-25	敲石	安山岩	7.80	8.00	3.30	281.8	125.654	
第26図	11	F 1-43	敲石	安山岩	6.80	8.50	4.00	327.7	125.468	下部を欠損
第26図	12	D 1-56	磨石	安山岩	10.3	8.80	4.20	565.8	126.575	
第26図	13	H 8-43	投弾	安山岩	6.30	6.10	4.50	233.5	125.510	
第26図	14	一形	投弾	安山岩	7.35	5.50	6.05	364.2		
第26図	15	779	敲石	結晶片岩	24.75	4.35	3.25	640.5		



第26圖 蚌石・磨石実測図



第27図 グリッドF-9の土器出土状況

(4) 土器 (第28図～第32図)

土器はE列とF列の6～11のグリッド内とG列とH列の20～22のグリッド内で主に出土した。石器と同様、遺跡の平州部から緩斜面にかけての包含層からの出土であり、量的にはそれほど多くはない。土器の種類は、縄文土器・弥生土器・土師質土器・須恵質土器などである。

これらの中にあって、F-9グリッドより出土の一括土器は重要である。そのほとんどが土師質土器であり、円形状に直径30cm程度の範囲に土器片が集中しており、甕・甗・坏身・竈などさまざまな種類の土器が検出された。縄文土器にあっては、E列の7～10にかけて多く出土しており、それらはすべて無文土器であり、風化によって損傷が激しく復元できなかった。土器片やI緑部から厚手の大型の甕と考えられ、一方平耳遺跡から出土の無文土器・押型文土器などから同時期の縄文時代早期と考えられる。また、遺跡北側の先端部から弥生時代の土器片が数点出土している。

一甕・壺類 (第28図～第29図)

1～4は灰褐色の無文土器の甕で、1・2はI緑部にコブ状の凸起を有する。3・4は1や2に比べて厚く、胴部から口縁にかけてすぼみ、I緑部はわずかに外反している。いずれも遺跡の一番高い平坦面からの出土である。5～8は橙褐色の土器で、5・6・8は口縁端部が跳ね上がり状を呈する甕で、8は胴部外面にハケ目調整がある。7は傘でI緑部がわずかに肥大しており、「く」の字状になっている。9は橙色の平底の底部片である。5・7・9についてはG列の21グリッド、6はG列の19グリッド、8はH列の21グリッドと集中しているわけではないが、ほぼ遺跡北側の先端丘陵部から出土している。

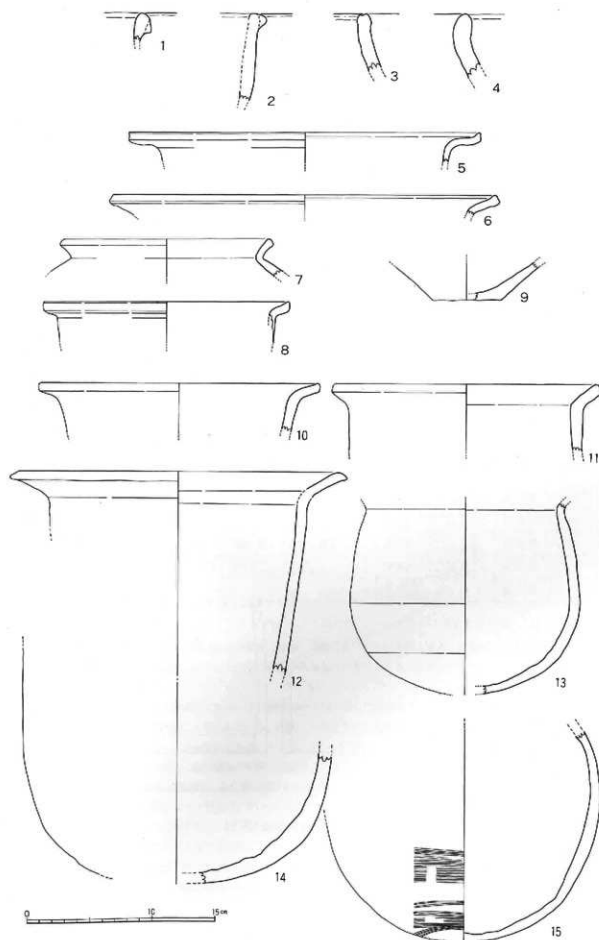
10・11は口縁部がやや外反し、胴部は張らずにそのまま下へすぼまる淡褐色の甕。風化が著しく調整は不明。12は暗茶褐色の甕でI緑部は外反し、外に開く口縁端部が尖り気味である。内面・外面ともに横ナデの調整が残る。復元したI径は22cmであった。

13～15は丸底の甕である。13は赤褐色で胴部もI緑部にかけてすぼまり、口縁部はやや外反するようである。14は茶褐色の大型の甕で、底部は厚めで胴部はやや外傾で直線的に立ち上がる。底部内面は成形の際の凸凹が残る。外面は横ナデがあり、胴部に大きくスガが付着する。15は暗茶褐色で底部が大きく内湾し、内面は削りの後横ナデがあり、外面下部に刷毛目が残る。

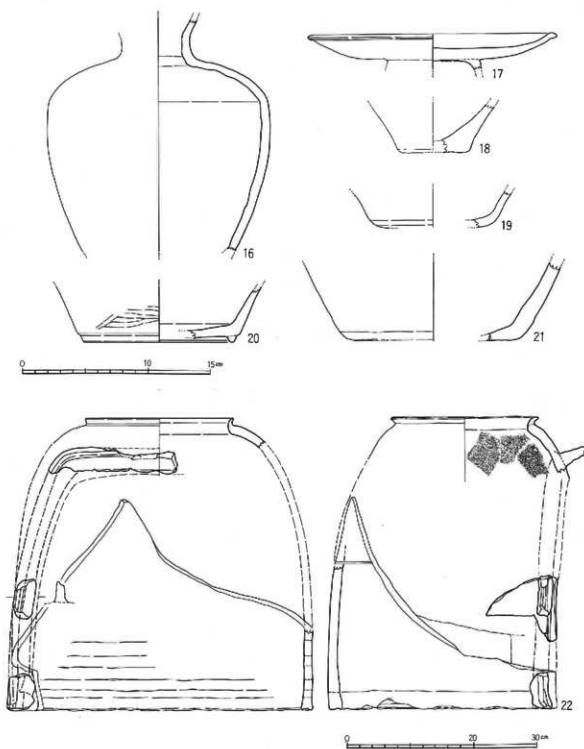
16は橙色の甕で、胴部は外傾に立ち上がり、上部で大きく内湾し、頸部からI緑部はやや外反する。短頸部は径5.5cmで、胴部最大径は17.8cmである。内外面ともに回転横ナデである。

17は褐色の付付き皿で復元した口径19.8cmの大型品で、I緑端部は外側へつままれ丸くなっている。皿部は内外面ともに削りの後、磨きを加えており丁寧な仕上げである。高台部分はナデ仕上げ。18は復元した底部5.8cmの平底の甕で、風化が著しく調整は不明。19は赤褐色の甕か坏と考えられ、底部から胴部へやや外反しながら立ち上がる。内面にナデ、外面底部に削りの後ナデ仕上げがおこなわれている。20は断面逆台形の高台付きの坏で内面に横ナデ、外面にナデの後下部には削りによる調整を加えている。胴部は下から外側へ直線的に立ち上がっている。21は大型の甕と考えられ、平底で底部の中心にいくほど薄くなっており、孔が穿けられていた可能性もある。煮し器として使ったものか。

22は大型で淡褐色の移動式の甕である。約4.2cmの底付きであり、焚き口の周囲全体に付いていたと考えられる。復元した焚き口の大きさは推定最大横幅35.4cm、高さ38.4cmで、I緑部の径は推定23.4cmである。甕全体としては、推定の域を出ないが正面断面はほぼ台形状を呈し、体部から口縁部にかけて内湾しながら、口縁端部は外反している。また、外面の胴部中央に1本の刻線があり、I緑部下の内面には青海波たたき文が残る。



第28圖 土器実測圖 (1)



第29图 土器実測図 (2)

第4表 土器観察表(1)

() の数字は反転復元

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調整	色調	胎土	図版番号	出土位置 山上番号
1	無文土器	甕				口縁部に内帯あり 内外面ともにナデ	褐色	角閃石・石英 灰白色土質	第28図	D-7 15
2	無文土器	甕				口縁部に内帯あり 表面割痕激しく不明	褐色	角閃石・石英	第28図	
3	短文土器	甕				内外面ともに横ナデ	褐色	角閃石・石英 灰白色土質	第28図	C-8 96
4	短文土器	甕				内外面ともに横ナデ	褐色	角閃石・石英 灰白色土質	第28図	C-8 28
5	弥生土器	甕 (28.0)				口縁部(はね型口縁) 内外面ともにナデ、外側にハケ目	黄褐色	角閃石・石英 灰白色土質	第28図	G-21 5-6
6	弥生土器	甕 (30.0)				口縁部(はね型口縁) 内外面ともにナデ、	黄褐色	角閃石・石英 灰白色土質	第28図	G-19一括
7	弥生土器	甕 (16.0)				口縁部から外側にかけてナデ	褐色	角閃石	第28図	
8	弥生土器	甕 (19.4)				口縁部(はね型口縁)でナデあり 胴部ハケ目あり	褐色	角閃石	第28図	H21- 6
9	土師質土器	高台付鉢					褐色 焼成ムラあり		第28図	G21- 7
10	土師質土器	甕 (22.0)				内外面とも破損激しく調整不明	淡褐色	角閃石・石英 赤色土質	第28図	E-9 14
11	土師質土器	甕 (21.0)				内外面とも破損激しく調整不明	淡褐色	角閃石・赤色土質 難い砂を含む	第28図	E-9 9
12	土師質土器	甕 (27.0)				口縁部外側から内面が横ナデ 胴部が縦ナデ	褐色		第28図	F-9 686 682 526
13	土師質土器	甕				製法不明 内面は横ナデ/外面は削り後ナデ 製法不明 内面に黒色の付着物あり	内-褐色 外-赤褐色	角閃石・石英 赤色土質	第28図	G-20一括
14	土師質土器	甕				内面は削り後ナデ 外面は丸底周囲にハケ目あり	赤褐色	角閃石・石英 灰白色土質	第28図	F-9 283 682 683
15	土師質土器	甕				内面は削り後ナデ 外面は丸底周囲にハケ目あり	褐色	角閃石・石英 赤色土質	第28図	試掘時採集
16	土師質土器	横骨器				内面・外面ともに横ナデ	褐色 焼成ムラあり	石英 白色土質	第29図	F-9 580
17	土師質土器		(19.8)			内面は丁寧な磨き、外面にも磨き 高台部分は横ナデ	内-褐色 外-赤褐色	角閃石 赤色土質	第29図	F-9
18	土師質土器	壺			(5.8)	風化激しく調整不明	黄褐色	角閃石・石英 灰白色土質	第29図	F-9 56
19	土師質土器	壺			(9.0)	内面にナデ、外面に削り後ナデ	内-赤褐色 外-赤褐色	角閃石・石英 灰白色土質	第29図	E-7 56 55
20	土師質土器	高台付鉢			(12.4)	内面に横ナデ外面に磨き	赤褐色	角閃石・石英 灰白色土質	第29図	F-9 56
21	土師質土器	甕			(15.0)	内面・外面ともにナデ 底部へタ削り調整後ナデ	淡褐色	角閃石・石英 灰白色土質	第29図	F-9 1 31b 164
22	土師質土器	甕					内-褐色 外-赤褐色		第29図	F-9

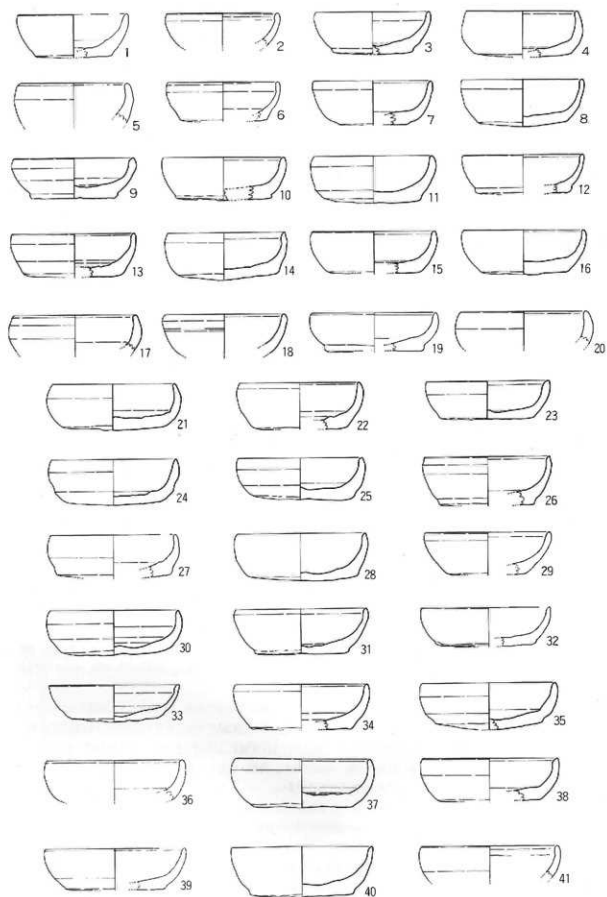
一土師器・坑一 (第30～31図)

土師器の坑身・坑については、完全品および復元(矢野)可能であったものを数えると、65点になった。その他、細かな土器片など底部を基本にした場合、さらにその倍の点数があるものと考えられる。また、坑身に限っては、そのすべてがF-9 グリッドからの出土である。

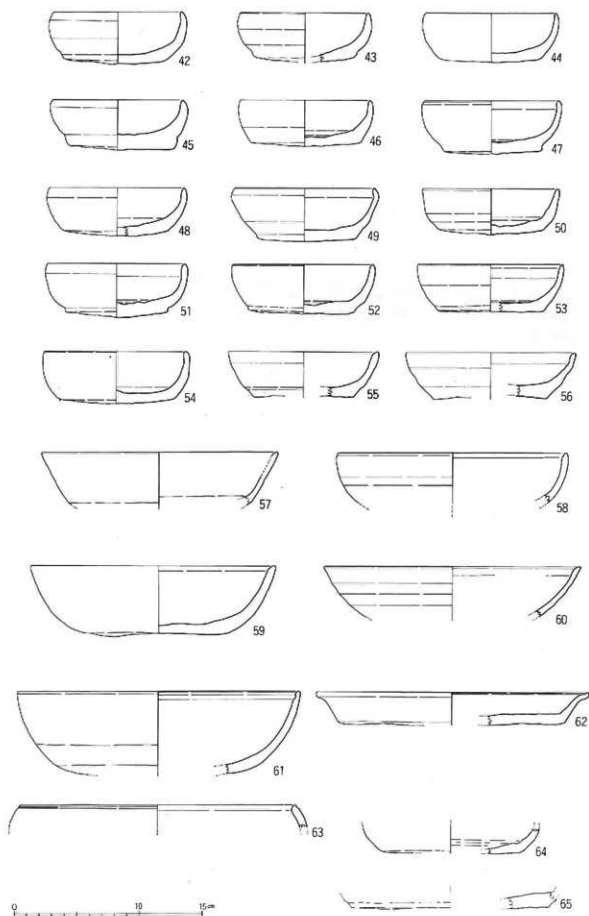
1～56まで、そのほとんどで共通していることは底部はへう切り離して厚手であり、体部は外方に内湾しながら立ち上がり、口縁部は丸く膨らんで内側に入り込んでいる。内面・外面ともに横ナデで、クロコ成泥時の内面底部の指押さえや外面の凹凸がはっきりと残っているものもある。4・10・31・44の内面には割痕と思われる付着物が残っていた。9・10・23・42・45・52などには底部に板目状痕が明瞭に確認できた。完全・復元した坑身の平均口径は約10.2cm、器高約3.6cm、底径約7.7cmである。焼成は普通で、作日も粗雑なものが多い。

57～61は渾で、内外面は横ナデ仕上げ、59・61は底部に削り調整もおこなわれている。58は口縁部の内側に稜をもち、61は口縁部内面に1本の沈線をもつ。57・60は薄手で、57の立ち上がりは漸進的で、60はクロコ仕上げの際の凹凸がある。59は厚手で内湾きみに大きく立ち上がる。

62は皿で、底部は深く内面は丁寧なナデ、体部立ち上がりは短く面線的で口縁部は先端で外反している。63は口縁部のみであるが内側にすばり、口縁先端部の外面には1本の沈線が見られる。64・65は坑の底部で、へう切り離し後ナデ仕上げをおこなっている。



第30图 土器实测图 (3)



第31圖 土器実測圖 (4)

第5表 土器観察表(2)

()の数字は反転復元での計測

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	通 差	色調	胎土	図版番号	出土位置 出土番号
1	土師質土器	坏身	(8.8)	(3.4)	(6.2)	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	赤褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 659・ 661
2	土師質土器	坏身	(8.8)			内外面ともにナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 680
3	土師質土器	坏身	(9.0)	(3.4)	(5.8)	内面指押さへ/へう切り離し	褐色	角閃石・赤色粒を含む	第30図	F-9 414 細線描いた
4	土師質土器	坏身	(9.0)	(3.6)	(7.4)	内外面ともにナデ/底部へう切り 離し後ナデか。黒色の付着物あり	茶褐色	角閃石・赤色粒を含む	第30図	F-9 514・ 410・417
5	土師質土器	坏身	(8.6)			内外面ともにナデ	褐色	角閃石・赤色粒を含む	第30図	F-9 544
6	土師質土器	坏身	(8.8)	(3.1)	(7.0)	内面指押さへ/内外面ともにナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 684
7	土師質土器	坏身	(8.4)	(3.4)	(5.6)	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	赤褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 385
8	土師質土器	坏身	9.6	3.8	6.8	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 461
9	土師質土器	坏身	(9.6)	(3.2)	(6.8)	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	茶褐色	角閃石・赤色粒を含む	第30図	F-9 71
10	土師質土器	坏身	(9.6)	(3.4)	(7.6)	内外面ともにナデ/底部へう切り 離し後ナデか。スリ目	暗茶褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 474
11	土師質土器	坏身	9.4	3.7	7.0	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 394
12	土師質土器	坏身	(9.2)	(3.2)	(7.2)	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・赤色粒を含む	第30図	F-9 408
13	土師質土器	坏身	(9.3)	(3.4)	(8.0)	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	暗褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 659
14	土師質土器	坏身	9.3	3.7	8.0	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	赤褐色	角閃石・赤色粒を含む	第30図	F-9 658
15	土師質土器	坏身	(9.8)	(3.4)	(7.2)	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	赤褐色	角閃石・赤色粒を含む	第30図	F-9 683
16	土師質土器	坏身	(9.4)	(3.5)	(6.8)	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・赤色粒を含む	第30図	F-9 690
17	土師質土器	坏身	(9.8)			内外面ともにナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 410
18	土師質土器	坏身	(9.6)			内外面ともにナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 517
19	土師質土器	坏身	(9.8)	(3.1)	(7.6)	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	赤褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 195
20	土師質土器	坏身	(10.0)			内外面ともにナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 546
21	土師質土器	坏身	9.7	3.6	8.2	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	暗褐色	角閃石	第30図	F-9 637
22	土師質土器	坏身	(9.4)	(3.6)	(7.9)	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・赤色粒を含む	第30図	F-9 41
23	土師質土器	坏身	(9.6)	(3.0)	(7.4)	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	赤褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 514
24	土師質土器	坏身	(10.0)	3.6	7.5	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 515
25	土師質土器	坏身	9.8	3.3	7.6	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	赤褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 660
26	土師質土器	坏身	(10.0)	(3.8)	(7.4)	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 410
27	土師質土器	坏身	(9.8)		(9.0)	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	暗茶褐色	角閃石	第30図	F-9 680
28	土師質土器	坏身	10.2	3.8	7.3	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 655
29	土師質土器	坏身	(10.2)		(6.2)	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	赤褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 688
30	土師質土器	坏身	10.3	3.6	8.6	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 412
31	土師質土器	坏身	(10.4)	(3.5)	(7.4)	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 616
32	土師質土器	坏身	(10.2)	(3.1)	(7.6)	表面の風化ひどく判断不明	明褐色	角閃石・白色 赤色粒を含む	第30図	F-9 70
33	土師質土器	坏身	(10.4)	(3.8)	(6.8)	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 415
34	土師質土器	坏身	(10.6)	(3.6)	(8.6)	内面指押さへ/内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	赤褐色	角閃石 赤色粒を含む	第30図	F-9 460
35	土師質土器	坏身	(10.6)	(3.8)	(8.5)	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石	第30図	F-9 410
36	土師質土器	坏身	(10.8)			内外面ともにナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒を含む	第30図	F-9 657

第6表 土器観察表 (3)

() の数字は反転複元での計測

番号	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整	色調	胎土	図版番号	出土位置 出土番号
37	土師質土器	坏身	(10.7)	(4.0)	(8.2)	内面指押さへ／内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	赤褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第30図	F-9 664・ 669
38	土師質土器	坏身	(10.7)	(3.5)	(8.2)	内面指押さへ／内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	赤褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第30図	F-9 400・ 410
39	土師質土器	坏身	(11.2)	(3.3)	(8.0)	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第30図	F-9 684
40	土師質土器	坏身	(11.2)	(4.0)	(8.0)	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第30図	F-9 659
41	土師質土器	坏身	(10.8)			内外面ともにナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第30図	F-9 657
42	土師質土器	坏身	(10.2)	(4.1)	(8.0)	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	赤褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第31図	F-9 60
43	土師質土器	坏身	(10.4)	(3.8)	(7.8)	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第31図	F-9 410
44	土師質土器	坏身	10.4	3.9	8.0	内外面ともにナデ底部へう切り 離し後ナデ。内に黒色に付着物あり	黄褐色	角閃石・石英	第31図	F-9 190
45	土師質土器	坏身	10.4	4.0	8.2	内面指押さへ／内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	暗褐色	角閃石・石英	第31図	F-9 71
46	土師質土器	坏身	10.2	3.6	8.6	内面指押さへ／内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	赤褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第31図	F-9 527
47	土師質土器	坏身	(10.7)	(4.2)	(7.6)	内面指押さへ／内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	暗褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第31図	F-9 71 637
48	土師質土器	坏身	10.6	(3.9)	8.3	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石 赤色粒子含む	第31図	F-9 517
49	土師質土器	坏身	11.2	4.2	8.0	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	暗褐色	角閃石 赤色粒子含む	第31図	F-9 684
50	土師質土器	坏身	(10.8)	(3.6)	(8.2)	内面指押さへ／内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	茶褐色	角閃石 赤色粒子含む	第31図	F-9 415
51	土師質土器	坏身	(10.8)	(4.3)	8.0	内面指押さへ／内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	茶褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第31図	F-9 655・ 660
52	土師質土器	坏身	(11.0)	(3.9)	(8.4)	内面指押さへ／内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	茶褐色	角閃石 赤色粒子含む	第31図	F-9 514・ 406
53	土師質土器	坏身	(11.6)	(3.7)	(8.4)	内面指押さへ／内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	内一帯褐色 外一帯褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第31図	F-9 515・ 410・411
54	土師質土器	坏身	(11.4)	(4.1)	(8.5)	内面指押さへ／内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	茶褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第31図	F-9 406・ 415
55	土師質土器	坏身	12.0	3.6	8.0	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石 赤色粒子含む	第31図	F-9 657
56	土師質土器	坏身	(13.3)	(3.7)	(9.0)	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石	第31図	F-9 410
57	土師質土器	碗	(18.6)		(14.5)	内外面ともにナデ	褐色	赤色粒子含む	第31図	試験時集
58	土師質土器	浅鉢	(18.4)			内外面ともにナデ	褐色	角閃石 赤色粒子含む	第31図	F-9 350 356 607
59	土師質土器	碗	(24.0)	(5.3)	(11.0)	内外面ともにナデ 底部へう切り離し後削り調整	赤褐色	角閃石 赤色粒子含む	第31図	F-9 622
60	土師質土器	碗	(20.2)			内外面ともにナデ	内一帯褐色 外一帯褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第31図	F-9 683
61	土師質土器	碗	(22.4)		(16.0)	内外面ともにナデ 底面周辺部より削り調整後ナデ	内一帯褐色 外一帯褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第31図	F-9 597・ a39・550
62	土師質土器	皿	(21.6)	(2.6)	(17.8)	内面底部より削り調整後ナデ 底部へう切り離し後ナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第31図	
63	土師質土器	鉢	(22.2)			内外面ともにナデ	褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第31図	F-9 662 665
64	土師質土器	坏身			(11.2)	内面指押さへ／内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	外一帯褐色 内一帯褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第31図	F-9 689
65	土師質土器	器底部			(14.8)	内面指押さへ／内外面ともにナデ 底部へう切り離し後ナデ	内一帯褐色 外一帯褐色	角閃石・石英 赤色粒子含む	第31図	F-9 490 500 662

(5) 須恵器 (第32図)

須恵器の出土は主に試掘時の束縛トレンチの中央部分及びその周辺からで、ほかの地点からはごくわずかにある。完形品や復元できたものはなく、口縁部周辺や底部などごく一部であるが、若干の観察の状況を説明する。

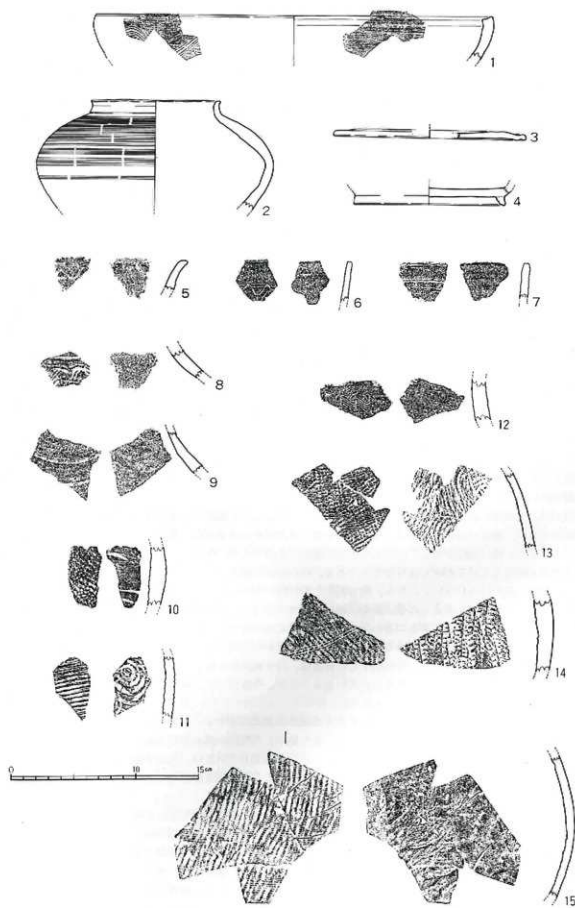
1は口縁部が面取りにより平坦に仕上げられた鉢で、口縁部とその周辺は横ナデし、外面には4本の刻目波文が観察される。2は口径約10.6cm、最大胴径約19.9cmの壺で、口縁部は垂直に立ち上がり、端部はやや外反する。頸部から胴部にかけてカキ目模様が観察される。3は口径15.2cmの坏蓋で、口縁部はわずかながら屈曲し、端部も丸く、口縁部から底部までほとんど平坦である。内面は一定方向のナデ、外面は回転ナデ。4は高台の付いた甕もしくは坏の底部で径12.2cmである。高台はやや外に張り出し、断面は不整な台形を呈し、底部と胴部の境に付いている。内面は不規則なナデ、外面は回転へう切りの後、ナデが残る。

5は甕の口縁部と思われ、砂泥じりで焼成はあまりよくない。交差する2本の刻目波文が観察される。6・7も同様な小型の壺の口縁部で、ともに横1本の刻目文と波文があるが、厚さ文様の位置などから別の個体であると考えられる。8～10は甕の頸部付近の破片と考えられ、横1本の刻目文の下に櫛で掻いたような波文が確認できる。9は櫛の刻目波文が5本確認できる。10は横並びに2列、櫛で突いた孔が観察される。11～15は休部から胴部にかけてのたたき目模様の観察(拓本)である。11～13・15は内面に青海波たたき、14には格子目状のたたきが観察される。外面には格子目状および平行たたきが観察される。

第7表 須恵器観察表

()の数字は反転復元での計測

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	測 量	色 調	胎 土	図版番号	出土位置 出土番号
1	須恵器	鉢	(30.4)			横ナデ 4本の刻目波線	暗灰色	白色粒子・ 赤色粒子を含む	第32図	試掘時出土
2	須恵器	壺	(10.6)	頸部径 (19.9)		内面・外面ともにナデ 頸部から胴部にカキ目模様あり	灰色	白色粒子を含む	第32図	試掘時出土
3	須恵器	蓋	(15.2)			内面は一定方向のナデ 外面は回転ナデ	灰色	白色粒子を含む	第32図	D-6 120
4	須恵器	甕			(12.2)	内面は不規則なナデ 外面は回転へう切りの後ナデ	灰色	白色粒子を含む	第32図	D-9 1
5	須恵器	甕				交差した2本の波線あり	暗赤褐色	砂粒 白色粒子を含む	第32図	D-9 29
6	須恵器	甕				内面・外面ともにナデ 1本の波線と波線あり	暗赤褐色	砂粒 白色粒子を含む	第32図	D-10-一括
7	須恵器	甕				内面・外面ともにナデ 1本の波線と波線あり	暗赤褐色	砂粒 白色粒子を含む	第32図	D-10 41
8	須恵器	壺				内面・外面ともにナデ 1本の波線と波線あり	暗赤褐色	砂粒 白色粒子を含む	第32図	F-9 44
9	須恵器	不明				内面・外面ともにナデ 頸部?處で押した穴あり	暗灰色	白色粒子を含む	第32図	一括
10	須恵器	不明				外面に格子状たたきあり 内面に青海波たたき	淡灰色	石灰を含む	第32図	D-7 49
11	須恵器	不明				内面に青海波たたき 外面に平行たたき	灰色	白色粒子を含む	第32図	一括
12	須恵器	壺				頸部25本の櫛目による波状紋あり	暗灰色	白色粒子を含む	第32図	試掘時採取
13	須恵器	甕				内面に青海波たたき 外面に格子状たたき後ナデ	灰色	白色粒子を含む	第32図	一括
14	須恵器	甕				内面に青海波たたき 外面に平行たたき	灰色	白色粒子を含む	第32図	一括
15	須恵器	壺				内面に青海波たたき 外面に平行たたき	灰色	白色粒子を含む	第32図	D-10 65



第32圖 須恵器実測圖

第3章 小結

今回の調査では、集石7基、土坑7基が確認された。集石については、東西に長く伸びる調査区の東寄りに点在しており、4号集石のみが西側斜面から検出された。遺跡全体にわたり礫が多く、また焼け礫は確認できるのだが、集石状を明瞭に形成していることが少なかったので判断のつきにくい箇所もあり、明らかにその周囲の礫が被熱で赤色化しているか、あるいは被熱によって破砕している礫が集中している遺構を集石とした。不整形な形状を成すものが多く、遺構と考えられる範囲にも掘り込みなどは確認されなかった。特徴としては、拳大からやや小さめの礫の集合体である。1号集石、5号集石、6号集石については、範囲が広いものの焼け礫の碎片が多く、何度か2次的に利用した形跡を示唆するものであろう。集石の床上および周辺からは縄文時代早期のものと思われる無文土器が出土していることから、同時期と考えられる。

土坑については、1号土坑で縄文時代早期の無文土器片が出土した以外は、2号～7号土坑では遺物が検出されることはなかった。形態も様々で、その用途・時期等も推測の域を出ないが、以下に分類してみた。

1 a 類…縦1m×横50cm未満の小型の楕円形を呈し、深さも20cm未満である。(1号・4号土坑)

1 b 類…縦1m×横50cm以上の楕円形を呈し、深さも50cm以上である。(7号土坑)

2 類…径70cm前後の円形を呈し、断面は逆梯形である。(3号・5号土坑)

3 類…やや大型で不整形を呈し、深さも20cm未満と浅い。(2号・6号土坑)

1 a 類の1号土坑においては、赤く焼けた壁面が内側に湾曲しており、用途は不明だが熱を効率よく燃焼させる構造をもつ。1 b 類では壁面全体が暗赤色で堅く焼けており、多量の炭化物を含んでいる。特に床面に炭化物が敷き詰められるような状態であった。壁面が赤く焼けているものの、床面にはそれほど被熱が認められない傾向は製炭土坑の状態に類似している。2類では3号土坑では西側に、5号土坑では北側に段差を持つ。焼土などが認められるが用途は不明。3類の2号土坑では北側に焼土が確認され、6号土坑では床面南側から木炭が数点検出されている。それぞれの土坑について、土坑内Iの報告書で若干触れているが、土器・土器片としては土坑の状態からすると考えにくい。また土壘・製炭土坑などの可能性が考えられるにしても、土坑内部より遺物が検出されていなかったに言及は避けた。時期については、1 b 類の7号土坑について、スポーツ公園遺跡群の九池遺跡の焼土坑とともに地盤気分析を行った。分析報告は、島根大学の時枝氏により九池遺跡の報告書に掲載しているので参照願いたい。

石器では、人為的に加工した可能性があるものについて礫器として観察・実測を行い、31点と器種の中では一番多く検出された。礫器の石材組成では、流紋岩製6点、ホルンフェルス6点、玄武岩6点、砂岩3点、凝灰岩・安山岩ともに2点と他は風化が著しく石材不明とした礫器が6点である。多種の石材を利用しており、特定の石材を選んで加工・使用しているわけではなさそうである。なかには自然面に被熱の痕跡が見られるものがあり、逆に加工面には被熱の跡が見られないことから、熱で割れた焼け礫の中から都合のよい形・大きさのものを選出し、加工または利用した可能性も考えられる。また、礫器の重さの平均は756.4gであり、剥片石器類と比較してみると遥かに重い。さらには被熱跡があるにもかかわらず、集石遺構の検出されたグリッドからは礫器は見つかっておらず、遺跡南側の丘陵の一番高い区域から検出されていることが特徴的である。礫器については、人野川を挟んだ対岸の丹生遺跡における論争がある。今回出土した礫器は、丹生遺跡から出土したものとよく類似している。現在では縄文時代早期～早期とある説で落ち着いているようだが、今後は丹生台地だけでなく、対岸の鯉崎台地を含めた人野川中・下流域の礫器研究が必要であろう。

石核および剥片類は、67%が流紋岩製であり、そのほかに玄武岩・チャート・サヌカイト・ホルンフェルスなど様々な石材が含まれる。山上点数も非常に少なく、また使用した痕跡が認められるが、明瞭に石器として加工しているものも少ない。石斧・石鏃に関しても同様に、7点しか出土していない。石鏃は単形鏃又はそれに類似するものでその形態から縄文時代早期～前期初頭の範疇で考えられる。最石および磨石はすべて安山岩製で15点出土しており、重さも300g～500g程度で利用しやすい石を選んでいる。

土器については、遺跡南側の丘陵平坦面から東側斜面にかけて、縄文時代早期のものと思われる無文土器が出土しており、遺跡北側の丘陵部からは、縄文時代中期から後期のものと思われる土器が出土している。しかし、遺構は検出されず、縄文・弥生時代の土器も石器と同様に出土数はあまり多くなく、完形品もない。

一方、注目されることはF-9グリッドから一括出土した土師質土器である。径2.5m程度の円形の範囲に約10cmの厚さで土器片が密集していた。釜・壺・杯・洋・移動式竈など約70点の土師質土器が復元・実測できたが、復元できなかった土器片を含めて考えると約100～150点の土器が密集していたと考えられる。釜や杯の中心は煤

(もしくは油煙)が付着しているものがあり、使用した状況が伺える。また、壺後形壺?(第28図12)や口縁部内側に横方向の沈線1条を施す(第31図62)壺などから奈良時代(8世紀後半)と考えられる。土器の集中していた周囲および下部からは焼土や炭化物など遺構を確認することは出来なかった。また、第27図のF-9グリッドの出土状況を見ても、出土位置と器種の関係を知ることは難しい。土器の廃棄後の移動やその後の擾乱がないと考えたとき、土器密集地中央から北東側に大型の甕・鉢・鉢・甕が、それ以外の場所に1径10cm程の環が配置されていることを推察できる。

出土状況から「括廃棄」ということも考えられるが、日常的な土器を大量に使用し廃棄するという状況ではないように思われる。そこで考えられる特徴的なこととして、甕の出上りがあげられる。出土した甕は焚き口の周縁に底を張り付けた形のもので、釜1は口縁部が外反し先端部はとがっている。また、体部の中央には一本の沈線が認められ、風化が激しいものの内面の上部には須恵器工人が造ったことを推測させる青海波タキキ文が観察される。また、甕の破片と思われるものの中に孔が設けられているものがあり、体部側面に付く把持孔が体部背面に付く煙孔と思われる。甕は移動式の持ち運び可能な甕(以後、甕形土器と呼ぶ)であり、その出現は竪穴住居から掘立柱建物へと移り、普及する中で一様-甕の原則が崩れ始める古墳時代後期からとされている。出上った付け底のある甕形土器は、分布範囲も広く西日本一帯で確認されており、地域色も多様である。大分県においては、出土例は少なく、下部遺跡・大坪遺跡などで確認されている。

また、一般に集落やあるいはその周辺から確認されることの多い甕形土器であるが、本遺跡からは住居跡等の遺構は見つかっておらず、さらには出土した甕形土器も、下部に被熱による赤色化が認められるものの、頻繁に用いられた状態ではなかったことがうかがえる。とするならば、日常の炊きん具として使用されていたということは考えられず、それ以外の使用目的があったことが推測される。

まず第1には宗教的祭祀に関することが考えられるであろう。一般に祭祀は、広場や臨時的仮設建物といった、日常生活の場から離れたところで行われることも多い。そのような場でこそ持ち運び自由な甕の機能が発揮できる。甕形土器を用いた祭祀は神祭から儒教・仏教および地鎮・土建などの雑多な祭りにまで及んでいてと考えられ、本遺跡の甕形土器も祭具として使用された可能性が高い。また奈良・平安時代においては、甕形土器が多様な祭祀に共通して用いられた背景として、別火の信仰に奉仕する祭具として普及・発達してきたからであるとされている。例えば神祭においては神饌の調理に忌火が用いられる。その忌火がその火によって調理される食物に神聖さを付与すると同時にその火を使用する甕自体も神聖さを持ち合わせることになる。原太神宮延暦儀式帳には、土師器作物忌の製作した甕形土器を「忌甕」と記している。甕形土器が祭祀の道具として使用されている状況があり、本遺跡での大量の土師器・甕とともに甕形土器が1点のみ出土しているということも注目されることである。共存遺物との関連も視野に入れていかねばならないが、スポーツ公園遺跡群の1枚ノ内I・II遺跡においても時代差があるものの大量の土師器が出土しており、おそらく一回限りの飲食を伴う祭祀が行われたであろう可能性を示唆している。(なお、土師ノ内I遺跡については中野寿義氏の稿を、参照願いたい)

最後に、本遺跡は遺構・遺物ともにあまり検出されなかったが、遺跡の性格としては、長期間の使用はされず、単発的な使用、社会生活の2次的な環境の場であったことが予想される。また、曝露や土師質土器の一括出土など注目される部分も多いが、今後の資料の分析・研究の進展により、再度検討されよう。

参考文献

- 稲田幸司 『忌の甕と土権』『考古学研究』 第25巻 第1号 考古学研究会 1978年
 佐藤義敏他 『かわい池遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
 大分県教育委員会 1998年
 『下郡遺跡群』(2) 大分県教育委員会 1991年
 宮内克己他 『弥勒寺』宇佐弥勒寺旧境内発掘調査報告書 大分県宇佐佐佐史記の丘歴史民俗資料館 1989年
 綿貫俊一 『古墳山』大分県教育委員会 1997年
 大分県 『大分県埋蔵文化財年報』6-1996年度版- 大分県教育委員会 1998年
 『日本土器辞典』雄山閣 1996年
 木村幾多郎他 『大分大友土器研究』第14号- 大分大友土器研究会 1996年
 大分市 『大分市史』I: 大分市史編纂委員会
 埋蔵文化財研究会 『古墳時代の甕を考える』第32回埋蔵文化財研究集会 第三分冊 1992年



1号集石 (南より)



5号集石 (西より)



6号集石 (南より)

1号土坑（南より）



2号土坑（南より）



5号土坑（東より）





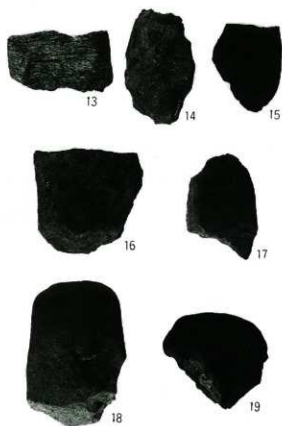
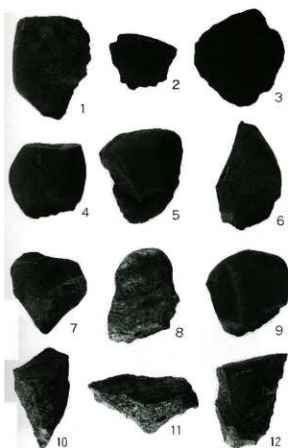
7号土坑（西より）



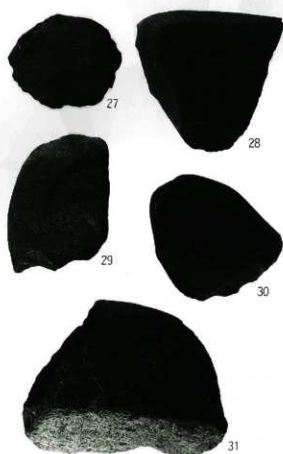
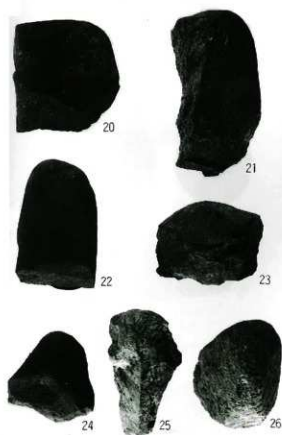
F9グリッド土器集中区（西より）



発掘調査風景



石器 (第10~18図)





1



3



2



4

石器 (第20图)



1



2



3



4



6



7



14

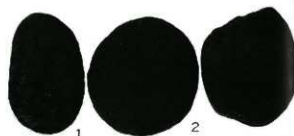


10



13

石器 (第21~24图)



1



2



6



4



5



10



9



11



12



15

石器 (第26图)



1



2



3

石器 (第25图)



4



5



6



7

石器 (第25图)



1



2



6



8



9



11



13



14



16



18



21



24



25



26

土器
(第30図 1~26)



27



28



30



36



37



39



40



42



44



47



52



61



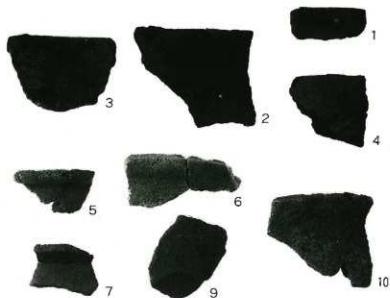
62



63

土器
(第30図27~40, 第31図42~63)

土器口縁部
(第28図1～10)



土器 (第28図12)



土器 (第28図13)



土器 (第28図15)

15



土器 (第29図16)



土器 (第29図17)



甕の釜口部



土器 (第29図22)



甕の底
(焚き口部)



2



1



6



7



3



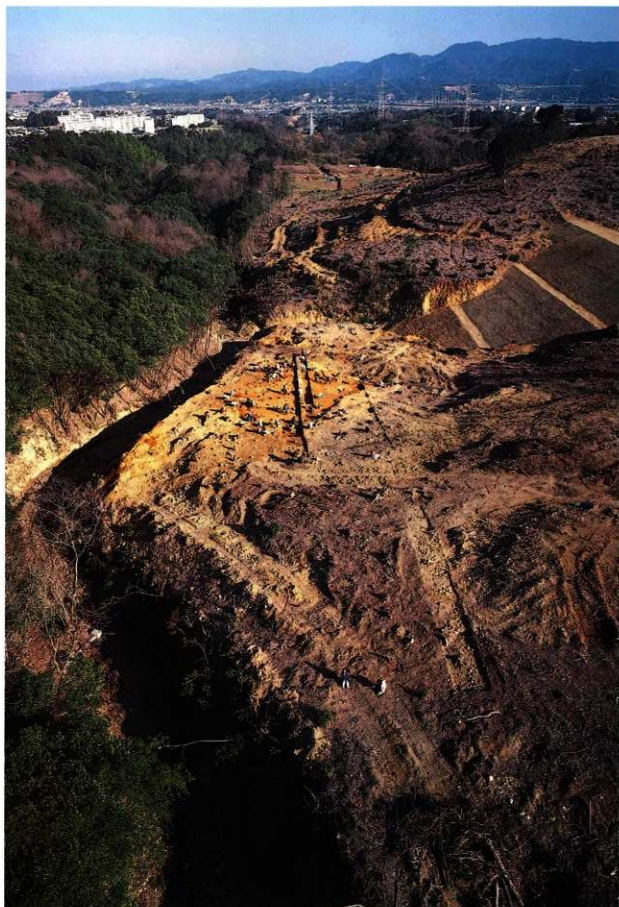
9



12

須恵器 (第32図1~12)

一方平Ⅳ遺跡



一方平Ⅳ遺跡（西より）

本文目次

第1章 遺跡の概要	(高橋)	1
第1節 調査の経緯	(高橋)	1
(1) 調査に至る経緯 (2) 調査体制	(高橋)	1
第2章 発掘調査の成果	(高橋)	1
第1節 調査の概要	(高橋)	1
第2節 層序	(高橋)	3
第3節 検出した遺構と遺物	(4は高橋・他は甲斐)	7
(1) 遺 構		7
(2) 土 器		7
(3) 鉄 器 (4) 石 器		43
第3章 まとめ	(3は高橋・他は甲斐)	64
(1) はじめに (2) 土器について		64
(3) 石器について		70
(4) おわりに		71

挿 図 目 次

第1図 一方平IV遺跡と周辺地形図	2
第2図 一方平IV遺跡トレンチ配図	3
第3図 一方平IV遺跡面(1)図	4
第4図 一方平IV遺跡面(2)図	5
第5図 遺構実測図	6
第6図 一方平IV遺跡出土土器1	8
第7図 一方平IV遺跡出土土器2	9
第8図 一方平IV遺跡出土土器3	9
第9図 一方平IV遺跡出土土器4	10
第10図 一方平IV遺跡出土土器5	11
第11図 一方平IV遺跡出土土器6	12
第12図 一方平IV遺跡出土土器7	13
第13図 一方平IV遺跡出土土器8	14
第14図 一方平IV遺跡出土土器9	15
第15図 一方平IV遺跡出土土器10	16
第16図 一方平IV遺跡出土土器11	17
第17図 一方平IV遺跡出土土器12	18
第18図 一方平IV遺跡出土土器13	19
第19図 一方平IV遺跡出土土器14	21
第20図 一方平IV遺跡出土土器15	22
第21図 一方平IV遺跡出土土器16	23
第22図 一方平IV遺跡出土土器17	24
第23図 一方平IV遺跡出土土器18	25
第24図 一方平IV遺跡出土土器19	26

第25图	一方平IV遺跡出土土器20	27
第26图	一方平IV遺跡出土土器21	28
第27图	一方平IV遺跡出土土器22	29
第28图	一方平IV遺跡出土土器23	30
第29图	一方平IV遺跡出土土器24	31
第30图	一方平IV遺跡出土土器25	32
第31图	一方平IV遺跡出土土器26	33
第32图	一方平IV遺跡出土土器27	34
第33图	一方平IV遺跡出土土器28	35
第34图	一方平IV遺跡出土土器29	36
第35图	一方平IV遺跡出土土器30	37
第36图	一方平IV遺跡出土土器31	38
第37图	一方平IV遺跡出土土器32	39
第38图	一方平IV遺跡出土土器33	40
第39图	一方平IV遺跡出土土器34	41
第40图	一方平IV遺跡出土土器35	42
第41图	一方平IV遺跡出土鉄器	43
第42图	石 鏃	44
第43图	石 皿	45
第44图	磨石類	46
第45图	磨石類	47
第46图	磨石類	48
第47图	磨石類	49
第48图	石 槌・剝片	50
第49图	石 核	51
第50图	礫 器	52
第51图	礫器・削器	53
第52图	礫器・削器	54
第53图	礫器・削器・石器	55
第54图	石器接合資料・削器・扁平打製石器	56
第55图	石器分布図	57
第56图	一方平IV遺跡出土土器編年図(1)	66
第57图	一方平IV遺跡出土土器編年図(2)	67
第58图	一方平IV遺跡出土土器編年図(3)	68
第59图	一方平IV遺跡出土土器編年図(4)	69

図 版 目 次

図版 1	72	図版 6	77
図版 2	73	図版 7	78
図版 3	74	図版 8	79
図版 4	75	図版 9	80
図版 5	76		

第1章 遺跡の概要

第1節 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

一方平IV遺跡は大分県大分市大字横尾字一方平にあり、今回新たに発見した遺跡である。

一方平IV遺跡は一方平遺跡のある尾根の北西側に位置し、南から流れ南遺跡を分断する小川の西側にある段丘上に立地している。一方平遺跡との比高差は約20mあり当初、調査開始以前は一方平遺跡の一部として扱っていたが、地形的に区分できることから新たに一方平IV遺跡とした。本遺跡の東側には一方平遺跡が存在するが、こちらも本遺跡よりもやや高い位置にある。北側は小川の向こうに山が迫っている。従って、一方平IV遺跡は周辺を高い地形に囲まれており、まったく見通しのきかない地形に立地している。

調査は平成8（1996）年11月25日から平成9（1997）年1月31日まで行なった。

(2) 調査体制

一方平IV遺跡の調査者は以下のとおりである。

調査 担当 高橋 信武（大分県教育委員会文化課埋蔵文化財第二係主任）

甲斐 寿義（同 上）

調査作業員 竹中ナツメ・竹中加代・佐藤千寿子・佐藤文一・佐藤エリエ・那賀文子・勝野由紀子
中野聖子・丸山みどり・永松美智子・竹中タマエ・佐藤直江・佐藤常夫・佐藤英代子
佐藤昭子・竹中愛子・木津良子・竹中治子・竹中エリ子・安東啓子・竹中スエ・竹中好雄
竹中チヨ子・安部 明・木津奈良人・竹中久美・佐藤春高・佐藤寿恵子・佐藤春義・木津清美
向井麻規子・吉山和子・那賀貴子・高橋妙子

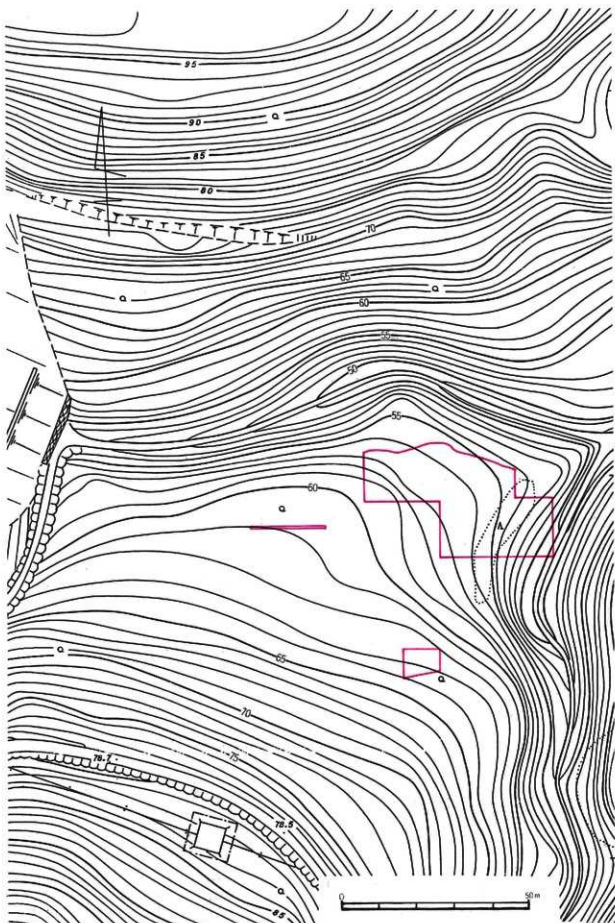
第2章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

一方平IV遺跡は調査前は雑木林であった。西から東に流れる小川の南側に広がる東西140m・南北60mの北向き斜面からなる段丘上に遺跡はある。水面から遺跡ののる段丘上面までは現在約5mあるが、年々下がっているわけであり遺跡を形成した当時はそれほど水面との比高差はなかったはずである。微地形的には、標高56m前後と標高61m前後の上下二段の小段丘面に分かれている。初め遺跡の範囲を確認するためトレンチ調査を行なってみたところ、上の面は表土下は礫層になり、遺跡は存在しないことが分かった。下の面には黄褐色のやわらかい土層が堆積し、その部分で遺物が出土したため、下の段丘面を本調査の対象地とした。遺跡はこの土層の中に存在し、縄文時代前期・中期・後期・晩期と弥生時代・古代・中世の遺物が出土した。遺物の数量的関係でみれば、一方平遺跡の主体は縄文時代晩期から弥生時代前期であるが、稲作が始まったとされる時期にまったく水田耕作に不適な場所に形成されたのが本遺跡である。

調査の進行に伴って土層を除去した結果、礫層が現われ北西から南東に下がる谷状の地形が埋没していることが分かった。

なお、調査にあたり、一方平遺跡と同一基準による杭打ちを行なった。ただし、方眼は東西10m、南北8mとし、名称は西から東に1～14、南から北にA～Gとした。表土が薄く、その中に遺物を含んでいるので表土剥ぎは通常のように重機を使うことを見合わせ、本遺跡では全て手作業で発掘した。調査面積は約600㎡である。



第1図 一方平IV遺跡と周辺地形図（1/1,000）

第2節 層序

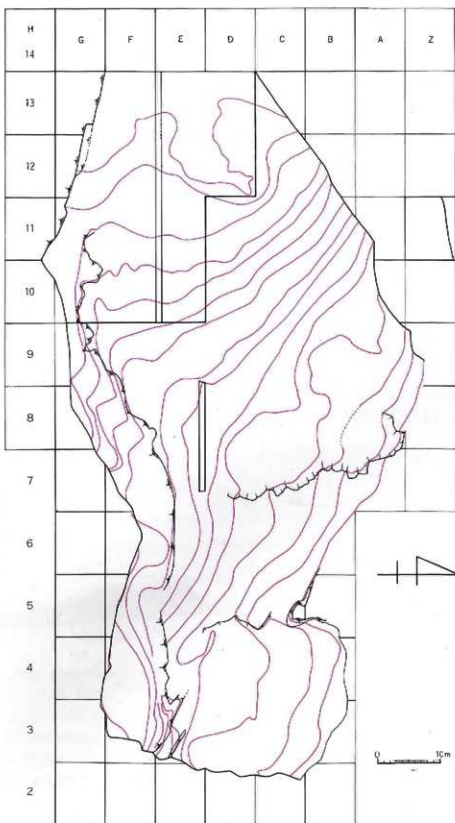
調査区を東西に貫くトレンチの壁面を図示して一方平IV遺跡の層序を説明する。

第3・4図はE10区からE13区にかけてのF区に面した壁面の土層図である。この部分では地形は東に向かって傾斜しており、地表面は西から東に徐々に下がっている。西端の9区との境界付近では上層の堆積はほとんど認められず、表土の下はすぐに礫層となる。礫層の上層は東に向かって厚みを増し、11区と12区の境付近でもっとも厚く、かつ複数の上層に分かれる。上層の起源は鹿児島県屋久島西方海面下の鬼界カルデラの噴出物であるアカホヤ火山灰(約6,300年前・以下Ah)である。これが複数の上層に現在分かれているのはさまざまな要因を反映しているためである。13区付近から傾斜がきつくなるが、14区になると平坦面が広がり、ここでは表土の下は礫層である。

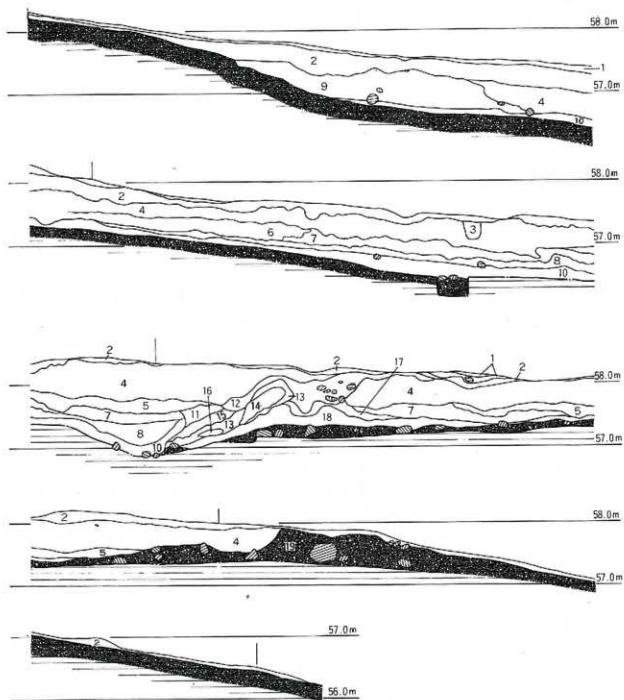
表上から礫層まで19枚に分けて以下説明する。

1層：表土の上ののる層で、発掘調査に先立って重機が走り回ったためにできたごく新しいもの。

2層：表上。黒色土。西部では20cm強の厚みが



第2図 一方平IV遺跡トレンチ配置図



第3圖 一方平IV遺跡層序圖(1)



第4図 一方平IV遺跡層序図(2)

あり、本来の層序を残している。中央部周辺では存在しないところがあるほど薄くなっている。これは重機の影響である。東側斜面では6cm前後の均一さを示す。

3層：黒色土。

4層：10Y R6/8明黄褐色土。下位の層に比べて暗色になったA hの風化土層。12区の西部にある地層の乱れにもかかわらず東西に同一の層が分布する。縄文時代と弥生時代の遺物包含層である。

5層：10Y R7/6明黄褐色土。A hの風化土層。11区と12区の境界付近と13区の東部に分布する。

6層：10Y R7/6明黄褐色土。A hの風化土層。基本的に5層と同じであるが、灰色気味(2.5Y1/7)の土斑を少量含む点で異なる。7層よりも5層に類似する。10区東部から11区にかけて存在する。

7層：10Y R7/6明黄褐色土。A hの風化土層。灰色気味(2.5Y1/7)の土斑を少量含む。西側で6層との移り変りは漸移的である。12区西部の層序の乱れた部分の東側にも存在する。

8層：10Y R5/6黄褐色土。A hの風化土層。層序の乱れた部分の西側に分布する。

9層：疎混じりのA hの風化土層。黄褐色土。上色の点では東側にづく層と区別できない。

10層：7.5YR1/6褐灰色。数cm大以下のものが主体となる円礫の砂利層である。円礫でないので水流によって運ばれたとは考えがたく、山崩れに伴うものであろう。10区の中程に薄く現われ次第に厚さ増して12区の西端までに認められる。東端では「く」の字に折れ曲がり東側の層序の乱れに乗り上げた形で終わる19層の円礫よりなる疎層に10層は直接重なる。黒曜石剥片等を少量包含する。

11層：10Y R7/6明黄褐色土。A hの風化土層。

12層：細かい円礫を少量満遍無く混入したA hの風化土層。一部は地表に現われ、あやうく礫群を伴う遺構と見まちがうところであった。

13層：細かい円礫を混入したA hの風化土層。

14層：細かい円礫よりなる砂利層。

15層：10Y R7/6明黄褐色土。A hの風化土層。灰色の土斑を混入する。6層・7層と類似する。

16層：14層と同じ。

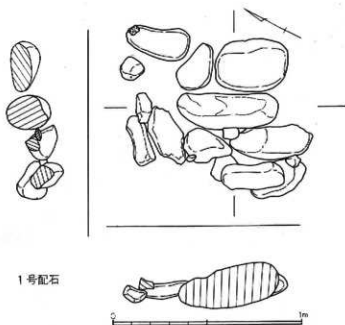
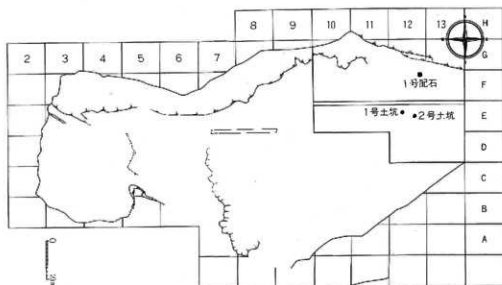
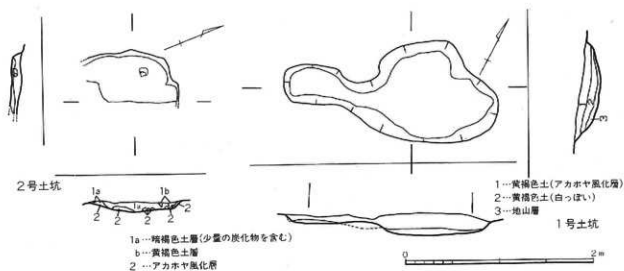
17層：2.5Y7/4浅黄色。A hの風化土層。

18層：2.5Y7/1灰色。A hが水中に堆積した場合の発色。18層はA hの水中堆積であろう。

19層：40cm～50cmの円礫をはじめそれ未満の円礫を多量に含み、砂利を主体とした層。水成層。

トレンチ部分では、12区西部にある層序の乱れを境に東西で堆積状態が異なる。東部では川砂利層の上に水中にA hが堆積し、水位が下がった後、山から風化したA hが二次堆積下。その後、西側で山崩れが発生し、既存の層序を破壊しながらトレンチ西部に堆積し、さらにA hが二次堆積した。山崩れの発生後にできたA h層の上に縄文時代の遺跡が残されたのであろう。

(高橋)



第5図 遺構実測図

第3節 検出した遺構と遺物

(1) 遺 構

D-12グリッド内に上坑2基とD-12グリッドで配石1基を検出した。

【1号土坑】(第5図)

グリッドの中央部より約2.7m北西よりに位置する。平面プランは不定形で北東方向に約2.3m、南東方向に約1.1mを測り、深さは約25cmである。床面は比較的平坦である。覆土は2層に分かれており、第1層は黄褐色のアカホヤ風化層、第2層は灰黄褐色のアカホヤ風化層である。第2層からは1点土器片が出土した。この土器片はこの遺構に伴う物ではなく、流れ込みと思われる。土器片は縄文後期の磨消縄文土器である(第9図3番の土器)。この土坑の上部には、縄文晩期以降の土器の包含層が存在していることから、時期的にこの土坑は縄文後期の遺構と考える。

【2号土坑】(第5図)

グリッドの中央部より約1.5m南東よりに位置する。右側が削平されているため、本来の平面プランは不明である。床面は比較的平坦であると予想される。覆土は1層で暗褐色土層であるが、黄褐色ブロックと少量の炭化物、焼土を含んでいる。土坑内からは、縦横ともに約10cm、高さ約5cm程度の礫が1点含まれていたが、火を受けた様子はない。上部に明確な遺物の包含層が見られないため、時期は不明である。

【1号配石】(第5図)

グリッド中央部より約4m南東に位置する。平面的には北西方向に約90cm、北東方向に約90cmを測る。石は火を受けて赤変しており、30cm×50cm大が9個、20cm大が1個、人頭大が3個、拳大が3個で構成されている。周囲に掘り込みや、焼土は見られない。石をよく観察すると、上部のみ火を受けて赤変している石も多く見られるが、周囲の状況から見ても、集石遺構とは考えにくい。おそらく、別の場所で使用された石を北西方向へ意図的に配列したのであろう。何らかの意味を持つ遺構の可能性が高い。時期については、その周辺から出土する土器の様子から、縄文晩期から弥生前期にかけての遺構と考える。(甲斐)

(2) 土 器

一方平V遺跡からは、遺跡を覆うアカホヤ風化層より2,000点以上の土器片が出土した。出土した土器は縄文時代前期から弥生時代中期までのもので主体は刻目突帯文土器である。しかし縄文時代前期の竇式土器や中期の船元式土器など時期の明らかな土器群を除くと、他の土器は住居跡等の遺構に伴わない包含層一括出土であり、時期的な差異を認めることができなかった。そこで今回の報告では、このような出土状況から、自ずと限界があるものの、その分布や土器の特徴から、土器の前後関係を可能な限り明らかにしてみた。土器を説明するにあたって、土器を下記のとおりに群に分け、その分布と特徴を同一群毎に示していくことにする。

I群土器	条痕文土器群(縄文時代前期)
II群土器	撫糸文土器群(縄文時代中期)
III群土器	磨消し縄文土器群(縄文時代後期)
IV群土器	刻目突帯文土器群(条痕調整でナデや研磨を施すもの)
V群土器	刻目突帯文土器群(ハケ目を施すもの)
VI群土器	壺形土器
VII群土器	古代の土器

I群土器(第6図～第7図) 条痕文土器群 器面の厚さで2個体に分ける。

1類土器(第6図1～11)

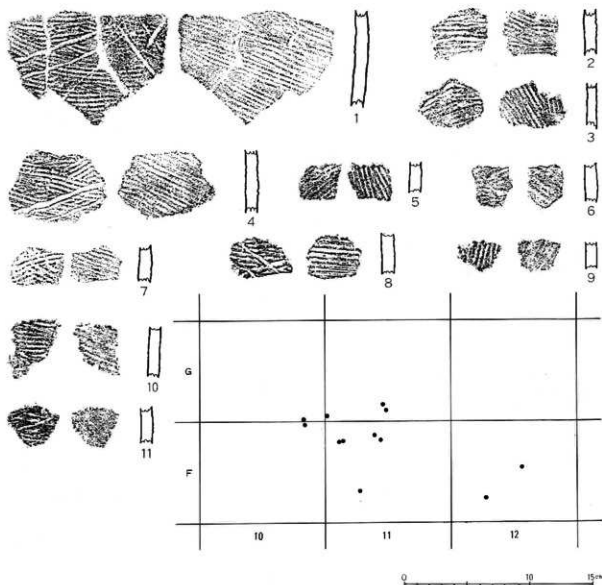


図6 一方平IV遺跡出土土器 1

F-11, G-11区を中心に出土。器壁は厚く深鉢状の器形と思われるが、土器片がいずれも胴部小片のため、全体の器形は不明である。内・外面ともに条痕調整が基本であるが1・4・8には、斜め方向に二本線の沈線が施文されている。外面は明赤褐色もしくは橙色で、内面は明黄褐色を呈しており、胎土に長石、角閃石、1～2mm大の石英を含んでいる。

2 類土器（第7図1～2）

E-12グリッド中央やや西よりでまとまって出土。胴部と底部である。1類土器と同じく深鉢状の器形と思われるが器壁は薄い。内・外面ともに条痕調整が施されている。1は底部である。丸底で内・外面ともに黄褐色を呈し、胎土に長石、角閃石、3～4mm大の石英や小礫を含んでいる。内面全体や外面にカーボンの付着が見られる。2は胴部で、調整や色、胎土から、1と同一個体と思われる。口縁部や全体の器形が不明のため明確ではないが、アカホヤ上層から出土するの縄文土器の範疇に属すると考える。

II 群土器（第8図）撫糸文土器群 分布の状況や撫糸文の特徴から2個体に分ける。

1 類土器（第8図1～9）

F-12区の中央部中心に出土。鉢型土器の口縁部と胴部、頸部の破片である。9は口縁部であるが、面取を

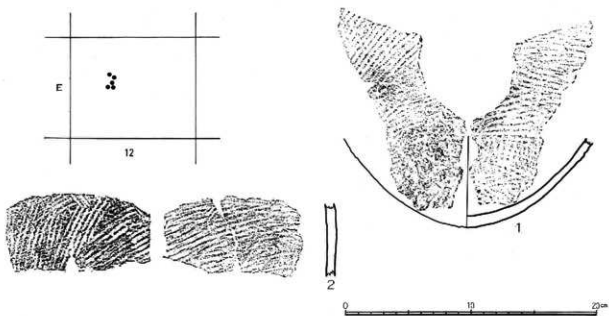


圖7 一方平IV遺跡出土土器2

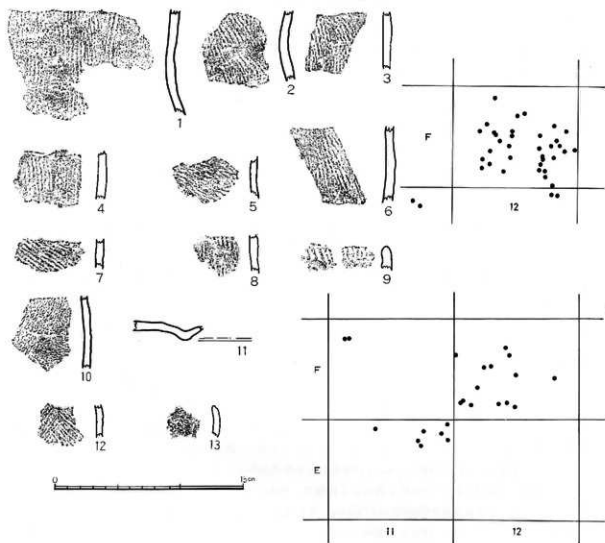


圖8 一方平IV遺跡出土土器3

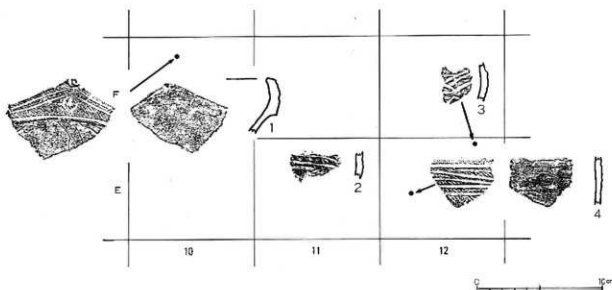


図9 一方平IV遺跡出土土器 4

せず、内・外面に爪形による文様を付けている。口縁部の形状がキャリバー状に開くのか直口するかは判断できない。1～8は胴部と頸部であるが、頸部にはくびれがみられる。外面は撚りのゆるい縄文を縦走させ、内面は丁寧なナデ調整のみである。色は黄褐色であるがカーボンが付着しているためにくすんだ色になっている。胎土に長石、角閃石を含み、石英は少なく、細かく白い粒子を多く含む。全体の器形が明らかではないが、以上の特徴から船元式土器の範疇に属すると思われる。

2 類土器 (第8図10～13)

F-11区とF-12区の北側の境界を中心に出土。鉢形の甕の口縁部と胴部、底部の土器片である。1類土器に比べると撚り糸が明瞭で、太くない。13は口縁部で全体的な器形ははっきりしないが、波状口縁の可能性が高い。11は底部で、円形の上げ底であり、内・外面共にナデ調整である。10・12は胴部である。外面は撚り糸を縦走させ、平行沈線文が施されている。内面は丁寧なナデ調整あり、色は黄褐色で胎土に長石、角閃石、5mm大の石英を含む。以上の特徴から、船元式の範疇に入ると思われる。

Ⅲ群土器 (第9図) 磨り消し縄文土器群

1は波状口縁で、口縁部が「く」の字状に屈曲する。口縁部は縄文を施した後、3本沈線を巡らす。波頂部に「V」字状の刻み目を施し、その下位に半円状の対向弧文が施されている。頸部及び内面は丁寧な横・斜め方向の研磨が施されている。明黄褐色を呈し、長石、角閃石を含むが石英は少ない。2～4は胴部である。2・3は明黄褐色、4は黄褐色を呈し、縄文を施した後、複数の沈線を巡らしている。いずれも胎土に長石、角閃石、石英を含んでいる。西平式土器の範疇に入ると思われる。

Ⅳ群土器 (第10図～第18図) 刻目突帯文土器群である。ただし、本群には浅鉢や無刻目突帯文土器、突帯のない土器も伴する可能性が高いと思われるので含める。

浅鉢1類 底部の形状は不明であるが、屈曲部直上に沈線を巡らし、頸部から口縁に向けて長く外反する口縁部を有するもの。口縁端部は肥厚せず、面取りが行われている。(第10図1～4)

1はF-12区出土。復元口径31.6cm。内・外面ともに明黄褐色を呈し、外面は沈線を巡らした後、へら状工具による研磨、内面も同じくへら状工具による研磨で、内面にはカーボンの付着が見られる。

2は口径33cmを測る。復元胴部最大径28.4cm。外面は黄褐色で、沈線を巡らした後へら状工具による研磨、内面は明黄褐色で、へら状工具による強いナデである。端部付近には研磨がみられる。

3はF-12出土。口径33cm、復元胴部最大径26.4cmを測る。外面は、沈線を巡らした後へら状工具による

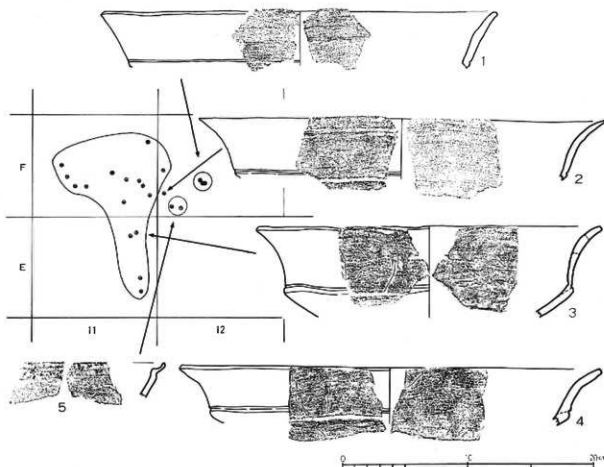


図10 一方平IV遺跡出土土器5

研磨、内面はヘラ状工具による強いナデである。

4はE-11、F-11区出土。口径27.0cm、復元胴部最大径22.8cm。3と同じで内面にはカーボンの付着が見られる。

これらの土器は、1は明黄褐色、3・4は浅黄褐色を呈し、胎土に長石、角閃石、石英を含む。2・4には1～3mm大の石英が含まれている。いずれの土器も内・外面の研磨や強いナデは横・斜め方向である。

浅鉢2類 底部の形状は不明、口縁が屈曲気味に立ち上がり口縁端部内側は丸く肥厚するもの。(第10図5)

5はF-12区出土。内・外面ともにヘラ状工具による研磨であり、内面は棕色、外面は明黄褐色を呈している。胎土に長石、角閃石、石英を含んでいる。

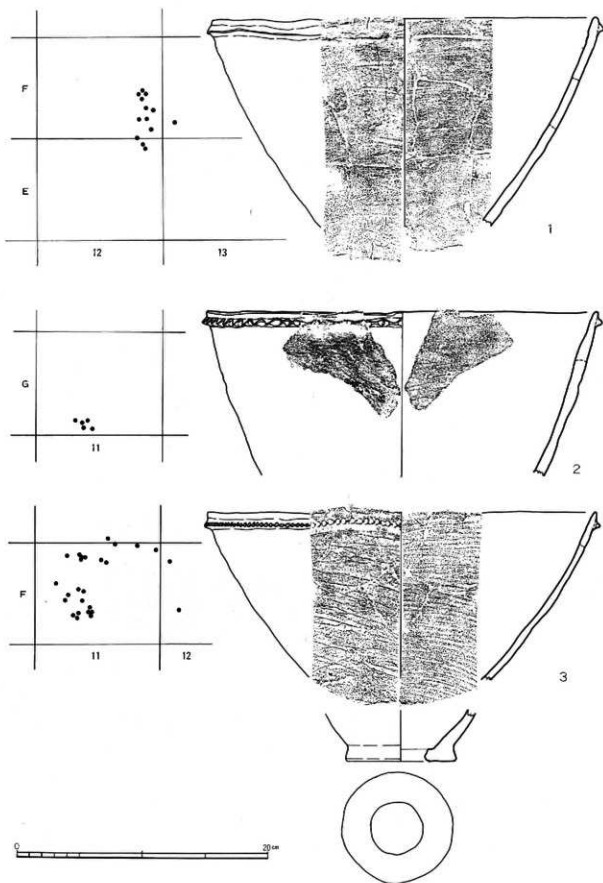
深鉢1類 底部の形状は不明であるが、口縁部から底部に向けて胴部がやや膨らむ砲弾状のもの。刻み目突帯の有無により2つに分類。(第11図～第12図)

1類-a (刻み目突帯を付さないもの 第11図)

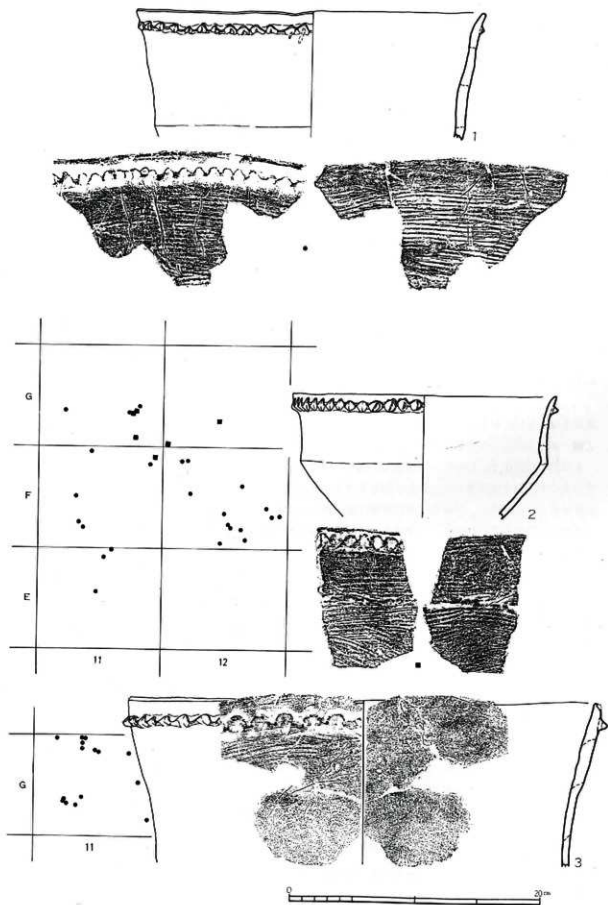
1はF-12区出土。口径30.0cmを測る。口縁直下に無刻み目の突帯が付されている。明黄褐色を呈し、二枚目による条痕調整後、口縁部や突帯付近は指による横ナデ、内面は丁寧なナデ調整の後、底部から口縁より約4cm下まではヘラ状工具による横方向の研磨、外面は、突帯を貼り付けた後、板状工具もしくはヘラによる横・斜め方向のナデである。胎土に長石、角閃石、石英を含んでいる。

1類-b (刻み目突帯を付すもの 第11図)

2はG-11区出土。口径30.6cmを測る。1に比べると口縁部のやや下位に突帯を付した後、指で下方から突帯を押し上げるように刻み目を施している。明褐色を呈し、内面は二枚目条痕後、ヘラ状工具による横・斜め方向の砂粒が移動するほどの強いナデ、外面は板状もしくはヘラ状工具による横・斜め方向のナデ後、難な



第11圖 一方平Ⅳ遺跡出土土器 6



第12図 一方平IV遺跡出土土器 7

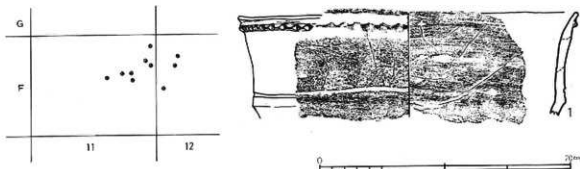


図13 一方平IV遺跡出土土器 8

研磨がみられる。

3はF-11区出土。口径30.8cmを測る。2と同じく11緑やや下位に刻み目突帯を付している。刻み目はへら状工具によるものである。明赤褐色を呈し、二枚貝による条痕調整後、11緑部や突帯付近は指による横ナデ、外面は板状もしくはへら状の工具による横・斜め方向の荒いナデである。1・2に比べると器壁は薄い。底部はやや厚みをもち、端部が外方向へ張り出し、焼成後に穿孔している。甕として使われた可能性がある。いずれも、胎上に長石、角閃石、2～3mm大の石英を含んでいる。

深鉢2類 外反しながらも直線的に伸びる11緑部を持つもの。胴部の様相から2つに分類。(第12図～13図)

2類-a (刻み目突帯を付すもの 第12図)

1はF-12区出土。口径27.6cmを測る。復元胴部最大径24.6cm。類の土器に比べると、やや下位に刻み目突帯を付す。指で突帯を下方から上に押し上げるように刻み目を施している。内・外面共に二枚貝による条痕調整である。口縁内側、11緑端部及び突帯付近は指による横ナデである。

2はG-11区を中心に出土。口径20.8cmを測る。復元胴部最大径19.6cm。1に比べるとやや上位に刻み目突帯を付す。刻み目は2と同じ指刻みであるが、突帯は1より太い。内・外面ともに二枚貝による条痕調整後、11緑部や突帯付近は指による横ナデ、内面は軽いナデが施されている。口縁端部は面取りされていない。

3はG-11区出土。復元口径28.4cmを測る。口縁下位に刻み目突帯を付す。突帯の刻み方は他と同じで下方からの指刻みであるがやや浅い。器形も1・2に比較するとさらに口縁部が外反している。二枚貝による条痕調整後、11緑部や突帯付近は指による横ナデだが、内面はへら状工具による砂粒が動くほどの強いナデ、外面は一部ナデが見られる。

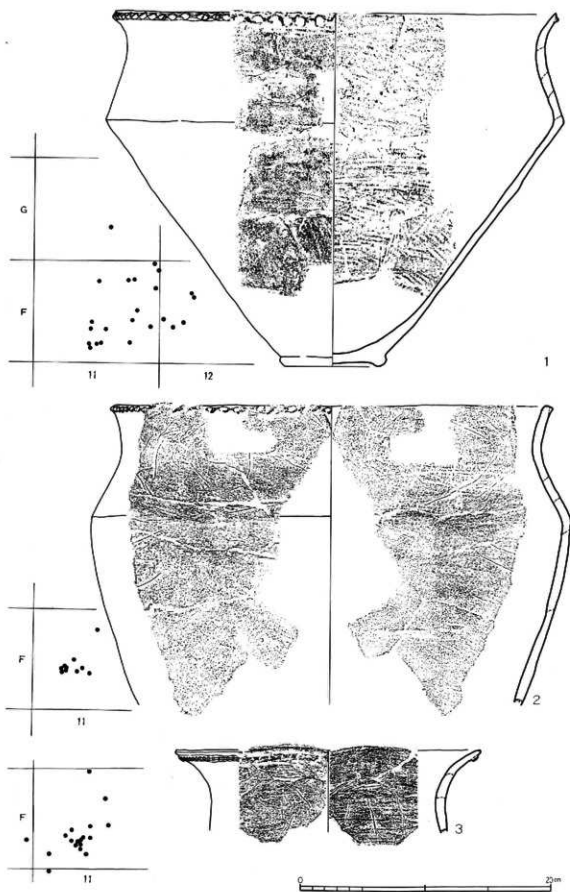
これらの土器は、1は明褐色、2、3は明黄褐色を呈し、いずれも胎上に長石、角閃石、1～2mm大の石英を含む。

2類-b (胴部に沈線を巡らし刻み目突帯を付すもの 第13図)

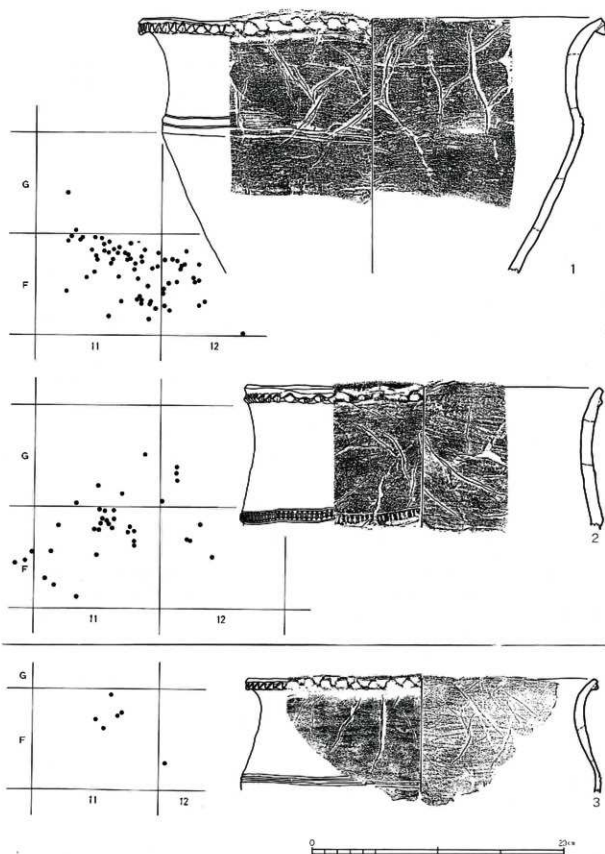
1はF-11・12区を中心に出土。口径26.8cmを測る。復元胴部最大径24.8cm。突帯は他と同じく下方からの指刻みで、位置も口縁下位だが、刻み目は小さい。屈曲部よりやや上方に1条の沈線を巡らしている。明褐色を呈し、二枚貝による条痕調整の後、内面はへら状工具による砂粒が移動するぐらい強いナデ、外面は状態が悪く不明である。口縁や突帯付近は指による横ナデであり、面取も行われている。胎上に長石、角閃石、石英を含む。

深鉢3類 (第14図～第17図) 11緑部が大きく外湾する深鉢。胴部の様相や、刻み目、突帯の有無によりの形状により4つに分類。

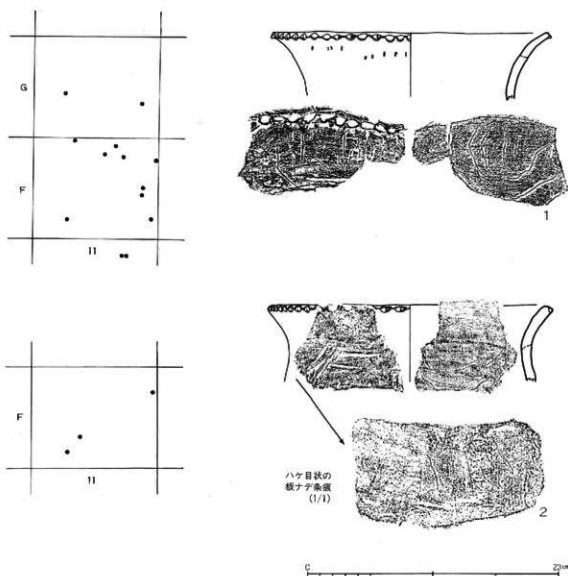
3類-a (刻み目突帯を付すもの 第14図)



第14図 一方平IV遺跡出土土器 9



第15図 一方平Ⅳ遺跡出土土器10



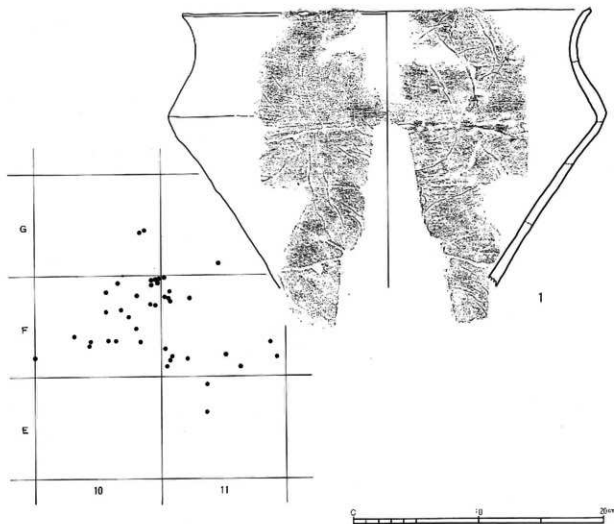
第16図 一方平Ⅳ遺跡出土土器11

1はF-11区を中心に出土。口径34.8cmを測る。復元胴部最大径36.0cm、復元底径7.2cm。11縁端部直下に刻目突帯文を付し、指で突帯を下方から押し上げるように刻み目を施している。二枚貝による条痕調整後、口縁端部や突帯付近は指による横ナデ、内面は屈曲部から口縁部にかけて横方向のナデ、胴部は不定方向の雑なナデ、外面は横・斜め方向のナデである。底部は円環状の粘土紐を貼り付けており、やや上げ底状の外に張り出した形状を呈している。

2はF-11区出土。口径33.6cmを測る。復元胴部最大径37.8cm。11縁端部に刻目H突帯を付す。1と同様に指刻みであるが、下方からではなく上方から突帯に刻みHを施している。器形も1、2に比べると胴部に膨らみを持ちやや長胴の感がある。二枚貝による条痕調整後、口縁部や突帯付近は指による横ナデ、内面は横・斜め方向にヘラ状工具による砂粒が動くほどの強いナデ、外面は屈曲部から口縁部にかけて、ヘラ状工具による研磨の跡が見られる。器面の状態が悪い。

3はF-11区出土。11径24cmを測る。11縁端部下位に帯状の細い刻目突帯文を付し、工具により横方向から刻み目を施している。大きく外反する口縁部をもつ。端部は横ナデ、二枚貝による条痕調整後、突帯付近は横ナデ、内面はヘラ状工具による強いナデ、外面はナデである。

これらの土器は、いずれも明黄褐色を呈し、胎土に長石、角閃石、石英を含むが、2・3には2mm大の石英が含まれる。



第17図 一方平Ⅳ遺跡出土土器12

3類-b (刻み目突帯を付し、胴部に沈線や突帯を持つもの 第15図)

1はF-11区を中心に出土。復元口径36.4cm、復元胴部最大径は33.4cmである。口縁端部に刻み目突帯を付し、刻み目は下方からの指刻みである。胴部屈曲部やや上方に二本の沈線を巡らしている。二枚貝による条痕調整の後、口縁端部や突帯付近は指による横ナデ、内・外面ともにヘラ状工具によるナデ後、屈曲部付近から口縁部にかけてはヘラ状工具による研磨である。口径が復元胴部最大径より大きい。

2はF-11区出土。口径27.2cm、復元胴部最大径28.4cmを測る。口縁端部に刻み目突帯を付し、刻み目は1と同じく下方からの指刻みである。屈曲部上に沈線を二本巡らしている。1と同じく二枚貝による条痕調整後、内面は強いナデ、外面はナデの後、ヘラ状工具による研磨である。

3はF-11区出土。口径28cm、復元胴部最大径28.8cmを測る。口縁端部下に刻み目突帯を付す。4と同じく、下方からの指刻みである。屈曲部にも突帯を付し、その周囲に沈線を2本巡らせ、ヘラ状工具で刻み目を施している。胴部には一部赤色顔料が付着している。二枚貝による条痕調整後、内面は横や斜め方向に強いナデ、外面はヘラ状工具による研磨である。口縁や突帯付近は指による横ナデであり、面取りも行われている。

これらの土器は、1・3は明黄褐色、2は赤褐色（裏は黄褐色）を呈し、いずれの土器も長石、角閃石、石英を含むが、1には3～4mm大、5は5mm大などやや大きめの石英が含まれている。

3類-c (口縁部に刻み目を有するもの 第16図)

1はF-11区出土。口径21.8cmを測る。突帯は付さず、口唇部をつまみ出し、器面調整後、上方から指で押さえ込むように刻み目を施している。二枚貝による条痕調整後、内面はヘラ状工具による強いナデ、内面の



第18圖 一方平IV遺跡出土土器13

口縁付近から外面はナデであるが確である。外面には意図的に爪形が残されている。胴部及び底部の器径は不明であるが、胴部に屈曲部を持つと予想される。

2はF-11区出土。復元口径22.6cm。1と同様に突帯を付さず、器面調整後に、横方向から指で口縁部に刻み目を施している。器面調整は1と同じであるが、外面は板状の工具を使つての縦方向のナデ（ハケ目状）が部分的に残る。1と同じく器径は不明である。

これらの土器はいずれも明黄褐色を呈し、胎上に長石、角閃石、1～2mm大の石英を含む。

3類-d（突帯のないもの 第17図）

1は、F-10を中心に出土。口径32.0cmを測る。復元胴部最大径34.4cm。突帯は付さない。浅黄褐色を呈し、内面と外面一部にスガが付着している。口縁端部は指によるナデ、二枚貝による条痕調整後、内面は横・斜め方向にへう状工具による砂粒が動くほどの強いナデ、外面はナデ後屈曲部から口縁部にかけて横方向のへう状工具による研磨である。胎上に長石、角閃石、石英を含んでいる。

第18図1～4は、胴部片である。1は、E-11区出土。復元胴部最大径は34.8cm。内面は器面の状態が悪く不明であるが、外面は二枚貝による条痕調整後、ナデである。2はD-11、12区出土。胴部に沈線を通らしている。復元胴部最大径は30.8cm。二枚貝による条痕調整後、内面は横・斜め方向にナデ、外面は、頸部は板状工具かへう状工具によるナデ、胴部は横・斜め方向のナデである。3はF-11区出土。復元胴部最大径は33.6cm。二枚貝による条痕調整は施しているが、器面の状態が悪く、最終の調整は不明である。外面に一部研磨の痕跡が認められる。4は屈曲部に突帯を付し、横方向からの指刻みを施している。復元胴部最大径は46.2cm。器壁も厚い。二枚貝による条痕調整後、内面はへう状工具による砂粒が移動するほどの強いナデ、外面は丁寧なナデである。

これらの土器は、1は明黄褐色、2は明褐色（一部赤褐色）、3は黄褐色、4は明赤褐色を呈し、いずれも胎上に長石、角閃石、1～3mm大の石英、2～3mm大の小礫を含む。1は7mm大も含む。

いずれも口縁部は不明であるが、11は口縁部が大きく外反しない2類-a、10及び12、13は大きく外反する3類-bに属すると考える。

第V群土器（第19図～第25図） ハケ目調整の刻目突帯文土器群

2類 外反する口縁部と屈曲する胴部を持つもの。（第19図）

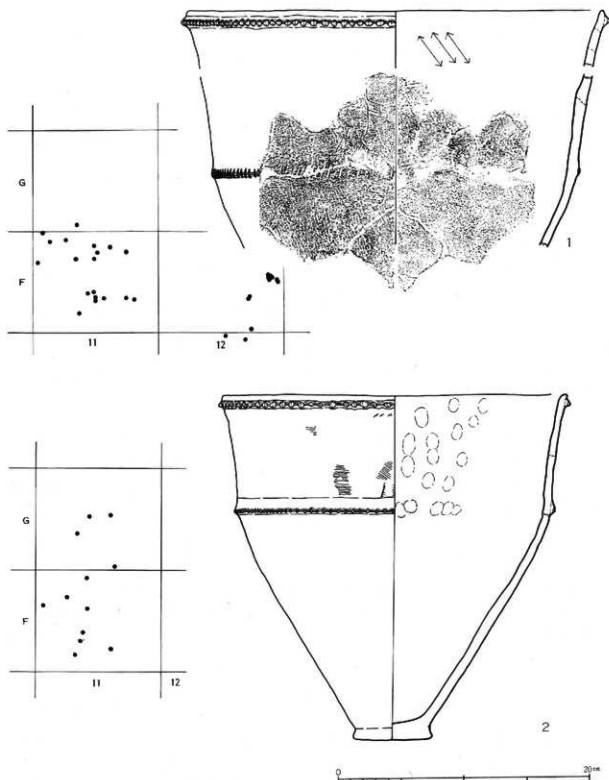
1類-a（やや外反する口縁部に一条の突帯と胴部屈曲部に刻み目もしくは突帯を付すもの 第19図）

1はF-11区出土。口径32.6cmを測る。復元胴部最大径29.8cm。口縁端部やや下位に一条の突帯を、胴部屈曲部に刻み目を付す。横方向から板状工具により刻み目が施され、刻み日には木目状の凹痕が見られる。ハケ目調整後、口縁部及び突帯付近は横ナデ、内面は、胴部はナデ、頸部から口縁部付近はへう状工具による横・斜め方向の強いナデ、外面は、頸部から口縁部にかけて丁寧なハケ目をナデ消し、胴部にはハケ目が残る。胴部と頸部の接合面（屈曲部）にへう状工具で刻み目を施しているが、明確な突帯は見られない。

2はF-10、G-11区で出土。口径27.2cm、復元胴部最大径25.4cm、復元底径6.1cm。口縁端部やや下位及び胴部屈曲部に一条の突帯を付す。板状工具で横方向からやや斜めに刻みを施している。ハケ目調整後口縁及び突帯付近は横ナデ、内面は頸部から口縁部にかけてはナデ、底部から胴部はへう状工具による横・斜め方向の強いナデ、外面は横方向のハケ目調整後、頸部・口縁部は丁寧なハケ目をナデ消し、底部から胴部にかけては斜め方向の強いナデが施されている。内面には指頭圧痕が認められ、外面には部分的にハケ目が残っている。

1類-b（外反する口縁部と口縁部に二条の突帯を付すもの 第20図）

3は、E-12区出土。口径32.0cmを測る。胴部と頸部の境界が明確でなく長胴の感がある。口縁端部やや下位に二条の突帯を付し、胴部には削り出しの突帯を巡らす。口縁部の二条の突帯は板状工具の小口で横方向から同時に刻み目を施している。胴部の刻み目と同じ工具によるものである。1・2に比べると刻み目は小さい。内面は横・斜め方向、外面は縦・斜め方向のハケ目調整後、端部及び突帯付近は横ナデ、内・外面共に、ハ

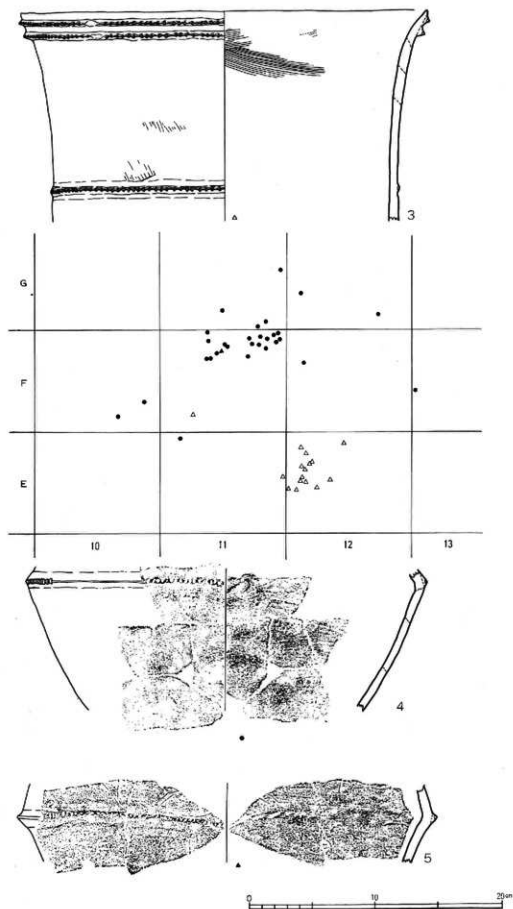


第19図 一方平IV遺跡出土土器14

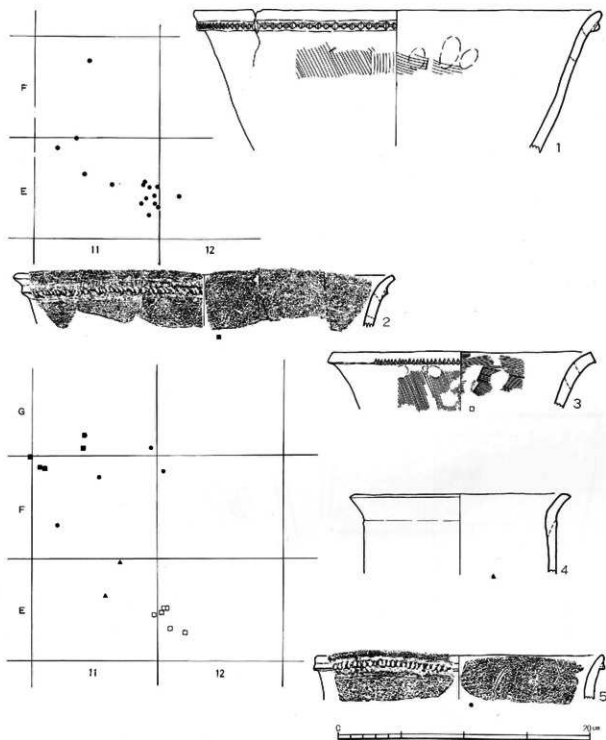
ケ目をナデ消している。

これらの土器は、1は暗褐色、2は橙色、3は明赤褐色を呈す。いずれも胎土に長石、角閃石、石英を含む。1・2の石英は1～2mm大であるが、3は3～5mm大の石英や結晶片岩、小礫を含み、明らかに胎土に違いが見られる。

4・5は胴部のみの上器である。1～3のように胴部に刻み目突帯を付す。4は屈曲部に突帯を付し、板状



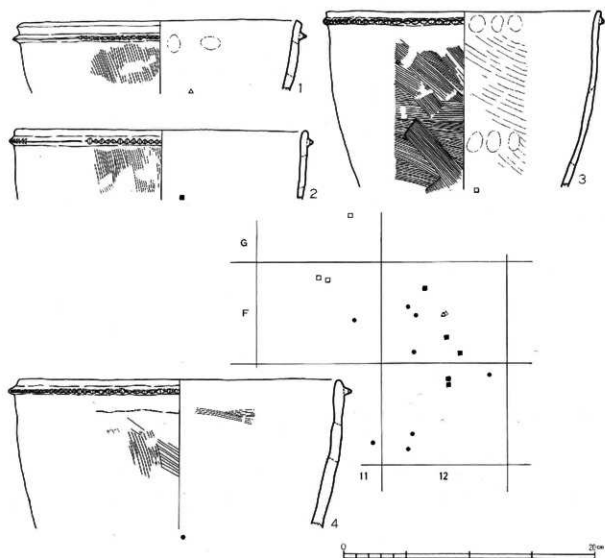
第20圖 一方平Ⅳ遺跡出土土器15



第21図 一方平IV遺跡出土土器16

工具により横方向から刻み目を施している。内面はヘラ状工具による横・斜め方向のナデ、外面は丁寧なナデ、突帯付近は横ナデを施している。5も4と同じく屈曲部に板状工具による刻み目線を有する突帯を付す。突帯付近は横ナデ、内面、外面ともにナデである。4は褐色、5は明黄褐色を呈し、いずれも胎土に長石、角閃石、石英を含む。頸部や口縁部は不明であるが、胴部の屈曲の様子から、深鉢3類に属すと思われる。

表2類 口縁部から底部にかけて胴部がやや膨らむ碗状のもの。口縁部の形状から3つに分類する。第21図～第23図



第22図 一方平IV遺跡出土土器17

2類-a (口縁部が大きく外反するもの 第21図)

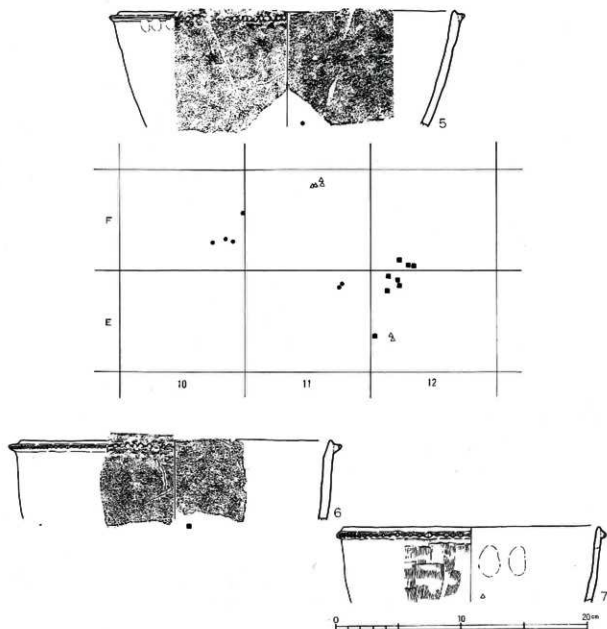
1はE-11区出土。復元口径37cmを測る。口縁端部下位に突帯を付す。板状工具の小口により、横からの刻みを施している。大きく外反する口縁部は口唇部でさらに外反している。内面は横・斜め方向のハケ目を施した後、横方向のナデ、外面は縦・斜め方向のハケ目を施した後ナデ消している。端部や突帯付近は横ナデであり、内面には指頭圧痕も見られる。

2はF-11、G-11区出土。復元口径29.4cm。口縁端部下位に刻み目突帯を付す。刻み目は板状工具の小口によるものである。ハケ目調整後内・外共にハケ目をナデ消している。端部は面取され、口縁や突帯付近は横ナデである。

3はE-12区出土。復元口径20cm。突帯は付さず、口唇部下端をつまみ出し、板状工具により刻み目を施している。刻み日には木目の圧痕が残っている。端部は面取しており、口縁及び口唇部は横ナデ、内面は横・斜め方向のハケ目、外面は縦・斜め方向のともにハケ目である。外面には指頭圧痕が残る。

4はE-11出土。復元口径17.6cm。口唇部に刻み目を施さず、口縁部と頸部の境界に段を有する。端部は面取しており、口縁部は横ナデ、内・外面ともにナデである。

5はF-11区出土。復元口径22.6cm。口縁端部下位に突帯を付す。横方向からの刻み目は板状工具の小口



第23図 一方平IV遺跡出土土器18

によるものである。口縁端部および突帯付近は横ナデ、内面はナデであるが、外面は器面の状態が悪く判別できない。

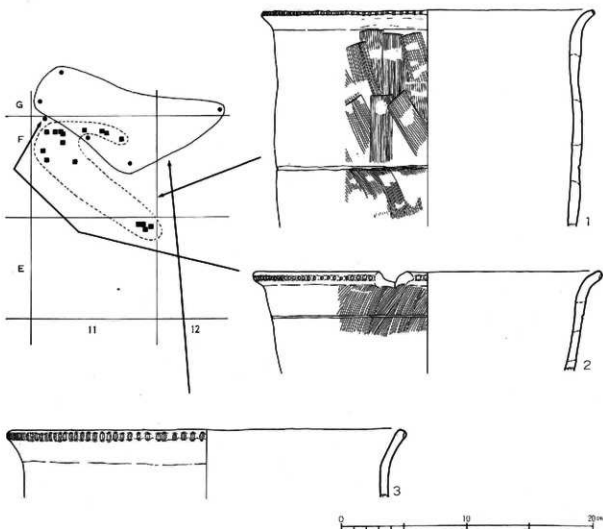
これらの土器は、2・5は明黄褐色、3・4は明赤褐色を呈し、いずれも胎上に長石、角閃石、石英を含む。2は2mm大、3は3～5mm大、4は2～4mm大の石英も含まれる。

2類-b (11唇部が直線的なもの 第22図)

1はF-12区出土。復元口径21.6cm。端部は面取をしており、端部下位に突帯を付す。板状工具の小口により、横からの刻みを施している。内面はハケ目調整後、丁寧なナデ、指頭匠痕も認められる。外面のハケ目は縦・斜め方向で、端部及び突帯付近ハケ目調整後は横ナデである。

2は、F-11、E-12区出土。復元口径23.0cm。2と同じく端部下位に刻み目突帯を付す。横方向からの刻み目は板状工具の小口によるものである。2に比べると刻み目は大きい。内面はハケ目調整後丁寧なナデ、外面は縦・斜め方向のハケ目、口縁及び突帯付近はハケ目調整後横ナデである。面取はされていない。

3はF-11区、G-11区出土。復元口径21.0cm。口唇部がやや外反している。2・3と同じく刻み目突帯



第24図 一方平IV遺跡出土土器19

を口縁端部下位に付す。横方向からの刻み目は板状工具の小口によるものである。内面はハケ目調整後、ヘラ状工具による強いナデ、外面は横、斜め方向のハケ目である。端部及び突帯付近はハケ目調整後横ナデである。

これらの土器は、1・2は明黄褐色、3は茶褐色を呈す。いずれも胎土に長石、角閃石、1～2 mm大の石英を含む。特に1・3は石英が多く含まれており、5 mm大も含む。3には結晶片岩も含まれる。

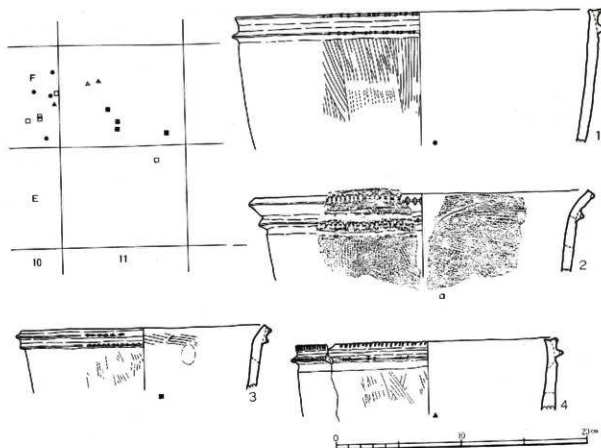
2類-c (I) 西部がやや内湾するもの 第22図～第23図)

4はE-11・12区出土。復元口径25cm。2類-aと同じく刻み目突帯をI縁端部やや下位に付す。横方向からの刻み目は板状工具の小口によるものである。内面は横・斜め方向のハケ目調整後ナデ、外面は縦・斜め方向のハケ目調整後ナデ消している。I縁及び突帯付近は横ナデである。外面には縦方向のハケ目調整を施す際の小口の痕跡が残る。

5は、F-11区出土。復元口径20.0cm。4と同様、刻み目突帯をI縁端部直下に付す。横方向からの刻み目は板状工具の小口によるものである。内面は丁寧にナデが施され、ハケ目は残っていない。指頭圧痕も認められる。外面は上から下への縦方向のハケ目、I縁及び突帯付近は横ナデである。確実にはハケ目調整後突帯を付している。

6はF-10出土。復元口径26.4cm。I縁端部をつまみ出し突帯状に巡らし、板状工具の小口により口唇部に刻み目を施している。口唇部の下位には指頭圧痕もみられる。I縁端部付近は横ナデであるが、内・外面とも器面の状態が悪く明確ではないがナデで、ハケ目は確認できない。

7はE-12、F-12区出土。復元口径24.4cm。6と同じで口唇部をつまみ出し突帯を有する。刻み目も同様



第25図 一方平IV遺跡出土土器20

に小口によるものである。口縁部はやや外反しており、口唇部をつまみ出したためにやや内湾気味の印象を受ける。器面は、内・外面共にナデである。

これらの土器は、5は明黄褐色、4・6・7は明赤褐色を呈し(6の内面は明黄褐色)、いずれも胎土に長石、角閃石、2～5mm大の石英を含む。5は石英を多く含み、4・6・7は結晶片岩や小礫を多く含む。

2類-d (如意形口縁を有するもの 第24図)

1はF-11区出土。復元口径26.0cm。口唇部端部が板状工具により全面刻み目が施されており、刻み目には木目の圧痕が残る。長胴であり、口縁部は横ナデ、内面はナデ、外面は縦・斜め方向のハケ目調整を施すが、胴部中位には、ハケ目を施す際、原体を器面に押し付けながら胴部に小口の圧痕を巡らし、沈線状の段を形成している。

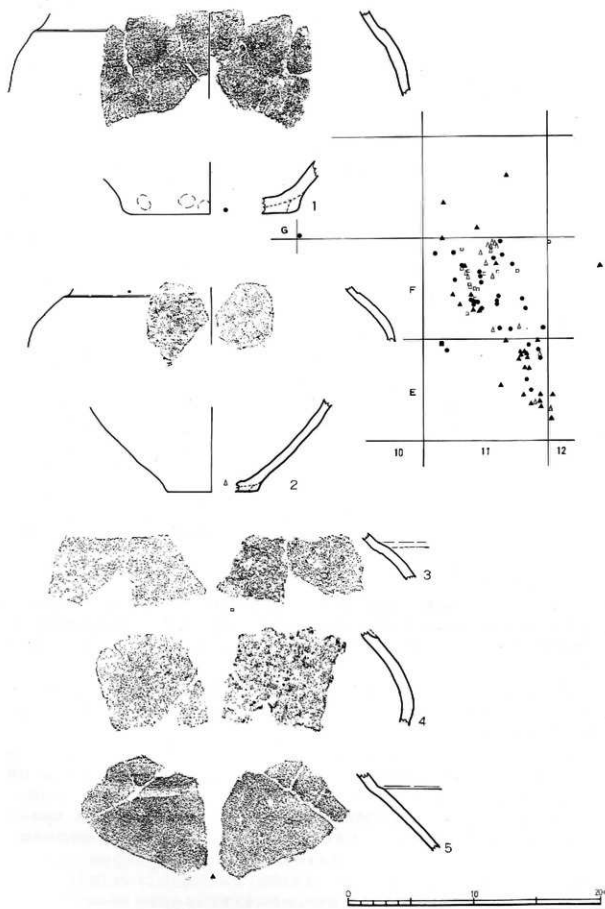
2はF-11区出土。復元口径27.0cm。1と同様板状工具により口唇部に刻み目を施しているが、下端刻みである。全体の器係は不明であるが、1のように長胴でなく砲弾状の器形を呈するものと思われる。口縁部は横ナデ、内面はナデ、外面は縦・斜め方向にハケ目調整を施した後、胴部上位に沈線を巡らしている。

3はG-11区出土。口径は30.0cmを測る。2と同じく板状工具による口唇部下端刻みである。口縁部は横ナデで内面はナデ、外面はハケ目調整後ナデである。1・2に比べ刻み目が大きく明確であるが、沈線の有無については不明である。

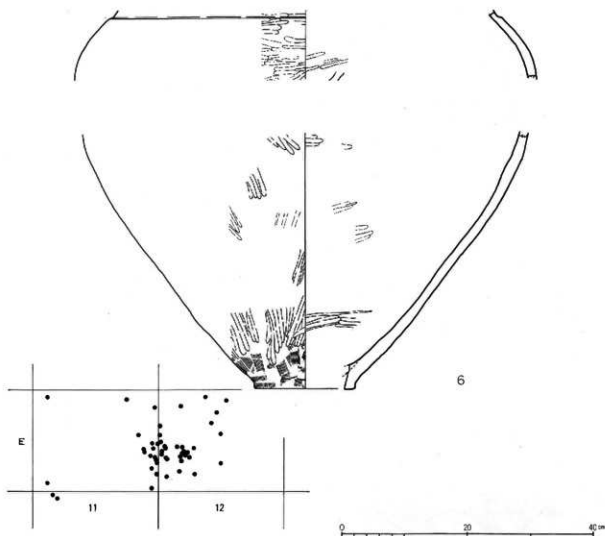
これらの土器は、1は橙色、2・3は明黄褐色を呈す。いずれも胎土に長石、角閃石を含むが、1には5～6mm大の石英、2・3には3～4mm大の石英が含まれる。また、1には4～5mm大の結晶片岩や小礫が多く含まれており、胎土に違いが見られる。

2類-e (下城式土器に含まれるもの 第25図)

1はF-10区出土。復元口径27.2cm。ハケ目調整後、口縁部下端をつまみ出し、さらに端部下位に突帯を付す。口縁部はやや内湾する。へう状工具により横方向から端部下端及び突帯へ同時に刻み目を施す。端部や



第26図 一方平IV遺跡出土土器21



第27図 一方平IV遺跡出土土器22

突帯付近は横ナデ、内面はナデ、外面は縦・斜め方向のハケ目である。

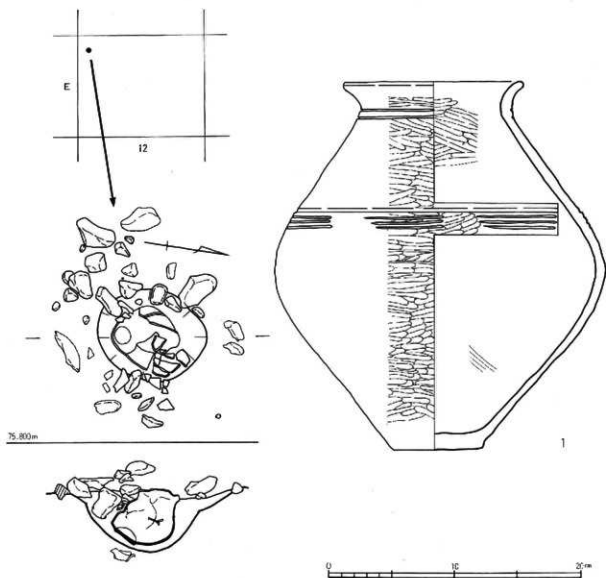
2はF-10区出土。1と同様に口縁端部をつまみ出し、その下位に突帯を付すが、刻み目はヘラ状工具により別々に施している。口縁部は大きく外反しており、ハケ目調整後突帯を付している。端部付近や突帯はナデ、内面は横・斜め方向のハケ目調整の後ナデ、外面は縦・横方向のハケ目であるが、突帯を付した後再度ハケ目調整を行っている。

3はF-11出土。復元口径20.6cm。1と同様に口縁部をつまみ出し、その下位に突帯を付し、ヘラ状工具により横方向から同時に刻み目を施す。口縁部も内湾しており1に類似しているが、やや小型である。端部や突帯付近は横ナデ、内面はナデ、外面は縦・斜め方向のハケ目である。

4はF-11区出土。口縁は19.0cmを測る。2と同様に口縁端部をつまみ出し、その下位に突帯を付し、刻み目はヘラ状工具で別に施している。口縁部も外反しており、2に類似しているが、やや小型である。端部付近や突帯はナデ、内面は横・斜め方向のハケ目調整の後ナデ、外面は縦・横方向のハケ目である。これらの土器は、1は明赤褐色、2～4は明黄褐色を呈し、胎土に長石、角閃石、2～3mm大の石英や小礫を含む。2には6mm大の石英や5mm大の小礫も含む。

VI群土器 壺形土器（第26図～第29図）

器形と文様により2つに分類。



第28図 一方平IV遺跡出土土器23

1類 肩部に段を設けるもの。(第26～27図)

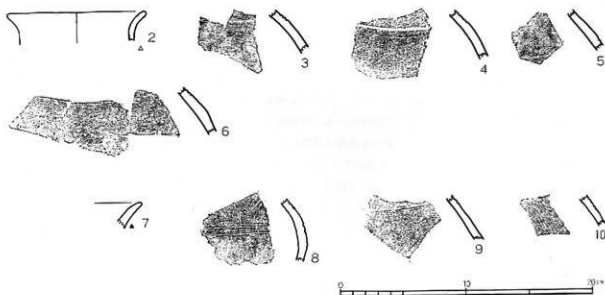
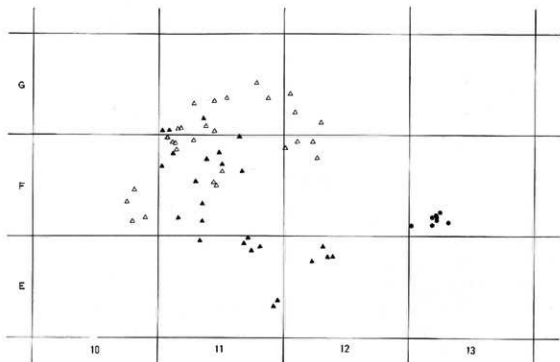
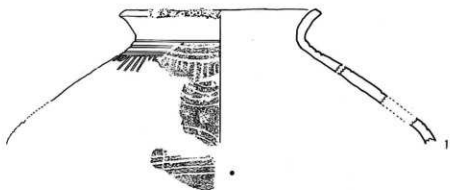
1はF-11区出土。肩部の復元径27.6cm、復元底径14.0cmを測る。底部に円環状の粘土紐を貼り付け、そこに粘土を充填し、平底に仕上げている。口縁部の器形は不明である。内面は丁寧なナデ、外面はへら状工具による研磨である。器面に丹が塗られているいわゆる丹塗磨研帯である。

2はF-11区出土。肩部の復元径は23.6cm、復元底径7cmを測る。底部は平底で、1と同様、底部に円環状の粘土を巡らせ、そこに粘土を充填している。器面は、内面は条痕調整後丁寧なナデ、外面はへら状工具による研磨である。

3～4は同一個体である。F-11区出土。1や2と同じように、内面は丁寧なナデ、外面はへら状工具による研磨であるが、胴部の内面には砂粒が動くほどの強いナデが見られる。口縁部、底部の器形は不明である。

5はE-11区出土。3と同じように、丁寧なナデ、外面はへら状工具による研磨である。口縁部、底部の器形は不明である。

6はE-11、12区出土。肩部の復元径60.8cm、復元底径16cmを測る丹塗磨研の大甕である。底部は底が抜けているが、粘土紐を高台上に貼り付け、内部に粘土を充填していたと思われる。内面はナデであるが一部へら状工具による研磨、外面はハケ目調整後、へら状工具による研磨を施している。



第29圖 一方平IV遺跡出土土器24

これらの土器は、1・2は浅黄褐色、3は明褐色、4は明黄褐色、5は明赤褐色で、胎土にいずれも長石、角閃石、1～3mm大の石英を含むが、3・4・5は1・2に比べると石英の量が多く、結晶片岩も含まれている。

2類 頸部の段が削り出しによるもの(第28図)

1はE-12区出土。斜めに埋納された形で出土。器高28.6cm、口径14.0cm、胴部最大径26.0cm、底径7.1cmを測る。口縁部は短く外反し、頸部は短く内傾する。口縁部と頸部の境にはへら状工具による二本の沈線が通っている。胴部最大径は器高のほぼ中位にあり、胴部と頸部の境には、削り出しによる段を巡らす。その下位に、5cm～6cm程度の沈線による3本1組の平行弧文を、右方向から等間隔で8単位施す。底部は平底である。内面はハケ目調整後、へら状工具による横・斜め方向の研磨、外面はナデ後沈線を巡らせ、へら状工具による横・斜め方向の研磨、口縁部付近は横ナデ、底部付近はナデである。底部に粗の片痕が残る。明褐色を呈し、外面には焼成時の黒痕が残る。胎土に長石、角閃石、4mm台の石英を含む。

3類 頸部や胴部に沈線による文様が施されるもの(第29図)

1はF-13区出土。口径は15.0cmを測る。口縁部は短く外反し、口唇部には同心円状の刺突文を施文している。頸部と胴部の境は明確でない、いわゆる「なで肩」状の頸部を持つ。頸部と胴部の境には、へら状工具で4本の沈線を巡らし、さらに胴部には区割り重弧文を施文している。胴部最大径は器高のほぼ中位に持ち、球状の胴部を持つ。内・外面共にナデで、その後施文している。赤褐色を呈し、長石、角閃石、2～6mmの石英、4～6mm大の小礫を含む。全体的に石英や小礫が多い。

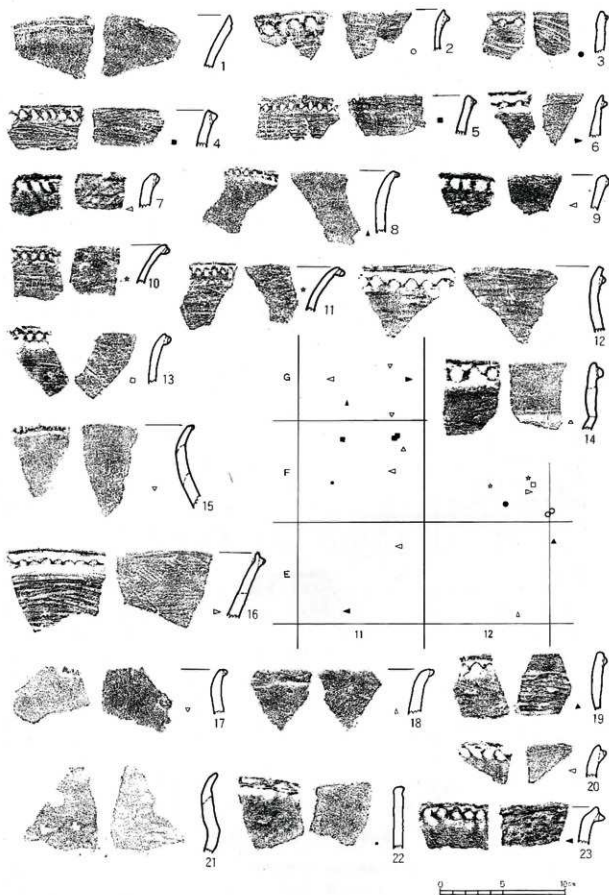
2～6は同一個体である。G-11区を中心に出土。2は緩やかに外反する口縁部で、口径は10.8cmを測る。3～6は頸部や胴部であるが、へら状工具で頸部に二本の沈線を巡らせる。内・外面ともに施文後、へら状工具による研磨である。橙色を呈し、胎土に長石、角閃石、石英を含む。

7～10は同一個体である。E-11・12区出土。7は口縁部で、やや直線的に外反すると思われる。8～10は頸部や胴部で、へら状工具で沈線を施した後、半截竹管により連続重弧文を施文している。内面がナデ、外面は施文後へら状工具による研磨である。棕色を呈し、胎土に長石、角閃石、1～3mm大の石英を含む。

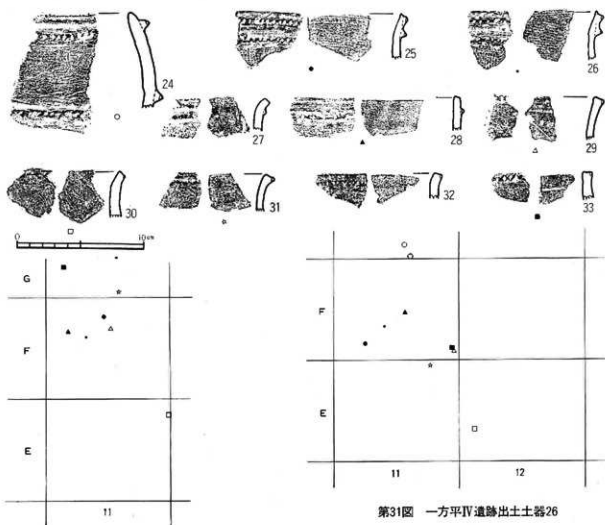
以上、一個体毎の分布図をもとに説明を加えてきたが、以下は個体分類のできない土器について説明する(第30図～35図)。

1～24は深鉢のⅡ縁部である。1は口縁部に波状沈線が施文されている。調整は器面の状態が悪く不明であるが、Ⅲ群土器群(西平式土器に相当)に属す。2～17・19・20・23は刻目突帯文土器である。4・5・7・11・13・15・17は端部直下、他は端部や下位に突帯を付している。刻み目は、4・5・7・10・11・13は棒状工具、8・15・17はへら状工具で横方向、他は下方からの指刻みであるが、9は横方向からの指刻みである。いずれも明褐色を呈し、二枚目による条痕調整後、内面は強いナデ、外面はナデである。2～6・10～13・16・23は外面に条痕が残る。18は無刻目突帯を端部直下に付す。黄褐色を呈し、内・外ともにナデである。21は突帯を付さないが、屈曲部に刻み目を意識したような痕跡がある。明黄褐色を呈し、内面はへら状工具による強いナデ、外面は器面の状態が悪く不明である。いずれもⅣ群土器群に属する。22は口唇部を等間隔につまみ出している。刻み目は長石、内明褐色を呈し、内・外ともにナデである。ハケ目は見られないが、Ⅴ群に属する可能性もある。いずれも長石、角閃石、石英を含む。24は2条刻目突帯を有する土器で、胴部が「く」の字状に屈曲し、頸部はやや膨らみを持ちながら直線的に内傾している。赤褐色を呈し、内・外共に横方向のナデである。この土器は直入町古殿遺跡に類例を見る。同じ2条刻目突帯を付すⅤ群1類土器と比較すると、器形に違いが見られ、胎土も石英が少ないことから、他地域より持ち込まれた可能性がある。

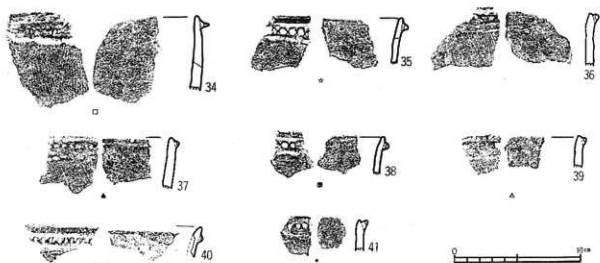
25～46はⅤ群に属する釜の口縁部である。25・26は同一個体で、Ⅱ唇部をつまみ出し、その下位に突帯を付し、へら状工具で上下同時に刻み目を施している。赤褐色を呈し、内面は横ハケ、外面は縦ハケである。2類一c、いわゆる下城式土器に属す。27・28は、Ⅱ縁部を面取し、端部下位に刻み目突帯を付す。27は外反する



第30圖 一方平IV遺跡出土土器25

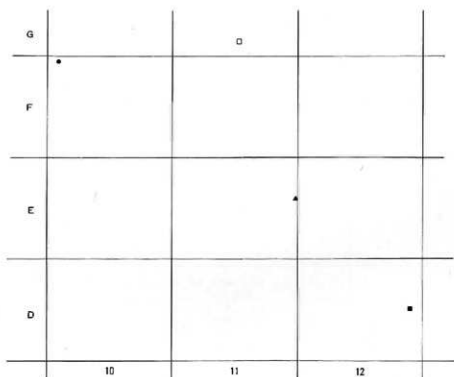
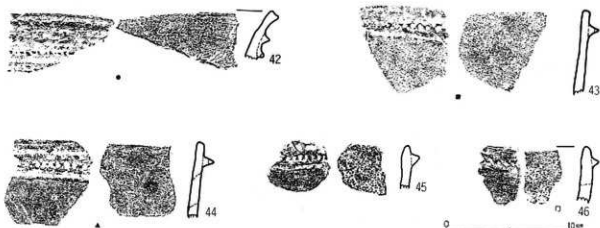


第31図 一方平IV遺跡出土土器26



第32図 一方平IV遺跡出土土器27

口縁を有し、明褐色を呈す。刻み目や調整は器面の状態が悪く不明である。28は直線的な口縁を有する。黄褐色で、内・外ともにナデである。カーボンが付着している。24～33はいずれも外反する口縁を有し、11層部をつまみ出し、ヘラ状工具により刻みを施している。いずれも明赤褐色を呈し、内面はナデ、外面は、29～31は

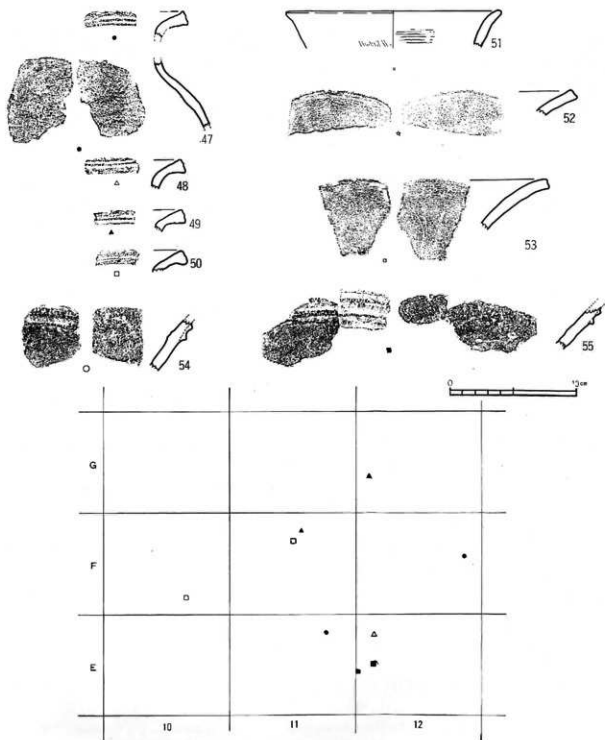


第33図 一方平IV遺跡出土土器28

ハケ目、32・33はナデである。いずれも胎土に長石、角閃石、石英を含む。28は2類-bに、他は2類-aに属す。

34~41は口縁端部やや下位に突帯を付す。40は明黄褐色、他は明赤褐色を呈し、いずれも内面はナデ、外面は縦・斜め方向のハケ目で、2類-bに属す。42は口唇部をつまみ出し、さらにその下位に2条刻み目突帯を付す。ヘラ状工具により刻み目を施す。口唇部及び上段の突帯は同時に刻まれている。明黄褐色を呈し、カーボンの付着も見られる。2類-cに属す。いずれも胎土に長石、角閃石、石英を含むが36・37・39・41には結晶片岩を含む。43~46は口縁部下位に刻み目突帯を付す。43・44は同一個体で灰白色を呈す。内面はナデ、外面は縦・斜め方向のハケ目である。45・46は明赤褐色を呈す。器面の状態が悪く、調整は不明である。いずれも2類-a属し、胎土に長石、角閃石、石英を含む。

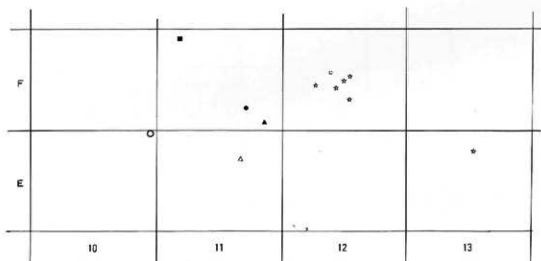
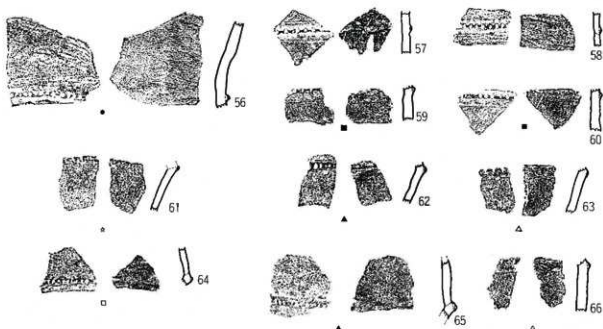
47~50は同一個体の可能性が高く、V群に属さない土器である。口縁部が人さく外反し、端部が拡張され、2条の凹線文を付している。いわゆる瀬戸内系の「凹線文土器」土器で、弥生中期後葉~後期前半のものと思



第34図 一方平Ⅳ遺跡出土土器29

われる。外面は橙色を呈しナデ、内面は黒褐色を呈し、黒色磨研に近い調整を行っている。胎土に長石、角閃石、3～6mm大の石英を含む。

51～55は壺の口縁部である。51は口径17.0cmを測り、外面は縦・斜め方向のハケ目、内面は横方向のハケ目調整後、ていねいにナデている。52・53は同一個体の可能性が高い。端部を面取りし、内面は横ナデ、外面はナデによる。54・55も同一個体の可能性が高い。外面に2条の刻み目突帯を付し、内・外ともに研磨である。51・52・53は明黄褐色を呈し、54・55は赤褐色を呈す。いずれも胎土に長石、角閃石、3～5mm大の石英を含む。

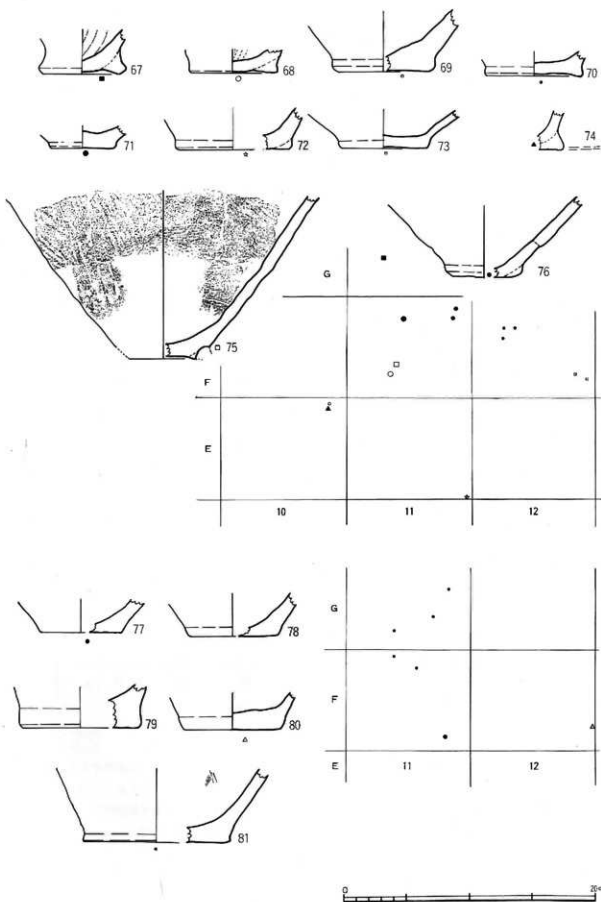


第35図 一方平IV遺跡出土土器30

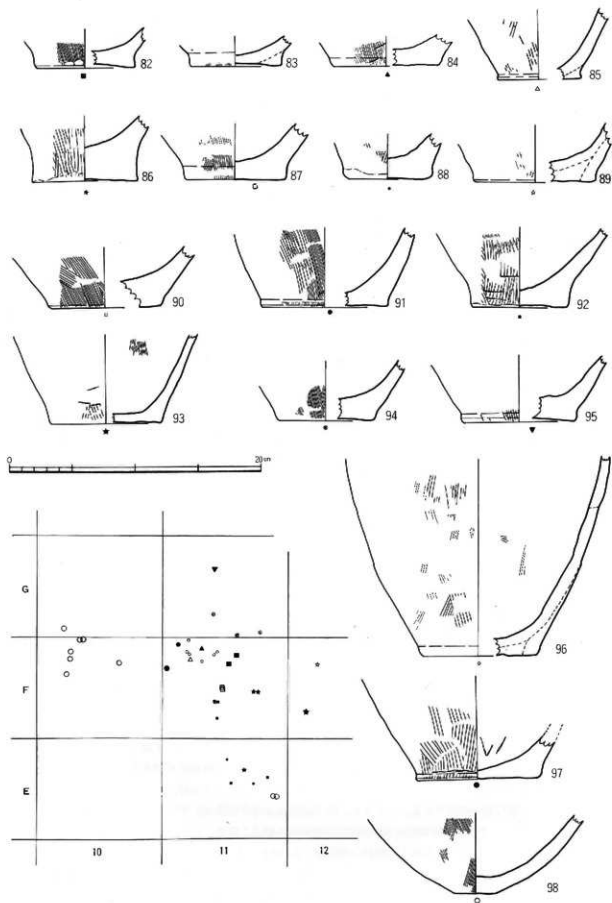
小片のため分類できず、時期も確定できない。

56～66はV群土器に属する甕の胴部である。56は2条刻み目突帯を付す。内面は明褐色でナデ、外面は褐色を呈しナデ、突帯付近は横ナデである。胎土に、角閃石が多く、石英が少ないことから、24と同じ時期に他地域から持ち込まれた可能性がある。57～60は胴部に削り出しの刻み目突帯を付す長胴の甕である。58は明黄褐色、57・59・60は明赤褐色を呈し器面は内・外面ともにナデ、突帯付近は横ナデである。いずれも胎土に石、角閃石、石英を含む。61～66は胴部に屈曲部を持つ甕である。内・外面にまばらにススが付着している物もみられる。いずれも屈曲部に刻み目を付し、ヘラ状の工具で刻み目を施している。内面はナデ、外面もナデだが、63と66にはハケ目調整の跡が残っている。胎土に長石、角閃石、石英を含む。

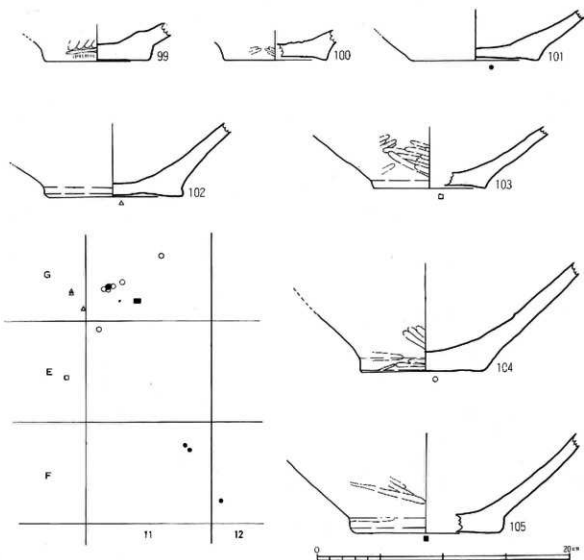
次に底部について説明する。(第36図～38図)



第36圖 一方平IV遺跡出土土器31



第37圖 一方平Ⅳ遺跡出土土器32

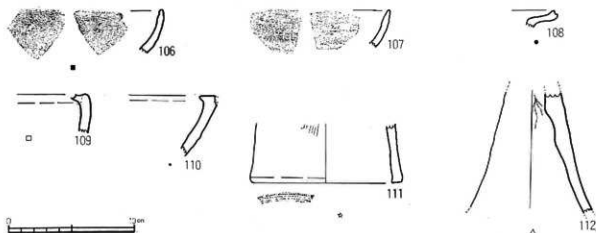


第38図 一方平IV遺跡出土土器33

67～76は、深鉢の底部である。上げ底状の底部を持つ。67は底径6.0cmを測り、内面はへら状工具による強いナデ、外面はナデである。底部に円環状の粘土紐を巡らした、上げ底状の横に張り出す底部である。68は底径6.8cmを測り、器面調整は67と同じである。69は復元底径5.8cm。67・68に比べると平底に近くなっている。内・外面ともにナデである。70は底径7.6cmを測る。71は復元底径5.0cmを測る。小皿の底部の可能性もある。72は復元底径8.6cmを測る。いずれも内・外面ともにナデである。73は復元底径6.6cmを測る。内面はへら状工具による強いナデ、外面はナデである。74は内・外面ともにナデである。75は横に張り出した部分が欠落している。二枚貝による条痕調整後、内面はナデ、外面はへら状工具による縦・斜め方向の強いナデである。76は復元底径6.0cmを測る。内・外面ともに二枚貝による条痕調整後、内面はナデ、外面もナデである。67は赤褐色、69・72・74は明赤褐色、68・73・75・77は明黄褐色、70は明褐色、76は淡褐色を呈する。いずれも胎土に長石、角閃石、石英を含む。

77～81は平底の甕の底部である。いずれも、内・外面ともにナデである。77の復元底径は6.4cm、78は6.8cm、79は9.0cmを測る。79は底部が厚い。80は復元底径7.6cmを測る。同様に底部が厚い。77・79・81明赤褐色、78・80は明黄褐色を呈す。いずれも胎土に長石、角閃石、3～4mm大の石英を含むが、81には4mm大の結晶片岩が含まれている。

82～98も平底の甕の底部である。81は復元底径11.6cm。内面はナデで、一部ハケ目が残り、外面は横・斜め方向のナデである。内・外面にはススが付着している。82は復元底径7.8cm。内面はへら状工具によるナデ、



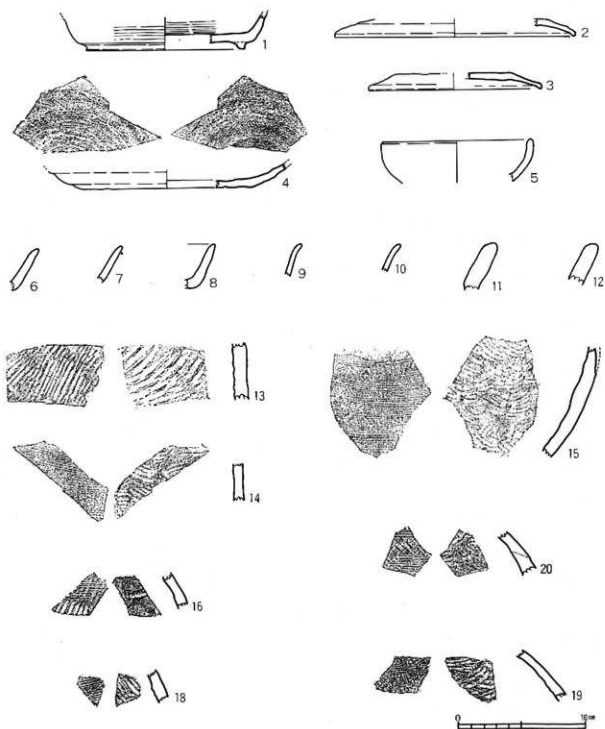
第39図 一方平IV遺跡出土土器34

外面はナデである。83は復元底径7.2cm。内面はナデで、外面は器面の状態が悪く不明であるが一部ハケ目が残っている。84は復元底径8.2cm。明赤褐色を呈す。内面はナデ、外面はハケ目である。85は復元底径6.6cm。

内面はナデ、外面はハケ目調整後ナデである。86は底径8.4cmを測り、内面はナデ、外面はハケ目である。87は底径7.8cmを測り、内面はナデ、外面はハケ目である。88は底径6.0cmを測り、内面はナデ、外面はハケ目調整である。89は復元底径9.0cm。内面はナデ、外面はハケ目調整である。90は復元底径8.4cm。内面はナデ、外面はハケ目である。91は底径9.9cmを測り、内面はハケ目

調整後ナデ、外面はハケ目である。92は底径7.6cmを測り、内面はナデ、外面はハケ目調整である。93は底径8.6cmを測り、内・外面ともにハケ目調整後ナデである。94は復元底径7.0cm。内面はナデ、外面はハケ目調整である。95は復元底径8.6cm。内面はナデ、外面はハケ目である。96は底径8.8cmを測り、長胴の胴部を持つ。明黄褐色を呈し、内・外面ともにハケ目調整後ナデである。内面にはカーボンが付着している。97は底径9.7cmを測る。内面はハケ目調整後ナデ、外面はハケ目である。98は底径が3cmでわずかに平底が残っている。内面はナデ、外面はハケ目で、弥生終末の上器と思われる。明赤褐色を呈す底部が多いが、87・96・98は明黄褐色、89は赤褐色を呈し、いずれも胎土に長石、角閃石、2～4mm大の石英を含み、82・87・89・91・92は5～8mm大の石英も見られる。また、84・93・96は結晶片岩を含む。

99～105は壺の底部である。99は底径8.2cmを測り、内面はナデ、外面はへう状工具による研磨である。100は復元底径8.2cm。器面の状態が悪く内面の調整は不明であるが、外面はへう状工具による研磨である。101は底径10.0cmを測る。器面の状態が悪く内面の調整は不明であるが、外面はナデである。102は底径10.8cmを測り、内面はへう状工具による強いナデ、外面は丁寧なナデであり、底面には糊の圧痕がある。103は底径8.8cmを測る。101と同じで内面の調整は不明であるが、外面はへう状工具による研磨である。104は底径9.8cmを測り、底部端の外側を意図的に一部削っている。器面は、内・外面ともにへう状工具による研磨である。105は底径11.2cmを測り底部端外側まで研磨している。99は赤褐色、100・103・104は明赤褐色、101・102・105は明黄褐色を呈す。いずれも胎土に長石、角閃石、2～5mm大の石英を含む。



第40図 一方平IV遺跡出土土器35

第39図はその他の土器である。106・107は同一個体である。11縁部であるが全体の器形は不明である。明黄褐色を呈し、胎土に長石、角閃石、1~2mm大の石英を含む。108は、甕の口縁である。跳ね上げ口縁に近い。弥生中前期前半の城ノ越式土器の甕である。黄褐色を呈し、胎土に長石、角閃石、石英を含む。109・110は高環の口縁部である。ともに明黄褐色を呈し、胎土に長石、角閃石、2mm大の石英を含む。111は高環の脚部と思われる。橙色を呈し、内面はナデ、外面はハケ目調整後ナデである。胎土に長石、角閃石、4mm大の石英を含む。112は高環の脚で明黄褐色を呈し、内面はナデ、外面は研磨である。内面にはカーボンが付着し、紋り

痕が残る。胎土に長石、角閃石、石英を含む

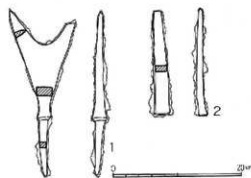
第Ⅶ群土器（古代の上器 第40図）

古代の土器は、量的に少なく、分布が散漫であるため分布図は示していない。1は土師器の杯身である。底部はヘラ切り離して高台が付いており、復元底径12.8cm。褐色を呈し、高台付近はナデ、内・外面ともに研磨である。器面調整の様子から8C後半と思われる。2・3はともに須恵器の杯蓋で、それぞれの復元口径は19.0cm, 11.8cm。天上部は回転ヘラ切り離して、内・外面ともに回転横ナデである。口縁端部の形状や天上部が平坦になっていることから、1と同じく8C後半と思われる。褐色を呈し、いずれも長石、角閃石、石英を含む。4・5は同じく須恵器であるが、時期・器種ともに不明である。4は、底部は回転ヘラ切り離して、内・外面ともに回転横ナデである。外面には重ね焼きの痕跡が残る。5は内・外面ともに回転横ナデである。いずれも褐色を呈し、胎土に長石、角閃石、石英を含む。6～10は杯、11・12は甕の口縁である。いずれも土師器で、褐色を呈す。11・12は器面の状態が悪く、調整は不明であるが、他は内・外共に回転横ナデである。いずれも胎土に長石、角閃石、石英を含むが、11・12は石英を多く含む。

13～19は須恵器の甕の胴部である。いずれも叩き後カキ目仕上げである。13は、内面は平行の当て具痕が残る、外面は平行叩き痕が残る。14～19は、内面に同心円の当て具痕が残る、16の外面には平行叩き痕が、17・19は外面に格子目状の叩き痕が残る。いずれも褐色を呈し、胎土に長石、角閃石、石英を含む。（甲斐）

(3) 鉄器（第41図）

1はD-14区出土。雁股式の鉄鎌である。全長は12.8cm、基部は4.3cmを測り、基部の断面は方形で、刃部は楔状である。狩猟用の鎌で刃を内側に付け、獲物の足首などを切るのに適したといわれている。普通は銅と一体で、征矢の上差にも用いられた。三光村佐知遺跡の中世墓出土の鉄鎌に類似をみることから中世のものとする。2は鉄製の工具と思われる。全長は8.3cmを測り、基部は1.2cm、先端部は0.6cmを測り断面は方形である。時期は不明である。（甲斐）



第41図 一方平Ⅳ遺跡出土鉄器

（甲斐）

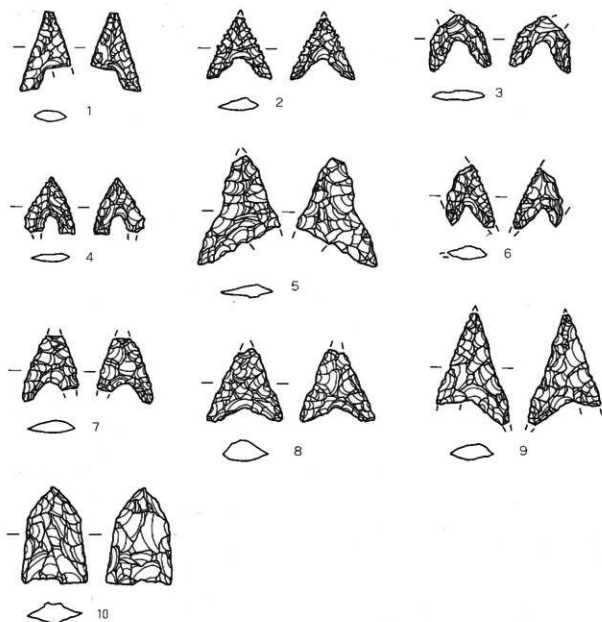
(4) 石器

礫層の上にアカホヤ火山灰層の分布する範囲から、石器が出土した。大部分はアカホヤ火山灰層起源の土層中から出土したが、一部の姫島産黒曜石・チャート等の小割片はそれを除去した段階の下層の礫層からも出土した。また、全体の調査区の中で、ヶ所南側に孤立しているB区調査区では、礫層の上に薄く火山灰層の堆積がみられるので、土層の分布する範囲を調査した。ここから1点だけ遺物が出土した（第53図3）。

土器の項で述べられているように、アカホヤ火山灰層の上層からは縄文時代前期・中期・後期の土器少量と本遺跡で主体となる最の晩期から弥生時代の土器が明確には分離できない状態で見つかっていて、土器の量的な点から石器も大部分は縄文時代晩期から弥生時代に属するものだと考える。ただし、これまで縄文時代の他の遺跡ではほとんど使用例のない流紋岩を使っており、これらの石器は通例どおり旧石器時代のものである可能性も完全には否定できない。

石鎌（第42図1～10）

石鎌に利用した石材はチャート・姫島産黒曜石・安山岩（サヌカイト）で、規模的には長さ2cm以下のものと2cm以上のものの大小2種類がある。小型のうち4点のチャートは形態・石材から縄文時代のものであろう。



第42図 石鏃

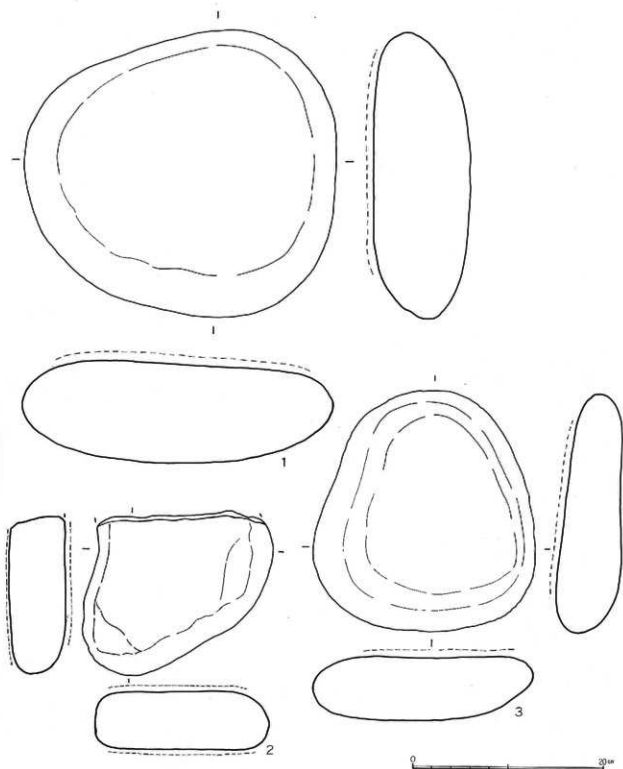
さらに層位的に第42図7は縄文時代のものである。10点の石鏃のうち、縄文時代晩期から弥生時代に属するのは5点だと考える。これらは姫島産黒曜石が3点、安山岩（サヌカイト）が1点、チャートが1点の割合を示す。

石皿（第43図1～3）

自然の扁平な川原石の平坦面が摩滅したもので、磨石類を利用する際の台石である。3点出土した。1・3は平たい自然石の片面にだけ使用痕がある。2は一端が割れた後も使用したため、破損部分の角がとれている。両面に使用痕がある。

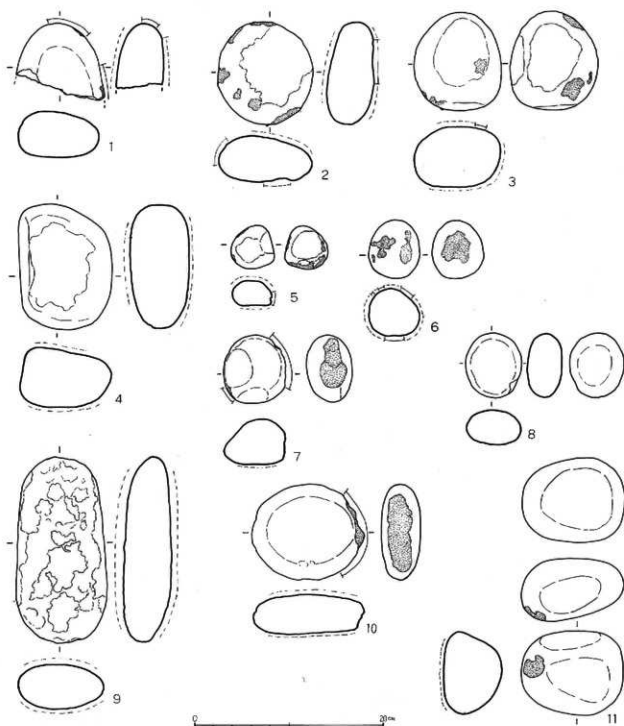
磨石類（第44図1～11、第45図1～14、第46図1～11、第47図1～14）

敲打に使用したため鏃面の一部が剥落（実測図では外側に実線で示した範囲）したものは叩き石と呼ばれ、使用によって摩耗痕（実測図では外側に破線で示した範囲）を残したものは磨石と呼ばれる。しかし、同一の石でありながら両方の特徴をもった例が多く、ここでは一括して磨石類として扱う。48点が出土した。層位的に下部



第43図 石皿

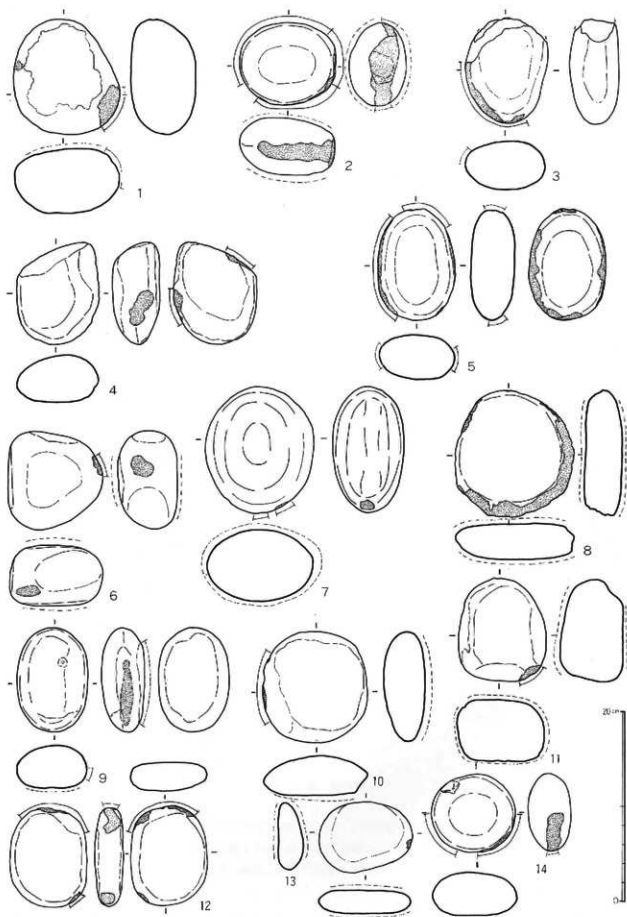
から出上し、縄文後期かそれ以前と考えられるもの2点(第44図1・第47図2)を除けば、調査区内に満遍無く分布する状態であった。大きさにばらつきがあるが、ほとんどのものは扁平な礫を利用している。この中で磨耗痕だけをもち、敲打痕のないものは第46図1～4・6・8・11・第47図1～14の21点である。第46図1・同2・4は全体的に磨耗痕があるが破損部は特にめだつ。第47図1・第44図8は全周囲磨き。第47図2の片面の凹は自然のもの。



第44図 磨石類

石核 (第48図1・4、第49図1・2、第54図1)

5点の石核が出土した。第48図1は人型の円礫を利用した石核の最後の方の残りである。同図4は流紋岩製で、板状の剥片を利用している。第49図1は片面に少し礫面を残した厚手の剥片を利用し、両面から中心に向かって剥離作業が行なわれている。第49図2は砂岩だが、2と同様に片面に礫面を残す剥片に対し、求心的な剥片剥離が行なわれている。第54図1は剥片を利用した石核で、同図2の剥片が接合する（接合関係の分布状態は第56図）。



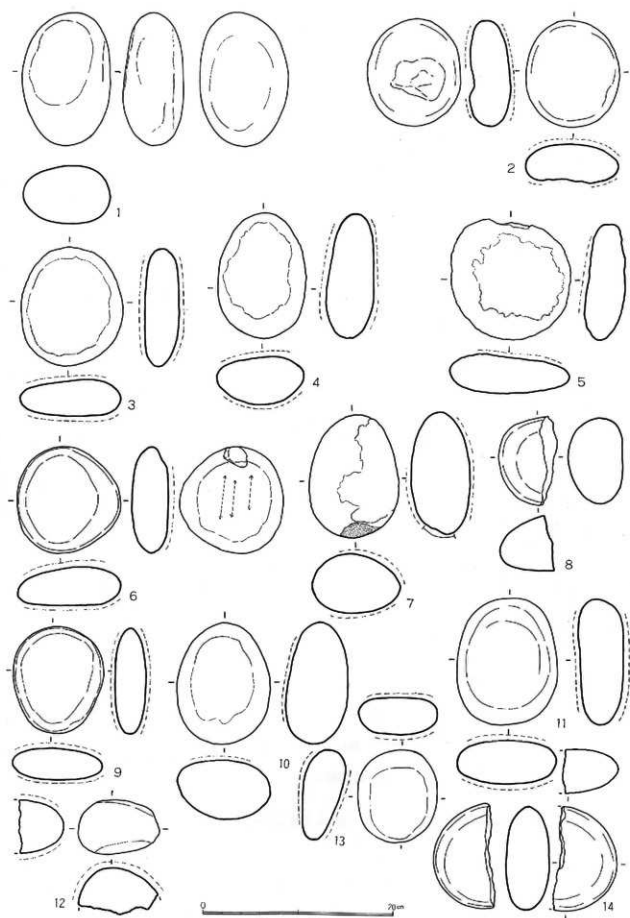
第45圖 磨石類



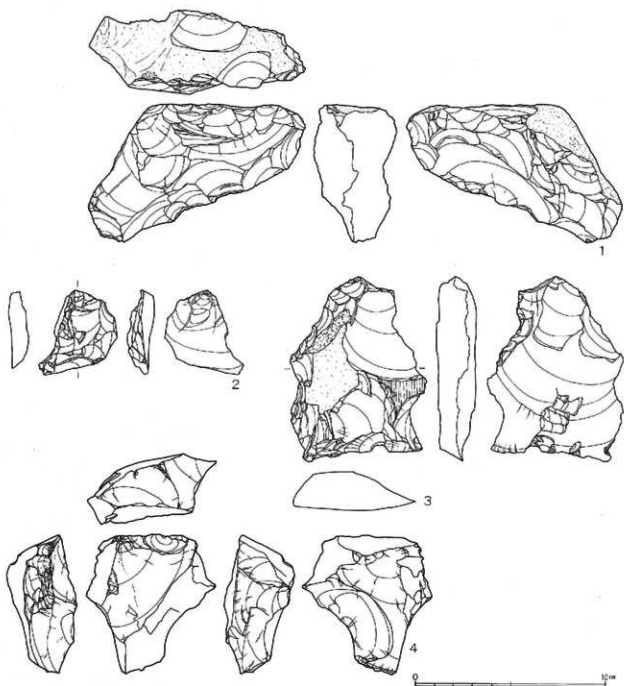
第46図 磨石類

礫器（第50図1・2、第51図1・2、第52図1・2、第53図2）

7点出土した。第51図1と第52図1は片面が礫面のままで、もう1面は平坦に見えるが節理で割れた礫面である。第50図1と第52図2は片面が礫面で、他面が剥離面である。礫器の素材という面からいえば、円礫をそのまま利用したものが5点、剥片を利用したものが2点ということになる。刃部の位置は長軸の端部にあるもの（第52図2・第53図2）、三角形をなす平面形のもっとも長い辺あるいは他の1側辺にもあるもの（第50図1・第51図1・2）、円い平面形片側にあるもの（第50図2・第52図1）がある。



第47図 磨石類



第48図 石核・剥片

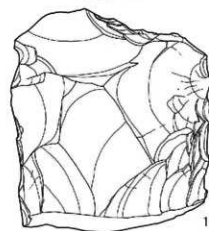
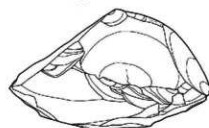
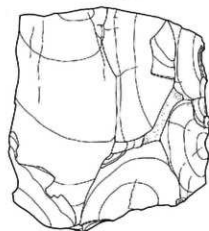
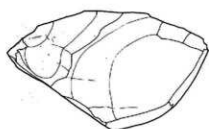
第50図1は砂岩製で、円盤の1側辺を集中的に剥離している。

剛器（第52図4・5）

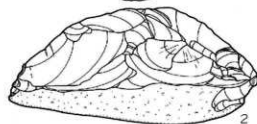
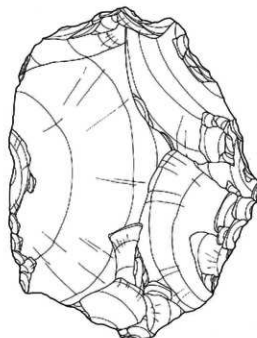
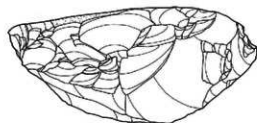
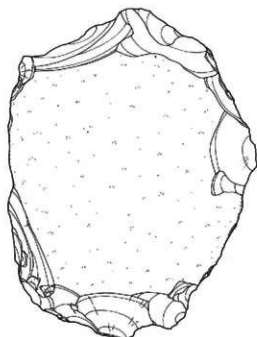
4は姫島黒曜石の剥片の2側辺と端部を二次加工し刃部を作っている。5は砂岩製で、剥片の両側辺に刃部を作り出している。

横刃型石器（第51図3・第54図5）

剛器的用途の石器である。3は安山岩製の剥片を加工し、一辺を直線的に向面から剥離を加えて刃部を作り、素材の打面周辺は剥ぎ取って円く形づくっている。片面には原石面を残す。5も1側辺にのみ両面からの剥離によって刃部を形づくっている。



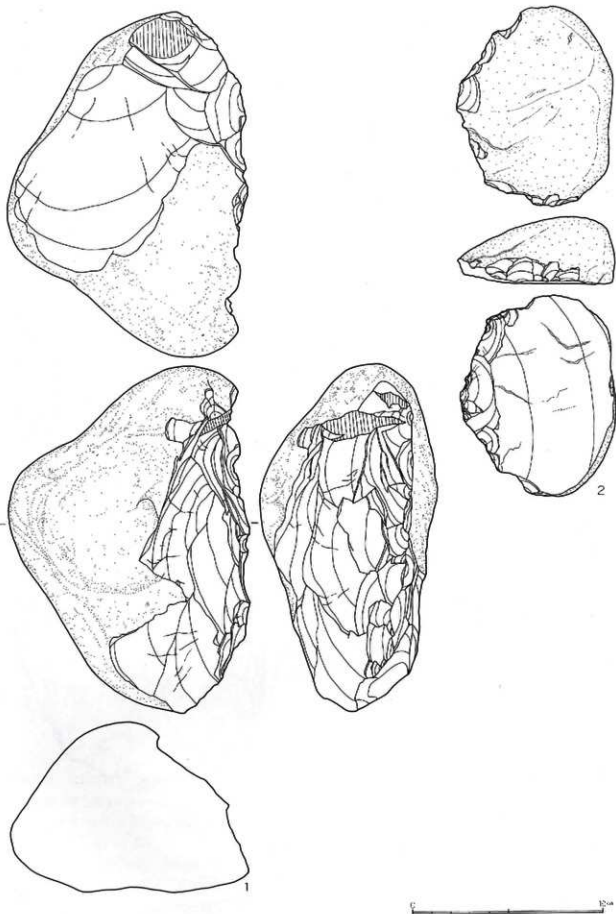
1



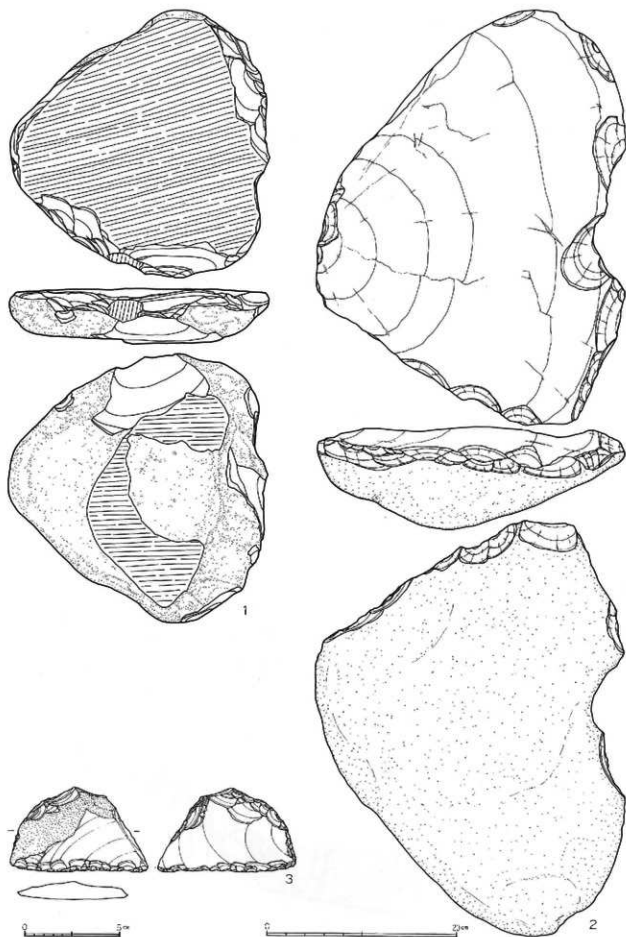
2



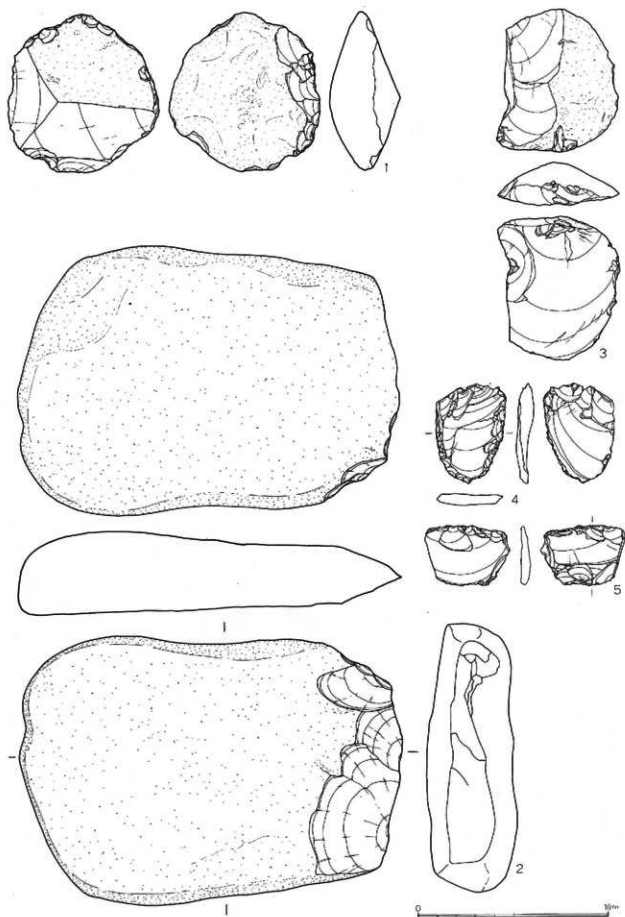
第49图 石核



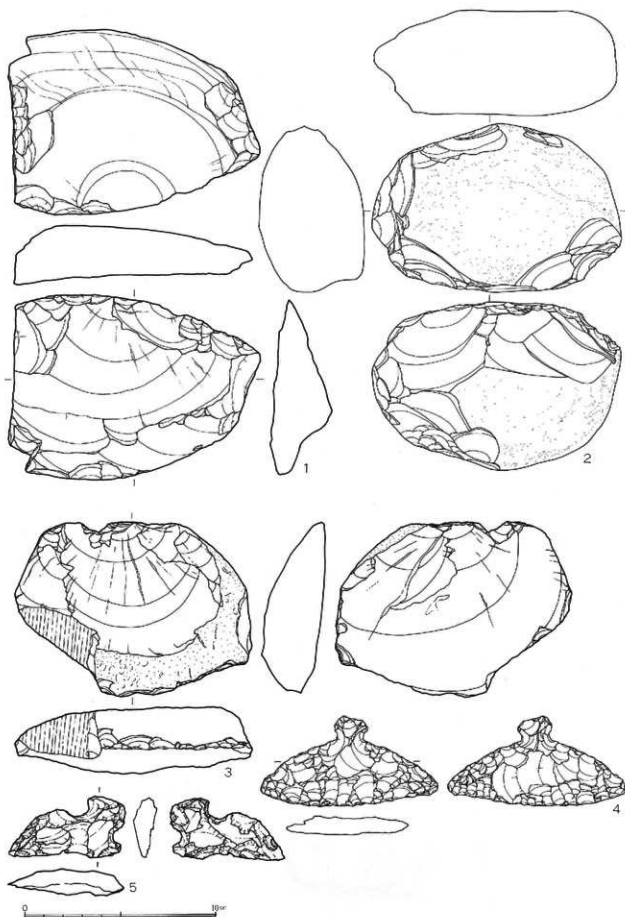
第50図 磁器



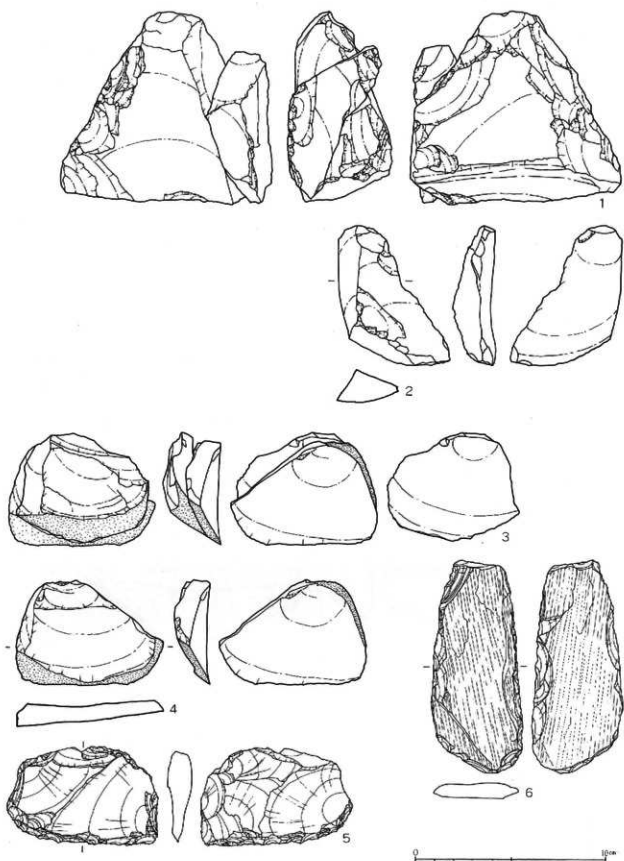
第51図 礫器・削器



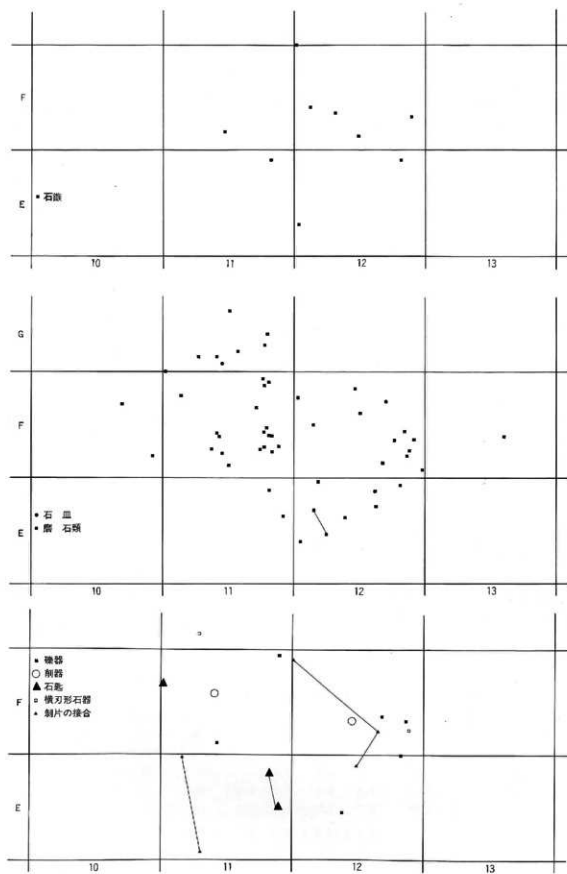
第52図 礫器・削器



第53图 砾器·削器·石匙



第54圖 石器接合資料・削器・扁平打製石器



第55図 石器分布図

石匙（第53図4・5）

2点出土している。5はふたつの破片が接合したもので、そのうちの一つは晩期から弥生時代の、もう一つはそれ以前の層から出土したので、5は縄時代文後期あるいはそれ以前に属するものであろう。

扁平打製石器（第54図6）

重機による表土剥ぎの前に表面採集した遺物である。両面とも節理によって板状に剥げた面で、周辺からの剥離によって石斧状に整えられている。一方平遺跡やその南方に位置する牧ノ内遺跡に類例が多い。

その他の石器接合資料（第54図3・4）

G11区の縄文時代晩期から弥生時代の層で、接合した剥片である。同じ打面を用いて剥離した2個の同じような剥片がとれている。円礫を素材としている。

（高橋）

石器観察表 1

(単位cm・g)

グリッド番号	器種	石材	北から	東から	長さ	幅	厚さ	重量	図-No	層その他
E-11-54	剥片	チャート	156	604	1.7	1.7	0.3	0.9		
E-11-100	剥片	流紋岩	368	74	4.3	6.9	1.7	46.3		
E-11-115	磨石	角閃安山岩	296	84	9.6	8.4	3.95	527.0	第47図13	
E-11-123	石核	流紋岩	20	846	11.0	9.3	5.2	611.0	第54図1	
E-11-184	石匙片	安山岩	140	166	4	2.2	1	7.8	第42図11	
E-11-188	剥片	安山岩	318	146	1.6	2.25	0.7	2.1		
E-11-251	剥片	チャート	92	106	1.9+	3.1+α	0.6+α	3.5		
E-11-253	石鏃	チャート	70	170	1.5+α	1.3+α	0.2	0.3	第42図4	
E-11-321	剥片	安山岩	112	270	1.6	2	0.4	1.0		
E-11-324	剥片	チャート	400	440	2.7+α	3.2+α	0.5+α	3.7		
E-11-327	磨石	角閃安山岩	94	186	8.2+α	9.3	4.9	447.8	第44図1・4層下部	
E-11-331	石匙片	安山岩	400	108	3.4+α	3.5+α		13.6	4層下部	
E-11-343	剥片	流紋岩	638	64	4.5+α	8.9+α	2.5+α	55.2	4層下部	
E-11-一括	刮削器	流紋岩			13.3	9.8	3	433.6	第53図1	
E-12-9	石鏃	チャート	558	968	1.5+α	1.6+α	0.2	0.5	第42図3	
E-12-183	磨石	角閃安山岩	386	816	12.1	9.5	6.3	1053.1	第47図7	
E-12-192	剥片	流紋岩	550	660	4.8	5.2	1.4	27.2		
E-12-194	剥片		306	612	9.6+α	7+α	4.8+α	363.5		
E-12-197	磨石	角閃安山岩	106	384	11.0	9.3	6.6	1047.0	第45図11	
E-12-205	蔽石	砂岩	56	186	13.9	9.15		575.0	第46図5	
E-12-208	石皿	砂岩	250	848	5.8+α	12.5+α	4.1+α	500.0	第46図10	E12-402と接合
E-12-211	蔽石	角閃安山岩	494	772	7.3	9.65	5.1	563.8		
E-12-212	磨石	角閃安山岩	218	370					第44図4	
E-12-215	剥片		68	110	8.2+α	13+α	4.5+α	624.7		
E-12-218	石鏃	サヌカイト	70	192	2.5	1.7	0.5	1.9	第42図10	
E-12-224	蔽石	安山岩	102	488	12.4+α	4.5+α	3.2+α	238.0		
E-12-226	剥片	流紋岩	84	512	7.7+α	5+α	3.1+α	122.9		
E-12-241	礫器	流紋岩	4	174	8.3+α	10.6+α	3.5+α	363.0	第50図2	
E-12-323	剥片	安山岩	594	834	1.4	2.1	0.1	0.5		
E-12-362	磨石	角閃安山岩	486	952	11.6+α	8.1+α	4.7+α	645.0	第45図5	
E-12-395	礫器	流紋岩	440	622	12.8+α	18.3+α	9+α	245.0	第50図1	
E-12-396	小剥片		392	612	2.6+α	4.8+α	1.3+α	12.1		
E-12-399	磨石	角閃安山岩	302	604	11.45	13.3	7.6	1573.7	第45図7	
E-12-402	石皿	流紋岩	428	752	11.1+α	7.8+α	4.3+α	491.3	第46図10	
E-12-403	剥片	流紋岩	432	772	8.9+α	5.7+α	2.2+α	122.9		
E-12-404	小剥片		400	938	1.4	2.3	0.5	1.2		
E-12-439	剥片	姫島OB			1.9	3.7	1.0	8.8		10層出土
E-12-440	礫器	流紋岩			8.4	8.0	3.7	222.0	第52図1	
F-10-4	剥片	泥岩	606	134	4.5	7.4	1.1	34.7		
F-10-28	石皿	角閃安山岩	254	348	23.3	25.2	7.0	5900.0	第43図3	
F-10-44	磨石	砂岩	638	74	9.0+α	8.2+α	4.5	473.2	第45図14	

石器観察表2

(単位cm・g)

グリッド番号	器種	石 材	北から	東から	長さ	幅	厚さ	重 量	図No	層その他
F-10-63	剥片		448	80	2.8	5.6	0.9	13.5		
F-10-105	磨石	角閃安山岩	246	308	12.3	11.3	6.9	1338.2	第45図1	
F-10-133	剥片	泥 岩	296	204	7.9+ α	6.5+ α	2.0+ α	108.4		
F-10-134	剥片	流紋岩	384	96	6.7	7.5	2.5	131.6		
F-10-135	UF	姫島OB	516	10	1.8	2.8	0.7	2.3		
F-10-137	剥片	流紋岩	282	164						
F-10-括	礫器	流紋岩			16.4+ α	21.4+ α	5.4+ α	1850.0	第51図2	
F-11-99	剥片	流紋岩	570	692	2.5+ α	2.1+ α	1.1+ α	3.8		
F-11-129	礫器	流紋岩	710	574	13.7+ α	14.1+ α	2.8+ α	800.0	第51図1	
F-11-145	磨石	砂 岩	710	500	13.2	9.35	5.0	903.1	第47図4	
F-11-152	剥片	流紋岩	514	590	6.4	5.15	2.5	66.5		
F-11-171	磨石	安山岩	488	566	8.4	6.4	6.2	448.2	第46図1	
F-11-185	剥片	流紋岩	334	588	9.9+ α	10+ α	3.2+ α	277.0		
F-11-186	スライパ-	姫島OB	330	594	5.2	3.7	0.6	14.6	第52図4	
F-11-197	剥片	流紋岩	554	498						
F-11-199	剥片	流紋岩	552	444	5.9+ α	7+ α	1.6+ α	69.3		
F-11-203	UF	流紋岩	508	396	10.4+ α	6.2+ α	2.5+ α	113.6		
F-11-256	磨石	流紋岩	568	224	10.2+ α	8.7+ α	6	738.4	第45図2	
F-11-267	磨石	角閃安山岩	460	228	8.7+ α	5.7+ α	4.9	308.3	第47図12	
F-11-269	剥片	安山岩	402	232	2.3+ α	3+ α	1+ α	4.7		
F-11-274	敲石	角閃安山岩	428	204	12.9+ α	17+ α	4.6	1440.0	第46図7	
F-11-284	磨石	角閃安山岩	274	286	11.0	10.9	4.1	665.9	第47図6	
F-11-291	小剥片	安山岩	258	330	2.4	2.5	0.5	2.4		
F-11-307	磨石	安山岩	614	164	11.1	9.6	3.4	519.0	第47図9	
F-11-327	剥片	流紋岩	224	186	2.7+ α	5.6+ α	1.3+ α	15.3		
F-11-336	剥片	流紋岩	662	78	4.0	6.6	1.1	19.6		
F-11-340	剥片	流紋岩	638	56	4.6+ α	4.9+ α	1.2+ α	21.2		
F-11-342	小剥片	流紋岩	556	74	2.8	2.6	0.7	5.1		
F-11-380	剥片	流紋岩	84	388	1.5+ α	2.3+ α	0.3+ α	1.1		
F-11-434	礫器	砂 岩	46	96	13.2	8.9	5.6	900.0	第53図2	
F-11-436	剥片		244	762	6.9	7.1	2.0	61.6		
F-11-557	小剥片		104	568	1.9+ α	2.9+ α	2.5+ α	2.9		
F-11-616	磨石	角閃安山岩	56	238	7.6	10.9	4.5	542.9	第45図9	
F-11-628	磨石	角閃安山岩	78	194	11.0+ α	6.6+ α	4.7+ α	417.8	第47図14	
F-11-634	剥片	姫島OB	386	422	1.8+ α	3.7+ α	1.3+ α	6.6		
F-11-661	石核	流紋岩	602	128	10.6	11.8	6.4	900.0	第49図1	
F-11-688	磨石	角閃安山岩	488	168	9.4+ α	6.2+ α	5.9+ α	399.5	第47図8	
F-11-699	石核	流紋岩	528	480	6.5	7.6	2.2	110.6	第52図3	
F-11-700	石核	流紋岩	418	494	7.3	6.9	3.7	120.5	第48図4	
F-11-705	剥片	流紋岩	650	542	2.4+ α	3.6+ α	1.3+ α	8.1		
F-11-707	剥片	流紋岩	628	538	2.1+ α	2.7+ α	0.6+ α	3.1		
F-11-715	剥片	安山岩	684	668	1.3	1.6	0.3	0.9		
F-11-718	剥片	安山岩	668	768	1.8+ α	4.1+ α	0.5+ α	4.8		

石器観察表 3

(単位cm・g)

グリッド番号	器 種	石 材	北から	東から	長さ	幅	厚さ	重 量	図-No	層その他
F-11-762	敲 石	角閃安山岩	466	590	10.5+ α	13.5+ α	5+ α	1029.4	第46図 8	
F-11-848	剥 片	姫島OB	204	698	1.6	2.2	0.4	1.2		
F-11-882	小剥片	流紋岩	108	586	1.8+ α	4.1+ α	0.9+ α	5.0		
F-11-957	磨 石	砂 岩	104	224	6.2	5.5	5.0	214.9	第44図 6	
F-11-973	敲 石	砂 岩	616	546	11.2	8.7	5.2	731.5	第45図 3	
F-11-1457	剥 片	流紋岩	595	88	2.5	9.1	2.0	63.8		
F-11-1466	剥 片	チャート			1.1	2.2	0.2	0.6		
F-11-1469	磨 石	角閃安山岩	486	190	8.1	10.4	3.0	405.5	第45図 12	
F-11-1481	剥 片	安山岩	418	604	3.8	5.0	1.9	26.8		
F-11-1488	磨 石	角閃安山岩	586	624	14.2	9.4	6.1	1131.0	第47図 1	
F-11-1568	石 核	砂 岩	201	252	7.9+ α	6.7+ α	6.2+ α	351.7		
F-11-1601	石 核	流紋岩	137	646	14.2+ α	9.9+ α	9.8+ α	1249.0		
F-11-2020	磨 石	角閃安山岩	584	258	12.8	9.9	6.4	1180.4	第47図 10	
F-11-2057	石 匙	姫島OB	254	980	4.8	9.4	1.0	32.4	第53図 4	
F-11-2058	磨 石	砂 岩	182	866	10.5	9.3	6.4	934.5	第44図 3	
F-11-2062	小剥片	流紋岩	336	966						
F-11-2077	剥 片	流紋岩	68	542	5.7	7.3	1.5	59.0		
F-11-2088	剥 片	流紋岩	752	64	4.8	4.5	1.0	12.8		
F-11-2110	石 鏃	チャート	652	522	1.6+ α	1.7	0.3		第42図 2	
F-11-2117	剥 片	安山岩	656	226	6.2	4.0	1.3+ α	31.7		
F-11-2123	剥 片	流紋岩	662	248	10.7+ α	4+ α	1.9+ α	57.0		
F-11-2127	剥 片	流紋岩	582	18	1.8	2.6	0.6	2.0		
F-11-2129	磨 石	角閃安山岩	566	116	13.3	12.7	3.9	974.2	第45図 8	
F-11-2134	剥 片	流紋岩	784	704	4.1+ α	8.7+ α	2.4	67.3	第54図 1	
F-11-2134	剥 片	安山岩	786	705	4.0	11.1	2.0	75.4		
F-12-3	剥 片		704	924	5.0+ α	5.5+ α	2.5	57.4		
F-12-26	剥 片	流紋岩	662	984	3.5+ α	5.3+ α	1.0+ α	16.2		
F-12-27	剥 片	流紋岩	602	950	6.3+ α	6.8+ α	1.7+ α	72.9		
F-12-44	剥 片	流紋岩	632	626	5.9+ α	6.9+ α	1.8+ α	75.1		
F-12-55	磨 石	安山岩	694	326	8.7	10.7	4.9	610.6	第45図 4	
F-12-57	剥 片	流紋岩	614	208	4.9	5.7	1.7	34.8		
F-12-58	磨 石	角閃安山岩	638	138	16.1	17.4	4.3	1830.0	第46図 11	
F-12-63	石 鏃	姫島OB	546	102	1.6+ α	1.3+ α	0.3		第42図 6	
F-12-74	礫 器	流紋岩	504	320	13.2+ α	17.5+ α	6.1+ α	1550.0	第49図 2	
F-12-75	剥 片	流紋岩	598	408	2.1	2.9	0.5	2.7		
F-12-78	剥 片	流紋岩	631	934	3.0	5.4	0.6	7.6		
F-12-80	剥 片	流紋岩	584	520	10+ α	6.9+ α	2.4+ α	114.4		
F-12-101	剥 片		568	830	3.5	7.3	1.4	26.8		
F-12-117	剥 片	流紋岩	478	844	7+ α	6.5+ α	4.8+ α	316.3	第44図 7	
F-12-117	磨 石	角閃安山岩	458	158	10.3	10.0	6.4	1049.0	第45図 6	
F-12-177	剥 片	流紋岩	294	974	9.7+ α	12.1+ α	5.1+ α	695.7		
F-12-181	磨 石	砂 岩	200	974	19.5	9.7	4.9	1340.3	第44図 9	
F-12-210	剥 片	姫島OB	292	394	2.3+ α	3.2+ α	1.1+ α	6.9		

石器観察表 4

(単位cm・g)

グリッド番号	器種	石 材	北から	東から	長さ	幅	厚さ	重量	図-No	層その他
F-12-211	石皿	角閃安山岩	230	300	19.4+ α	18+ α	6+ α	3550	第43図2	
F-12-214	剥片	流紋岩								
F-12-220	剥片		120	566						
F-12-234	石核		164	936	10.6+ α	14.6+ α	3.3+ α	777.7		
F-12-247	剥片	流紋岩	24	934	5.3	7.6	2.3	97.5		
F-12-253	剥片	流紋岩	58	654	4.0	4.4	1+ α	11.4		
F-12-257	石皿		42	570	15.5	12.7	4.1+ α	1177.7		
F-12-258	石核		16	548	9.7	11.4	5.2	828.4		
F-12-262	小剥片		66	160	2.4+ α	2.5+ α	1.7+ α	10.7		
F-12-267	小剥片	流紋岩	568	742	3.4+ α	4.3+ α	0.8+ α	7.7		
F-12-268	礫器	砂岩	538	135	20.4+ α	13.8+ α	4.3+ α	2100.0	第52図2	
F-12-269	剥片	チャート	372	202	2+ α	3.6+ α	0.9+ α	4.5		
F-12-271	剥片	流紋岩	110	940	6.2+ α	7.1+ α	1.7+ α	67.2		
F-12-276	剥片	姫島OB	692	666	1.3+ α	2.8+ α	0.8+ α	1.5		
F-12-292	剥片	安山岩	590	964	3.9	4.6	1.0	25.6		
F-12-295	剥片	流紋岩	502	942	6.9	5.0	1.2	31.7		
F-12-298	剥片	流紋岩	518	866	5.7+ α	3.4+ α	0.9+ α	13.6		
F-12-308	石核	姫島OB	474	874	3.2+ α	1.9+ α	0.4	1.3	第42図9	
F-12-314	磨石	角閃安山岩	402	856	12.7	12.9	4.1	943.5	第47図5	
F-12-332	剥片		226	630	4.7+ α	4.5+ α	1.8+ α	29.4		
F-12-335	小剥片	安山岩	262	744	3+ α	3.5+ α	2.8+ α	7.9		
F-12-386	横刃型石	サヌカイト	610	108	5.2	8.1	1.3	51.8	第54図5	
F-12-388	磨石	角閃安山岩	598	124	9.8	7.5	2.8	303.1	第45図13	
F-12-390	剥片	流紋岩	574	92	2.4	3.7	1.5	11.0		
F-12-402	剥片	安山岩	496	602	2.4+ α	2.8	1.1+ α	7.3		
F-12-409	剥片	姫島OB	234	402	1.7+ α	2.6+ α	2.7+ α	2.5		
F-12-422	剥片	安山岩	534	732	1.8	1.9	0.3	1.5		
F-12-430	剥片	流紋岩	434	698	1.6	2.8	0.7	3.4		
F-12-471	石核	流紋岩	80	994	11+ α	10.4+ α	4.6+ α	525.6		
F-12-484	小剥片	チャート	80	664	1.5	1.7	0.5	0.9		
F-12-485	剥片	安山岩	72	678						
F-12-500	剥片	流紋岩	620	350	5.7+ α	6.9+ α	2.2+ α	90.6		
F-12-507	剥片	流紋岩	606	214	8.8	7.2	1.7	102.9		
F-12-515	磨石	安山岩	740	20	6.8	5.9	3.7	193.3	第44図8	
F-12-519	剥片	姫島OB	676	24	4.4+ α	1.5+ α	1.4+ α	9.0		
F-12-533	磨石	安山岩	512	86	10.8	10.1	5.0	721.9	第44図2	
F-12-542	磨石	安山岩	520	240	4.4	4.5	2.8	79.3	第44図5	
F-12-552	横刃型石器	サヌカイト	538	542	3.1	4.5	0.5	10.4	第52図5	
F-12-553	磨石	砂岩	508	540	5.2+ α	3.3+ α	1.4+ α	16.7		
F-12-572	磨石	安山岩	314	492	13.4	10.7	4.6	1047.6	第47図11	
F-12-573	剥片	流紋岩	216	386	8+ α	5.2+ α	2.9+ α	76.3		
F-12-598	磨石	砂岩	488	992	5.8	5.5	1.4	38.8		
F-12-599	剥片	流紋岩	770	910	4.3+ α	3.2+ α	0.7+ α	11.8		

石器観察表 5

(単位cm・g)

グリッド番号	器種	石 材	北から	東から	長さ	幅	厚さ	重 量	図-No	層その他
F-12- 603	石 核	角閃安山岩	694	938	7.2	11.6	4.3	300.8	第48図1	
F-12- 609	剥 片	流紋岩	770	666	2.5+ α	5.8+ α	1.2+ α	14.6		
F-12- 614	石 纖	チャート	516	684	2.8+ α	2.2+ α	3.0		第42図5	
F-12- 617	磨 石	砂 岩	516	704						
F-12- 625	石 纖	姫島OB	692	510	1.9+ α	2	0.5	1.2	第42図8	
F-12- 635	小剥片		388	542	2.6	3.8	0.7	4.8		
F-12- 646	磨 石	安山岩	130	540	12.5	10.8	3.9	803.8	第47図3	
F-12- 661	剥 片	流紋岩	366	628	4.7	6.1	1.7	39.6		
F-12- 668	剥 片	姫島OB	686	28	1.4	3.5	0.6	2.3		
F-12- 683	剥 片	姫島OB	386	284	1.5	2.6	0.4	1.0		
F-13- 15	磨 石	安山岩	498	400	9.9	11.3	4.4	650.0	第47図2	9 層
G-10- 42	スクレイパー	流紋岩	94	198	7.3+ α	9.9+ α	1.9+ α	147.6	第48図3	
G-11- 2	磨 石	角閃安山岩	792	978	6.6	5.9	4.5	247.9	第46図2	
G-11- 53	磨 石	角閃安山岩	692	730	6.6	5.8	3.6	192.7	第46図4	
G-11- 54	横刃型石器	サヌカイト	682	710	4.5+ α	7.3+ α	1.1+ α	29.3		
G-11- 84	石 皿	角閃安山岩	745	545	33.2	30.1	10.5		第43図1	
G-11- 86	小剥片		760	530	3.0	3.5	3.8	6.0		
G-11- 91	磨 石	角閃安山岩	686	590	7.3	6.1	2.2	131.8	第46図3	
G-11- 118	剥 片	流紋岩	670	410	6.9+ α	5.5+ α	1.9+ α	63.4	第54図3	G11-192と接合
G-11- 119	磨 石	安山岩	652	426	9.9+ α	5.4+ α	5.2+ α	318.5	第46図6	
G-11- 134	磨 石	安山岩	338	490	11.7+ α	11.2+ α	4.3+ α	791.8	第45図10	
G-11- 158	石 核	チャート	770	218	3.7	5.3	1.9	39.4		
G-11- 166	磨 石		602	230	11.9	10.1	4.3	721.2	第44図10	
G-11- 172	磨 石		516	206	11.9	11.0	5.0		第46図9	
G-11- 192	剥 片	流紋岩	282	280	7.6+ α	5.6+ α	2.0	73.9	第54図4	
G-11- 198	剥 片		638	166	2.0	3.9	0.8	4.7		
G-11- 220	剥 片	流紋岩	742	18	7.9	8.4	2.2	185.4		
G-11- 334	剥 片	流紋岩	614	866	3.9	5.7	0.9	10.2		
G-11-k 点	小剥片		438	734	3+ α	3.2+ α	0.7+ α	6.7		
G-12- 12	剥 片	流紋岩	746	532	5.5+ α	5.5+ α	1.5+ α	31.3		
G-12- 20	剥 片		618	786	3.5+ α	2.5+ α	0.9+ α	12.0		
G-12- 28	小剥片	流紋岩	518	850	2.7	2.8	0.5	3.4		
G-12- 30	石 皿	安山岩	562	712	17.5+ α	27.2+ α	7.3	5010.0		
G-12- 39	磨 石	安山岩	538	906	10.9	8.9	6.2	918.8	第44図11	
G-12- 41	石 纖	姫島OB	794	986	1.7+ α	1.5+ α	0.3	0.5	第42図7・5	層出土
G-12- 48	剥 片	流紋岩	616	954	2.8+ α	2.6+ α	0.5	3.6		5 層出土
G-12- 51	剥 片	姫島OB	592	924	1.6	2.9	0.7	2.3		5 層出土
G-12- 55	小剥片	姫島OB	522	958	0.7	1.2	0.2	0.3		5 層出土
Z-11- 1	刮 器	流紋岩			9.2	12.6	3.2	443.6	第53図3	
一括	磨 石	砂 岩			11.3+ α	4.3+ α	0.8+ α	73.6		
一括	打製石斧	緑泥片岩							第54図6	
一括	剥 片	流紋岩			4.5+ α	4.2+ α	1+ α	17.8		
一括	剥 片	流紋岩			2.1+ α	1.3+ α	0.3+ α	0.5	第48図2	
一括	石 纖	チャート							第42図1	

第3章 まとめ

(1) はじめに

今回の調査では、刻目突帯文土器を中心に2000点以上の遺物と縄文時代後期の土坑、時期不明の土坑及び弥生時代前期の配石遺構を検出した。E-11区では柱穴がほぼ検出されたが、埋土は表土であり、建物としてのまとまりがなく樹痕の可能性もあることから、本遺跡に直接関わるものではないと判断した。

この遺跡の立地について検討してみると、この遺跡は解析された谷間の山裾平坦部に位置する。面積は狭く、北・東側には川の侵食により形成された谷が存在し、南側は山が迫っており日当たりは良くない。土層図を見ると遺跡の範囲は、アカホヤが堆積する以前には窪地で川砂利層があり、その直上にアカホヤの水中堆積層であることから、かつては川であった場所がアカホヤ火山灰の降下によって平坦面が形成されたことが伺える。隣接した遺跡として旧石器を主体とする一方平Ⅰ遺跡、旧石器及び縄文早期の一方平Ⅱ遺跡があるが、本遺跡には、その時期の遺物が出土しないのは、上記のような理由によると思われる。現在、北側の川の upstream には灌漑用水用のダムがあるが、大正3年測図(一万五千分の一)の地形図(国土地理院 鶴崎)を見ると、溜め池であり、古くから水源として利用されてきたことがわかる。水源は申し分ないが、立地条件・検出された遺構・包含層から出土した土器の量などからみて、集落が形成され、恒常的に生活を営んだ場とは考えにくい。以下、出土した土器や石器について検討を加えながら遺跡の性格に迫ってみる。

(2) 土器について

一方平遺跡のアカホヤ風化層からは多量の土器が出土している。この主体は刻目突帯文土器である。これらの土器はいずれも包含層中からの一括出土であるが、時期的には縄文晩期(弥生早期)～弥生前期に位置付けることができる。高橋徹氏は『大分県史』先史編でこの時期の土器について早期を一期、前期を三小期に分け、さらに大分県内を地域的に4地域に分け、一方平遺跡を含む別府湾沿岸を第2地域として、編年を行っている(註1)。しかしながら前期前期→千葉(高橋編年ではⅡ期-Ⅰ)段階については、今まで良好な資料が得られず不明な部分も多かったが、近年下志村遺跡の発見により、器種の構成等が明らかになりつつある。

本遺跡では当該時期の土器も出土しており、弥生早期からほぼ連続して土器編年表(第56～59図)を示すことができたのでここで紹介しながら、第2地域の土器編年との比較を試みたい。

なお、編年の方法としては、包含層からの一括出土というきわめて信頼性の乏しい状況にあるが、個体毎の分布の様子や、形態、文様変化などを手挂かりに検討し、系統や時間的な差異を明らかにしてみた。

I期(第56・57図)

条痕調整を主調整とする土器群である。器面の最終調整や、沈線の有無、その分布状況から2段階に分けた。器種としては、浅鉢・深鉢・甕である。

(古段階)

器種の構成は浅鉢と深鉢からなる。甕が少量伴うと思われる。

浅鉢は、1類である。頸部から口縁部に向けて長く外反する口縁部を持ち、屈曲部に沈線を持つタイプで、下黒野式の浅鉢のⅠ縁部とは明らかに形状が異なる。深鉢は1類～3類に分類される。深鉢の器面調整は主にナデが中心であるが2類には条痕が残る。1類には、無刻目突帯が、3類には突帯が付されていないものもある。ナデ仕上げの深鉢類はほぼ同じ分布位置で出土しており、他の古段階の土器と時期的な差異があると思われる。

(新段階)

甕と深鉢で構成されるのが特徴であるが、若干の浅鉢も伴うと思われる

甕は頸部の形状から夜口系の甕と思われるが、口縁部を欠くため断定できない。深鉢は1類～3類に分類される。3類土器が中心で、屈曲部に、1～2条の沈線を巡らす。また屈曲部に刻目突帯を付すものもある。

以上、I期の土器について説明してきたが、では、それぞれの段階がどの時期に位置付けられるか検討する。まず浅鉢であるが、I期の浅鉢のⅠ縁部は「下黒野」段階の逆「く」の字口縁に比べると胴部土中が傾斜し、

胴部屈曲も緩慢になっている。同じ口縁部を持つ浅鉢は直入町古殿遺跡で見ることができ、ここでは蓋、二条刻目突帯文を有する甕、浅鉢がセットで出土しており、甕の器面調整は全面ナデ仕上げになっている。地域性や時期差を考慮に入れなければならないが、1期古段階でのナデ仕上げの深鉢群は直入町古殿遺跡と同時期の「下黒野」段階（高橋編年1期）、福岡平野との併行関係では「夜臼」段階に位置付くと考えられる。次に新段階であるが、この段階の特徴は、屈曲部に沈線を巡らした甕である。屈曲部に沈線を巡らした甕は京都大学構内遺跡出土の遊賀里式土器（註2）や愛媛県道後今市遺跡出土土器（註3）に類例を見ることができることから、在地性の強い土器というよりも瀬戸内系の土器の影響を強く受けたものとする。また、沈線を巡らす3類一bの上器群の中には3類一bの土器のように屈曲部に突帯を貼り付けた後、沈線を巡らし刻み目を施した土器も存在しており、沈線から刻目突帯への形式変化の過程が伺える。しかし、本遺跡出土の屈曲部に刻目突帯を付す土器の中には本文中の18図4や32図24のように胎土が在地のものとなる土器も存在しており、本地域において二条刻目突帯文藝が出現する過程では、瀬戸内系の土器の影響だけでなく、二条刻目突帯文藝が主体的に分布している山間部や夜臼式土器の影響も当然受けたであろうと考える。いずれにしても、在地の土器が多方面からの影響を受けながら次の段階へ変化をはじめた過渡期と言える。これらの屈曲部に沈線を巡らす土器群は大部分平野では今までに知られていない新しいタイプの土器（セット関係が明確ではないが、一方平式の上器とする）である。これらの土器群が京都大学構内遺跡出土土器と併行関係にあるとすれば夜臼併行こととなり、1期の古段階に位置付くことになる。しかし、出土分布の様子から古段階の土器群と共存する可能性は低く、「下黒野」の次の段階に位置付けるのが妥当であり、福岡平野では板付1段階にほぼ併行するものとする。ところで二条刻目突帯文藝については、「下黒野」段階において山間部に主体的に分布するのに対して、一条刻目突帯文器突帯を有する甕は、より海岸部に分布する傾向が指摘されている（註4）。しかし先に説明を加えたように3類一bの土器群の中に二条刻目突帯文藝の範疇に入る土器が存在しており、これらの土器群を「下黒野式」の範疇に加えるのであれば、海岸部における二条刻目突帯文藝の分布については再考の余地があると思われる。

II期（第56・57図）

基本的にはハケ目調整の土器群である。胎土の違いから2期に分けた。新段階における胎土の変化と土器には密接な関係があると思われるが、このことについては今回は割愛する。

（古段階）

壺・甕からなる。この時期の高杯は出土していないが伴うと思われる。

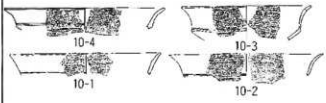
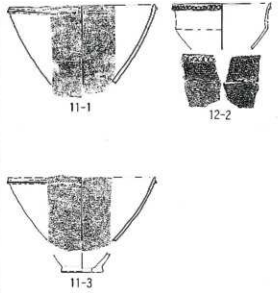
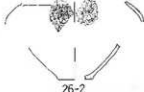
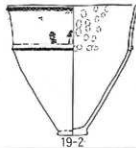
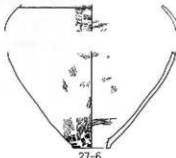
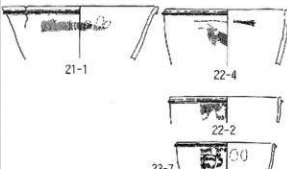
甕は胴部に段を設けるタイプで、甕は、深鉢3類、甕1類で器面調整はハケ目調整後ナデである。甕1類は深鉢2類の系譜を引き、胴部にも刻目突帯を付す。この土器群も1期の一方平式土器の系譜を引くことから、一方平式土器の新段階と位置付けたい。深鉢3類は口唇端部に付していた突帯がなくなり、端部に直接刻目を施す。器面にはナデ後、縦方向の板ナデ条痕（細密条痕）がハケ目状に残る。この段階では、器形はまだ縄文の系譜を引く。

（新段階）

壺・甕からなる。この時期の高杯は出土していないが伴うと思われる。

この時期の上器は胎土に石英と結晶片岩が多量に含まれている。まだ端部は面取せず、胴部には屈曲が見られない。前段階で見られた甕1類は見られず、口縁部に二条、胴部に削り出し突帯を付す刻目突帯文藝が出現し、一条刻目突帯文藝が増加する。また如意形口縁で口唇端部前面刻目、胴部に沈線を巡らす甕も出現する。

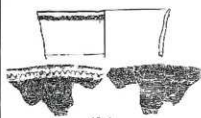
以上、II期の土器群について説明を加えたが、この段階は土器にとって激動の時期である。古段階では細密条痕を有する土器とハケ目調整が主調整となる土器が出現する。細密条痕の有する土器は明らかにハケ目を意識したものであり、「遊賀川式土器」の影響を強く受けはじめたことを意味するものであると考える。京都大学校内遺跡出土の船橋式土器に同様の細密条痕を持つ土器が存在する（註5）ことは興味深いことである。

	浅鉢	深鉢・甕
一方平Ⅰ期 (古)	 10-4 10-3 10-1 10-2	 11-1 12-2 11-3
	壺	
(新)	 26-1	 11-2 13-1
一方平Ⅱ期 (古)	 26-2	 19-2
(新)	 27-6	 21-1 22-4 22-2 23-7

第56図 一方平Ⅳ遺跡出土土器編年図(1)

深 鉢 ・ 甕

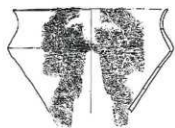
一
方
平
I
期
(古)



12-1



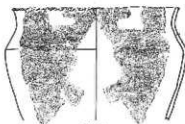
12-3



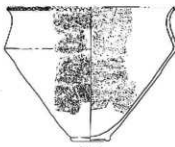
17-1



14-3



14-2

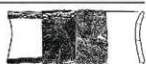


14-1

(新)



15-1

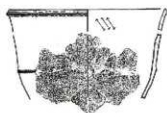


15-2



15-3

一
方
平
II
期
(古)



19-1



16-2



16-1

(新)



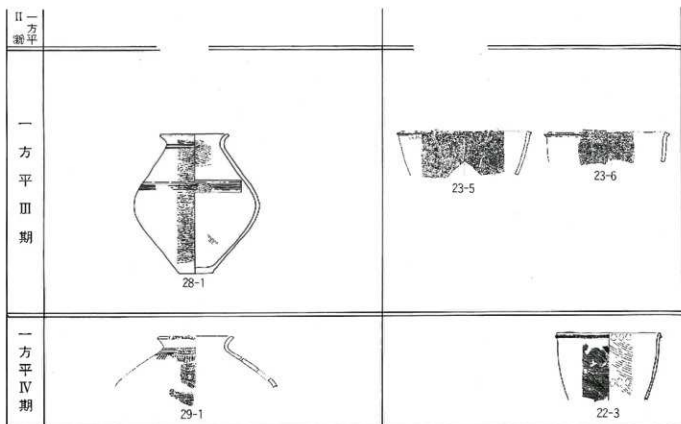
20-1



24-1

0 20 40cm

第57図 一方平IV遺跡出土土器年図(2)



第58図 一方平Ⅳ遺跡出土土器編年図(3)

新段階では前段階で出現した甕Ⅰ類はここで消滅し、縄文の系譜を引かない新出の器形を持つ一条刻目突帯文甕が主体を成すようになる。これも「遠賀川式土器」の影響であろう。口縁部に二条刻目突帯を付す土器は山下の池遺跡(註6)に見ることができるが、胴部の突帯は削り出しに変化し、型式学的退化を遂げる。この土器の口縁部は下城式土器の出現を予感させる。また、明らかに板付の系譜を引く土器も出現しており、縄文の系譜を引く土器が減少する。古段階は福岡平野では板付Ⅰ段階、新段階は福岡平野で板付Ⅱ-a 期に位置付けられると考える。

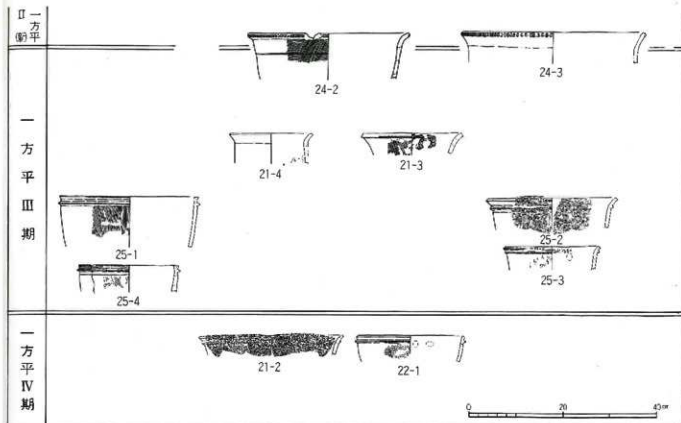
Ⅲ期(第58・59図)

ハケ目調整の土器群である。

壺・甕である。高杯が伴うと思われる。

この段階の壺は胴部に削り出しの段を持ち、胴部にはへら描きの施文がみられる。甕は一条刻目突帯文甕いわゆる縄文晩期系の系譜を引く甕と、弥生時代の板付式土器の系譜を引く甕、新たに端部を面取し口唇端部に刻目を施した下城式甕の祖形と思われる甕である。

Ⅲ期に新たに出現した甕は、大分市の下志村遺跡(註7)や千歳村の平石遺跡出土の甕(註8)に見ることができる。いわゆる「口縁下端凸状盤」系譜で、遠賀川以東の初期弥生土器にみられる特徴を持つ。一条刻目突帯文甕の系譜を引くものは、口縁部下に突帯を付すようになり端部は面取されてはいないが、形態的には新出の土器との差異は認められない。この二つのタイプの土器と前段階の口縁部下位に二条刻目突帯を付す甕が融合し下城式甕の祖形が完成すると予想される。しかし、この段階の土器の量は少なく、下志村遺跡や平石遺跡で出土した「口縁下端凸状盤」に伴う壺は出土していない。壺も下志村では新古に編年されているが資料不足は否めず、この土器群をⅢ期としてまとめることは問題を多く含むが、前段階の土器は下志村では出土しておらず、明らかに型式変化が見られることからⅡ期に続く段階としてⅢ期を設定する。とすればⅢ期は福岡平



第59図 一方平Ⅳ遺跡出土土器編年図(4)

野では版付Ⅱ～Ⅲ期と位置付けられると考える。

Ⅳ期(第58・59図)

東九州弥生時代前記中ごろ以降の下城式の土器群である。

甕・甕である。高坏が伴うと思われる。

この段階の土器は少ない。壺は胴部と頸部の境がなくなり胴部にへら描きの区割り重弧文がほどこされる。甕は下城式甕である。

小 結

本遺跡の土器を、個体毎の分布の様子や、形態、文様変化などを手がかりに検討してきた。その結果、包含層一括出上でありセット関係が明確でないことなど抱える問題点が多いものの、大分平野における縄文晩期末(弥生早期)～弥生時代前期中頃までの土器編年に新しい土器型式を設定することが出来たなど一定の成果を加えたものとする。さらに海岸部における二条刻門突帯文甕の問題、ハケ目調整を土調整とする甕の出現期、下志村式の位置付けなど新たな課題も生じた。しかし、今回の調査の成果と課題は、あくまでも本遺跡の土器を編年することにより生じたのであり、この編年案が大分平野において普遍的なものであるかは今後の調査の積み重ねを待たなければならない。しかしミッシングリンクであるこの時期の土器編年に新たに一定の成果と課題を投げかけたという点で、この遺跡の持つ意味は大きいと考える。今後の調査に期待したい。(中斐)

(3) 石器から見た一方平IV遺跡の特徴

九州北部では縄文時代の終わり（晩期後半）頃から在来縄文時代の物に加えて、次第に朝鮮半島系統の遺物をもつ遺跡が現われ始め、やがて弥生時代と呼ばれるようになる。新たに登場したのは伐採用の太型蛤刃石斧・木材加工用の柱状片刃石斧や扁平片刃石斧・収穫用の石槍頭と石鎌・武器の石鏃等の磨製石器、各種の金属器、木製農具類、家畜としての豚等々である。同じ九州だとしても九州北部と同じような状況が瞬時に東九州の大部分地域で発生するわけではなく、また、それらが伝わってきた後も東九州の地域性が失われることはなかった。しかし、大分県内の遺跡ではこれまで、晩期後半から弥生時代の初めにかけての石器群の全体像が判明する良好な調査例がなかったため、この時期の様相がはっきりわからなかった。この時期の土器が出土しても、縄文時代後期の遺物も混在する例だったり、量的に少なすぎたりという中で推定するしかなかった。坂本嘉弘氏は扁平打製石斧（ここでは扁平打製石器といっているもの）は「豊後地域では縄文時代晩期の上層生B式土器の時期（引用者註→晩期中頃で一方平遺跡の直前）を最後に姿を消すものと考えられる」としている（坂本1996）。

今回の一方平遺跡の調査では、扁平打製石器が1点採集されているし、周辺の一方平II遺跡や九池遺跡、牧ノ内遺跡から合計30点ほど土器を伴わず時期不明であるが出土していること、扁平打製石器があつてよい時期の遺跡が一方平IV遺跡だけであることを考えると、スポーツ公園予定地内遺跡群から出土した扁平打製石器は晩期後半から弥生時代前期のものである可能性が高い。大野町神原遺跡では一ヶ所だけであるが晩期後半の遺物がまとまって出土した地点があり単一時期のもので報告されているが、石鎌4点・同木製品1点・石皿1点の他、扁平打製石器3点（石材は安山岩）が一緒に出土していることも付け加えておきたい（編纂1991）。

晩期後半から弥生時代初期に所属すると考えている一方平IV遺跡の石器組成は、扁平打製石器1点・石鏃5点・石皿3点・磨石類46点・鏃器7点・削器2点・横刃型石器2点・石匙2点である。特徴的なのは、磨石類が46点と他を圧倒していることである。石器組成からこの遺跡を残した当時の人々の生業について考えてみたい。

縄文時代後期中頃から弥生時代前期までの石器組成を検討した研究によれば、大陸系磨製石器をまったく含まない場合は（イネを代表とする栽培型植物以外の）植物質食料に大きく依存した石器組成であり、磨石類のような調理具の多いものは野生型植物の採集という伝統的な生産システムを反映しているという（藤尾1993）。本遺跡は、他のスポーツ公園内の遺跡のような丘陵上ではなく、小規模な河岸段丘の端部に立地している。現在でも水面からの比高差は5m程度しかなく、2千年前であれば地面はほとんど水面近くに存在したであろう。遺構が確認されてないが仮に想像すれば、遺跡の周囲に広がる森で採集したドングリ類の水さらしや加工を行なう場所として利用されたのではないだろうか。あるいは山香町龍頭遺跡（縄文時代後期）のようにドングリ類数万個が詰まった貯蔵穴も作られたのかもしれない。

周辺の丘陵上の遺跡から扁平打製石器が多数出土するのは、彼らの活動の一面を示すものであろう。いまでは扁平打製石器は上掘り貝と想像されているが、現実には福岡県肥前町クリナラ遺跡では細長い谷の中という立地からであるが、多数の扁平打製石器とともに小溝状の遺構25条が並んで検出されており、それは晩期後半の畑地遺構であろうと考えられている（川間1997）。残念ながら牧ノ内遺跡や九池遺跡は棚田造成により破壊されていたためもありそのような遺構は残っていないが、遺存状態がよければ畝穴住居跡や畑の痕跡も発見できたかもしれない。（高橋）

《引用文献》

- 坂本嘉弘1996『東北部九州における石器組成の変遷—縄文時代後期から古墳時代にかけて—』『おおいの考古』第8集 大分県考古学会
- 中間研志1997『クリナラ遺跡・若宮遺跡』九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告43 福岡県教育委員会
- 藤尾信一郎1993『生業からみた縄文から弥生』『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集 国立歴史民俗博物館
- 綿貫俊一1994『川南原遺跡群発掘調査報告書』大分県文化財調査報告第1輯 大分県教育委員会

(4) まとめ

以上、出土した土器や石器について説明を加えてみたが、出土した土器は縄文時代前期から、弥生時代中期、そして古代のもので、その主体は、刻目突帯文土器である。数量を比較すると縄文前期・中期・後期の土器は1～2個体に対して、縄文晩期から弥生前期の刻目突帯文土器は50個体を超える。しかし、中期になると1～2個体に減少し、古代の土器も数個体である。このことから、本遺跡に人が訪れるようになったのはアホカヤが堆積し平地部が形成されて以降であり、活動した時期は縄文晩期から弥生前期にかけてである。おそらく縄文晩期より以前は、水辺のキャンプ地もしくは移動する際の中継点として利用されたのであろう。ではここでどのような活動が行われたのであろうか。先に触れたようにこの場所で、集落が形成されていたとは考えにくく、今回の調査でも縄文晩期から弥生前期にかけての住居跡等の遺構は検出せず、遺跡の性格を示すような遺構も検出するには至らなかった。明確な答えを導き出すことは不可能であるが、出土した遺物をもとに、遺跡の性格についていくつかの可能性を示してまとめたい。

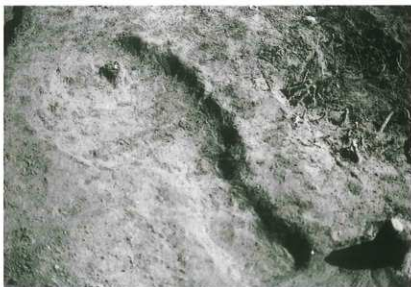
出土した石器を見ると、鏃器と磨石が中心である。鏃器については高橋信武氏がエゴノクチ遺跡出土の石器を同じ早期の遺跡である静岡県富士宮市若宮遺跡の石器組成と比較することにより伐採用の石斧として使用したと指摘している(註9)。しかしながら、早期の石器類は出土しておらず、鏃器は本遺跡というよりも早期の土器が出土している「方平1」遺跡に関わるものと考えられる。次に磨石であるが、出土した磨石類数は46個体にとどまり、この遺跡で多量の磨石が使用されたことがわかる。川が近いことを考えると、この遺跡において、ドングリ等の堅果類を水にさらし、アク抜きを行っていた可能性が考えられる。そうであれば、出土した土器に深鉢や甕が多いことの説明もできる。次に、横刃型石器が2点出土しているが、この石器は稲作と深い関わりがあることが指摘されており、底部に裾の止痕を持つ土器も出土していることから、ここにおいて初期の水田経営が行われていた可能性も考えられる。上流にダムが建設されているため旧地形は復元できないが、この谷間に存在したであろう湿原を水田として利用したのであろう。稲作に関することとして、水源の管理の可能性も考えられる。この遺跡の周囲を流れる川は現在でも農業用水として利用されているが、おそらく当時この川が用水に利用された可能性は高い。稲作の時期になると水源に近いこの場所の水が必要となり、流域の湿地帯で水田を経営しながら水源を管理していたのである。また、出土した土器に煮炊きで使われた痕跡が少ないという指摘もあり、出土した土器が水源における祭祀に用いられた可能性もある。とすれば、E-12区で出土した甕が埋納された状態で出土したことも説明できる。ともあれ、この遺跡から矢板や杭列が検出されたわけではなく上記の可能性も考古学的に立証されたわけではない。しかし、弥生時代前期後半になると土器の量が極端に減ってくる。このことはこの場所の必要性がなくなったことを意味するもので、弥生時代における生活や稲作の形態変化と密接に関わると思われる。いずれにしても、今回の調査では水田遺構を検出するには至っていないが、このような谷間での水田遺構の探索とその実態解明が今後の課題となろう。(甲斐)

(3以外の)註及び参考文献

- 註1 高橋 徹1989「弥生文化の定着」『大分県史』
- 註2 浜崎・志・千葉 豊1987「京都大学北部構内BD33の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』
- 註3 大淵徹夫1951「愛媛県での縄文晩期土器の発着 縄文から弥生へ」『愛媛考古学』愛媛考古学会
- 註4 高橋信武1987「白作市尾首遺跡の刻目突帯文土器」『大分県地方史』第127号大分県地方史研究会
- 註5 註2に同じ
- 註6 清水宗昭・坂本嘉弘1989「山下の池遺跡出土遺物」『町史 湯布院』
- 註7 高橋 徹1996「付論「曲遺跡」九州横断道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書 大分市教育委員会
- 註8 坂本嘉弘1989「平石遺跡」『高浜台地の遺跡』千歳村教育委員会
- 註9 高橋信武1993「エゴノクチ遺跡」『宇佐別府道路・山口ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書』大分県教育委員会



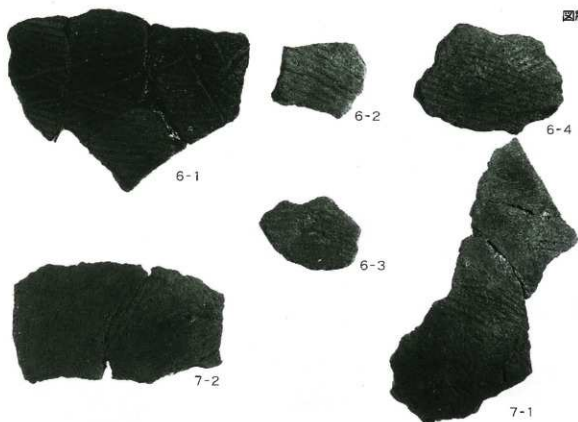
一方平IV遺跡遠景



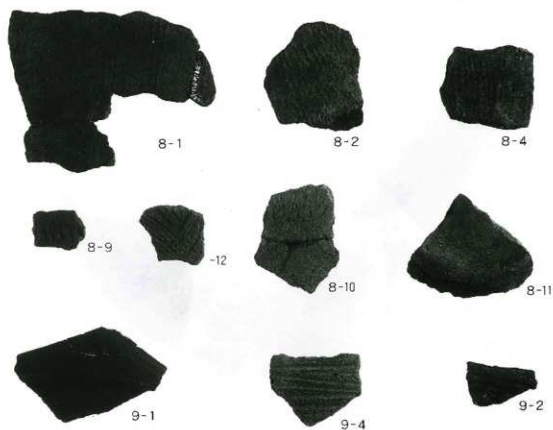
1号土坑



一方平IV遺跡土層



一方平IV遺跡出土土器 (1)



一方平IV遺跡出土土器 (2)



17-1



10-3



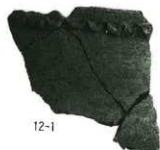
11-1



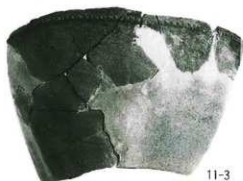
12-2



12-1



14-1



11-3



14-3



14-2

一方平 1 期土器群 (古)



15-1



26-1

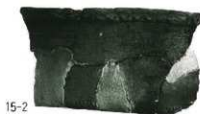


15-3



11-2

一方平 I 期土器群 (新)



15-2



13-1



19-2



16-1



16-2



19-1

一方平 II 期土器群 (古)



21-1



24-1



20-1



22-4

一方平旦期土器群（新）



28-1



24-2



20-1



25-3



23-6



25-4

一方平旦期土器群



21-2



22-3

一方平Ⅳ期土器群

底部残の圧痕



38-102

一方平Ⅳ遺跡出土土器



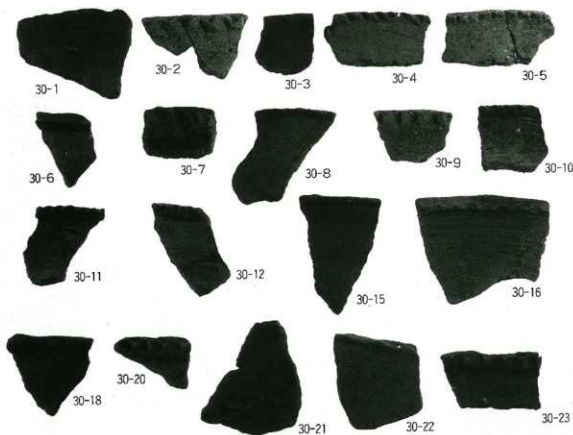
20-4



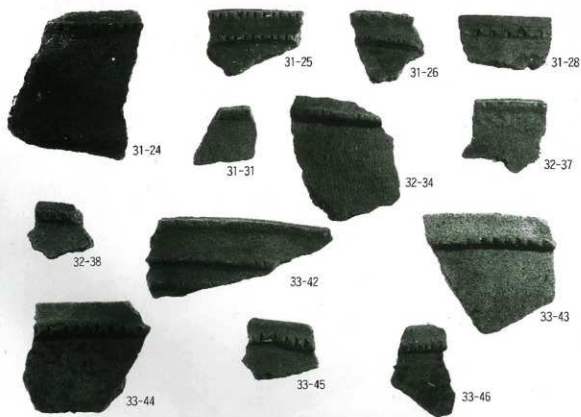
18-1



圖版 7



一方平IV遺跡出土土器 (3)



一方平IV遺跡出土土器 (4)



铁器

埋納壺出土狀況



遺物出土狀況

遺物出土狀況



作業風景 1



作業風景 2



作業風景 3



大分県文化財調査報告書 第103輯

**スポーツ公園内遺跡群
発掘調査報告書**

平成11年3月

編集 大分県教育庁文化課

発行 大分県教育委員会

〒870-0021

大分市府内町3丁目10番1号

TEL 097-536-1111

印刷 株式会社明文堂印刷
